福岡広域都市計画道路3･3･1-78号堅粕線整備事業及び福岡広域都市計画道路3･4･1-159号
原田箱崎線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1)

箱　崎　64

－第92次・第102次・第108次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1457集

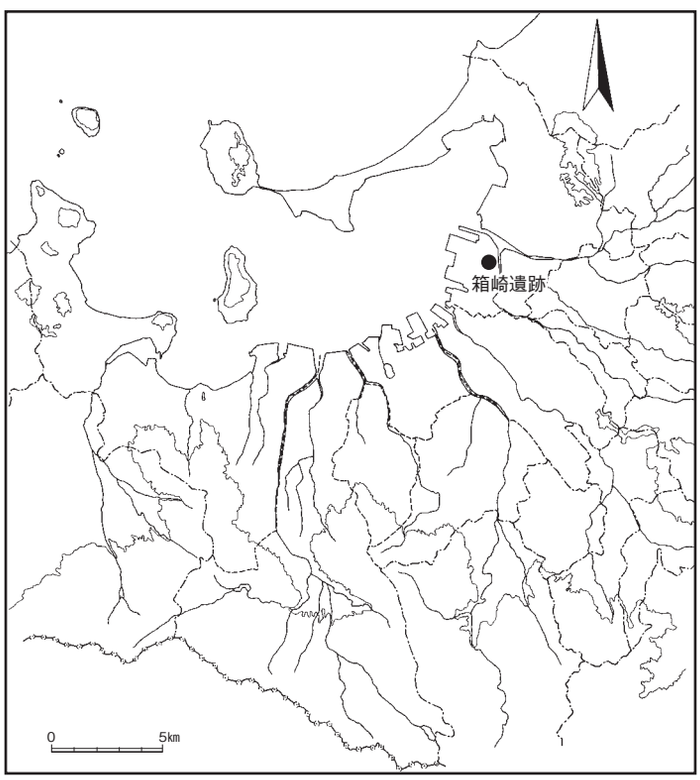
２０２２

福岡市教育委員会

福岡広域都市計画道路3･3･1-78号堅粕線整備事業及び福岡広域都市計画道路3･4･1-159号
原田箱崎線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（1）

箱崎　64

－第92次・第102次・第108次発掘調査報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1457集



遺跡略号	調査番号
HKZ－92	１８３０
HKZ－102	１９４０
HKZ－108	２０１１

２０２２

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄界灘を介して大陸・半島と一衣帯水の関係にあり、古代より双方の交流が絶え間なくおこなわれており、旧石器時代から中世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、九州大学箱崎キャンパス跡地における都市計画道路整備事業に伴う箱崎遺跡第92次・第102次・第108次発掘調査について報告するものです。この度の調査では中世の集落跡を検出しました。これらの調査は従来発掘調査例が少なく、長らく不明であった九州大学箱崎キャンパス内における中世の箱崎遺跡の様相を明らかにするという重要な成果をもたらしました。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の一資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、関係者の皆様には発掘調査から本書の作成に至るまで深いご理解と多くのご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和4年3月24日

福岡市教育委員会

教育長　　星子　明夫

例　　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が福岡広域都市計画道路3･3･1-78号堅粕線整備事業及び福岡広域都市計画道路3･4･1-159号原田箱崎線整備事業に伴い、福岡市東区箱崎6丁目10-1番地において実施した箱崎遺跡第92次・第102次・第108次発掘調査の報告書である。
2. 第92次調査の遺構・遺物の実測、写真撮影、報告執筆は主に板倉有大が行なった。
3. 第102次調査の遺構・遺物の実測、写真撮影、報告執筆は主に藏冨士寛が行なった。
4. 第108次調査の遺構・遺物の実測、写真撮影、報告執筆は主に阿部泰之が行なった。
5. 本書で用いた方位は特に断りなき限り世界測地系に基づく。
6. 遺構の呼称は柵列をSA・掘立柱建物をSB・溝をSD・井戸をSE・土壙をSK・鍛冶炉をSL・柱穴およびピットをSP・木棺墓をSR・性格不明の遺構をSXと略称する。
7. 本書にかかわる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
8. 本書の編集は阿部が行なった。
9. 本書で報告する発掘調査の細目は以下の通りである。

箱崎遺跡第92次調査

遺跡調査番号	1830	遺跡略号	ＨＫＺ－92	
所在地	福岡市東区箱崎6丁目10-1		分布地図番号	34 箱崎
開発面積	25,000㎡		調査面積	1,514.1㎡
調査期間	平成30年11月1日～平成31年3月31日		事前審査番号	30-1-61

箱崎遺跡第102次調査

遺跡調査番号	1940	遺跡略号	ＨＫＺ－102	
所在地	福岡市東区箱崎6丁目10-1		分布地図番号	34 箱崎
開発面積	25,000㎡		調査面積	2,712.76㎡
調査期間	令和元年8月19日～令和2年2月28日		事前審査番号	30-1-61

箱崎遺跡第108次調査

遺跡調査番号	2011	遺跡略号	ＨＫＺ－108	
所在地	福岡市東区箱崎6丁目10-1		分布地図番号	34 箱崎
開発面積	25,000㎡		調査面積	541.63㎡
調査期間	令和2年5月1日～令和2年7月7日		事前審査番号	30-1-61

本　文　目　次

はじめに …… 1
調査に至る経緯
調査組織

第1章　位置と環境 …… 3
第1節　地理的環境
第2節　歴史的環境

第2章　第92次調査の記録 …… 9
第1節　調査の概要 …… 9
第2節　第Ⅰ区第１面の調査 …… 11
第3節　第Ⅰ区第２面の調査 …… 33
第4節　第Ⅱ区の調査 …… 49
第5節　自然科学分析 …… 71
第6節　総括 …… 90

第3章　第102次調査の記録（1） …… 115
第1節　調査の概要 …… 115

第2節　２区の調査 …… 115
1. 調査の概要 …… 115
2. 遺構と遺物 …… 115

第3節　４区の調査 …… 126
1. 調査の概要 …… 126
2. 遺構と遺物 …… 129

第4節　６区の調査 …… 137
1. 調査の概要 …… 137
2. 遺構と遺物 …… 137

第4章　第108次調査の記録 …… 145
第1節　調査の概要
第2節　遺構と遺物

挿　図　目　次

【第1章】
第1図　箱崎遺跡と周辺の主な遺跡（1/50,000）…… 6
第2図　箱崎遺跡と既往の調査地位置図…… 7
第3図　本書にて報告する調査区位置図…… 8
【第2章】
第４図　第Ⅰ区第１面遺構全体図（1/150）…… 10
第５図　第Ⅰ区壁面土層実測図（1/80）…… 折り込み
第６図　SP出土土器実測図（1/3）…… 11
第７図　SL051・147、SK008、SP154 実測図（1/20）… 12
第８図　SK031・106・135・094・023・144・098 実測図（1/40） 14
第９図　SK063・014・153・131・027・006・005 実測図（1/40） 15
第10図　SK151・049・073 実測図（1/40）…… 16
第11図　SK019・026・018・138・022・001 実測図（1/40） 17
第12図　SK出土土器実測図（1/3、1/4）…… 18
第13図　SK出土土器・土製品実測図（1/2、1/3、1/4） 19
第14図　SE035・155、SX036、SE056・047 実測図（1/40） 21
第15図　SE出土土器・土製品実測図（1/2、1/3、1/4） 22
第16図　SX・包含層出土土器実測図（1/3、1/4、1/6） 23
第17図　SP・SK出土石製品・土錘実測図（1/2）…… 24
第18図　SK153・063出土石製品三次元モデル画像および実測図（1/6）…… 25
第19図　SE・SK・SX・包含層出土石製品・土錘・木製品実測図（1/2）…… 26
第20図　第Ⅰ区第1面金属製品実測図およびX線画像（1/1） 28
第21図　第Ⅰ区第２面遺構全体図（1/150）…… 34
第22図　SR152 実測図（1/20）…… 35
第23図　SR152 鉄釘出土位置模式図…… 35
第24図　SR152出土土器実測図（1/3、1/4）…… 36
第25図　SX168実測図（1/20）…… 37
第26図　SX168出土土器実測図（1/3）…… 37
第27図　SE158・190・191・192・193・195・196 実測図（1/40） 38
第28図　SE出土土器実測図（1/3）…… 39
第29図　SD 平面実測図（1/100）…… 40
第30図　SD 断面実測図（1/50）…… 41
第31図　SK176・160 実測図（1/40）…… 41
第32図　SD・SK・SX出土土器実測図（1/3）…… 42
第33図　SR・SE・SX出土石製品・土錘実測図（1/2）… 44
第34図　第Ⅰ区第２面金属製品実測図およびX線画像（1/1、1/3）…… 46
第35図　第Ⅱ区遺構全体図（1/200）…… 50
第36図　第Ⅱ区壁面土層実測図（1/80）…… 51
第37図　SX044 実測図（1/10）…… 52
第38図　SX044出土土器実測図（1/3）…… 52
第39図　SP出土土器実測図（1/3）…… 53
第40図　SK034・033・030・042・035・032・037 実測図(1/40) 54
第41図　SK038・036・040・022・023 実測図（1/40）… 55
第42図　SK061・068・054・056・057・060・049 実測図（1/40）…… 56
第43図　SK046・020・014 実測図（1/40）…… 57
第44図　SK出土土器実測図１（1/3、1/4）…… 58
第45図　SK出土土器実測図２（1/3、1/4）…… 59
第46図　SE039 実測図（1/40）…… 60
第47図　SE063・064 実測図（1/40）…… 61
第48図　SE出土土器実測図（1/3）…… 62
第49図　SX・包含層・攪乱出土土器実測図（1/3）…… 63
第50図　SK出土石製品・土錘実測図（1/2）…… 64
第51図　SK・SE出土石製品・土錘実測図（1/2、1/3） 65
第52図　SK020、SE063出土石製品実測図および三次元モデル画像（1/6）…… 66
第53図　第Ⅱ区出土金属関係遺物実測図およびX線画像（1/1、1/3）…… 67
第54図　植物珪酸体分析結果…… 81
第55図　主要珪藻ダイアグラム…… 83
第56図　器物の基礎構造（左）と釘の木質パターン（右） 88
第57図　鉄釘の木材パターン（左）と木棺の想定図（右） 89
＜表一覧＞
第１表　第Ⅰ区第１面出土土器・土製品…… 28
第２表　第Ⅰ区第１面出土石器・石製品…… 30
第３表　第Ⅰ区第１面金属関係遺物出土遺構…… 31
第４表　第Ⅰ区第２面出土土器・土製品…… 47
第５表　第Ⅰ区第２面出土石器・石製品…… 48
第６表　第Ⅰ区第２面金属関係遺物出土遺構…… 48
第７表　第Ⅱ区出土土器・土製品…… 67
第８表　第Ⅱ区出土石器・石製品…… 69
第９表　第Ⅱ区金属関係遺物出土遺構…… 70
第10表　動物遺存体同定結果…… 73
第11表　樹種同定結果…… 75
第12表　炭化種実同定結果…… 77
第13表　花粉分析結果…… 79
第14表　植物珪酸体分析結果…… 81
第15表　珪藻分析結果…… 84
第16表　鉄釘の観察結果…… 89
【第3章】
第58図　第102次調査区（1/600、1/400）…… 115
第59図　２区土層（1/1,000、1/60）…… 116
第60図　２区遺構配置（1/100）…… 117
第61図　２区SK（１）（1/40）…… 119
第62図　２区SK（２）（1/40）…… 121
第63図　２区SK出土遺物（1/4、1/3）…… 122
第64図　２区SE2095（1/40、1/3）…… 123
第65図　２区礫・礎石を有するSK・SP（1/40）…… 124
第66図　２区礫・礎石を有するSK・SP出土遺物（1/4、1/3） 125
第67図　４区土層（1/1,000、1/60）…… 126
第68図　４区遺構配置（1/100）…… 127
第69図　４区SD4035（1/60、1/40、1/8）…… 128
第70図　４区SD4035出土遺物（１）（1/3）…… 128
第71図　４区SD4035出土遺物（２）（1/4）…… 129
第72図　４区SD（２）・SK・SE（1/40）…… 131
第73図　４区SK・SE出土遺物（1/4、1/3）…… 132
第74図　４区ST4005～4009（1/40）…… 135
第75図　４区ST4005・4006・4008出土遺物（1/4、1/3） 136
第76図　４区その他の遺物（1/3）…… 137
第77図　６区遺構配置（1/100）…… 138
第78図　６区SE6010（1/40）…… 139
第79図　６区SE6010（1/3）…… 140
第80図　６区その他の遺物（1/3）…… 140
【第4章】
第81図　第108次調査2区南壁土層断面実測図（1/100） 145
第82図　第108次調査1区全体図（1/150）…… 146
第83図　第108次調査2区全体図（1/100）…… 147
第84図　第108次調査検出井戸実測図（1/60）…… 148
第85図　第108次調査SE01出土遺物実測図（1/3）…… 149
第86図　第108次調査SE02・03出土遺物実測図（1/3）… 149
第87図　第108次調査SE01・02、05・06出土遺物実測図(1/3) … 149
第88図　第108次調査SK13実測図（1/60）…… 150
第89図　第108次調査SK13出土遺物実測図（1/3）…… 150
第90図　第108次調査SR03実測図（1/60）…… 150
第91図　第108次調査SR03出土遺物実測図（1/3）…… 150
第92図　第108次調査出土石錘・土錘・土製品実測図(1/3) … 151
第93図　第108次調査出土金属器実測図（1/3）…… 152

はじめに

1．調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、国立大学法人九州大学（以下、九大）施設部施設企画課から、同市東区箱崎6丁目10番1号（敷地面積457,385㎡）における土地売却に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成24年11月22日付で受理した（事前審査番号：24-2-809ほか）。

これを受けて市内の埋蔵文化財関係事務を補助執行する経済観光文化局埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が広大なうえ、周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡・元寇防塁を含むことから、平成24年12月から試掘調査を開始した。その結果、現地表面下80～130cmで地山である砂丘砂上に遺構が確認された。

その後、申請地における土地利用計画が立案され、計画案のうち都市計画道路原田箱崎線および堅粕箱崎線については独立行政法人都市再生機構九州支社（以下、UR）が整備することとなったため、遺構の保全等に関して九大・UR・埋蔵文化財課の3者で情報共有のうえ協議・調整を行った。

その結果、確認調査により遺構が確認された都市計画道路原田箱崎線とそれに隣接する部分については、埋蔵文化財への影響が回避できないことから記録保存のための発掘調査を実施することで合意し、平成30年9月25日付で「九州大学箱崎キャンパス跡地における都市計画道路整備事業に係る埋蔵文化財の取扱いに関する基本協定書」（以下、協定書）が締結された。

協定書に従い、発掘調査および調査後の資料整理・報告書作成に要する費用については、都市計画道路部分はURが、それ以外の部分は九大が負担することとしている。

その後、平成30年10月15日付で福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査および埋蔵文化財整理・報告書作成作業に関する業務委託契約（以下、委託契約）を締結し、同年11月1日から発掘調査を、翌平成31年度から資料整理・報告書作成を順次おこなうこととなった。

なお、発掘調査と整理・報告書作成事業は別個の委託契約とし、UR・九大各々と2者で契約を締結している。

2．調査組織

調査委託：	独立行政法人都市再生機構九州支社			
	国立大学法人九州大学			
調査主体：	福岡市教育委員会			
調査総括：	文化財活用部埋蔵文化財課長		大庭康時	（平成30年度）
			菅波正人	（令和元～3年度）
		調査第1係長	吉武　学	（平成30～令和2年度）
			本田浩二郎	（令和3年度）
調査庶務：	文化財活用課管理係	係長	藤　克己	（平成30～令和元年度）
			大森秋子	（令和2年度）
			石川あゆ子	（令和3年度）
		係員	松原加奈枝	（平成30～令和2年度）

			内藤　愛	（令和3年度）
事前審査：	埋蔵文化財審査課	事前審査係長	本田浩二郎	（平成30～令和2年度）
			田上勇一郎	（令和3年度）
	事前審査係	主任文化財主事	田上勇一郎	（平成30～令和2年度）
			森本幹彦	（令和3年度）
		文化財主事	吉田大輔	（平成30年9月まで）
			中尾祐太	（令和元年9月まで）
			松﨑友理	（令和2年8月まで）
			神　啓崇	（令和2年9月～令和3年度）
調査担当：	埋蔵文化財課			
	調査第1係	文化財主事	板倉有大	（第92次調査）
	調査第2係	主任文化財主事	藏冨士寛	（第102次調査）
			阿部泰之	（第108次調査）

※調査担当者の所属は調査当時のもの。

第1章　位置と環境

第１節　地理的環境

現在の行政区分上の福岡市は、東は三郡山地、西と南を脊振山地に囲まれ、博多湾を包み込むようにして玄界灘に面している。博多湾を囲む山地からは多くの河川が博多湾に注いでおり、それぞれが扇状地を形成し平野を構成しているが、これらの平野と博多湾が接する沿岸部には砂州と砂丘が発達している。箱崎砂層と呼ばれるこの砂州と砂丘は東区箱崎付近から室見川河口付近まで分布しており、多くの遺跡が確認されている。なお、砂丘の形成時期は考古学および地質学的調査成果から縄文時代後期以降と考えられている。

箱崎遺跡は宇美川下流域、多々良川河口左岸の南北に延びる標高35mから40mの砂丘上に位置する。箱崎遺跡は概ね南北10km、東西500mの範囲に広がり、西側は博多湾に臨み、東側は宇美川の氾濫により浸食を受けている。箱崎遺跡が位置する砂丘は南に標高を下げながら更に伸び吉塚本町遺跡へと続き，南西 1.5kmの古砂丘には博多遺跡群が位置する。

現在、砂丘の海岸側は埋め立てが進み、高層建築物が立ち並んでいるため往年の状況は窺い難いが、高層建物等の階上からは博多湾の海面を指呼の間に臨むことができる。

第２節　歴史的環境

箱崎遺跡では、1983（昭和58）年の地下鉄建設に伴う第1次調査以来、2021（令和3）年10月時点で120次にわたる調査が行われており、縄文時代晩期から近世に至る各時期の遺構・遺物が確認されている。箱崎遺跡ではその地割による狭小な面積の発掘調査が多いが、とりわけ中世では石清水八幡宮をはじめとする中央権門とのつながりからくる特異性が明らかになりつつある。本節では遺構・遺物が安定的にみられる古墳時代と、平安時代以降中世の箱崎遺跡に焦点を当て、これまでの調査成果をもとに概観したい。

１．古墳時代

古墳時代の遺構・遺物は、遺跡が乗る砂丘の東斜面、宇美川に面した範囲に集中している。箱崎遺跡では筥崎区画整理事業として、JR鹿児島本線箱崎駅周辺において再開発が実施されており、それに伴う発掘調査で古墳時代の大規模な集落跡と墳墓群の存在が確認された。

集落跡は筥崎宮の北東側、砂丘の最高所付近で検出された。第8次調査・20次調査1区・30次調査16区で古墳時代前期の竪穴住居跡が検出され、前期初頭頃に集落が形成されたことがわかっている。この集落は前期を通じて存続するが、中期に入ると衰退し、6世紀には廃絶することが発掘調査の結果から見て取れる。遺物は土師器のほか、第8次調査では滑石製石錘やイイダコ壺・陶質土器、第30次調査16区では5世紀後半頃の竪穴住居跡から滑石製臼玉・勾玉・剣型模造品が、第40次調査18区、第52次調査では小片ながら東海系S字状口縁甕が出土している。

集落跡からは滑石製石錘やイイダコ壺など漁労に関係する遺物が多く出土しており、漁撈に深くかかわった住民の生活を窺うことができる。石錘は博多湾西岸の遺跡から同型のものが出土しているほか、東海系土師器や陶質土器が出土していることから、博多湾沿岸のみならず海を介した遠方との交流も想定される。

一方、墓域は集落から浅い谷を挟んだ南西側の高所で検出されている。第22次調査4区、第26次調査6区では土器棺墓が、第40次調査19区では方形周溝墓が検出された。これらの墳墓は集落が形

成された古墳時代初頭に遡ると推測されている。第40次調査19区では方形周溝墓のほかに円墳2基、石室状遺構が検出されており、円墳のうち1号墳は集落が衰退を始める5世紀中頃、2号墳は集落廃絶に近い6世紀後半に位置付けられている。2号墳は石室の床面が遺存しており、直刀・鉄鎌・鉄鏃・刀子が出土した。

2. 平安時代前期

平安時代前期の遺構・遺物は、筥崎宮の南東、東西100m、南北300mの範囲に集中している。遺構は井戸や土壙で、特異なものとして梵鐘鋳造遺構が挙げられる。官衙の特徴を示す掘立柱建物や方形の区画は検出されていないが、官衙あるいは官人の存在をうかがわせる以下のような遺物が出土している。

第26次調査では石帯巡方が、第47次調査では権が出土した。越州窯系青磁は第26次調査で多く出土しているが、粗製品の部類に入るものが多いようである。

瓦は第47次調査で10世紀後半～11世紀前半頃のものが大量に出土した。建物廃絶後、井筒の構築材に転用されたものと推測され、大宰府・鴻臚館出土瓦と同型式のものが含まれる。

筥崎宮が遷座した平安時代前期の箱崎遺跡は、その出土遺物から官人の存在が窺えるものである。大宰府・鴻臚館出土瓦と同型の瓦が出土するなど大宰府とのつながりや、対外交易の拠点としての発展の萌芽をみることができる。

3. 式内社筥崎宮

箱崎遺跡が乗る砂丘の中央部、標高3.5mほどの高所に筥崎宮が位置する。箱崎遺跡の中心となる区域であり、『筥崎宮縁起』によると延長元年（923）に大分宮（福岡県飯塚市）より遷座したとあるが、この時期は鴻臚館の最末期にあたる。遷座にあたっては大宰府官人の対外交易に関する思惑が背景にあったとされ、それに従うならば筥崎宮それ自体が対外交易の拠点としての性格を有していたことになる。

延長5（937）年に成立した『延喜式』神名帳には、「八幡大菩薩筥崎宮一座　名神大」との記述がみえ、このころには筥崎宮が成立しており、名神大社の社格が与えられていたことがわかる。

平安時代末頃の成立とされる『今昔物語集』二六には、筥崎宮神官と大宰府府官を兼任した秦貞重と宋商人の交渉が描かれる。秦貞重は日宋貿易に従事することで得た富によって中央権門とも密接なつながりを持っていたと考えられ、筥崎宮は対外交易に深くかかわっていた大宰府とその成立から密接な関係を有していたことが箱崎遺跡における平安前期の出土遺物からも窺える。

筥崎宮は治安4（1024）年に石清水八幡宮の傘下に入る。その前年には石清水八幡宮別当に宇佐弥勒寺講師元命が就任しており、平安時代後期になると脚台付きの土師器坏のような神饌用と考えられる特殊な土器や、畿内とあわせて豊前地域とのつながりを示す遺物がみられるようになる。筥崎宮は治承・寿永の内乱（1180～1189）後石清水八幡宮別宮となり、楠葉型瓦器といった畿内産土器がひきつづき多く出土している。

4. 平安時代後期

平安時代後期には、遺構・遺物が確認できる範囲はそれまでのほぼ倍の範囲に拡大し、砂丘の西斜面でもみられるようになる。

この時期に属する遺物の特徴は、特定の地域から搬入されたものが目立つ点である。第26次調査7区からは在地の土師器に交じって少数ながら豊前型土師器坏が、第26次調査8区では楠葉型瓦器椀をはじめとする畿内産土器が多く出土している。筥崎宮が石清水八幡宮の傘下に入った時の別当元

命は宇佐弥勒寺講師を務めており、豊前型土師器坏は宇佐地域からの人の動きを示すものの可能性がある。また、楠葉型瓦器椀は主として畿内から下向する官人や水運関係者の携行品とされ、治安4（1024）年に筥崎宮が石清水八幡宮の傘下となった結果、他の遺跡と比し多く出土するものと考えられる。

平安時代後期の箱崎遺跡では、博多遺跡群同様中国陶磁器が多量に出土するようになる一方、残りの良い高麗青磁の優品が出土している。また、祖型を高麗にもつ単弁八葉軒丸瓦と花菱半截文軒平瓦が遺跡の南東で径200mの範囲、現在の筥崎宮境内裏手の東南部から出土しており、筥崎宮の堂宇のいずれかに用いられたものと考えられ、高麗との経済的なつながりをもつ人物がその造営にかかわった可能性を示している。

5. 平安時代末から鎌倉時代

12世紀後半になると、遺構・遺物は砂丘のほぼ全域に分布するようになる。井戸や土壙といった深い遺構のほか、建物にまとめられるものは少ないが柱穴等も多数検出されている。建物にまとめられた柱穴の軸線は砂丘の地形に合う現況の街区に沿っており、これまでの発掘調査において顕著な道路遺構が検出されていないことから、筥崎宮を中心とする街区の成立が中世以前にさかのぼる可能性を示すものである。

遺物は中国陶磁器の出土量が増加し、陶磁器片を廃棄した井戸や土壙、陶磁器の完品を複数供献した木棺墓や土壙墓が多数検出されている。また、博多と異なる点として宗教用具とみられる遺物も目立ち、ミニチュア鍔付三足羽釜が第56次調査をはじめ複数の調査区から出土している。

6. 鎌倉時代後期から南北朝時代

箱崎遺跡では、13世紀後半に受けた2度にわたる蒙古襲来を物語る遺構として、元寇防塁の一部とみられる石塁遺構が九大箱崎キャンパス跡地で複数個所検出されている。また、砂丘の北西側、東西100m・南北300mの範囲を中心に13世紀後半頃、文永の役に伴う兵火の痕跡の可能性がある焼土層が検出されている。

この時期の箱崎遺跡では、龍泉窯系青磁の優品が高い頻度で出土している。第26次調査7区では鼎形、第32次調査では鬲形の小形青磁三足香炉が出土している。とくに第32次調査出土個体は焼成・発色ともに良好で、鎌倉期の箱崎が、石清水八幡宮別宮であった筥崎宮の力を背景とし、同時期の博多に劣らない対外交易の拠点に発展していたことが窺える。

7. 室町・戦国時代

15世紀にはいると、それまで箱崎遺跡が乗る砂丘全体に広がりを見せていた遺構・遺物が、砂丘の南北端部に集中するようになるが、遺跡の中心部分での発掘調査例は少なく、分布については不明なところがある。文明12（1480）年には飯尾宗祇が筥崎宮に参詣し、『筑紫道記』に兵火による焼失後、再建途中であった堂宇の様子が述べられている。

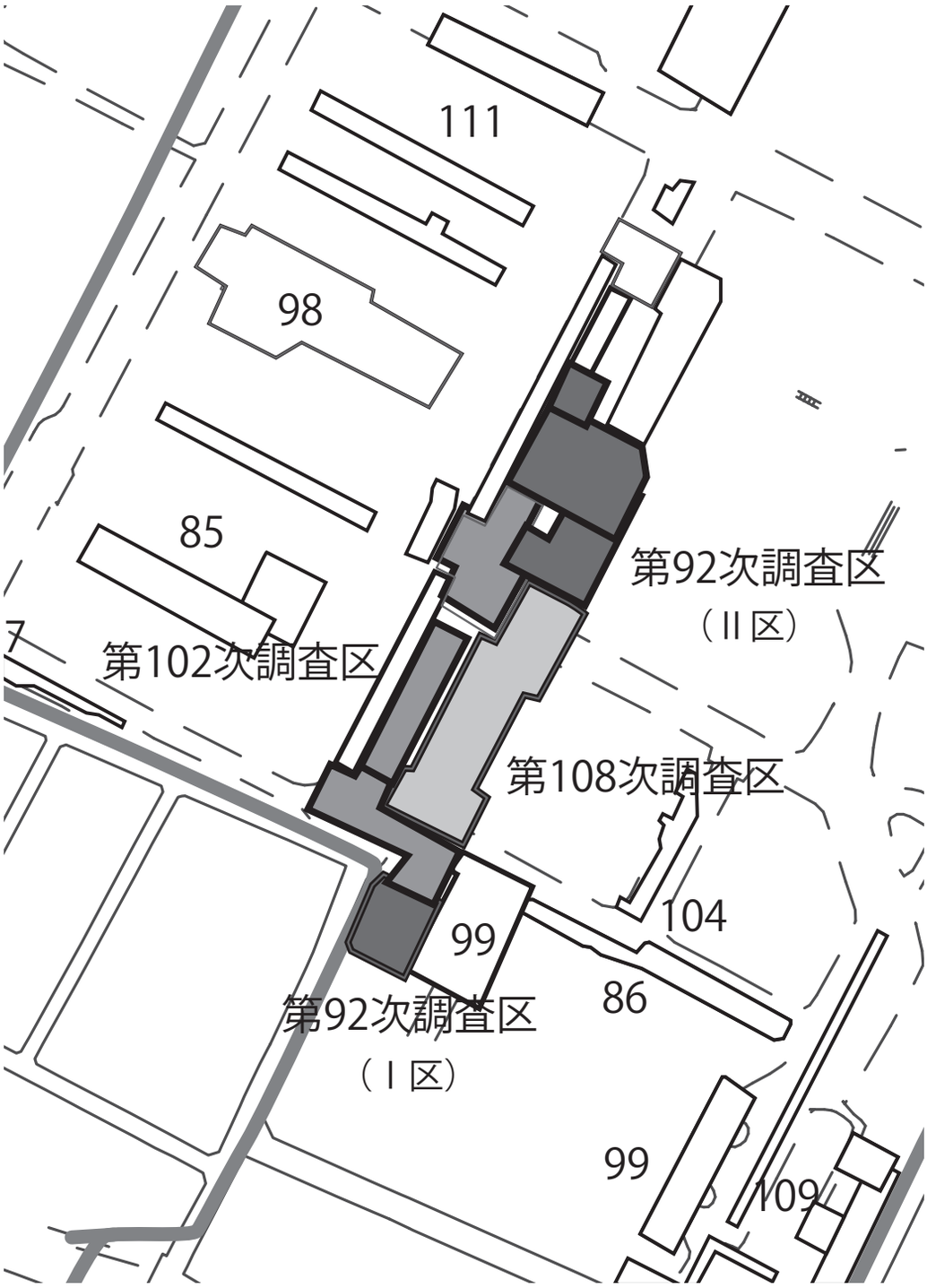
現在みられる筥崎宮本殿と拝殿は天文15（1546）年に大内義隆によって、楼門は文禄3（1594）年に小早川隆景によって建立され、いずれも国の重要文化財に指定されている。16世紀代になると遺構・遺物とも減少するが、現在まで続く町場での発掘調査例が少なく箱崎遺跡の衰退を示すものと一概にいうことはできない。現存する町屋の地下に当該期の遺構が眠っている可能性は高いといえる。

本書掲載の埋蔵文化財包蔵地の範囲は令和３年３月現在の推定線であり、現在は変更されている可能性があります。本文の内容に直接関わらない遺跡は一部省略しています。

第1図　箱崎遺跡と周辺の主な遺跡（1/50,000）

1 箱崎遺跡　2 元寇防塁　3 吉塚本町遺跡　4 吉塚祝町遺跡　5堅粕遺跡　6 吉塚遺跡　7 博多遺跡群　8 上牟田遺跡　9 席田平尾遺跡　10 雀居遺跡　11 久保園遺跡　12 下月隈D遺跡　13 山王遺跡　14 比恵遺跡群　15 那珂遺跡群　16 五十川遺跡　17 諸岡A遺跡　18 諸岡B遺跡　19 那珂君休遺跡　20 板付遺跡　21 高畑遺跡　22 住吉神社遺跡　23 元寇防塁（国史跡）　24 福岡城・鴻臚館（国史跡）

第2図　箱崎遺跡と既往の調査地位置図



第3図　本書にて報告する調査区位置図

第２章　第92次調査の記録

第１節　調査の概要

（発掘作業）

平成30年度の第92次調査は、調査対象地のうち、南端（第Ⅰ区）と旧工学部本館の西側南半（第Ⅱ区）の２地点に調査区を設定した。第Ⅰ区の北側は、当初予定調査区から既設支線柱を避けた形状となった。第Ⅱ区は、既存構造物・埋設物や植栽樹木、土壌汚染範囲、解体工事の仮設道等を避けた形状となった。第Ⅱ区の北西部については、平成30年度調査は一部に止め、残りは平成31年度以降の調査対象とすることになった。調査区上端の面積は第Ⅰ区が433.6㎡、第Ⅱ区が1,080.5㎡である。両区の排出土はすべて場内に仮置きし、調査終了後に調査区内に戻した。

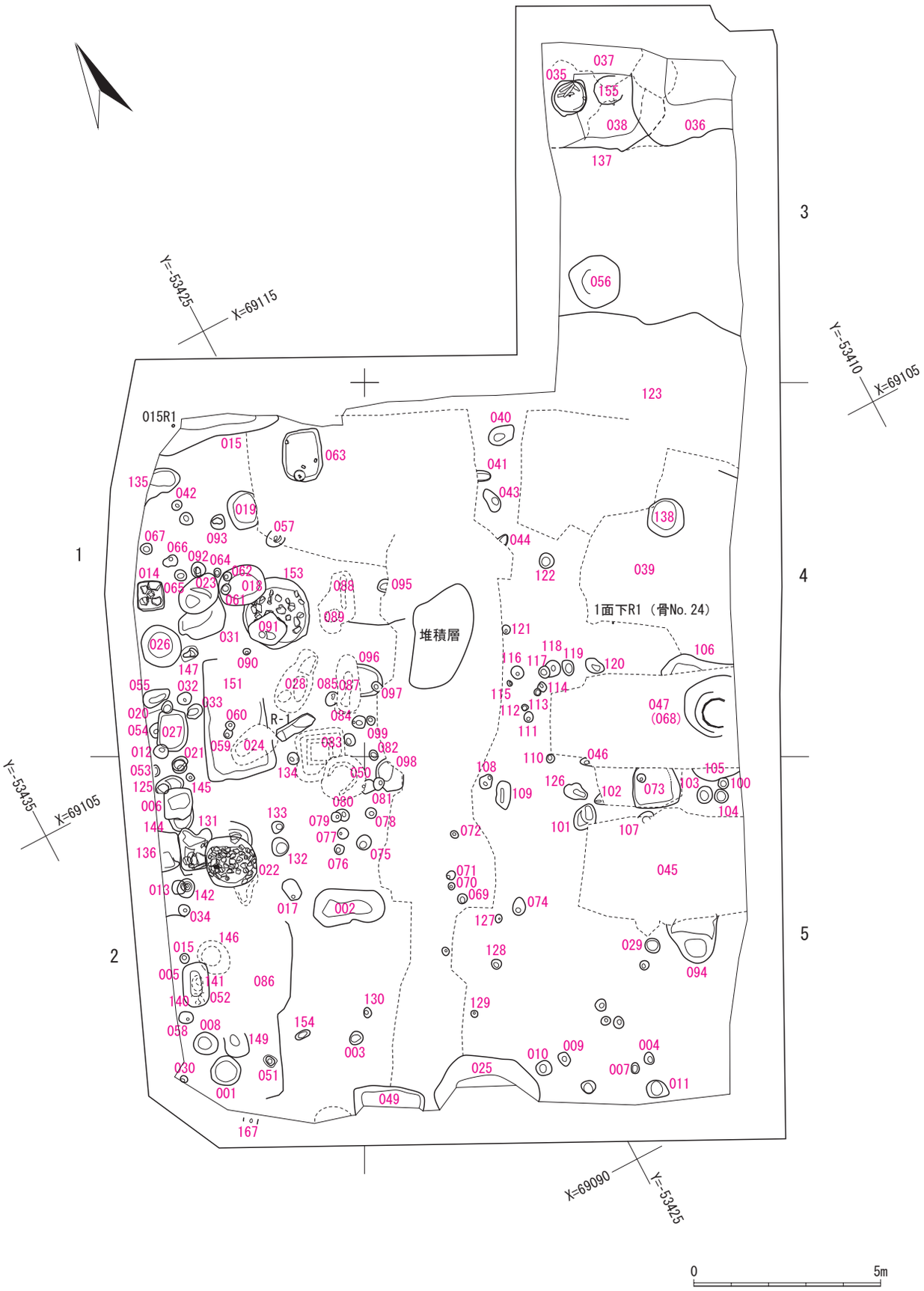
調査区には九州大学が構内に設置していた10ｍグリッドに合わせて、区画を設定した（第Ⅰ区は５区画、第Ⅱ区は19区画）。国土座標（世界測地系）と標高値は九州大学が平成28年に敷地内に設置した３級基準点をもとに与えた（基準点・共用グリッドの詳細は九州大学埋蔵文化財調査室報告第１集（2018）を参照）。調査写真は、35mm判と６×７㎝判のモノクロおよびリバーサルフィルム、デジタルカメラ（NiconD5500、他コンパクトデジタルカメラ）で撮影した。全景写真は、高所作業車を使用して撮影した。遺構平面図は、手実測の他、電子平板（株式会社CUBIC「遺構くん」）をリースして使用した。実測図の縮尺は、１/５・１/10・１/20遺構実測図、１/20土層実測図とした。土層注記は、新版標準土色帖（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）をもとに調査担当者の肉眼観察で行った。

掘削作業は発掘作業員約24名が行なった。遺構実測は、板倉と中園将祥が行なった。遺構写真撮影は板倉が行なった。遺構番号は、記録をとった順に通し番号と仮の遺構略号を付け、整理・報告の過程で、遺構略号を決定した。遺構埋土の一部は調査担当者が現場で採取し、洗浄・乾燥させて微細遺物を抽出した。

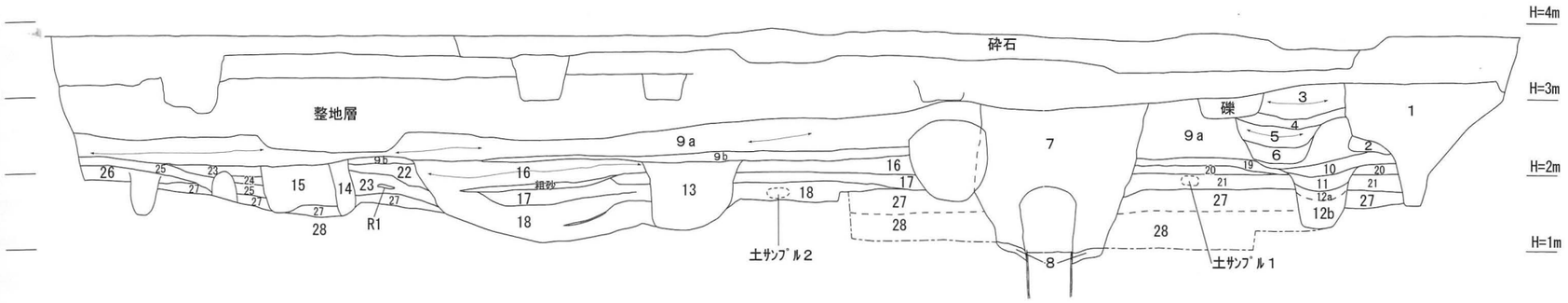
（整理作業）

平成30年度から令和３年度の整理作業は、三宅恵子（平成30～令和３年度）、立山睦彦（平成30～令和２年度）が主に行なった。遺物は、土器・土製品、石器・石製品、金属器・金属製品、木質遺物、自然遺物に分類して整理作業を進めた。土器・土製品は最も多く出土し、報告資料の抽出は最低限のものとした（図化遺物約15箱、未図化遺物約72箱）。石器・石製品は全資料の一覧を作成し（第２・５・８表）、一部を図化報告した。石材判定はネオジム磁石による磁性確認などを参考に担当者の肉眼観察で行った。石造品の一部は３次元計測スキャン（Artec Space Spider）を行い、メッシュモデルを作成した。金属器・金属製品、金属生産関係遺物は、遺構ごとの一覧表を作成し（第３・６・９表）、一部を図化報告した。金属器・金属製品のうち、銅銭は全点のＸ線写真撮影を行った。薬莢については蛍光Ｘ線分析による材質調査を行なった。３次元計測、Ｘ線写真撮影、蛍光Ｘ線分析は福岡市埋蔵文化財センターの機器を利用した。遺物実測は、土器・土製品を野口聡子、山本麻里子、大庭友子、板倉が、石器・石製品、金属器・金属製品を板倉が行なった。遺物写真撮影は板倉が行なった。トレースは土器・土製品を野口が、その他を板倉が行なった。本章の執筆は、第５節第１項を株式会社古環境研究所が、第５節第２項を小林　啓（九州歴史資料館）が行ない、その他を板倉が行なった。また、遺物整理において加藤良彦、佐藤浩司、比佐陽一郎、藤崎彩乃の助言と協力を得た。

出土遺物の内容を記述するにあたっては、下記文献（五十音順）を参考とした。

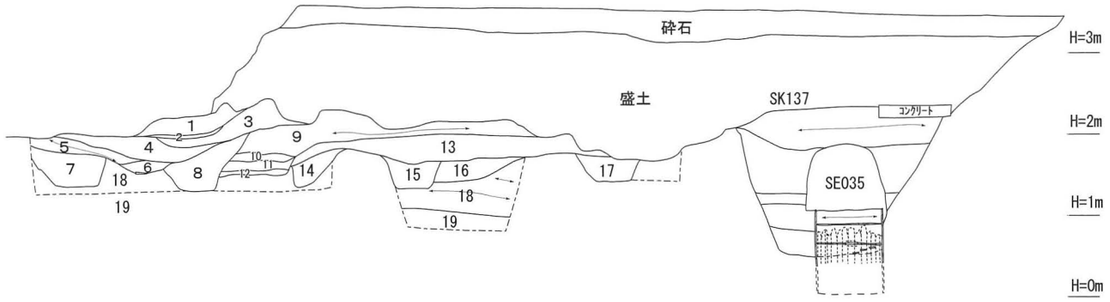


第４図　第Ⅰ区第１面遺構全体図（1/150）

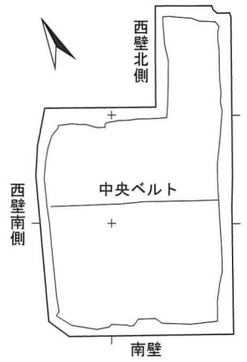


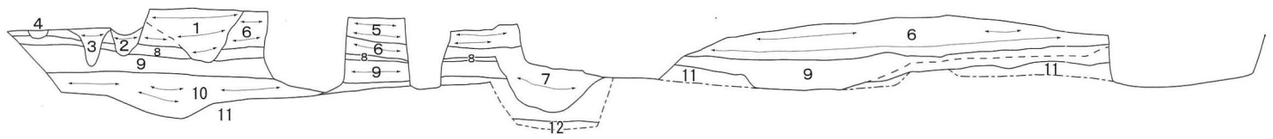
22. 黄褐色2.5Y5/4中砂　23. オリーブ褐色2.5Y4/4粘質砂　24. 黒褐色2.5Y3/2粘質砂
25. にぶい黄褐色10YR4/3粘質砂　26. 暗褐色10YR3/4粘質砂。マンガン含む
27. 黄褐色10YR5/6・5/4細・中砂　28. 明黄褐色10YR6/8細砂～中粗砂の細かい互層

第Ⅰ区西壁南側土層
1. 灰黄褐色10YR4/2粘質砂　2. にぶい黄褐色10YR4/3粘質砂
3. オリーブ褐色2.5Y4/3粘質砂　4. 3層に焼土塊含む
5. 褐色10YR4/4砂・中砂。径2cm炭・焼土、礫含む
6. 褐色10YR4/4砂・中砂。暗褐色粘土ラミナ堆積
7. にぶい黄褐色～黄褐色10YR5/4・5/6細・中砂。褐色10YR4/4粘質砂ラミナ・小ブロック含む
8. 暗褐色10YR6/6細砂　9a. にぶい黄褐色10YR5/4細・中砂。粘質砂ラミナ　9b. 細砂
10. 黄褐色10YR5/6細～粗砂　11. 暗褐色10YR3/4粘質砂多い細砂
12a. 暗褐色粘質砂ラミナ、細砂　12b. 暗褐色粘質砂ラミナ、小ブロック細砂
13. 褐色10YR4/4細・中砂。粘質砂小ブロック含む
14. オリーブ褐色2.5Y4/4細・中砂に暗色土小ブロック含む　15. オリーブ褐色2.5Y4/4細・中砂
16. 褐色10YR4/4・4/6細砂、鉄分・マンガン含む　17. 暗オリーブ褐色粘質砂。径1cm炭含む
18. にぶい黄褐色10YR5/4細・中砂。粗砂含む互層
19. 暗オリーブ褐色粘質砂。細・中砂ブロック、ラミナ含む　20. にぶい黄褐色10YR5/4細・中砂
21. 暗褐色10YR3/3粘質砂。径1cm炭・焼土含む

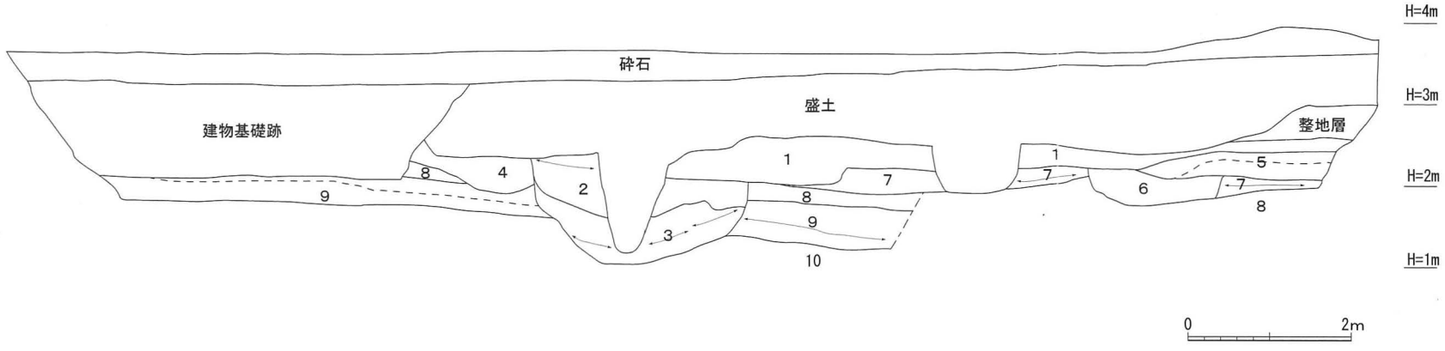


第Ⅰ区西壁北側土層
1. 明黄褐色10YR6/6砂。しまり弱い
2. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質砂　3. 1層と同質
4. にぶい黄褐色10YR5/4砂。SX188　5. 1層と同質
6. にぶい黄褐色10YR4/3粘質砂。骨・炭化物含む。しまり強い
7. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土。しまりやや強い。SX164　8. 7層と同質。SX165
9. 褐色10YR4/4粘質砂。SX123
10. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質砂。しまり強い
11. 明黄褐色10YR6/6砂　12. 10層と同質
13. にぶい黄褐色10YR5/4細・中砂
14. 褐色10YR4/6細・中砂　15. 14層と同質。SX139
16. 明黄褐色10YR6/6細・中砂
17. 褐色10YR4/6粘質砂
18. 明黄褐色10YR6/6細～中砂互層
19. 鉄分沈着層。細～粗砂





第Ⅰ区中央ベルト南面土層
1. にぶい黄褐色10YR5/4細・中砂、粘土ラミナ層。SX166
2. 褐色10YR4/4細・中砂、粘土ラミナ層。しまりやや弱
3. オリーブ褐色2.5Y4/6中砂、粘土小ブロック含む。しまりやや弱
4. 黄褐色2.5Y5/3粘質砂。径5cm炭粒含む。しまりやや弱
5. 褐色10YR4/4細・中砂、粘土ラミナ含む。木根・小礫含む。しまりやや強。包含層Ⅰ層
6. 明黄褐色10YR6/6細～粗砂。しまり弱。包含層Ⅱ上層
7. にぶい黄褐色10YR5/4細・中砂
8. にぶい黄橙色10YR7/4・6/4細砂
9. 明黄褐色10YR6/6細・中砂。にぶい黄褐色10YR5/4粘土ラミナ、暗褐色粘質砂・にぶい黄褐色シルトブロック含む。包含層Ⅱ下層
10. 明黄褐色10YR6/6・8細・中砂。暗褐色粘土層含む
11. 明黄褐色10YR6/8細・中砂。しまりやや弱い
12. 褐色10YR4/6細砂。しまりやや弱い。鉄分沈着層



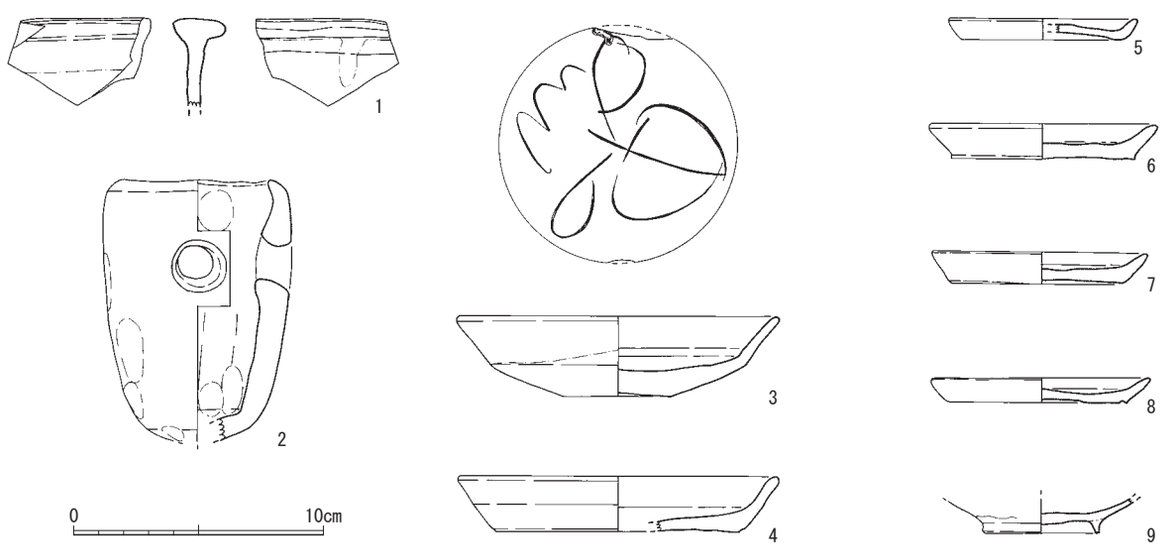
第Ⅰ区南壁土層
1. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3粘質砂。礫・炭含む
2. 暗オリーブ褐色粘質砂ブロック含む黒褐色粘質砂・砂の粗い互層
3. 黒褐色粘質砂・砂の細かい互層。SK025
4. にぶい黄褐色10YR4/3粘質砂。径1cm炭粒含む。しまりやや強い
5. オリーブ褐色砂質土。マンガン・鉄分、礫・粗砂ブロック含む。
6. オリーブ褐色2.5Y4/3粘質砂。径5～10cm炭含む。しまりやや弱い。SR152
7. オリーブ褐色2.5Y4/3粘質砂、暗オリーブ褐色粘質砂ラミナ含む。径1cm炭含む。しまりやや強い
8. 黄褐色10YR5/6～2.5Y5/4細・中砂。しまりやや強い
9. 明黄褐色10YR6/6細・中砂の細かい互層。しまりやや弱い
10. 粗砂。鉄分沈着層。しまり弱い

第５図　第Ⅰ区壁面土層実測図（1/80）

井澤洋一（1995･1996）「筑前における中近世瓦の分類試案」『福岡市博物館研究紀要』５・６、pp.85-108、pp.60-91
尾上実・森島康雄・近江俊秀（1995）「瓦器椀」中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』、pp.315-337、真陽社
笹間良彦編（1992）『資料日本歴史図録』柏書房
楠瀬慶太（2007）「土師器食膳具から見た中世博多の土器様相」『九州考古学』82、pp.21-43
佐賀県立九州陶磁文化館編（2006）『近現代肥前陶磁銘款集』
坂詰秀一編（1986）『出土渡来銭―中世―』ニュー・サイエンス社
太宰府市教育委員会編（2000）『大宰府条坊跡ＸＶ―陶磁器分類編―』（太宰府市の文化財第49集）
田中克子（2011）「博多遺跡群出土の中国陶磁器と対外貿易」『博多研究会誌・20周年記念特別号』、pp.57-77
田中克子・佐藤一郎（2008）「貿易陶磁器の推移」大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎編『中世都市・博多を掘る』、pp.112-131、海鳥社、福岡
山本信夫（1990）「統計上の土器―歴史時代土師器の編年研究によせて―」乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会編『九州上代文化論集』、pp.349-386、熊本
山本信夫・山村信榮（1997）「中世食器の地域性：九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集、pp.237-310

第２節　第Ｉ区第１面の調査

表土・盛土をバックホウで除去後、標高2.4～２ｍの面を遺構検出面とした。調査区の東半は建物基礎（旧アドミッションセンター）による影響が大きく、遺構の残りは良くなかった。ピット・鍛冶炉・土坑・井戸・堆積層などを掘削・記録した。出土遺物の時期は12世紀～17世紀代を中心とする。



1　SP085　2　SP115　3　SP069　4　SP046　5　SP017
6　SP141　7　SP074　8　SP075　9　SP128

第６図　SP出土土器実測図（1/3）

1．ピット（第４図）

調査区内からは柱穴が複数確認されたが、建物としての明確な並びは認識できなかった。出土遺物の時期は、概ね12世紀後半、13世紀前半、17世紀後半の３時期に分かれる。

出土遺物（第６・20図）

１はSP085（１区）出土の陶器盤。Ⅱ類：13世紀前半か。

２はSP115（４区）出土の土師器蛸壺。枝紐の通し孔は径1.6cmを測る。

３（図版18-1）はSP069（５区）出土の龍泉窯系青磁皿Ⅰ類（D期：12世紀中頃～後半）。体部下位は露胎。

４はSP046（５区）出土の土師器坏で、糸切り底で小型化している。13世紀中頃。

５はSP017（２区）出土の土師器小皿で、復元口径が7.5cmと小さく、器高も0.85cmと低い。17世紀後半か。

６はSP141（２区）出土の土師器小皿。13世紀前半。

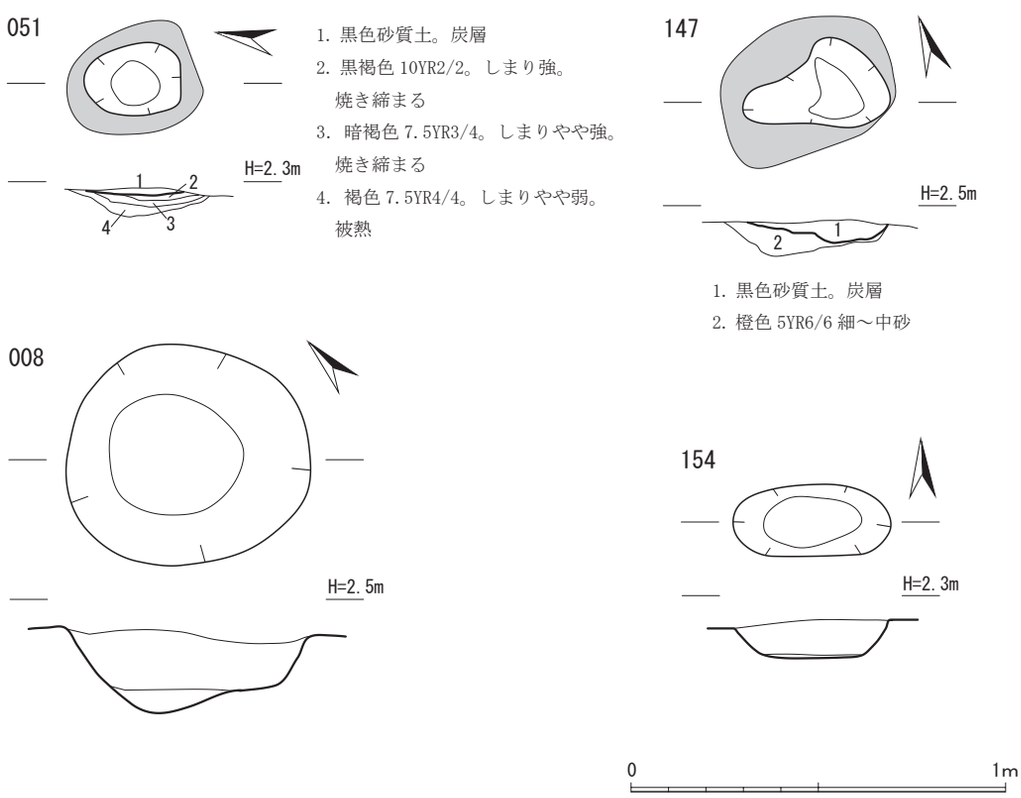
７はSP074（５区）出土の土師器小皿で、内面にヘラナデ痕を残す。13世紀前半。

８はSP075（２・５区）出土の土師器小皿。13世紀前半。

９はSP128（５区）出土の土師器の小椀。

118はSP119（４区）出土の銅銭「至道元寶」（初鋳995年）。

他にSP074（５区）からイヌ大腿骨が出土した。



第７図　SL051・147、SK008、SP154 実測図（1/20）

２．鍛冶炉・焼土土坑

赤色化面もしくは炭化物の集中として認識された。炭層を洗浄・乾燥して微細な遺物を採集した。

SL147（第７図、図版5-2）　１区。小型楕円形ピット。長さ39㎝、幅25㎝、深さ５㎝を測る。トレンチT6の、第１面から約15㎝掘り下げた面で検出した。炭層から鍛造剥片と流動滓が出土した。

SP055・032（第４図）　１区。鉄滓が出土した。

SL051（第７図、図版5-1）　２区。小型楕円形ピット。長さ26㎝、幅19㎝、深さ２㎝を測る。炭層から鍛造剥片と粒状滓が出土した。

SK008（第７図、図版5-3）　２区。円形土坑。長さ65㎝、幅59㎝、深さ18㎝を測る。炭を含む埋土から鍛造剥片と粒状滓、炭化した不明植物遺体約30点が出土した。不明植物遺体は、突起と孔を持つ形状で、動物骨類として種別同定委託を出したが、不明植物遺体と同定された。

SP154（第７図）　２区。楕円形ピット。長さ42㎝、幅19㎝、深さ10㎝を測る。

出土遺物（第17図）　68は上面出土の小型砥石。使用痕は不明瞭だが、長軸面に平滑な砥面が形成される。他に多量の鍛造剥片と粒状滓が出土した。

SP108（第４図）　５区。不定形ピット。長さ42㎝、幅36㎝、深さ30㎝を測る。鉄滓が出土した。

出土遺物（第17図）　69は滑石加工品。石鍋転用の温石か。再加工面もやや被熱・黒色化する。

３．土坑

不定形土坑、方形土坑・礫敷土坑、円形・楕円形土坑に分けて記述する。出土遺物の時期は、概ね12世紀後半、13世紀前半、13世紀後半～14世紀代、17世紀代に分かれる。不定形土坑が古く、円形土坑が新しいという傾向がある。

（不定形土坑）

SK031（第８図）　１区。長さ128㎝、深さ84㎝を測る。SK023に切られる。埋土は粘土・砂のラミナ堆積。

出土遺物（第12図）　10は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類（D期：12世紀中頃～後半）。

SK106（第８図）　４区。深さ63㎝を測る。

出土遺物（第12図）　11は白磁皿Ⅷ類（D期：12世紀中頃～後半）。体部下位は釉削り取り。

SK094（第８図）　５区。幅132㎝、深さ39㎝を測る。埋土は炭・焼土の混じる暗オリーブ褐色粘質砂。

出土遺物（第12図）　12は土師器坏。ヘラ切り底。底内面からの破砕打撃痕跡が残る。12世紀中頃。13は同安窯系青磁碗Ⅲ類（D期：12世紀中頃～後半）。体部下位は露胎。14は陶器小盤Ⅰ類。口唇内側は釉拭き取りで赤褐色に発色する。体部下位は露胎。12世紀中頃か。他に羽口片、鉄滓が出土した。

SK135（第８図）　１区。深さ30㎝を測る。埋土に礫を含む。

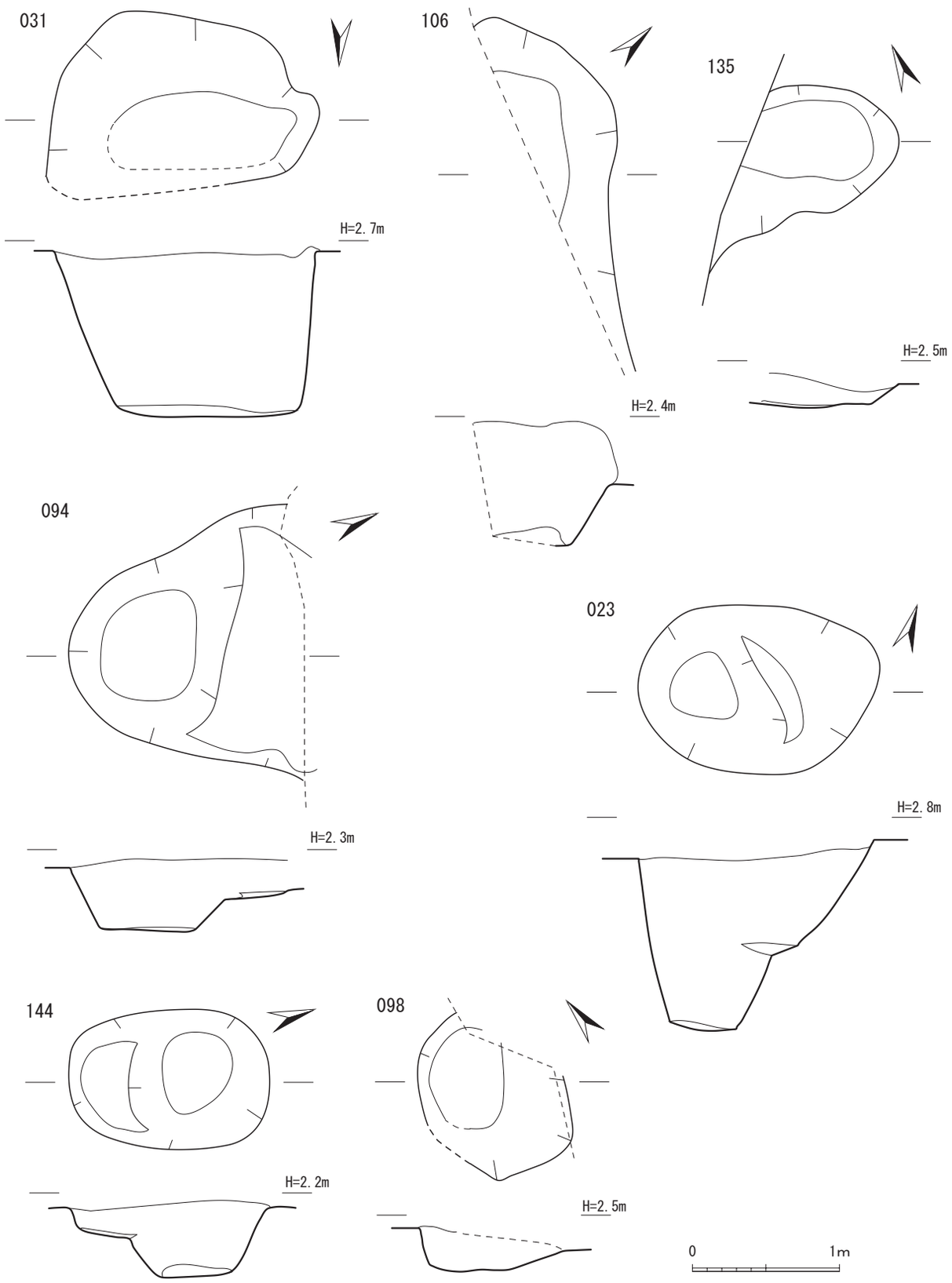
出土遺物（第12・17図）　18は龍泉窯系青磁碗Ⅱc類（F期：13世紀中頃～14世紀初頭前後）。底外面は露胎、畳付けは釉拭き取りで赤褐色に発色。70は滑石製石錘。長軸と側面に溝を持つ。

SK023（第８図、図版5-4）　１区。長さ124㎝、幅87㎝、深さ97㎝を測る。SK031を切る。埋土に礫を多く含む。

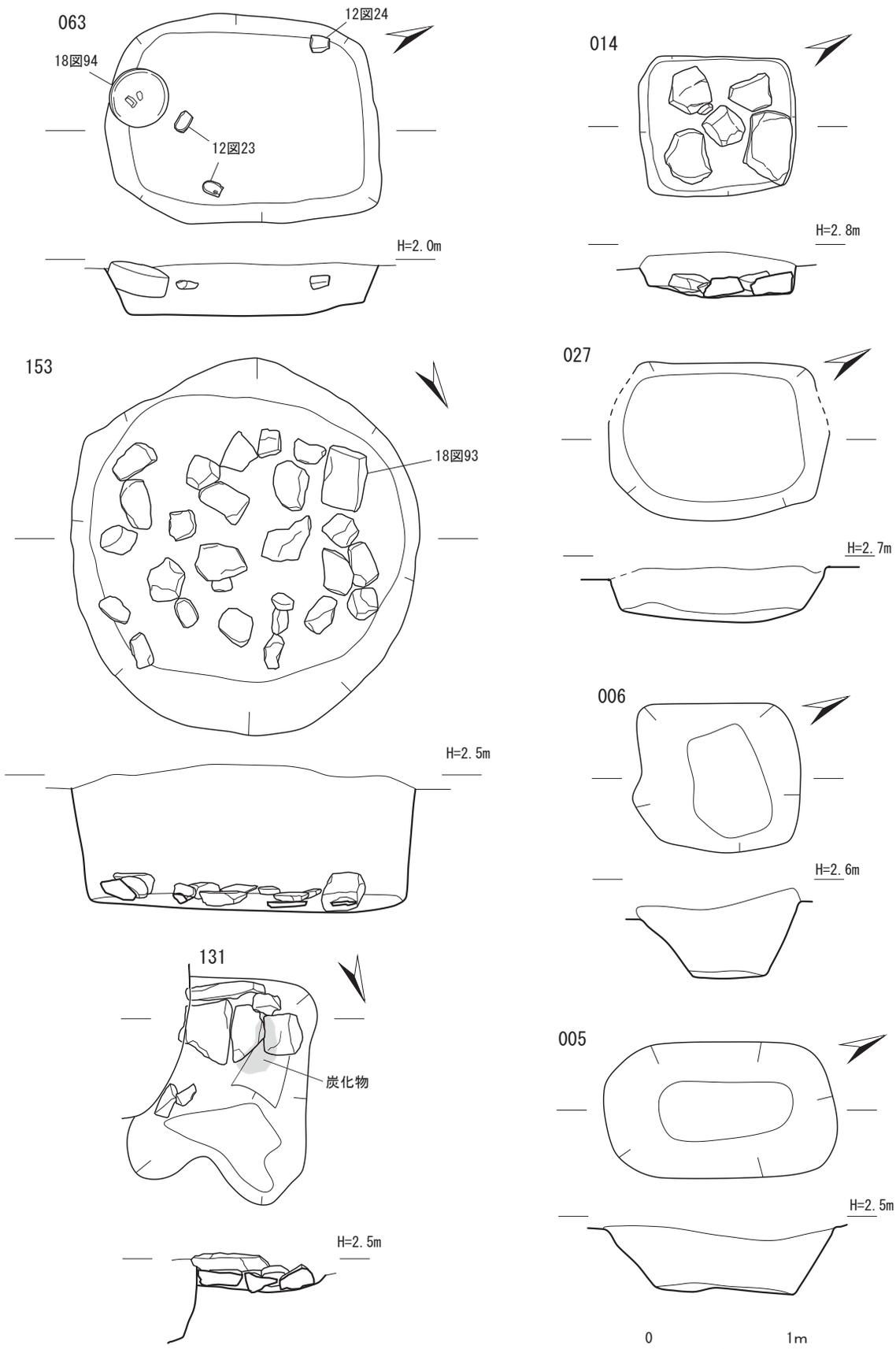
出土遺物（第12・17図）　22は土師器小皿。14世紀代。71は滑石製石錘。72～74は土錘。

SK144（第８図）　２区。第１面を掘り下げて検出した。長さ101㎝、幅71㎝、深さ42㎝を測る。SK006に切られる。

SK098（第８図）　５区。深さ24㎝を測る。



第８図　SK031・106・135・094・023・144・098 実測図（1/40）

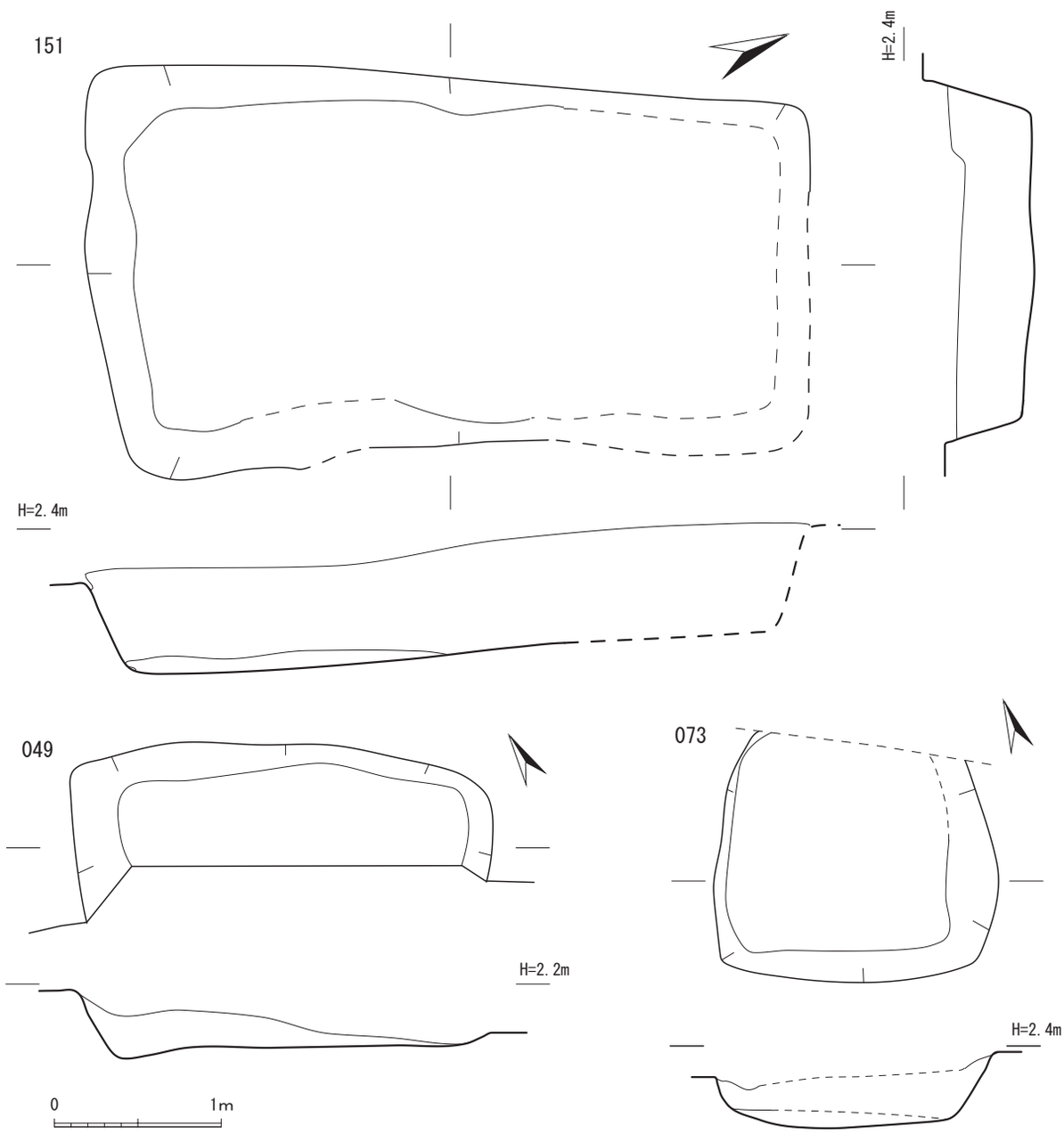


第９図　SK063・014・153・131・027・006・005 実測図（1/40）

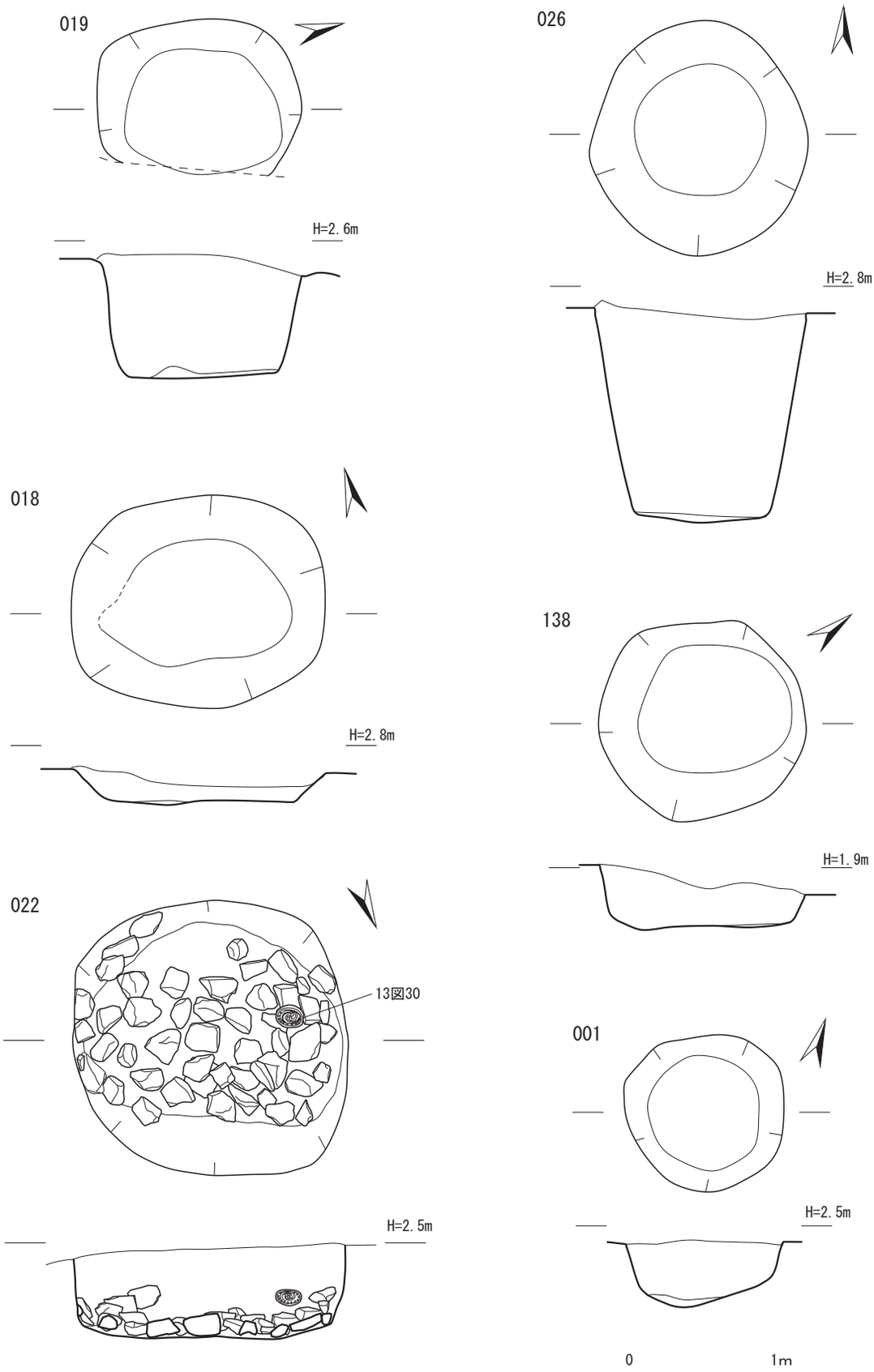
（方形土坑、礫敷土坑）

SK153（第９図、図版5-8）　１区。長さ192㎝、幅176㎝、深さ80㎝を測る。SK018に切られる。埋土は暗オリーブ褐色2.5Y3/3粘質砂と黄褐色細・中砂の細かい互層。底に礫を敷く。

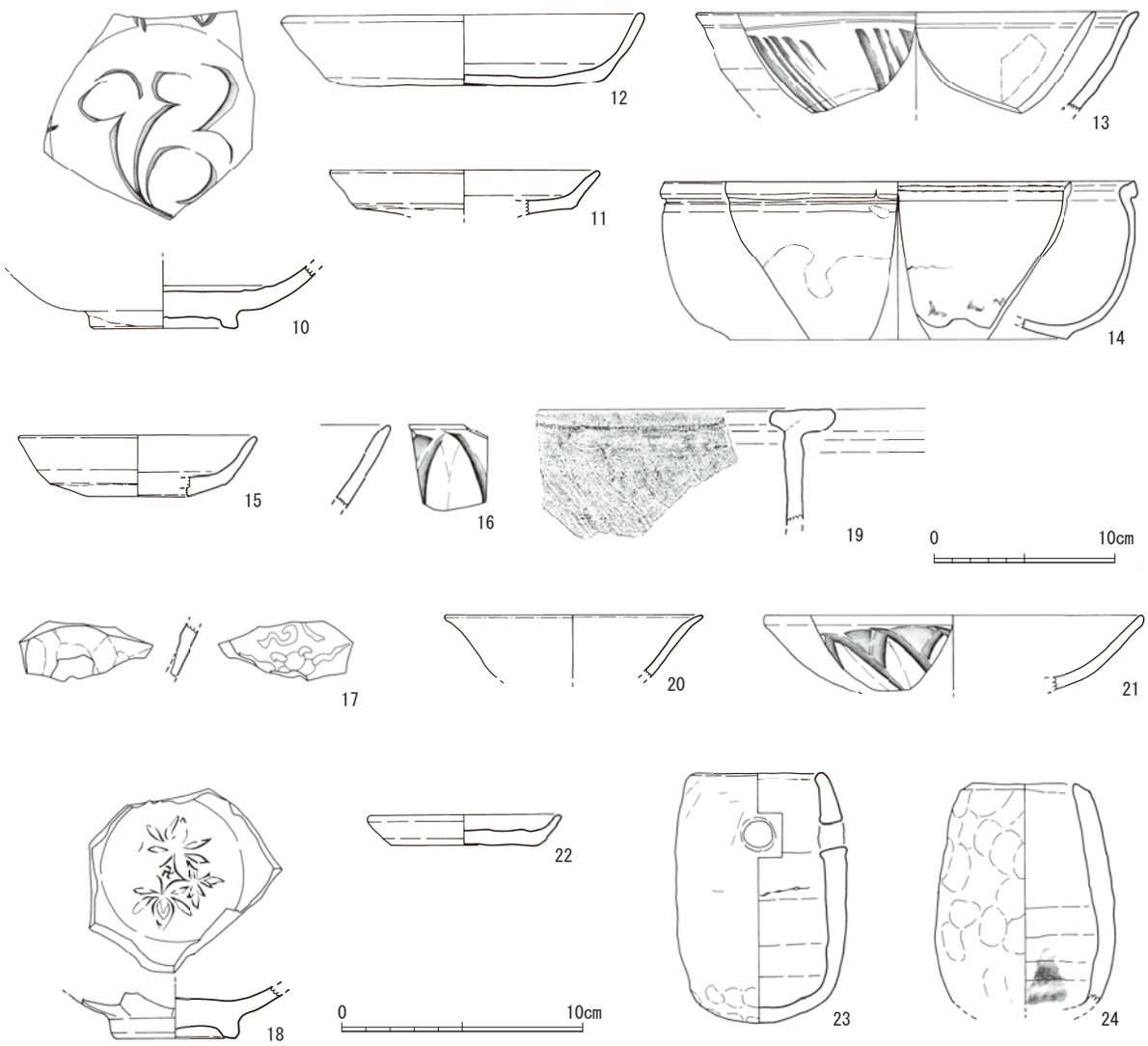
出土遺物（第12・17・18図）　15は白磁皿Ⅷ類（D期：12世紀中頃～後半）。体部下位は釉削り取り。16は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類（E期：13世紀前後～前半）。17（図版18-2）は瑠璃釉磁器の破片。75～77は滑石製石錘。75は長軸の溝と、側面に一部溝と打ち欠きを施す。76は板状の製品を転用している。78・79は土錘。93は砂岩の板碑片で、前面に人物像を彫る（大日如来か。顔と手の部分は剥落する）。表面はわずかに鑿痕を残しつつ平滑に仕上げるが、後面には粗い鑿痕を残す。土坑底部の南西隅に前面を伏せた状態で置かれていた。



第 10 図　SK151・049・073 実測図（1/40）



第 11 図　SK019・026・018・138・022・001 実測図（1/40）



10　SK031　　11　SK106　　12～14　SK094　　15～17　SK153
18　SK135　　19～21　SK049　　22　SK023　　23・24　SK063

第12図　SK出土土器実測図（14・19は1/4、他は1/3）

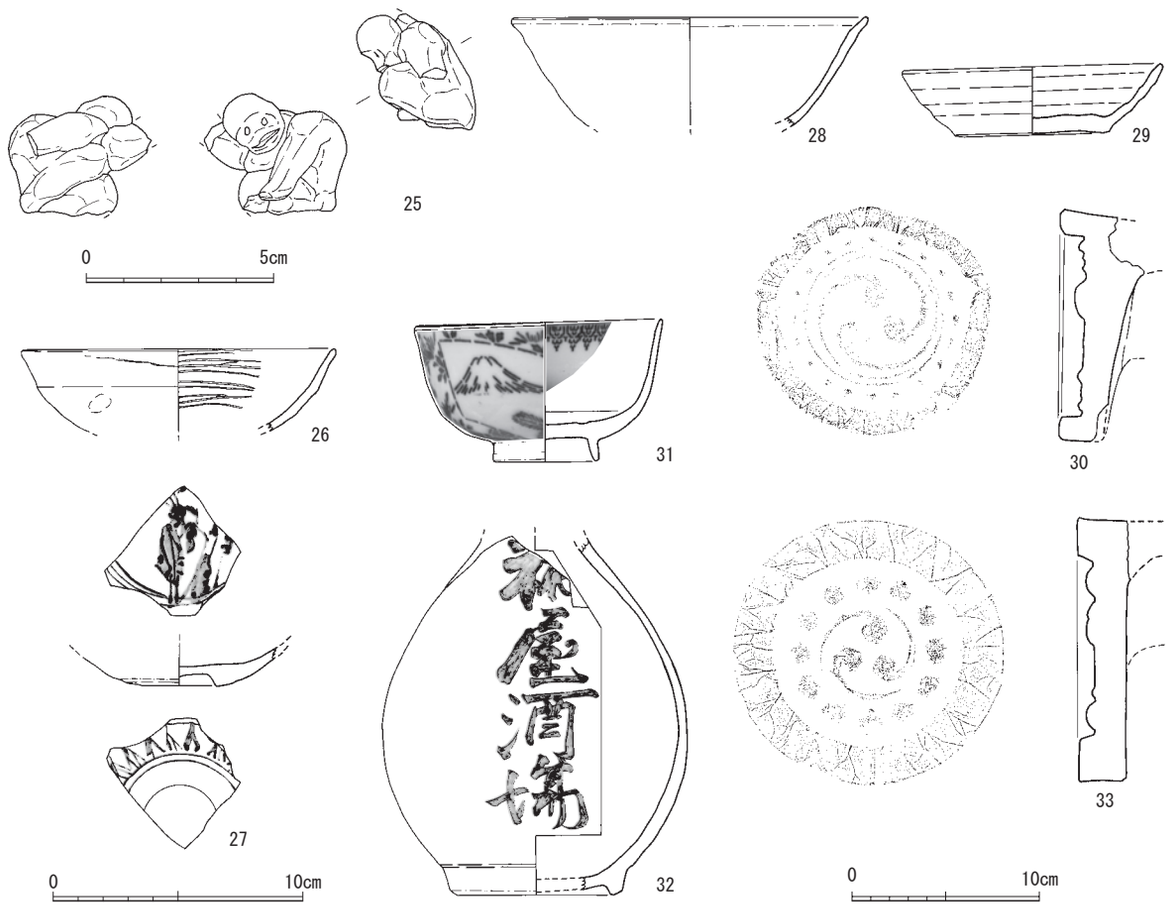
SK063（第９図、図版5-6）　１区。長さ138cm、幅104cm、深さ36cmを測る。埋土は、径１mm焼土・炭を少なく含む暗オリーブ褐色粘質砂と黄灰色砂のラミナ堆積。

出土遺物（第12･18図）　23･24は土師器の蛸壺。23は内面ヨコナデ、外面タテナデで丁寧に仕上げられ、径1.1cmの焼成前穿孔を外面から内面に向かって施す。真二つに割れた状態で出土した。24は内面ヨコナデ、外面タテナデで仕上げられ、穿孔部分は残っていない。94は石臼上石。もの入れ孔は長方形で４×３cm、挽き手孔は長方形で３×2.5cm、軸受け孔は円形で径1.5～1.7cmを測る。臼面（凹み）以外は全体に被熱・黒色化する。石臼や蛸壺は埋没の途中で投棄されている。

SK014（第９図、図版5-7）　１区。長さ79cm、幅71cm、深さ20cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色粘質砂でしまりやや弱い。底に礫が配置される。

SK027（第９図、図版6-1）　１区。長さ112cm、幅80cm、深さ26cmを測る。SP012･020に切られる。SP054を切る。埋土は暗オリーブ褐色砂質土と粘質土のラミナ堆積。

SK006（第９図、図版6-2）　２区。長さ81cm、幅75cm、深さ45cmを測る。SP125を切る。SK144



25・26　SK019　　27　SK026　　28～30　SK022　　31～33　SK002

第13図　SK出土土器・土製品実測図（25は1/2、30・32・33は1/4、他は1/3）

を切る。埋土は、暗オリーブ褐色粘質砂で径１cm炭、黄灰色粘土小ブロック含む。

SK151（第10図）　１区。長さ322cm、幅167cm、深さ70cmを測る。北側が明瞭に検出できなかった。

SK131（第９図、図版6-3）　２区。長さ113cm、深さ25cmを測る。SK022に切られる。礫が敷かれ、その上に炭化物が残る。礫は被熱している。

SK005（第９図、図版6-4）　２区。長さ116cm、幅69cm、深さ36cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色粘質砂で、径２cm焼土・炭やや多い。

出土遺物（第17図）　80は滑石製石鍋の転用・加工品。石鍋破片を端部・側面を細かく面取りして柱状に再加工する。弧状に彫られた溝。温石か。

SK049（第10図）　２・５区。長さ188cm、深さ32cmを測る。

出土遺物（第12図）　19は陶器盤Ⅱ類（13世紀前半）。20は白磁ⅢⅨ類（F期：13世紀中頃～14世紀初頭前後）。口縁端部が口禿げ。21は龍泉窯系青磁坏Ⅲ-5b類（F期）。

SK073（第10図、図版6-5）　５区。長さ63cm、深さ40cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色粘質砂で、径２cm大の焼土・炭を含み、間に黄褐色砂を挟む。

（円形・楕円形土坑）

SK019（第11図、図版6-6）　１区。長さ101cm、深さ63cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色粘質砂と黄灰色砂の互層。

出土遺物（第13図）　25（図版18-3）は猿の土人形。組猿か。26は和泉型の瓦器椀。口唇部は素直に

丸く収まり、胴部はやや張って丸みを帯びており、12世紀後半代と考える。他に銅銭「寛永通寶」（初鋳1636年）が出土している。

SK026（第11図、図版6-7）　１区。長さ116cm、幅105cm、深さ107cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色粘土と黄灰色砂の互層。

出土遺物（第13・17図）　27は青花皿。畳付は釉を掻き取る。16世紀中頃か。81は滑石製石錘。82は土錘。他に銅銭「寛永通寶」（初鋳1636年）が出土している。

SK018（第11図、図版6-8）　１区。長さ125cm、幅105cm、深さ19cmを測る。SP061・062に切られる。SK153を切る。埋土は黄褐色2.5Y5/3砂質粘土で、上層に暗オリーブ褐色粘質砂が厚さ３cmほど堆積する。

SK138（第11図、図版7-1）　４区。長さ101cm、幅96cm、深さ33cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色粘質砂で、径１cm炭、黄褐色砂ブロック含む。

SK022（第11図、図版7-2・3）　２区。長さ136cm、幅136cm、深さ60cmを測る。埋土はオリーブ暗褐色粘質砂。底に礫を敷く。

出土遺物（第13・17図）　28は口禿げの白磁碗Ⅸ類（F期：13世紀中頃～14世紀初頭前後）。29は土師器坏で、内面に黒色付着物が残る。近世期。30は巴文軒丸瓦。内区と外区の境に圏線が引かれ、珠文が比較的多い。16世紀前半代か。床敷きの礫よりも10cmほど上位で出土しており、埋没の途中で投棄されたと考えられる。83は滑石製石錘。84～87は土錘。88は滑石製円盤状石器。89は砂岩製の石球。

SK001（第11図）　２区。長さ78cm、幅77cm、深さ30cmを測る。埋土は、少量の径１cm炭・焼土と黄灰色粘土小ブロックを含む暗オリーブ褐色2.5Y3/3粘質砂でしまりやや弱い。

出土遺物（第17図）　90は滑石製石錘。91・92は土錘。92は他の土錘に比べて紡錘形を呈さない。

SK002（第４図）　２区。平面形は長楕円形。モルタルや瓦、ガラスなどを含む攪乱。

出土遺物（第13図）　31は印版小碗。畳付は釉掻取り。32（図版18-5）は染付瓶。「□屋酒場」「□三百廿七号」「□前本町」の文字が入る。33は巴文軒丸瓦。燻し瓦で雲母が付着する。珠文は大きく、数が少ない。近代

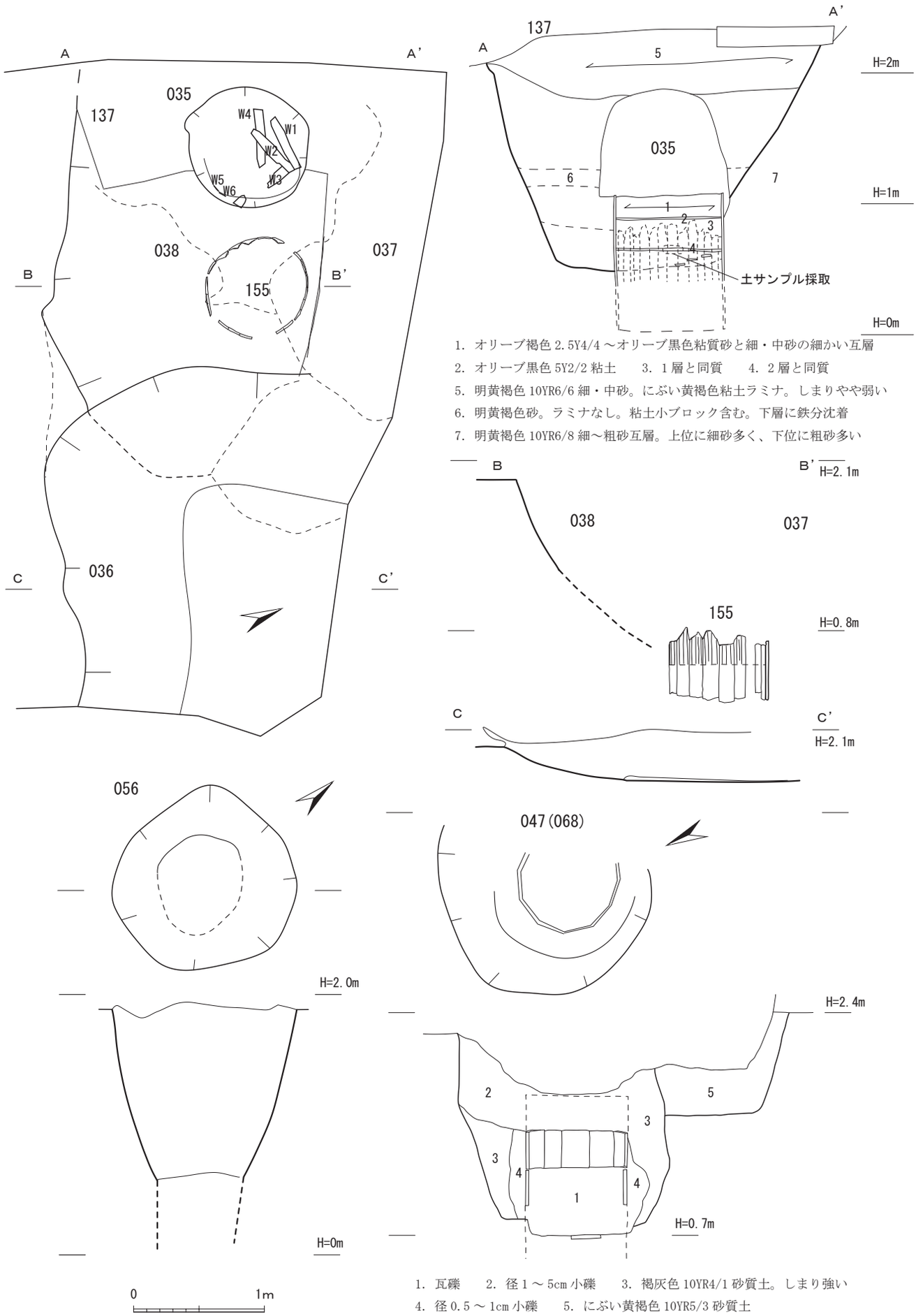
SK025（第４図、図版5-5）　５区。深さ101cmを測る。

４．井戸

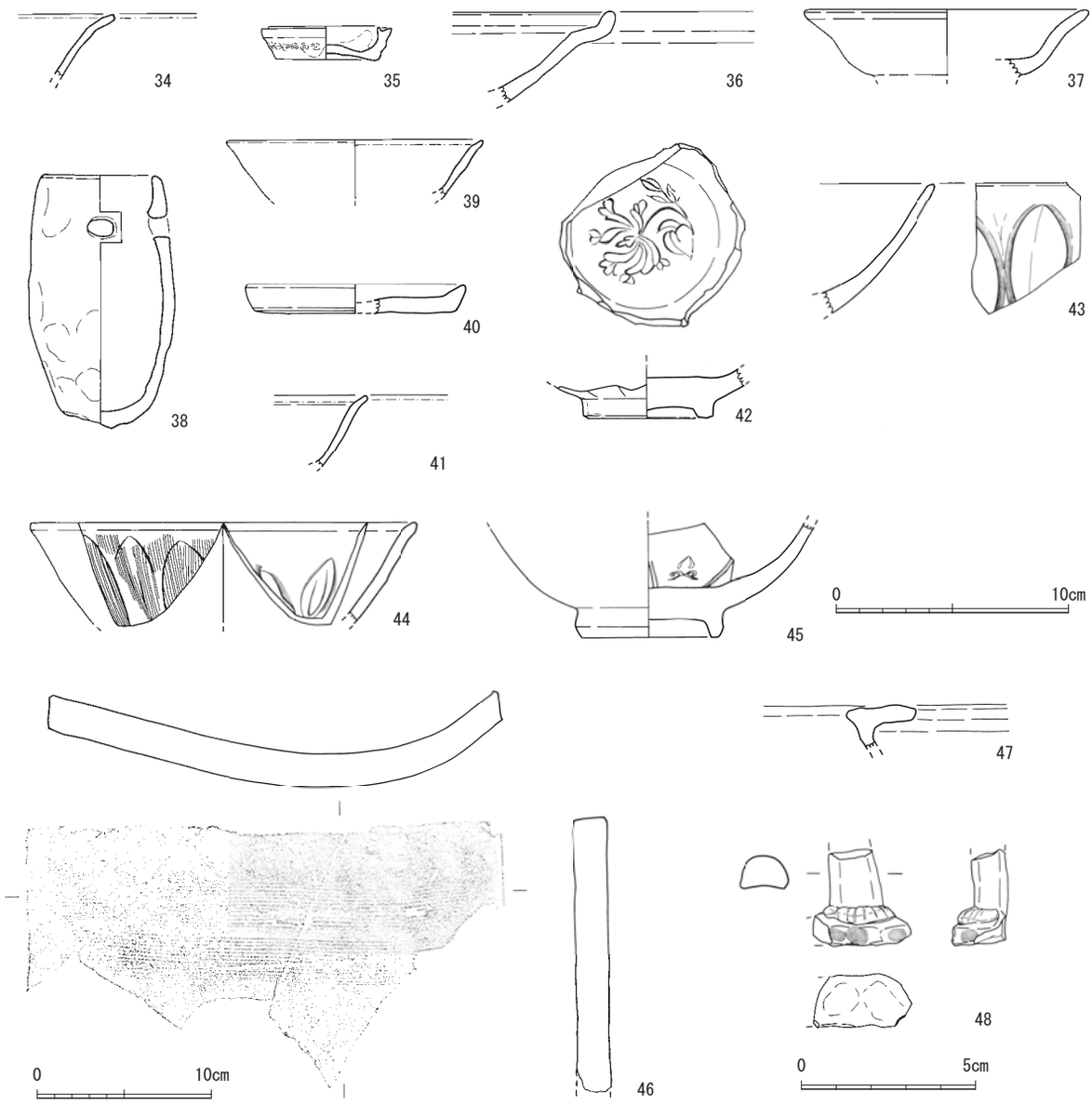
遺構の残りが比較的良好な西半（１・２区）では検出されず、東半の３・４区で検出された。時期は、SE035・155の結桶井戸が13～15世紀初頭、SE047の瓦井戸が近代となる。第２面１区で検出された井戸群（12世紀～14世紀初頭）よりも新しい。

SE035（第14図、図版7-4）　３区。井戸枠はスギ板目材を用いた結桶で径84cm、標高80～０cmに据えられる。

出土遺物（第15・19図）　34は口禿げの白磁碗Ⅸ類（F期：13世紀中頃～14世紀初頭前後）。35（図版18-4）は白磁合子身で、体部外面に陽刻連点文が施される。漆継ぎされている。36は龍泉窯系青磁浅型碗（坏Ⅲ類同様式。F期）。37は青磁皿。38は土師器の蛸壺。永楽通寶（初鋳1408年）が出土している。95は蛇紋岩質の石錘。96～98は土錘。99は礫岩の石球。100は井筒内最下層から出土したイスノキ削り出しの横櫛。歯の数は25本で、長さ4.2cm、幅9.2cm、厚さ１cmを測る。他に硬骨魚綱の椎骨、ネズミ科下顎・上腕骨片などが出土した。



第 14 図　SE035・155、SX036、SE056・047 実測図（1/40）



34～38　SE035　　39・40　SE155　　41・42　SK137　　43　SX036
44　SX037　　45　SX038　　46～48　SE047

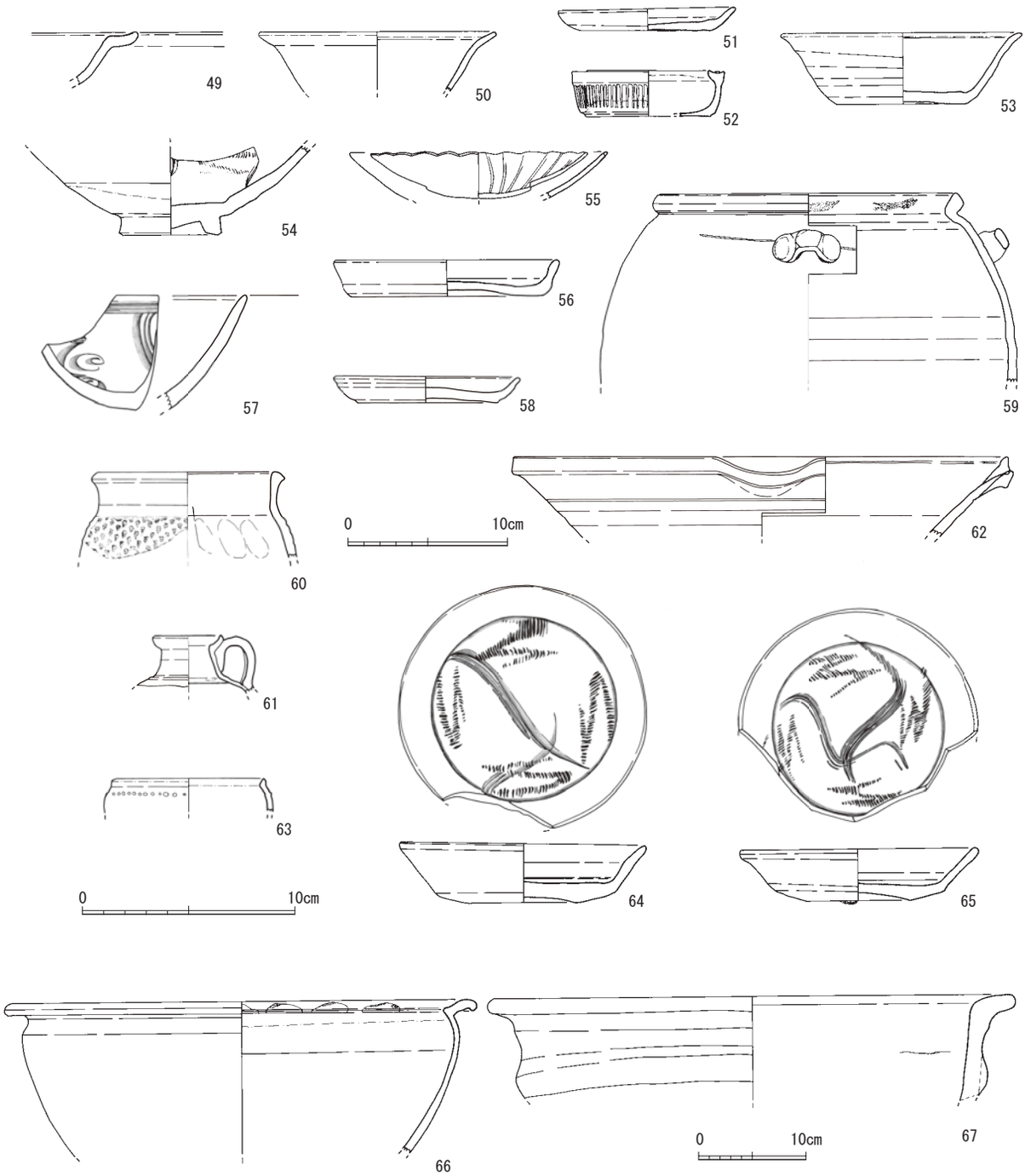
第15図　SE出土土器・土製品実測図（46は1/4、48は1/2、他は1/3）

SE155（第14図、図版7-5）　３区。井戸枠はスギ板目材を用いた結桶で、径86cm、標高80～20cmに据えられる。

出土遺物（第15・19図）　39は白磁皿Ⅸ類（F期）。40は糸切り底の土師器皿で小型扁平化している。13世紀中頃。101は粘板岩製の硯。平滑面の研磨は細かく、研ぎ痕等は見えない。後面が遺存する。102は砂岩の石球。面取りは粗く不十分で、球状を志向した多面体をなす。103・104は滑石製石錘。105・106は土錘。

SK137（第14図）　３区。SE035とSE155の掘方と思われる土坑。

出土遺物（第15・19・20図）　41は口禿げの白磁碗Ⅸ類（F期：13世紀中頃～14世紀初頭前後）。42（図版18-6）は龍泉窯系青磁碗Ⅱc類（F期：13世紀中頃～14世紀初頭前後）。底外面は露胎、畳付けは釉拭き取りで赤褐色に発色。107～110は土錘。119は銅銭「慶元通寶」（初鋳1201年）、120は銅銭「紹



49～51　SX015　　52・53　SX086　　54～56　SX123　　57・58　SX124　　59　SX166　　60　T5　2区
61　T6　2区　　62　5区西ほか　　63　2面検出　　64　4区　　65　T8　　66　西壁　　67　T6　1区

第16図　SX・包含層出土土器実測図（59・62は1/4、66・67は1/6、他は1/3）

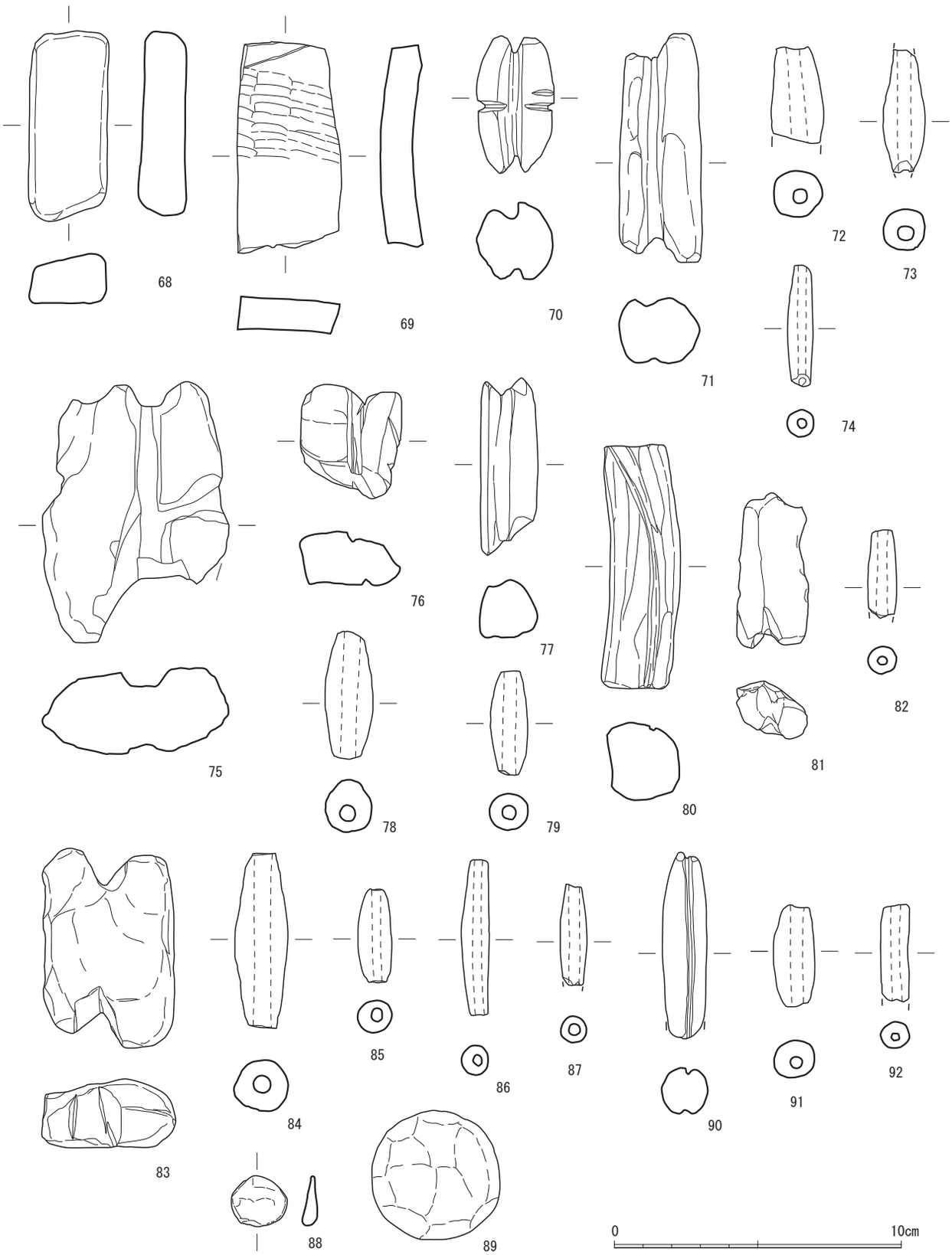
定通寶（初鋳1228年）」。

SX036（第14図）　３区。SK137を切る堆積層。

出土遺物（第15・20図）　43は龍泉窯系青磁碗Ⅱb類（E期：13世紀前半）もしくはⅡc類（F期：13世紀中頃～14世紀初頭前後）。121は銅銭「嘉泰通寶」（初鋳1205年）。他にイルカ類椎骨片が出土した。

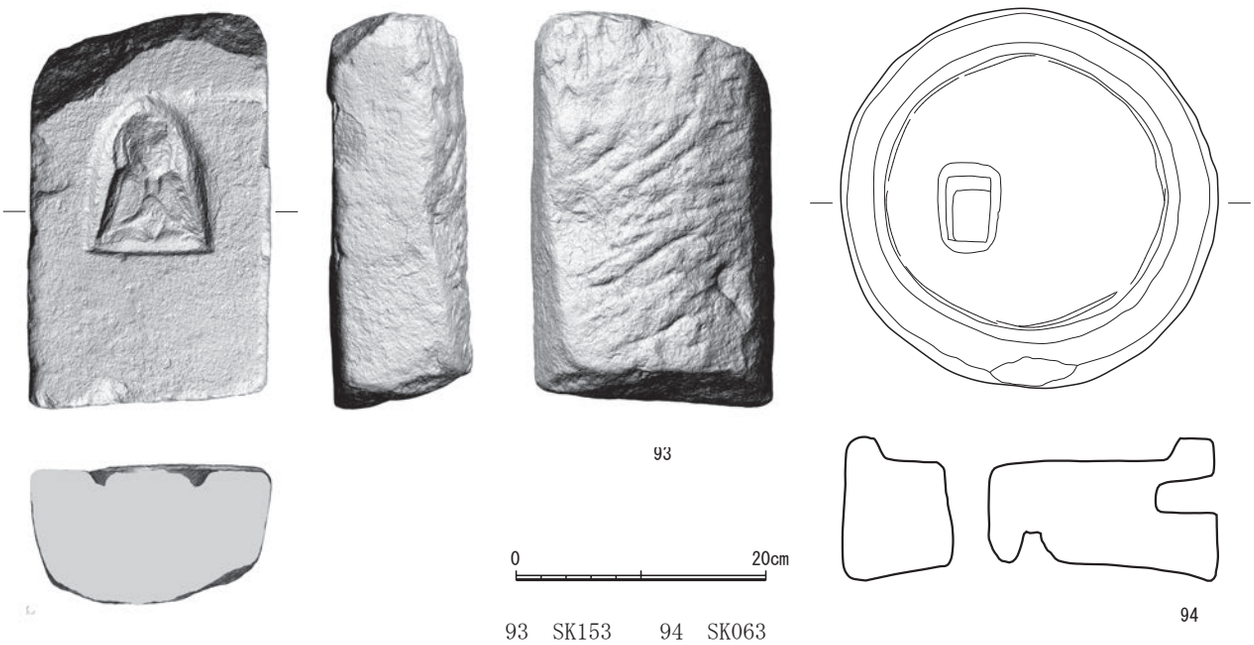
SX037（第14図）　３区。SK137上のブロック土堆積。

出土遺物（第15・19図）　44は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-6a類（D期：12世紀中頃～後半）。111は砂岩の石球。



68　SP154　　69　SP108　　70　SK135　　71 ～ 74　SK023　　75 ～ 79　SK153
80　SK005　　81・82　SK026　　83 ～ 89　SK022　　90 ～ 92　SK001

第 17 図　SP・SK 出土石製品・土錘実測図（1/2）



第 18 図　SK153・063 出土石製品三次元モデル画像および実測図（1/6）

112は滑石製の円盤状製品。打ち欠き石錘か。113～115は土錘。

SX038（第14図）　３区。SK137上のブロック土堆積。

出土遺物（第15図）　45は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4類（D期：12世紀中頃～後半）。高台内は露胎。

SE056（第14図、図版7-6）　３区。土坑埋土を掘り下げる途中で平面的に井戸枠の痕跡らしき輪状の腐植土を確認した。井筒の径は65㎝。下層の埋土は粗砂を含む褐色10YR4/4細・中砂。

SE047（第14図、図版7-7）　４区。井戸枠は瓦で、径は78㎝。井筒内からは鉄釘、レンガ、瓦が出土した。

出土遺物（第15図）　46は燻しの平瓦。47は須玖Ⅱ式の短頸壺。48（図版18-7）は陶器人形の足部分で、背面は露胎で平坦。その他ニホンジカ鹿角、スギの柾目材が出土した。

５．包含層

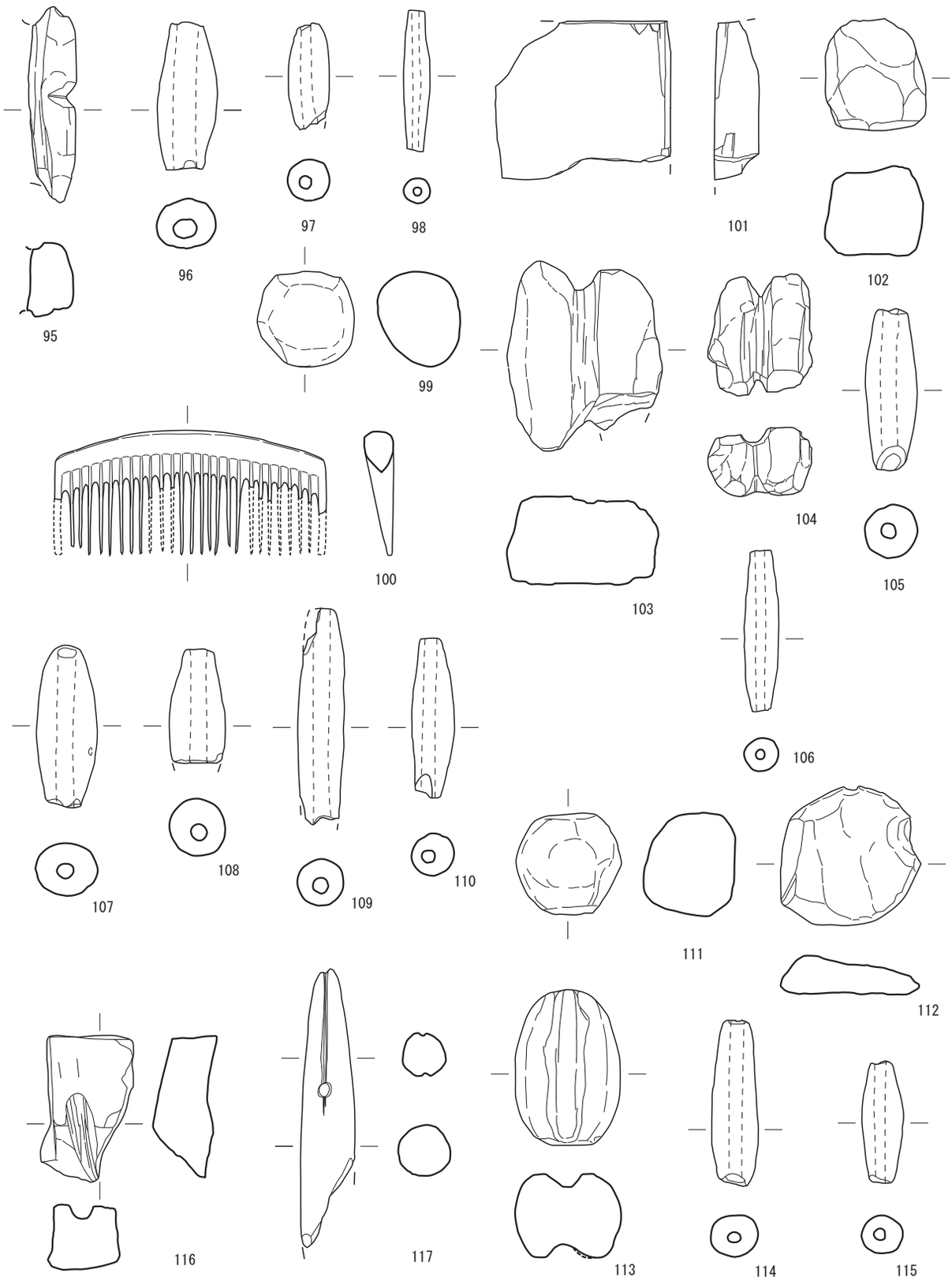
第１面の下層は遺物を包含する堆積層となっている。第１面掘り下げの過程で、平面範囲を把握した堆積層については、略号SXと遺構番号を付している。出土遺物の時期は、概ね12～14世紀である。

SX015（１区）出土遺物（第16図）　49は龍泉窯系青磁坏Ⅲ-2類（F期：13世紀後半～14世紀前半）。50は白磁皿Ⅸ類（F期）。口縁端部が口禿げとなる。51は糸切り底の土師器小皿で灯明皿利用される。13世紀後半か。

SX086（２区）出土遺物（第16・20図）　52は褐釉の合子身。体部外面下半は露胎。53は白磁皿Ⅸ-1c類（F期：13世紀後半～14世紀前半）。122～125は銅銭で、122は「景祐元寶」、123は「元祐通寶」、124は「宣和通寶」、125は「淳熙元寶」。

SX123（３・４区）出土遺物（第16・19図）　54は同安窯系青磁碗Ⅰ-1a類（D期：12世紀中頃～後半）。体部外面下半は露胎。55は景徳鎮窯系青磁小皿。56は糸切り底の土師器皿。12世紀後半頃。116はシルト質の砥石。

SX124（４区攪乱下）出土遺物（第16図）　57は青磁碗Ⅰ-4類（D期：12世紀中頃～後半）。58は



95 ～ 100　SE035　　101 ～ 106　SE155　　107 ～ 110　SK137

111 ～ 115　SX037　　116　SX123　　117　包含層

0　10cm

第 19 図　SE・SK・SX・包含層出土石製品・土錘・木製品実測図（1/2）

糸切り底の土師器小皿。13世紀代。

SX166（１区中央ベルト）出土遺物（第16図） 59（図版18-8）は褐釉陶器の耳壺。口縁部内面に目跡がある。

第１面下層出土遺物（第16・19・20図） 60（図版18-9）は素焼きの小型壺。61（図版18-10）は褐釉陶器の水滴茶入。62は瓦質土器の捏鉢。63は景徳鎮窯白磁小型壺。64は同安窯系青磁皿。胎土に砂粒を多く含む。65は同安窯系青磁皿。底部に目跡がある。66は褐釉陶器盤。口縁部内面に目跡がある。67は土師質土器の鍋で、外面にスス、内面にコゲが付着する。117は蛇紋岩質の石錘。126は銅銭「明道元寶」（初鋳1032年）。127は薬莢。径1.45㎝、厚さ１～0.2㎜、リム径1.6㎝を測る。Ｘ線画像では、リム内部に３つ又のアンビル（発火金）が確認できる。リム外面の上・下・右の３カ所に１字ずつ刻印を確認できるが劣化のため判読不明である（数字や英字ではなく、漢字と思われる）。蛍光Ｘ線分析装置による材質分析では銅と亜鉛が検出され、真鍮製と推定された。他にウマ上腕骨（４区R1）、ウマ基節骨（Ｔ６南Ⅱ下層）が出土した。

６．小結

方形土坑の軸や遺構の並びから、中世期の地割は、現況地割（調査区区割）からわずかに西に振れていた想定される。

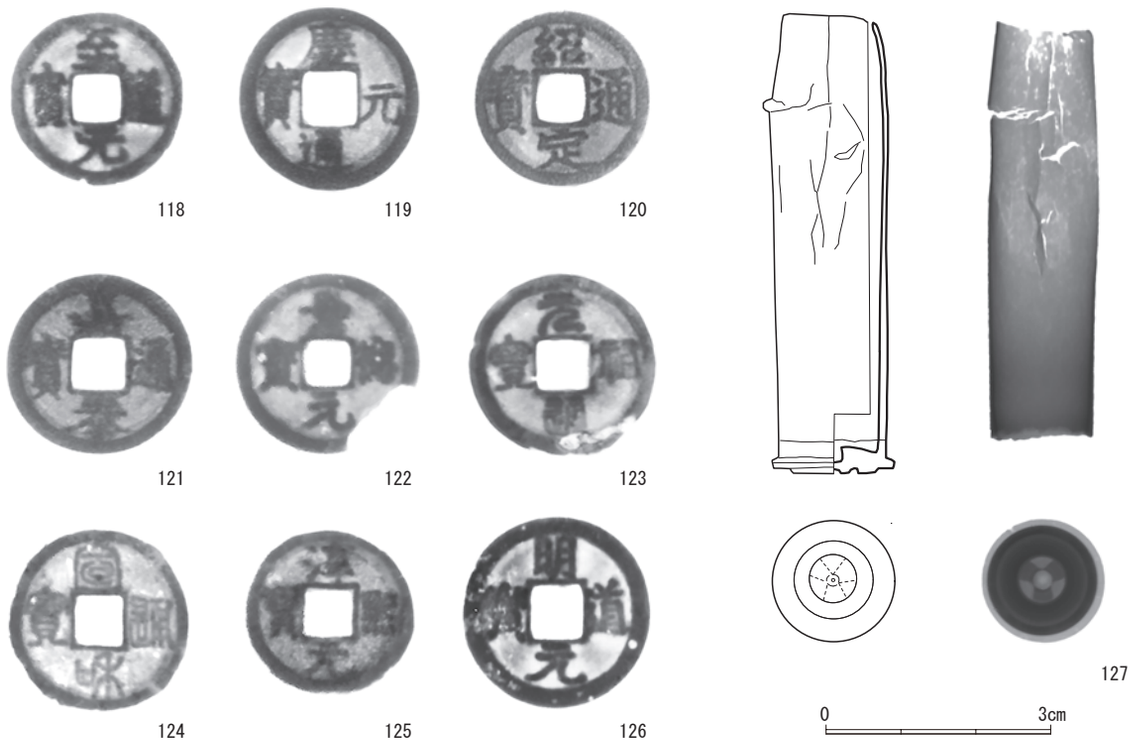
調査区南壁土層（第５図）を見ると、地山の砂層が東から西へ傾斜しており、調査区の東側は砂丘列の高い方で、削平の影響が著しいが、西側は低く、削平の影響が小さかったと考えられる。

鍛冶炉は、鍛冶炉SL147と廃棄ピットSP055・032、鍛冶炉SL051と廃棄土坑・ピットSK008・SP154という組み合わせが、南北の２カ所で確認された。小規模な鍛冶作業の場があったと想定できる。

礫敷土坑の性格は不明であるが、SK153では如来らしき像を彫った板碑片（第18図93）が礫敷きの１つに転用されていた。SK022は同じような礫敷土坑だが、SK153に比べて平面形が小さく、敷く礫の密度が高い。遺構の切り合いや出土遺物からSK022よりも新しいと判断される。

結桶井戸SE035の井筒下層からは、漆継ぎをした白磁合子身（第15図35、図版18-4）やイスノキ製横櫛（第19図100）が出土した。やや特殊な遺物であるため、井戸封じの儀礼に用いられた可能性がある。

第Ⅰ区出土の石錘・土錘は、大小各種が出土している。側面に１対の溝を持つ有溝石錘70（SK135）、長型有溝石錘90（SK001）、長型有孔石錘117（包含層）、有溝土錘113（SX037）は形状が他と異なる。有溝土錘113の同型は箱崎遺跡20次２区（767集）・SK228出土203、26次８区（853集）・SK226出土45、SK227出土46・47（12世紀前半）、73次（1316集）・SK133出土22（12世紀前半頃）、包含層出土15・16、SK472出土13、77次（1345集）・SE2085出土106（11世紀後半～12世紀前半）、SK1018出土112（12世紀半ば～13世紀前半）、SK2057出土231（13世紀前半）などが確認できる。有溝土錘113が出土したSX037は12世紀中頃～後半の青磁碗を含み、埋没時期は、SE035・155の掘方SK137の埋没時期である14世紀代に近いと考えられる。蛸壺も複数点出土しており、沿岸での漁業活動が活発であったことがうかがわれる。



118　SP119　　119・120　SK137　　121　SX036　　122 ～ 125　SX086　　126　包含層２区　　127　第１面除去土

第 20 図　第Ⅰ区第１面金属製品実測図およびX線画像（1/1）

第１表（１）　第Ⅰ区第１面出土土器・土製品

挿図	番号	遺構・層位	種類	器種	残存	法量（cm）	胎土	焼成	色調	仮番
6	1	SP085	陶器	盤	破片	-	径１㎜以下黒・白色粒やや多い	良好	胎土：浅黄灰～灰、釉：黄	39
6	2	SP115	土師器	蛸壺	1/3	口径 7.15、器高 10.35	径２㎜以下石英・長石、赤色粒含む	良好	外面：橙～にぶい黄、内面：橙～浅黄橙	40
6	3	SP069	青磁	皿	7/10	口径 12.8、器高 3.2	砂粒ほとんど含まない。精良	良好	胎土：淡灰、釉：灰緑、透明	36
6	4	SP046	土師器	坏	1/8	復元口径 12.8、器高 2.2	径１㎜以下赤色粒、微細な雲母ごく少ない。精良	良好	にぶい黄橙～にぶい橙	35
6	5	SP017	土師器	小皿	1/2	復元口径 7.5、器高 0.85	径１㎜以下赤・白色粒含む	良好	にぶい黄橙～にぶい橙	34
6	6	SP141	土師器	小皿	1/2	口径 9.1、器高 1.4	径１㎜以下石英・長石やや多い	良好	浅黄橙～橙	42
6	7	SP074	土師器	小皿	完形	口径 8.6、器高 1.3	径２㎜以下赤・黒・白色粒含む	良好	浅黄～にぶい黄橙	37
6	8	SP075	土師器	小皿	1/2	口径 8.7、器高 1	径１㎜以下石英・長石少ない	良好	橙～にぶい黄橙	38
6	9	SP128	土師器	小椀	底部 1/4	復元底径 4.7	径１㎜以下石英・長石、赤色粒含む	良好	外面：浅黄橙～にぶい黄橙、内面：浅黄橙～橙	41
12	10	SK031	青磁	碗	底部のみ	高台径 6.1	砂粒ほとんど含まない。精良	良好	胎土：淡灰、釉：淡緑、光沢鈍い	18
12	11	SK106	白磁	皿	1/8	復元口径 11.1	径１㎜以下砂粒ごく少ない	良好	胎土：灰白、釉：空色味、透明	26
12	12	SK094	土師器	坏	3/5	口径 15.05、器高 3	径２㎜以下石英・長石含む	良好	にぶい黄橙	23
12	13	SK094	青磁	碗	1/7	復元口径 18.3	径１㎜以下砂粒含む	良好	胎土：灰、釉：灰、半透明	22
12	14	SK094	陶器	小盤	1/8	復元口径 26.4、器高 8.6	径１㎜以下砂粒やや多い	良好	胎土：浅黄～灰、釉：黄	24
12	15	SK153	白磁	皿	1/5	復元口径 9.8、器高 2.5	径１㎜以下砂粒ごく少ない	良好	胎土：乳白、釉：灰緑、不透明	30
12	16	SK153	青磁	碗	破片	-	砂粒ほとんど含まない。精良	良好	胎土：灰、釉：オリーブ、透明	31
12	17	SK153	白磁	水注か	破片	-	径１㎜以下白色粒少ない	良好	胎土：灰、釉：瑠璃	32
12	18	SK135	青磁	碗	底部	高台径 5.3	砂粒ほとんど含まない。精良	良好	胎土：暗灰、釉：緑、透明	27
12	19	SK049	陶器	盤	破片	-	径２㎜以下白・黒色粒やや多い	良好	胎土：灰褐、釉：オリーブ灰	76
12	20	SK049	白磁	皿	1/8	復元口径 10.6	微細な黒色粒含む	良好	胎土：灰白、釉：灰緑	74
12	21	SK049	青磁	坏	1/8	復元口径 15.6	精良	良好	胎土：灰、釉：緑、透明	75
12	22	SK023	土師器	小皿	4/5	口径 8、器高 1.3	砂粒少ない。精良	良好	にぶい黄橙	16
12	23	SK063　R2＋R3	土師器	蛸壺	完形	口径 5.9、器高 10.3	径１㎜以下石英・長石含む	良好	橙	20
12	24	SK063　R4	土師器	蛸壺	1/2	復元口径 5.3	径２㎜以下石英・長石含む。微細な角閃石少ない	良好	外面：にぶい黄橙、内面：橙	21
13	25	SK019	土製品	猿形	4/5	残存幅 3.4	径１㎜以下赤・白色粒少ない	良好	にぶい褐	12
13	26	SK019	瓦器	椀	1/7	復元口径 12.6	径１㎜以下砂粒少ない	良好	胎土：灰白、表面：黒	11
13	27	SK026	青花	皿	1/4	復元底径 3	砂粒ほとんど含まない。精良	良好	胎土：灰褐、釉：黄色味、光沢強い	17
13	28	SK022	白磁	碗	1/7	復元口径 14.2	砂粒ほとんど含まない。精良	良好	胎土：灰白、釉：灰、光沢鈍い	14
13	29	SK022	土師器	坏	2/3	復元口径 10.4、器高 2.7	径１㎜以下白色粒少ない	良好	明褐。内面に黒色付着物	13
13	30	SK022　R1	瓦	軒丸	瓦当のみ	瓦当径 12.2、瓦当厚 2.4	径１㎜以下石英・長石含む	良好	胎土：灰～黄灰、表面：暗灰～黄灰	15
13	31	SK002	印判	小碗	4/5	口径 9.9、器高 5.6	砂粒ほとんど含まない。精良	良好	胎土：白、釉：透明	10

第１表（２） 第Ｉ区第１面出土土器・土製品

挿図	番号	遺構・層位	種類	器種	残存	法量（cm）	胎土	焼成	色調	仮番
13	32	SK002	染付	瓶	2/3	胴径 16.2	径１㎜以下砂粒ほとんど含まない。精良	良好	胎土：白、釉：青色味	9
13	33	SK002	瓦	軒丸	瓦当のみ	瓦当径 14.1、瓦当厚 2.5	径３㎜以下赤・白色ごく少ない	良好	胎土：灰、表面：黒・雲母	8
15	34	SE035	白磁	碗	破片	－	砂粒ほとんど含まない。精良	良好	胎土：白、釉：透明、光沢鈍い	19
15	35	SE035　下層	白磁	合子身	完形（漆継ぎ）	受け部径 5.6、器高 1.4	径１㎜白色粒少ない	良好	胎土：白、釉：白色、光沢鈍い	44
15	36	SE035　下層	青磁	浅型碗	破片	－	精良	良好	胎土：にぶい褐、釉：にぶい黄褐、光沢	45
15	37	SE035　下層	青磁	皿	1/5	復元口径 12.2	精良	良好	胎土：灰白、釉：淡緑、光沢	46
15	38	SE035　R1	土師器	蛸壺	完形	口径 5.2、器高 10.8	径２㎜以下石英・長石含む	良好	にぶい褐	43
15	39	SE155	白磁	皿	1/8	復元口径 11	精良	良好	胎土：灰白、釉：灰味、光沢鈍	51
15	40	SE155	土師器	皿	1/2	復元口径 9.4、器高 1.2	径１㎜以下白・赤色粒少ない	良好	明赤褐	50
15	41	SK137	白磁	碗	破片	－	砂粒ほとんど含まない。精良	良好	胎土：乳白、釉：灰緑味、透明	28
15	42	SK137	青磁	碗	底部	高台径 5.55	径１㎜以下砂粒少ない	良好	胎土：灰、釉：青味のある緑	29
15	43	SX036	青磁	碗	破片	－	微細な白色粒含む	良好	胎土：暗灰、釉：緑褐、半透明	71
15	44	SX037	青磁	碗	1/7	復元口径 16.6	精良	良好	胎土：灰～淡灰、釉：緑、透明	72
15	45	SX038	青磁	碗	底部	高台径 6.3	径１㎜以下白・黒色粒含む	良好	胎土：灰～赤褐、釉：緑	73
15	46	SE047	瓦	平	1/3	幅 26、厚さ 2	径２㎜以下石英・長石少ない	良好	黒色。銀化	47
15	47	SE047　掘方	弥生土器	短頸壺	破片	－	径２㎜以下石英・長石やや多い	良好	にぶい褐	49
15	48	SE047　掘方	土製品	人形	破片	－	径１㎜白色粒少ない	良好	胎土：淡黄、釉：一部緑色	48
16	49	SX015	青磁	坏	破片	－	精良	良好	胎土：灰白、釉：青緑、透明	70
16	50	SX015	白磁	皿	1/5	復元口径 11.1	精良	良好	胎土：灰白、釉：灰緑、不透明	69
16	51	SX015　R1	土師器	小皿	9/10	口径 8.3、器高 1.15	径３㎜以下石英・長石含む	良好	外面：浅黄橙～灰黄褐、内面：にぶい黄橙～褐灰	68
16	52	SX086	陶器	合子身	1/3	復元口径 7.2、器高 2.1	精良	良好	胎土：淡黄、釉：茶緑	77
16	53	SX086	白磁	皿	1/4	復元口径11.3、器高3.35	微細な白・黒色粒含む	良好	胎土：乳白、釉：灰緑、不透明	78
16	54	SX123	青磁	椀	底部	高台径 4.8	径 1mm 以下砂粒やや多い	良好	胎土：灰白、釉：空色、透明	80
16	55	SX123	青磁	皿	1/7	復元口径 12	精良	良好	胎土：灰白、釉：灰緑、透明	81
16	56	SX123	土師器	皿	1/2	復元口径 10.5、器高 1.7	径１㎜以下黒色粒やや多い	良好	橙色	79
16	57	SX124	青磁	碗	破片	―	微細な白色粒少ない	良好	胎土：淡灰、釉：オリーブ、透明	83
16	58	SX124	土師器	小皿	2/3	口径 8.75、器高 1.2	径１㎜以下白色粒を含む	良好	外面：橙～にぶい黄橙～褐灰、内面：にぶい黄橙～褐灰	82
16	59	SX166	陶器	耳壺	1/6	復元口径 19.4	径４㎜以下白色粒やや多い	良好	胎土：灰黄～浅黄、釉：灰～灰オリーブ	98
16	60	１層（１面下）T5　２区	無釉陶器	小壺	1/7	復元口径 9	微細な赤色粒含む	良好	黄橙	106
16	61	１層（１面下）T6　２区	褐釉陶器	茶入	1/4	口径 3.3	精良	良好	胎土：褐灰～にぶい赤褐、釉：褐	107
16	62	Ｉ層５区西＋Ⅱ下層４区＋５区＋ SD179	瓦質土器	捏鉢	1/5	復元口径 31	径３㎜以下石英・長石、黒色粒含む	良好	灰	108
16	63	２面検出清掃	白磁	小型壺	1/3	復元口径 7.2	微細な黒色粒含む	良好	胎土：乳白、釉：灰緑	110
16	64	Ⅱ下層　４区	青磁	皿	9/10	口径 11.5、器高 2.85	径４㎜以下白・黒色粒やや多い	良好	胎土：灰黄、釉：灰オリーブ、透明	111
16	65	２面下　T8	青磁	皿	3/5	口径 11.15、器高 2.45	精良	良好	胎土：暗灰～灰白、釉：灰オリーブ、透明	112
16	66	調査区西壁 R1	褐釉陶器	盤	1/10	復元口径 44.8	径２㎜以下黒・赤色粒含む	良好	胎土：灰～淡黄、釉：オリーブ黄	113
16	67	１層　T6　１区	土師質	鍋	1/5	復元口径 50	径３㎜以下白・赤色粒やや多い	良好	外面：にぶい褐～黒褐、内面：にぶい橙～褐～黒褐	109
17	72	SK023	土製品	土錘	1/2	径 1.8	径１㎜以下石英・長石含む	良好	灰白～橙	P3
17	73	SK023	土製品	土錘	完形	長さ 4.3、径 1.45、重量 6.7g	径１㎜以下白色粒、角閃石含む	良好	明赤褐	P4
17	74	SK023	土製品	土錘	完形	長さ 4.25、径 0.9、重量 3.3g	径１㎜以下石英・長石含む	良好	にぶい橙	P5
17	78	SK153	土製品	土錘	完形	長さ 4.4、径 1.8、重量 11.2g	径２㎜以下石英・長石、角閃石含む	良好	にぶい赤橙～褐灰	P1
17	79	SK153	土製品	土錘	完形	長さ 3.6、径 1.3、重量 5.7g	径２㎜以下石英・長石含む	良好	明赤褐～黒褐	P2
17	82	SK026	土製品	土錘	1/2	径 1	微細な砂粒を含む	良好	にぶい赤褐	P8
17	84	SK022	土製品	土錘	完形	長さ 6.1、径 1.9、重量 17.9g	径１㎜以下黒色粒やや多い	良好	浅黄橙～橙	P9
17	85	SK022	土製品	土錘	完形	長さ 3.2、径 1.2、重量 4.6g	径１㎜砂粒含む	良好	赤橙～黒褐	P10
17	86	SK022	土製品	土錘	完形	長さ 5.4、径 1、重量 3.6g	精良	良好	にぶい黄橙	P11
17	87	SK022	土製品	土錘	一部欠	径 0.9	径１㎜以下黒・白色粒含む	良好	赤橙	P12
17	91	SK001	土製品	土錘	完形	長さ 3.5、径 1.4、重量 6.9g	径２㎜以下石英・長石含む	良好	橙	P6
17	92	SK001	土製品	土錘	一部欠	径 1	径１㎜以下砂粒少ない	良好	明赤褐	P7
19	96	SE035 下層	土製品	土錘	完形	長さ 5、径 2、重量 14.8g	径１㎜以下白・黒色粒含む	良好	にぶい橙～赤橙	P13
19	97	SE035 下層	土製品	土錘	完形	長さ 3.6、径 1.4、重量 6.7g	径２㎜以下白色粒含む	良好	にぶい褐～橙	P14
19	98	SE035	土製品	土錘	完形	長さ 4.75、径 0.9、重量 2.9g	精良	良好	灰黄褐	P15
19	105	SE155	土製品	土錘	完形	長さ 5.5、径 1.8、重量 15.4g	径１㎜以下石英・長石、黒色粒含む	良好	橙～明赤褐	P16
19	106	SE155	土製品	土錘	完形	長さ 5.5、径 1.2、重 5.1g	微細な白色粒少なく含む	良好	浅黄橙～明赤褐	P17
19	107	SK137	土製品	土錘	完形	長さ 5.5、径 2.1、重量 19.2g	径１㎜以下白・赤色粒含む	良好	浅黄橙～橙	P19
19	108	SK137	土製品	土錘	1/2	径 1.9	径１㎜以下石英・長石、角閃石含む	良好	にぶい黄橙～橙	P18
19	109	SK137	土製品	土錘	一部欠	長さ 7.3、径 1.6、重量 16g	径１㎜以下白・黒色粒含む	良好	にぶい橙～褐灰	P21
19	110	SK137	土製品	土錘	完形	長さ 5.4、径 1.4、重量 8.7g	微細な砂粒を含む。精良	良好	にぶい黄橙～橙	P20
19	113	SX037	土製品	土錘	完形	長さ 5.2、幅 3.6、厚さ 2.8、重量 48.3g	径１㎜以下黒色粒やや多い	良好	にぶい橙～橙	P22
19	114	SX037	土製品	土錘	完形	長さ 5.6、径 1.6、重量 12.2g	径２㎜以下石英、角閃石含む	良好	赤橙	P23
19	115	SX037	土製品	土錘	完形	長さ 4.15、径 1.4、重量 6g	微細な砂粒を含む	良好	灰黄褐～橙	P24

第２表（１） 第Ｉ区第１面出土石器・石製品

※石材の「磁性」はネオジム磁石による。 ※法量の[ ]内は残存法量

番号	遺構・層位	石材	磁性	器種	残存	法量（cm、g）	備考
5001	SP034	泥岩	－	砥石	一部欠	長さ[9.4]	
5002	SP074	砂岩	微弱	石球	完形	径3.45-4.1	
5003	SP074	滑石	－	石鍋か	破片	長さ[5.6]	
5004	SP074	滑石	微弱	不明	破片	長さ[3.21]	
5005	SP074	滑石	－	不明加工品	破片	長さ[6.86]	
5006	SP095	結晶片岩	－	不明	破片	長さ[3.75]	
5007	SP115	滑石	－	石錘未成品か	完形	長さ5.36	
5008	SP117	滑石	微弱	石錘	完形	長さ4.03	
5009	SP117	滑石	－	石錘	破片	長さ[3.25]	
5010	SP120	結晶片岩	微弱	石錘	一部欠	長さ[8.28]	
5011	SP120	結晶片岩	微弱	石錘	破片	長さ[5.84]	
5012	SP130	滑石	－	石鍋	破片	長さ[4.42]	
5013	SP142	滑石	－	石錘	完形	長さ4.09	
5014	SL051周辺	滑石	－	石鍋	破片	長さ[5.3]	
S2	SP154上面	砂岩	－	砥石	完形	長さ6.6、重量58.2	17図68
S3	SP108	滑石	－	温石（石鍋転用）	完形	長さ7.46、重量66.2	17図69
5015	SK031	滑石	－	石鍋	破片	長さ[2.9]	
5016	SK031	滑石	－	温石か	破片	長さ[4.24]	
5017	SK031	頁岩	－	砥石か	一部欠	長さ[6.1]	
5018	SK031	滑石	－	小礫	完形	長さ3.97	
5019	SK031	滑石	－	小礫	完形	長さ3.58	
5020	SK031	滑石	－	石材	完形	長さ6.91	
5021	SK094	滑石	微弱	石錘	破片	長さ[5.33]	
S9	SK135	滑石	－	石錘	完形	長さ4.72、重量42.2	17図70
5022	SK135	結晶片岩質	弱	不明加工品	破片	長さ[3.37]	
5023	SK135	滑石	－	石材	破片	長さ[2.23]	
S11	SK023	滑石	微弱	石錘	完形	長さ8、重量75.4	17図71
5024	SK023	滑石	微弱	石鍋	破片	長さ[5.56]	
5025	SK098	滑石	－	石錘	一部欠	長さ4.36	
S33	SK153R1	砂岩	－	板碑	一部	長さ[31.8]、重量[1120]	18図93
S6	SK153	蛇紋岩質	中	石錘	一部欠	長さ9、重量159.1	17図75
S7	SK153	滑石	－	石錘（石鍋転用）	完形	長さ3.82、重量35.8	17図76
S8	SK153	滑石	－	石錘	完形	長さ6.2、重量34	17図77
5026	SK153	滑石	－	石鍋	破片	長さ[3.63]	
5027	SK153	滑石	－	石材	破片	長さ[5.23]	
5028	SK153	滑石	－	不明加工品	完形	長さ3.85	
5029	SK153	滑石	－	不明加工品	完形	長さ3.45	
5030	SK153	滑石	－	不明加工品	完形	長さ3.95	
S34	SK063R1	礫岩	－	石臼	完形	径30.5、重量1510	18図94
5031	SK063	滑石	－	石鍋	破片	長さ[3.97]	
5032	SK027	滑石	－	石鍋	破片	長さ[3.34]	
5033	SK027	チャート	－	小礫(光沢)	完形	長さ2.78	
5034	SK006	滑石	－	石錘	完形	長さ2.78	
5035	SK151	滑石	微弱	石材	完形	長さ10.44	
5036	SK151	石英	－	石材	完形	長さ4.49	
5037	SK131周辺土	砂岩	－	石球	完形	径3.34-4.15	
S4	SK005	滑石	－	温石か	完形	長さ8.59、重量113	17図80
5038	SK049	滑石	－	石鍋	破片	長さ[6.05]	
5039	SK049	砂岩	微弱	石錘	一部欠	長さ[3.35]	
5040	SK019	蛇紋岩質	弱	石材	完形	長さ10.25	
S13	SK026	滑石	－	石錘	完形	長さ5.31、重量26.7	17図81
5041	SK026	滑石	－	石鍋	破片	長さ4.3	
5042	SK026	滑石	－	小礫	完形	長さ4.81	
5043	SK138	滑石	－	石鍋	破片	長さ[3.13]	
S16	SK022	滑石	－	石錘	完形	長さ7.24、重量110.3	17図83
S15	SK022	滑石	－	小型円形加工品	完形	径1.7-1.89、重量2.3	17図88
S14	SK022	砂岩	－	石球	完形	径4.45、重量112.8	17図89
5044	SK022	チャートか	－	不明加工品	完形	長さ3.72	
S12	SK001	滑石	弱	石錘	一部欠	長さ[6.55]、重量[24.2]	17図90
5045	SK091	滑石	－	小礫	完形	長さ3	
5046	SK091周辺堆積土	滑石	－	石鍋	破片	長さ[4.53]	
5047	SK105	滑石	－	石錘（石鍋転用）	一部欠	長さ5.71	
S17	SE035下層	蛇紋岩質	弱	石錘	一部欠	長さ6.72、重量[39.7]	19図95
S18	SE035	礫岩	－	石球	完形	径2.8-3.3、重量38.3	19図99
5048	SE035	蛇紋岩質	弱	不明加工品	完形	長さ4.6	
S19	SE155	粘板岩	－	硯	破片	長さ[6.08]、厚さ[1.5]	19図101
S20	SE155	砂岩	－	石球	完形	径3.33-3.77、重量52.6	19図102
S21	SE155	滑石	－	石錘	完形	長さ6.5、重量145.4	19図103
S22	SE155	滑石	微弱	石錘	完形	長さ4.26、重量43	19図104
5049	SE155	滑石	－	石錘	完形	長さ4.95	
5050	SK137	砂岩	－	石球	完形	径4.3-4.5	
5051	SK137	滑石	－	石鍋	破片	長さ[6.73]	
5052	SK137	滑石	－	石鍋	破片	長さ[4.37]	
5053	SK137	滑石	－	石鍋	破片	長さ[4.58]	
5054	SK137	砂岩	－	不明方形成形品	完形	長さ4.97	
5055	SX036	滑石	－	石錘	完形	長さ5.86	
5056	SX036	滑石	－	石錘	完形	長さ4.42	
5057	SX036	滑石	－	石錘	一部欠	長さ[3.07]	
5058	SX036	滑石	－	石錘（石鍋転用）	完形	長さ9.11	
5059	SX036	滑石		小片			10点
5060	SX036	滑石	微弱	石材	完形	長さ8.05	
5061	SX036	蛇紋岩質	中	石材	完形	長さ6.6	
5062	SX036下T1	滑石	微弱	石材	破片	長さ[4.8]	
5063	SX036下T1	頁岩	－	砥石未成品か	完形	長さ7.04	
5064	SX037	砂岩	－	石球	完形	径3.02-3.96	
S24	SX037	砂岩	－	石球	完形	径3.02-3.46、重量50.8	19図111
S23	SX037	滑石	－	石錘	完形	長さ4.68、重量39	19図112
5065	SX037	滑石	－	石錘	完形	長さ3.51	
5066	SX038	滑石	－	石錘	一部欠	長さ6.3	
5067	SX038	滑石	－	石錘未成品か	完形	長さ3.83	
5068	SX038	砂岩	－	砥石か	一部欠	長さ[6.45]	
5069	SX038	滑石	－	石材	完形	長さ5.42	
5070	SE056	滑石	－	石錘	完形	長さ4.77	

第２表（２） 第Ｉ区第１面出土石器・石製品

※石材の「磁性」はネオジム磁石による。 ※法量の[ ]内は残存法量

番号	遺構・層位	石材	磁性	器種	残存	法量（cm、g）	備考
5071	SE056	砂岩	－	不明方形成形品	破片	長さ 3.74	
5072	SE047 掘方	珪化木	－	砥石か	一部欠	長さ [3.66]	
5073	SX015	滑石	－	石錘	完形	長さ 5.96	
5074	SX015	滑石	弱	石錘	完形	長さ 5.17	
5075	SX086	滑石	－	石鍋	破片	長さ [4.08]	
5076	SX086	滑石	－	石鍋加工品	完形	長さ 4.84	
5077	SX086	滑石	－	石錘	完形	長さ 2.71	
S5	SX123	シルト質	微弱	砥石	完形	長さ 7.42、重量 135.2	19 図 116
5078	SX136	滑石	－	石錘	完形	長さ 8.59	
5079	SX166	滑石	微弱	石錘	完形	長さ 3.42	
5080	1 層 1 区	滑石	－	石錘	完形	長さ 3.29	
S10	1 層 T6・1 区	蛇紋岩質	弱	石錘	一部欠	長さ [9.43]、径 1.8	19 図 117
5081	1 層(1 面下) T5・2 区	滑石	－	石鍋	破片	長さ [4.45]	
5082	1 層(1 面下) T6・2 区	砂岩	弱	石球	完形	径 2.56-2.84	
5083	1 層(1 面下) T6・2 区	滑石	－	石錘	完形	長さ 6.17	
5084	1 層(1 面下) T6・2 区	滑石	－	石錘	一部欠	長さ 4.8	
5085	1 層(1 面下) T6・2 区	安山岩	中	敲石	完形	長さ 8.67	
5086	1 層(1 面下) T6・2 区	安山岩	中	砥石か	破片	長さ [4.24]	
5087	1 面下層	滑石	－	不明加工品(石鍋転用)	完形	長さ 5.49	
5088	1 面下堆積土 SP059 周辺	蛇紋岩質	弱	石錘	完形	長さ 4.08	
5089	1 面下堆積土 SP059 周辺	蛇紋岩質	弱	石錘	一部欠	長さ 5.94	
5090	1 面下堆積土 SP059 周辺	滑石	－	不明加工品	完形	長さ 4.55	
5091	2 層 T1（4 区北西）	滑石	－	石鍋	破片	長さ [4.12]	
5092	Ｉ層 2 区	滑石	－	石錘か(石鍋転用)	完形	長さ 4.02	
5093	Ｉ層 2 区	砂岩	中	砥石か	破片	長さ [2.81]	
5094	Ｉ層 T7	滑石	－	石錘	完形	長さ 2.91	
5095	Ｉ層 T7	蛇紋岩質	弱	石錘	完形	長さ 2.96	
5096	Ｉ層 T7	蛇紋岩質	弱	石錘	完形	長さ 3.08	
5097	Ｉ層 T7	蛇紋岩質	弱	剥片	完形	長さ 4.74	
5098	Ⅱ下層 2 区	黒曜石	－	石核	完形	長さ 3.68	
5099	Ⅱ下層 5 区	滑石	－	石鍋	破片	長さ [4.19]	
5100	Ⅱ下層 5 区	蛇紋岩質	弱	不明加工品	完形	長さ 4.78	
5101	Ⅱ下層 T7・4 区	蛇紋岩質	弱	剥片	完形	長さ 3.65	
5102	SX039 攪乱	結晶片岩	微弱	小円形	完形	径 2.73-2.88	
5103	攪乱 (SP082)	滑石	－	石錘	完形	長さ 4.41	
5104	攪乱 045	滑石	－	石錘	完形	長さ 7.78	
5105	攪乱溝	滑石	－	不明加工品	完形	長さ 2.69	
5106	検出 5 区	滑石	－	石錘か（石鍋転用）	完形	長さ 4.65	
5107	検出 5 区	滑石	－	剥片	完形	長さ 3.82	
5108	検出 5 区	滑石	－	剥片	完形	長さ 4.16	
5109	樹根 SK022 北側	滑石	－	石鍋	破片	長さ [5.43]	
5110	清掃 西側	蛇紋岩質	弱	石錘	完形	長さ 5.35	

第３表（１） 第１面金属関係遺物出土遺構

遺構	取上日	金属関係遺物	備考
SP003	181115	鉄釘	
SP009	181116	鉄釘	
SP011	181116	鉄釘	
SP012	181116	鉄釘	
SP017	181120	鉄滓	
SP029	181128	鉄滓	
SP033	181128	鉄滓	
SP043	181129	銅銭	
SP053	181130	鉄釘	
SP058	181205	鉄滓	
SP060	181205	鉄釘	
SP061	181205	銅銭	
SP064	181205	鉄釘	
SP077	181207	鉄釘	
SP080	181207	鉄釘	
SP081	181206	鉄滓	
SP083	181207	鉄釘	
SP084	181207	鉄釘	
SP092	181214	銅銭	元祐通寶（初鋳 1086 年）
SP101	181212	鉄釘、鉄滓	
SP103	181212	鉄釘	
SP110	181212	鉄滓	
SP115	181212	鉄滓	
SP116	181212	鉄釘	
SP117	181212	鉄釘	
SP119	181212	銅銭	至道元寶（初鋳 995 年）20 図 118
SP126	181214	鉄釘	
SP133	191214	鉄釘	
SP141	181219	銅銭	元豊通寶（初鋳 1078 年）
SP142	181219	鉄釘	
SL147 埋土	181217	鍛造剥片、流動滓	
SP032	181128	鉄滓	
SP055	181130	鉄滓	
SL051	181217	鍛造剥片、粒状滓	
SL051 周辺	181207	鉄釘、鉄滓	
SK008	181115	鉄滓、鍛造剥片、粒状滓	
SP154	190108	鍛造剥片、粒状滓	
SP108	181212	鉄滓	
SK001	181115	鉄釘、鉄滓	
SK005	181115	鉄釘、鉄滓	

第３表（２） 第１面金属関係遺物出土遺構

遺構	取上日	金属関係遺物	備考
SK006	181115	鉄釘、銅銭	
SK014	181120	鉄釘	
SK019	181205	鉄釘、鉄滓、銅銭	寛永通寶（初鋳1636年）
SK022	181126	鉄製品、鉄釘、銅銭２	皇宋通寶（初鋳1039年）
SK023	181121	鉄釘、鉄滓、銅銭	
SK025	181207	鉄釘、鉄滓	
SK025 中央暗色土	181207	銅銭	
SK026	181126	鉄製品、鉄釘、鉄滓、銅銭２	政和通寶（初鋳1111年） 寛永通寶（初鋳1636年）
SK027	181126	鉄釘、鉄滓、銅銭	
SK031	181128	鉄釘、鉄滓	
SK039 下面堆積層	181212	鉄釘	
SK063	181205	鉄釘	
SK074	181212	鉄釘、鉄滓	
SK094	181210	羽口、鉄滓	
SK098	181210	鉄釘、鉄滓	
SK135	181217	鉄釘	
SK138	181218	鉄釘	
SK144	181219	鉄滓	
SK149	181226	鉄釘	
SK151	190109	鉄釘、鉄滓	
SK153	190115	鉄釘、鉄滓	
SE035	181128	鉄釘	
SE035 下層	190116	鉄釘、銅銭	永楽通寶（初鋳1408年）
SK137	181217	鉄釘、鉄滓、銅銭２	慶元通寶（初鋳1201年）20図119 紹定通寶（初鋳1228年）20図120
SX036	181129	鉄製品、鉄釘、銅銭	嘉泰通寶（初鋳1205年）20図121
SX036 下	181212	鉄釘	
SX037	181129	鉄釘	
SX037	181214	鉄釘	
SX038	181129	鉄釘	
SE056	181210	鉄釘、鉄滓	
SE056 下層	190107	鉄滓	
SE047	181212	鉄釘	
SX015	181120	鉄釘	
SX086	181207	鉄釘、鉄滓、銅銭７	開元通寶（初鋳621～年） 景祐元寶（初鋳1034年）20図122 熙寧元寶（初鋳1068年） 元祐通寶（初鋳1086年）20図123 宣和通寶（初鋳1119年）20図124 淳熙元寶（初鋳1174年）20図125
SX123	181212	鉄滓	
SX124	181212	鉄製品	
SX166	190118	鉄滓	
SP059 周辺１面下堆積土	181207	鉄釘、銅銭４	皇宋通寶（初鋳1039年） 元豊通寶（初鋳1078年） 紹聖元寶（初鋳1094年） 大観通寶（初鋳1107年）
SP074 周辺シミ状	191207	鉄釘、鉄滓	
SK091 周辺堆積土	181210	鉄釘	
SK131 周辺土	181218	鉄釘、銅銭	元豊通寶（初鋳1078年）
１層　１区	181226	鉄釘	
１層　２区	190108	鉄釘、鉄滓、銅銭４	明道元寶（初鋳1032年）20図126 紹聖元寶（初鋳1094年） 聖宋元寶（初鋳1101年）
１層　５区西	190108	鉄釘	
１層　T7	181226	鉄釘、鉄滓	
１層　１区 T6	181219	鉄釘、鉄滓	
１上層（礫）２区 T5	181226	鉄釘	
１層　T3 北区	181219	鉄釘	
１層（１面下）２区 T5	181219	鉄滓	
１層４区北西 T1	181210	鉄滓	
１層（１面下）２区 T6	181219	鉄釘、鉄滓、銅銭	熙寧元寶（初鋳1068年）
１面下層	181109	鉄滓	
１面除去土	190123	鉄製品、鉄滓、真鍮製薬莢（20図127）	
２層４区北西 T1	181210	鉄釘	
１・２層１区 T4	181226	鉄釘	
１・２層１区 T6	181226	鉄釘	
２上層 T6 中央	190111	鉄釘、鉄滓、銅銭	政和通寶（初鋳1111年）
２上層　１区 T7	181227	鉄滓	
２上層　４区 T7	181227	鉄釘	
２上層　T7	190111	鉄滓	
２上層　５区東	190108	鉄釘、鉄滓	
２下層　４区	190117	鉄釘	
２下層　２区	190118	鉄釘（大型）、鉄滓	
２下層　５区	190118	鉄釘、鉄滓	
２下層　T4	190109	鉄釘、鉄滓	
２下層　５区	190118	銅銭	開元通寶（初鋳621～年）
２下層　T6 北	190115	鉄釘	
２下層（黒褐層）T6 南	190111	鉄滓	
２下層　１区 T7	181227	鉄釘	
２下層　T7 西	190111	鉄釘	
２面下　T8	190124	鉄釘	
SK028 攪乱	181127	鉄釘、銅銭３枚	熙寧元寶（初鋳1068年） 寛永通寶（初鋳1636年）
SX045 攪乱	181129	鉄釘	
SK087 攪乱	181207	鉄釘	
SK088 攪乱	181207	鉄釘	
SK089 攪乱	181207	鉄釘	
攪乱（SP082 東）	181210	鉄釘	
攪乱	181108	鉄片、鉄釘、鉄滓	
攪乱２区（南西区）	181113	鉄製品、鉄釘	
中央攪乱下清掃	181129	鉄滓	
攪乱溝	181119	鉄釘	
検出　１区	181115	鉄滓	
検出　５区	181115	鉄滓	
検出　南西区	181113	鉄製品、鉄釘、鉄滓、銅銭	元豊通寶（初鋳1078年）
調査区西壁	190123	鉄釘	
壁面清掃	181105	銅銭	熙寧元寶（初鋳1068年）
西側清掃	181106	鉄釘	
南東区清掃	181108	鉄滓	
北東区清掃	181109	鉄釘	
１区排土	190118	鉄釘	
不明		鉄釘	

第３節　第Ⅰ区第２面の調査

第１面調査時に、攪乱や遺構の壁面観察によって、下層からの遺物出土を確認した。そのため、第１面調査後にトレンチT-１～７を設定して、下層の確認を行ないつつ第１面を掘り下げ、標高２～1.7ｍの砂丘風成砂上を遺構検出の第２面とした。土坑・井戸・溝などを掘削・記録した。出土遺物の時期は12世紀～14世紀代を中心とする。

１．木棺墓

SR152（第22･23図、図版7-8、8-1～5）　２区。調査区南西隅の第Ⅰ面掘り下げ中に10～15cm角の礫の集積を確認したが、礫の形状や並びが揃っていなかったため、礫の流れ込みや廃棄と認識して、検出状況の写真撮影（図版7-8）と礫出土範囲の記録（第22図）を行なった。その後、下層確認のためのトレンチT5の西端として掘削を進めたが、遺構の掘方を把握できなかった。トレンチT6の南端で完形青磁碗と人骨、鉄釘を検出して以降、木棺墓SR152と認識して記録をとった。

SR152の北東部から礫が並んで確認され、当初はSR152の一部と認識していたが、軸が異なっており、さらに北側に石列が延びたため、別の遺構（SX168）とした。

鉄釘は木棺に付属するものと想定して、出土位置を記録した（第23図）。鉄釘の形状と長軸の向き（上下左右）に着目して記録したが、検出時の砂・錆付着状態の観察によるため、釘の頭部・先端の認識は間違っている可能性もある。後のＸ線写真撮影や錆取りによる正確な形状の認識に対応できるような精度で記録・取り上げを行うべきであった。

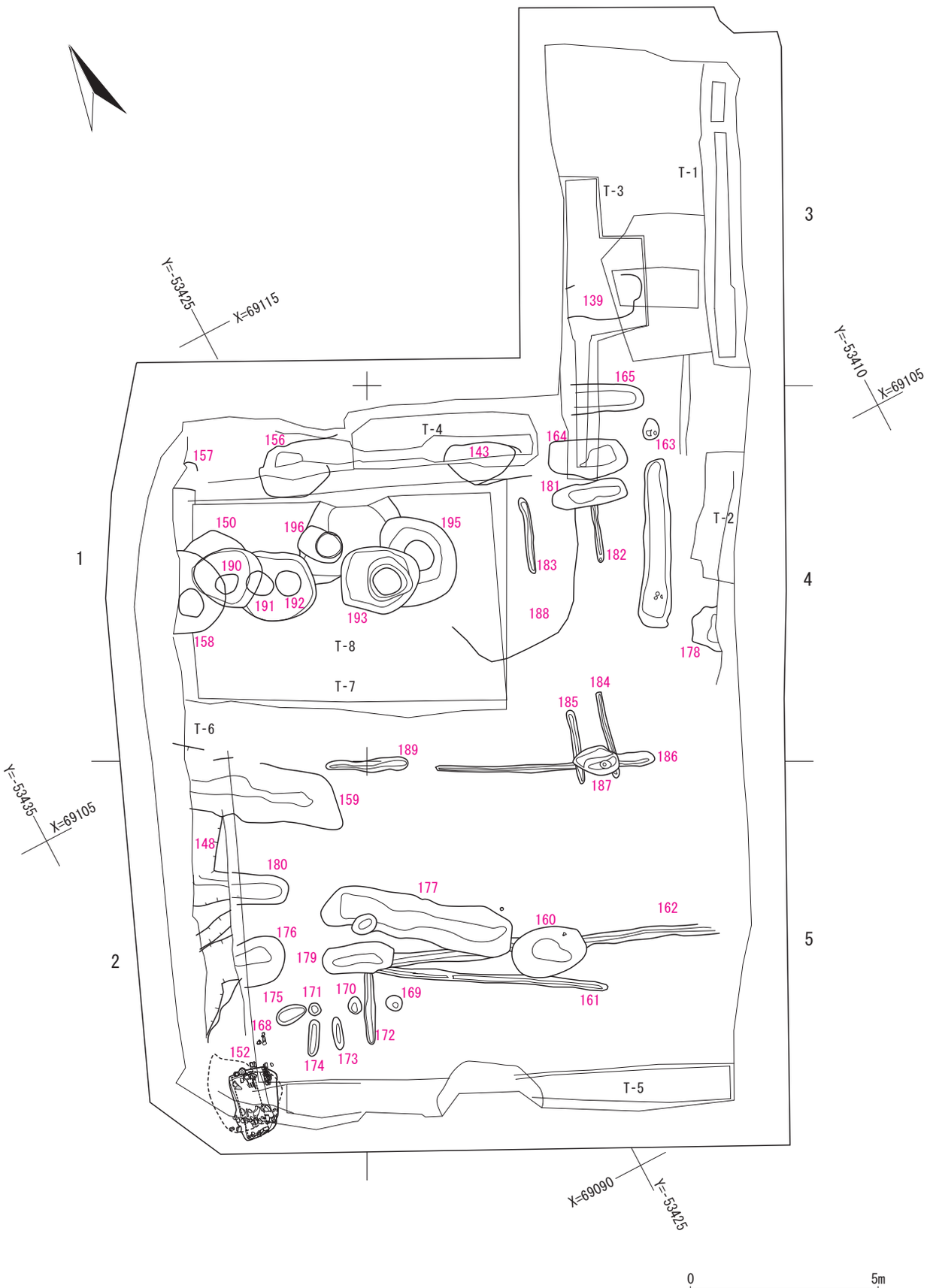
人骨は遺存状況が非常に悪く、形状を保った状態で取り上げることができなかった。頭部付近の土は洗浄して、歯を採取した。装身具等の微細遺物は確認できなかった。

上面礫の範囲は、長さ200cm、幅190cmを測る。墓壙は長さ182cm、幅115cm、深さ30cmを測る。棺材は残っていなかったが、棺材を打ち付けていたと考えられる鉄釘の位置から、長さ168cm、幅58cm程度の木棺を推定できる。

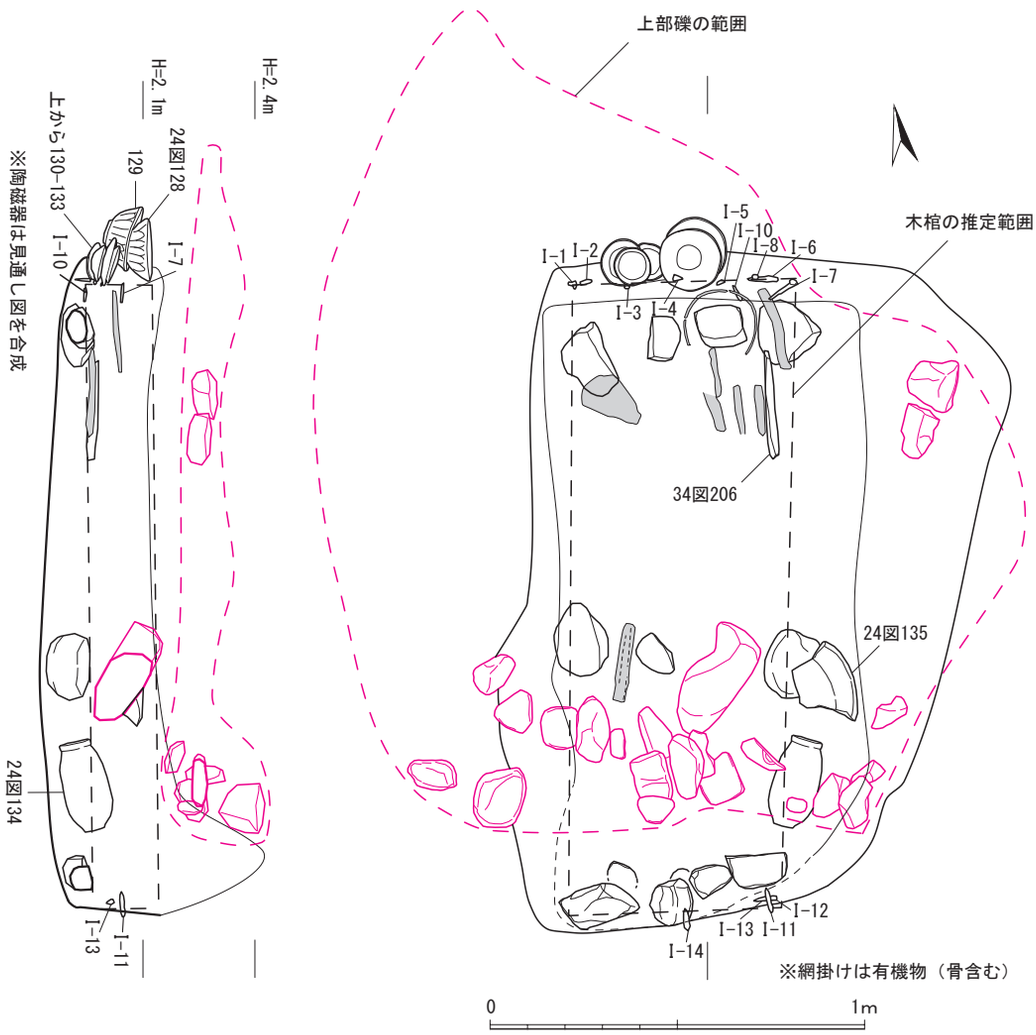
出土遺物（第24･33･34図、図版18-13）　128は龍泉窯系青磁碗Ⅱｂ類（E期：13世紀中頃～14世紀初頭前後）。畳付を釉拭取り、高台内に輪状の焼台痕が残る。129は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-6b類（D期：12世紀中頃～後半）。高台内に輪状の焼台痕が残る。130･132･133は同安窯系青磁皿Ⅰ-1a類（D期）。131は白磁皿Ⅷ-2b類（D期）。134は中国産陶器の壺。135は中国産陶器の大甕。体部下部に強いナデ上げの痕跡を特徴的に残す。Ⅰ類で12世紀後半。136は龍泉窯系青磁坏Ⅲ類（F期：13世紀中頃～14世紀初頭前後）。174は滑石の不明加工品。193～205は鉄釘。釘の体部に直交して棺材の木質組織が残っている。残存長は、193が5.1cm、194が3.72cm、195が5.86cm、196が4.9cm、197が5.96cm、198が7.34cm、199が7.73cm、200が4.23cm、201が6.07cm、202が7.05cm、203が6.87cm、204が6.92cm、205が6.66cmを測る。鉄釘・木棺に関する詳しい所見は後述する（本章第５節第２項）。206は鉄製短刀。全長30.4cm、刀身の長さ22.1cm、幅3.8cm、厚さ1.6cm、茎の長さ8.5cm、幅1.3cm、厚さ0.9cmを測る。刀身に木質片が付着している。他にヒト頭蓋骨、歯と共に硬骨魚綱歯１点が出土した。

２．石列

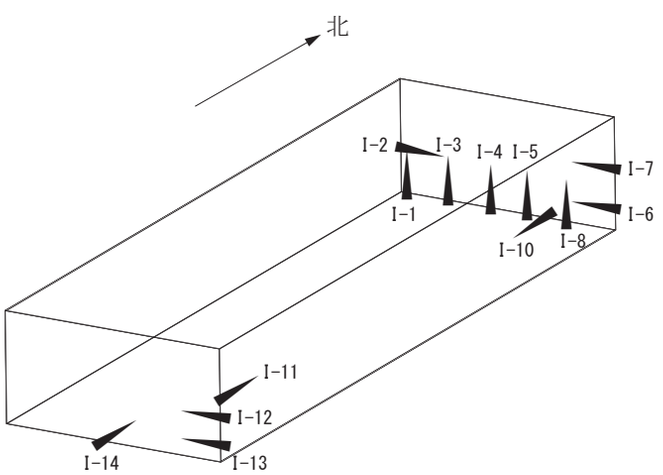
SX168（第25図、図版8-6）　２区。SR152の北側に長さ140cmの範囲で直線的に10～15cm角の石



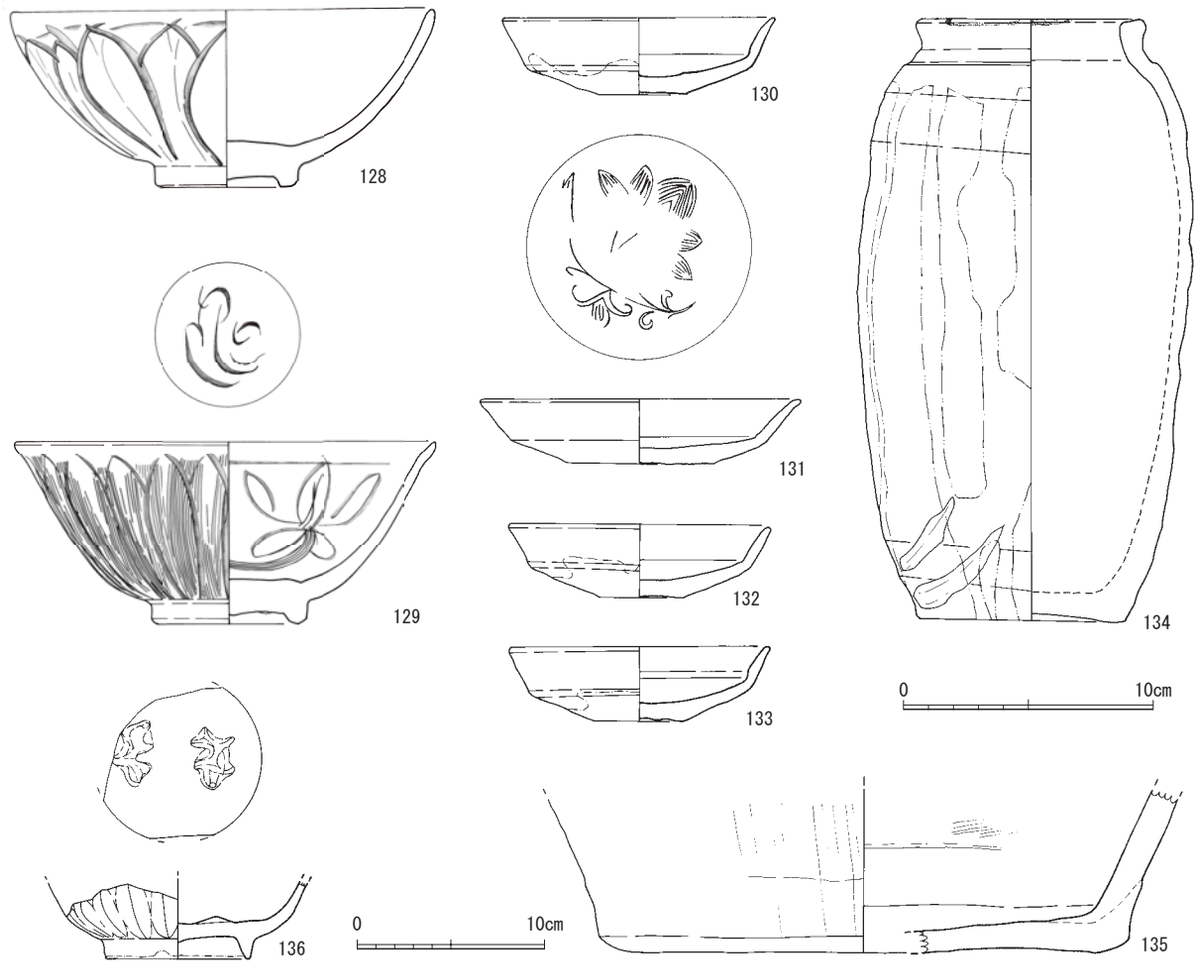
第 21 図　第Ⅰ区第２面遺構全体図（1/150）



第 22 図　SR152 実測図（1/20）



第 23 図　SR152 鉄釘出土位置模式図



第24図　SR152出土土器実測図（135は1/4、他は1/3）

が配置される。SR152に切られる。

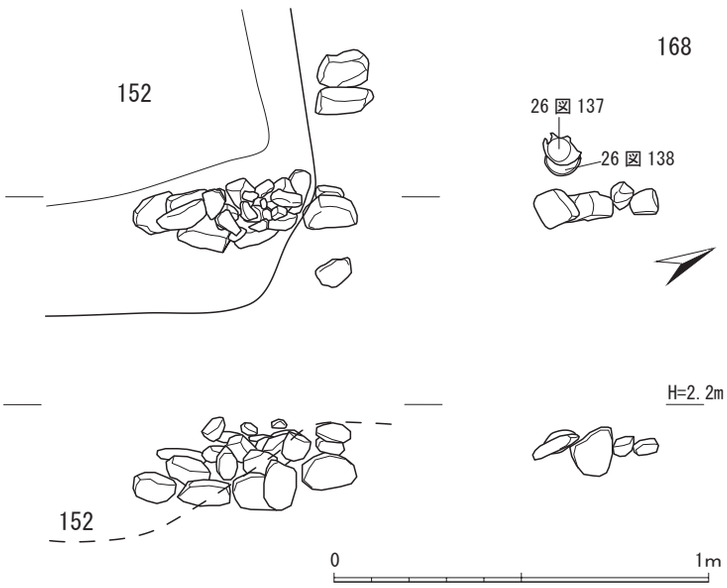
出土遺物（第26図）　137（図版18-11）は景徳鎮窯青白磁皿。口縁部の釉を掻き取る。白磁Ｘ類（F期後半：13世紀後半～14世紀初頭前後）。138は同青白磁小碗。

３．井戸

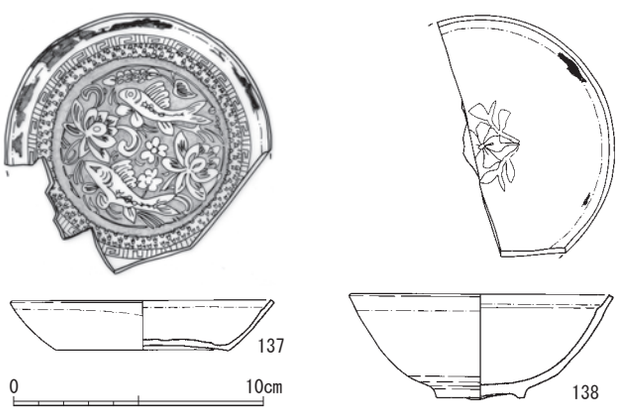
SE158の掘方はトレンチT6および調査区西壁で確認できたが、その他井戸の掘方は上面ではほとんど認識できなかった。第２面精査後、１区にわずかに汚れた砂が堆積していたため、トレンチT-8としてだめ押しで掘り下げたところ、下層で井戸群（井戸枠）を検出した。出土遺物の時期は12世紀中頃～14世紀初頭を中心とする。

SE196（第27図、図版8-7）　１区。井戸枠は確認されず、井筒と考えられる土坑部分の径は70㎝を測る。底面の高さは標高0.3ｍ程度。SE195・193・192に切られる。切り合いでは最も古い井戸となる。

出土遺物（第28・33図）　139は井筒出土の同安窯系青磁碗Ⅰ類（D期：12世紀中頃～後半）。140は井筒出土の同安窯系青磁碗Ⅱ類（D期）。体部外面下半は露胎。141は掘方出土の同安窯系青磁皿Ⅰ



第25図　SX168実測図（1/20）



第26図　SX168出土土器実測図（1/3）

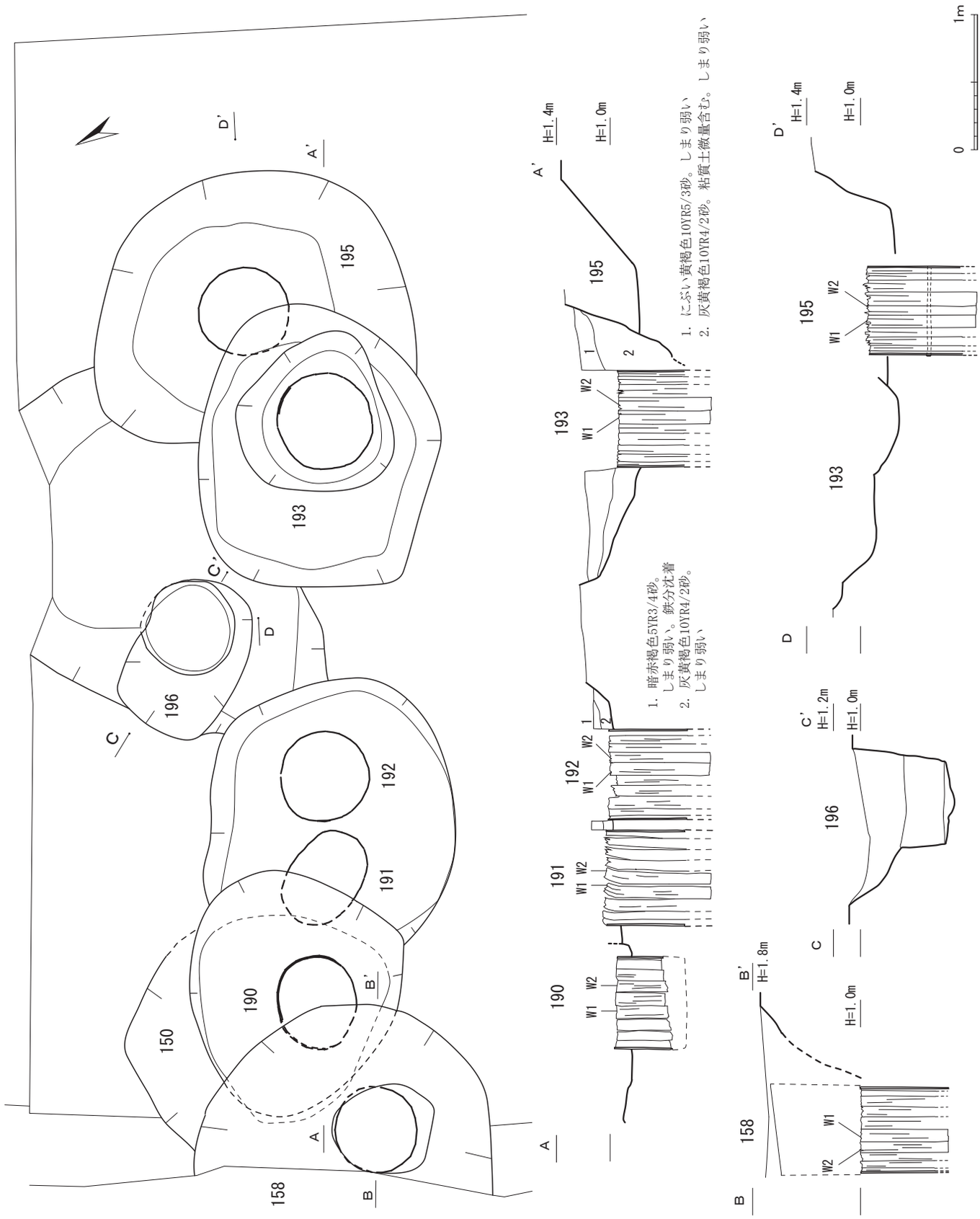
-2b類（D期）。底部外面の釉を掻き取る。142は掘方出土のヘラ切り底の土師器坏。12世紀中頃。175は井筒出土の滑石製石錘。長軸の溝の他、両側面に３カ所の対となる切り込み状の溝を持つ。176は井筒出土の土錘。他に井筒からヒト頭頂骨片が出土した。

SE195（第27図、図版8-8）　４区。井戸枠はスギ板目材22枚の結桶で、径84㎝を測る。遺存状態は悪いが箍が残っていた。標高0.95～0.1ｍに設置される。SE193に切られる。
出土遺物（第28図）　143は井筒出土の龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4類（D期：12世紀中頃～後半）。144は井筒出土の白磁皿Ⅹb類（F期後半：13世紀後半）。他に掘方からマダイ、ハタ科、ヒラメ、ニホンジカ下顎骨片などが出土した。

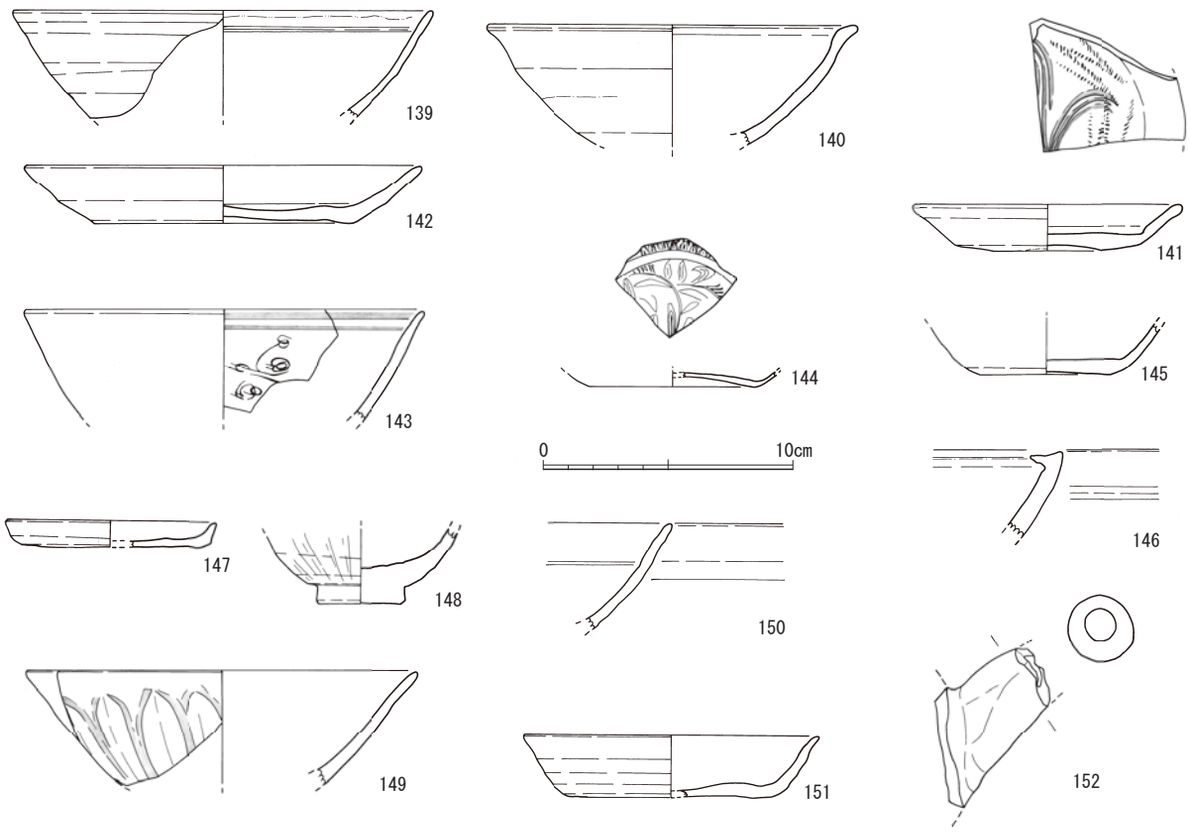
SE193（第27図、図版9-1・2）　１・４区。井戸枠はスギ板目材22枚の結桶で、径77㎝を測る。標高0.95～0.25ｍに設置される。
出土遺物（第28・33図）　145は井筒出土の白磁皿Ⅸ-１類（F期：13世紀中頃～14世紀初頭前後）。177・178は井筒出土の滑石製石錘。179は井筒出土の土錘。他に掘方からヒト下顎骨・歯（小児か）、ウマ歯、カレイ科第１血管間棘、井筒内からクジラ目椎骨などが出土した。

SE192（第27図、図版9-3）　１区。井戸枠はスギ板目材23枚の結桶で、径70㎝を測る。標高１～0.25ｍに設置される。
出土遺物（第28図）　146は井筒出土の龍泉窯系青磁鉢。他に井筒・掘方から土錘が出土した。

SE191（第27図、図版9-4）　１区。井戸枠はスギ板目材19枚の結桶で、径72㎝を測る。標高１～0.25ｍに設置される。
出土遺物（第28・33図）　147は井筒出土の糸切り底の土師器小皿で小型扁平化している。13世紀中頃。185は井筒出土の滑石製石錘。他に井筒から白磁、土錘が出土した。



第 27 図　SE158・190・191・192・193・195・196 実測図（1/40）



139・140　SE196　　141・142　SE196掘方　　143・144　SE195　　145　SE193
146　SE192　　147　SE191　　148・149　SE190　　150～152　SE158

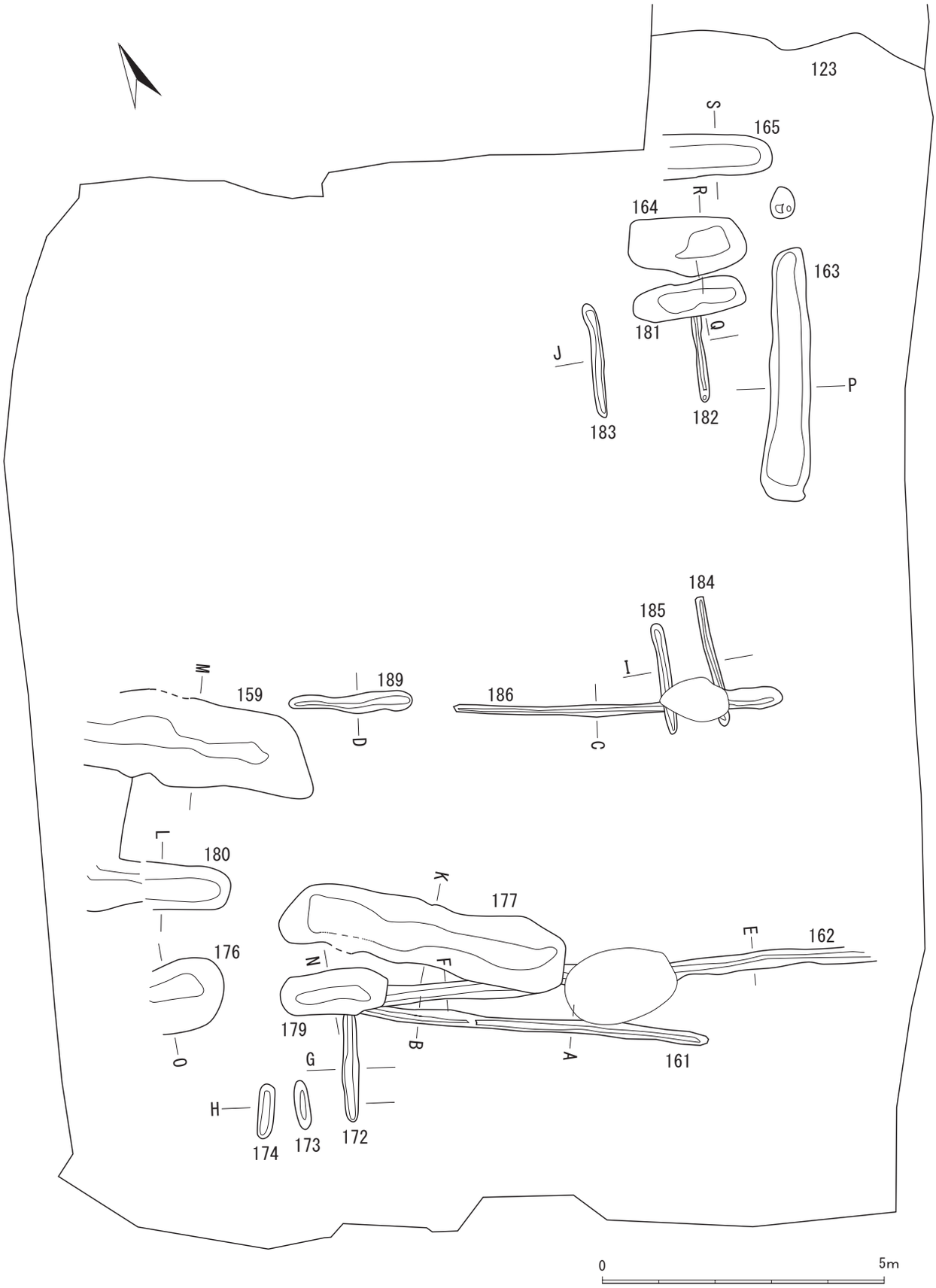
第28図　SE出土土器実測図（1/3）

SE190（第27図、図版9-5・6）　１区。井戸枠はスギ板目材20枚の結桶で、径65cmを測る。標高0.95～0.45mに設置される。
出土遺物（第28・33図）　148は井筒出土の明黄褐色釉の青磁小椀。149は井筒出土の龍泉窯系青磁碗Ⅱb類（E期：13世紀前半）。188は掘方出土の滑石製石錘。他に井筒からイヌ肩甲骨・四肢骨片（子犬か）、イルカ類歯などが出土した。井筒最下層土壌から花粉はほとんど検出されず、植物珪酸体も少なかった。

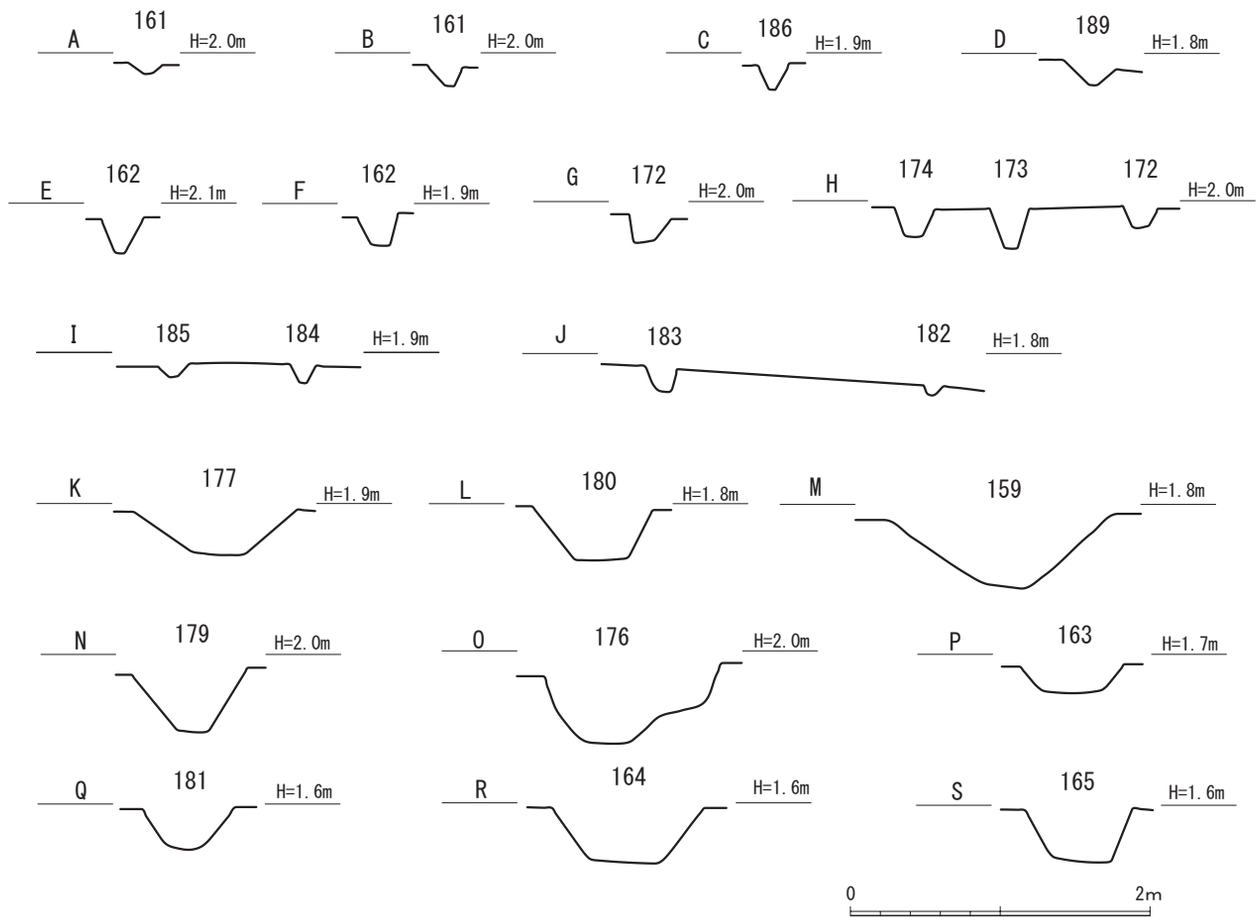
SE158（第27図、図版9-7・8）　１区。井戸枠はスギ板目材22枚の結桶で、径77cmを測る。標高１～0.3mに設置される。SE190を切る。
出土遺物（第28・33図）　150は井筒出土の白磁碗。151は井筒出土の糸切り底の土師器坏で、口唇部や内面の一部が黒色化しており、灯明皿として利用されている。11世紀代。152は井筒出土の黒褐釉陶器水注。189は井筒出土の滑石製石錘。

４．溝

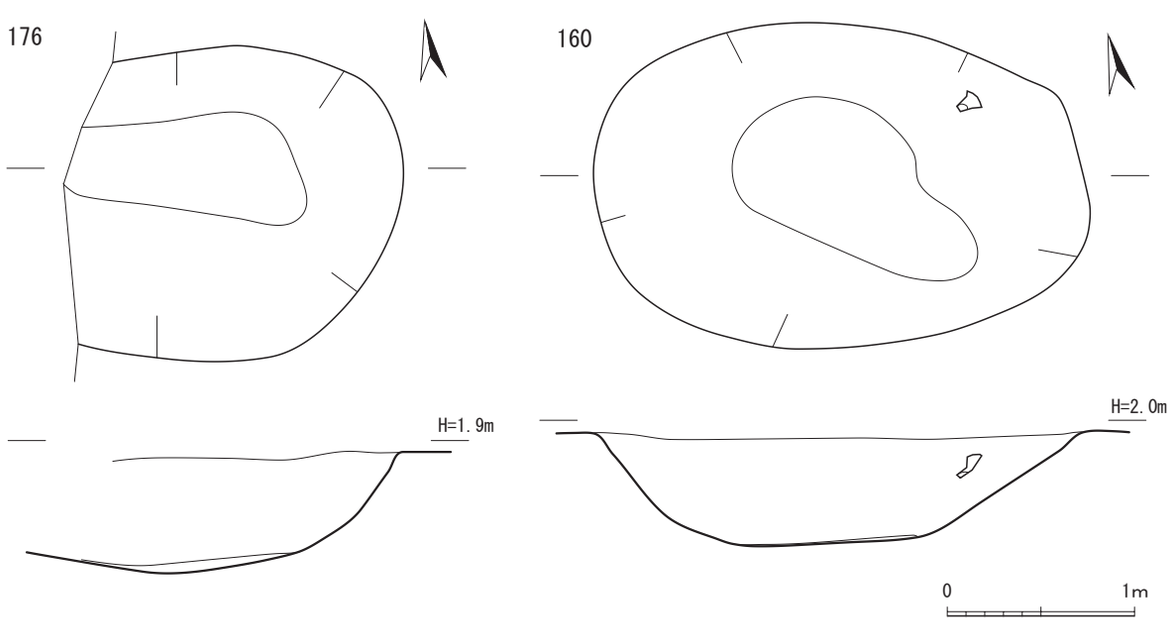
第２面全体で確認された。幅の狭い溝と広い溝で構成され、幅の狭い溝が幅の広い溝や土坑に切られる傾向がある。また、溝の方向にもわずかな差異があり、複数時期にわたって構築されている。出土遺物の時期は11世紀後半から12世紀後半もしくは13世紀代を中心とし、出土遺物からみても、層



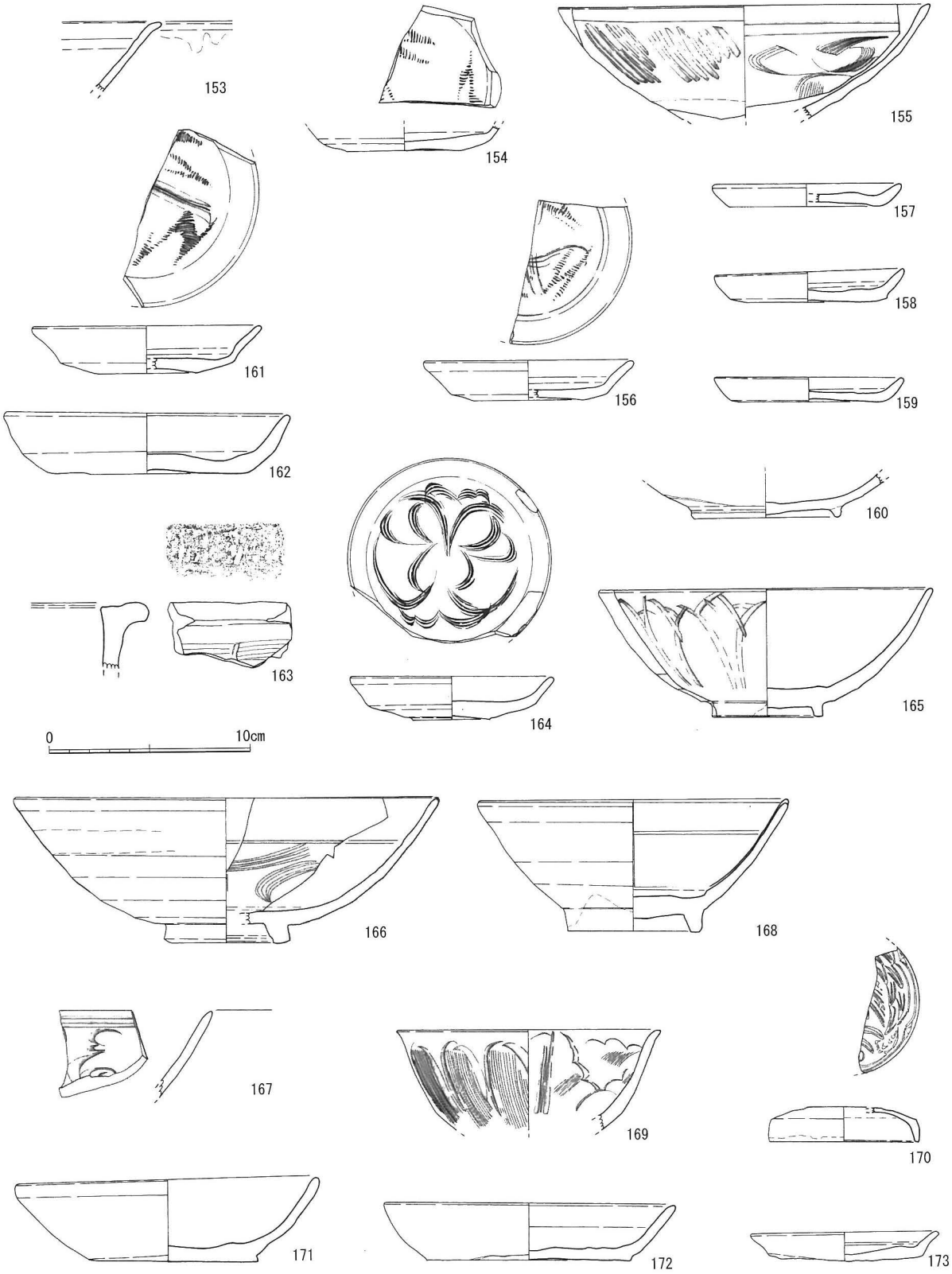
第 29 図　SD 平面実測図（1/100）



第 30 図　SD 断面実測図（1/50）



第 31 図　SK176・160 実測図（1/40）



153・154　SD162　155～159　SD163　160　SD164　161～163　SD159　164　SD177
165　SK160　166　SX156　167　SX157　168　SX139　169～173　SX188

第32図　SD・SK・SX出土土器実測図（1/3）

位からみても、第Ⅰ区で最も古い遺構群と考えられる。

SD162（第29・30図、図版10-3）　５区。幅27㎝、深さ23㎝を測る。SD177やSK160に切られる。
出土遺物（第32図）　153は白磁碗Ⅴ-2a類（C期：11世紀後半～12世紀前半）。154は同安窯系青磁皿Ⅰ-2b類（D期：12世紀中頃～後半）。底部外面の釉を掻き取る。

SD163（第29・30図、図版10-4）　４区。幅83㎝、深さ28㎝を測る。
出土遺物（第32図）　155は同安窯系青磁碗Ⅲ-1b類（D期：12世紀中頃～後半）で、体部外面下半は露胎。156は同安窯系青磁皿Ⅰ-2b類（D期）で、底部外面の釉を掻き取る。157～159は糸切り底の土師器小皿。他にイヌ下顎骨片が出土した。

SD164（第29・30図、図版10-2）　４区。幅106㎝、深さ49㎝を測る。
出土遺物（第32図）　160は土師器の高台付碗。他に陶磁器片が出土した。

SD159（第29・30図）　２区。幅158㎝、深さ61㎝を測る。
出土遺物（第32・34図）　161は同安窯系青磁皿Ⅰ-2b類（D期：12世紀中頃～後半）。底部外面の釉を掻き取る。162は糸切り底の土師器坏。13世紀代。163は土師質鍋。207は銅銭「天聖元寶」（初鋳1023年）。

SD177（第29・30図）　２・５区。幅108㎝、深さ56㎝を測る。SD162を切る。
出土遺物（第32・34図）　164は龍泉窯系青磁皿Ⅰ-2b類（D期：12世紀中頃～後半）。底部外面は釉を掻き取る。208は銅銭「祥符元寶」（初鋳1008年）。

５．土坑

幅の広い溝と長軸方向が同じ傾向もあるため、同質のもの（短い溝）の可能性もある。出土遺物の時期は13世紀前半。

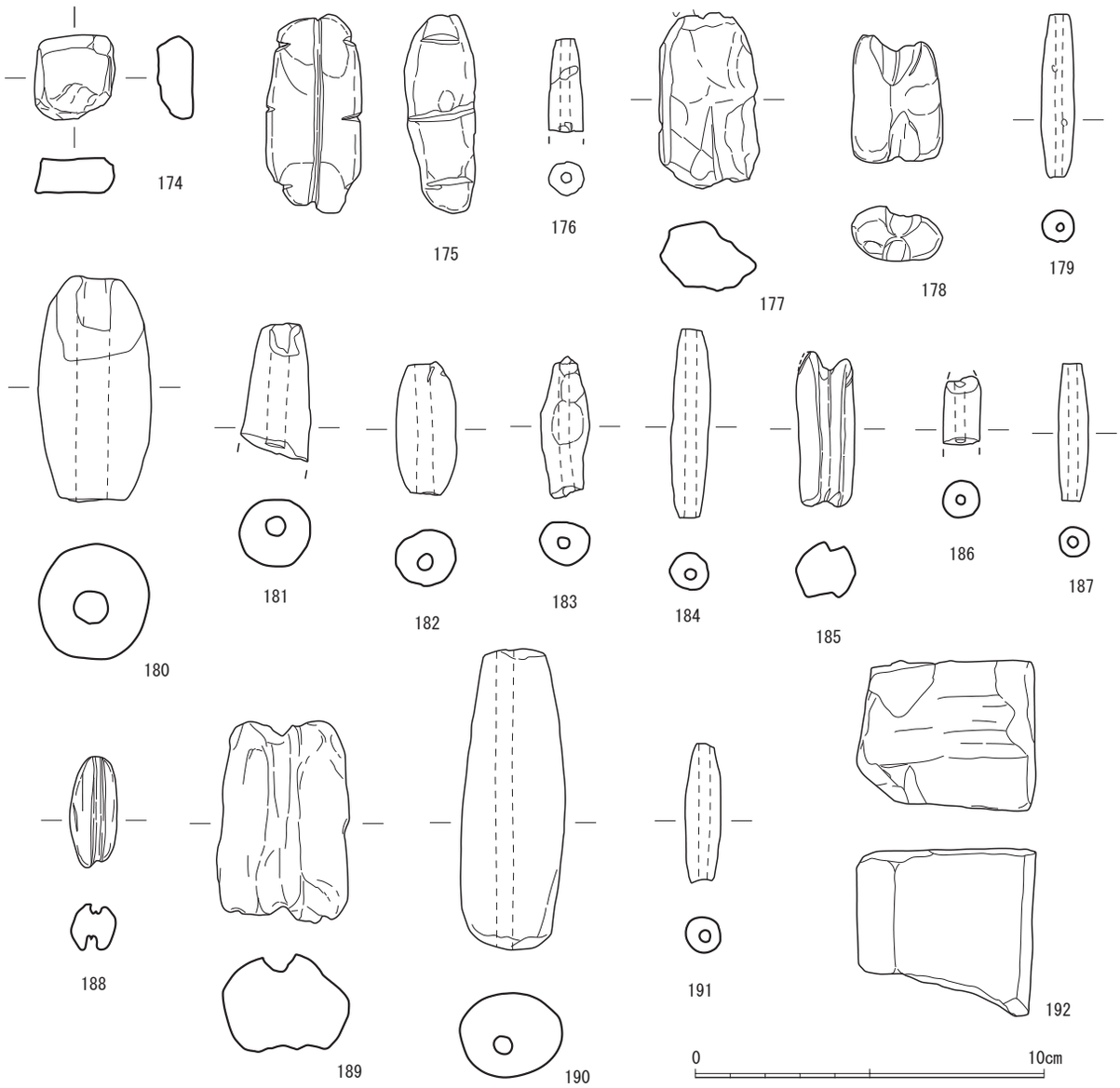
SK176（第31図）　２区。幅122㎝、深さ52㎝を測る。摩滅した黒曜石剥片が出土した。

SK160（第31図、図版10-1）　５区。長さ199㎝、幅130㎝、深さ45㎝を測る。SD162を切る。
出土遺物（第32図）　165は龍泉窯系青磁碗Ⅱa類（E期：13世紀前後～前半）。底外面は露胎、畳付は釉剥ぎ取り。他にスッポン肋骨版・腹骨板片、哺乳類骨片が出土した。

６．包含層

第２面上で形状が不明瞭な堆積層をSXとして記録した。出土遺物の時期は、11世紀後半から14世紀前半を中心とする。

SX156（１区）出土遺物（第32図）　166（図版18-12）は白磁碗で、口縁部外面に白化粧土を施し、内面と口縁部外面まで黄色味がかった不透明釉がかけられる。内面見込みの釉を環状に掻き取る。磁



174　SR152　　175・176　SE196　　177 ～ 179　SE193　　180 ～ 184　SE192
185 ～ 187　SE191　　188　SE190　　189 ～ 191　SE158　　192　SX188

第 33 図　SR・SE・SX 出土石製品・土錘実測図（1/2）

州窯産で12世紀後半～13世紀前半か。

SX157（１区）出土遺物（第32図）　167は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類（D期：12世紀中頃～後半）。

SX139（３区）出土遺物（第32図）　168は白磁碗Ⅱ類（C期：11世紀後半～12世紀前半）で、内面見込みの釉を環状に掻き取る。

SX188（４区）出土遺物（第32・33図）　169は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-6a類（D期：12世紀中頃～後半）。170は景徳鎮窯青白磁合子蓋（F期：13世紀後半～14世紀前半）。171・172は糸切り底の土師器坏。２点とも内面に黒色付着物がある。173は糸切り底の小皿。12世紀後半。192は砂岩の砥石。立方体状に打割後も砥石として利用している。線状痕や浅い削り状の凹みが形成され、砥面は凹状ではなく

平滑になる。他にマダイ頭骨片（カブトワリ痕あり）が出土した。

7．小結

溝の方向や井戸の並びから、第２面中世期の地割は、現況地割（調査区区割）からわずかに西に振れていたと想定され、第１面中世期の地割とほぼ同じと考えられる。

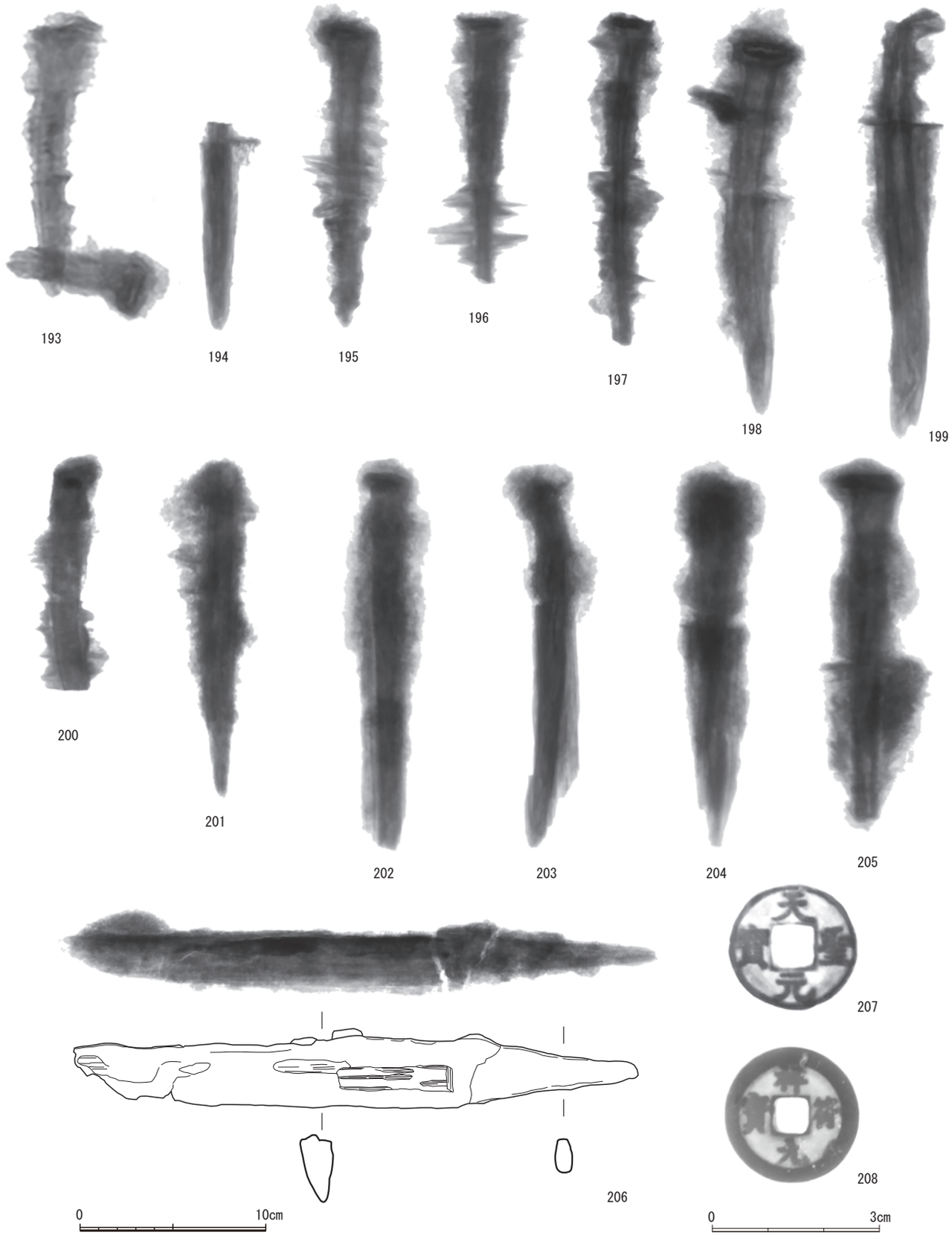
調査区全体で確認された数種の溝は、性格は不明だが、地割や埋め立て・整地に関係する可能性がある。

素掘り井戸SE196井筒からは人骨頭頂部片が、結桶井戸SE193の掘方からは小児下顎骨が、結桶井戸SE190井筒からは子犬骨が出土した。偶発的な混入でなければ、井戸の構築や廃棄に関係する可能性がある。

第２面については、第１面に比べて、漁撈具の出土が少ないことが特徴である。第33図や第５表で示すとおり、井戸から各種の滑石製石錘や土錘が出土したが、その他包含層や溝、土坑からは石錘・土錘・蛸壺はほとんど出土していない。第２面は通常の居住活動が本格化する前の段階に形成された活動面と考えられる。調査区南西隅で確認された木棺墓SR152も、当該地での居住地形成に伴って、最初期の段階で構築されたものと考えられる（副葬品は12世紀後半遺物を主体としつつ、13世紀代の遺物（第24図128･136）を含む）。

木棺墓SR152については、墓壙掘削後、北端・中央・南端に径20cmほどの礫を敷き、その上に木板を鉄釘で打ち付けて組み合わせた木棺（第５節第２項）を安置している。北側の青磁碗・皿（第24図128～133）は棺外副葬と考えられるが、鉄製短刀（第34図206）と陶器壺（第24図134）は木棺腐朽後に下位に落ちている可能性もあり、棺外か棺内か不明である。人骨は遺存状態が悪く、詳細は不明であるが、頭蓋や臼歯の形状は、成人女性の特徴を示している（第５節第１項）。

井戸から出土した石錘・土錘のうち、側面に３対の溝を持つ有溝石錘175（SE196）、小型有溝石錘188（SE190）、大型土錘180（SE192）、大型土錘190（SE158）は他と形状や大きさが異なる。側面有溝石錘175の同型石錘は箱崎遺跡11次（592集）・SE033出土52（13世紀中頃）、類似型石錘は21次（705集）・SE006出土11（13世紀後半）、32次Ｂ区（896集）・SP328出土263、包含層出土269､67次（1165集）・SE651出土11（13世紀後半～14世紀前半）、包含層出土34､73次（1316集）・包含層出土19、SK238出土７、SK428出土10などがある。側面有溝石錘175はSE196出土で12世紀中頃～後半の時期が考えられる。小型有溝石錘188の同型石錘は、箱崎遺跡47次（1046集）・SD20出土88（13世紀後半～14世紀前半以降か）､55次（1046集）・SK145（時期不明）､77次（1345集）・SE2085出土107（11世紀後半～12世紀前半）などが確認できる。小型有溝石錘188はSE190から出土しており、13世紀代の時期が考えられる。



193～206　SR152　　207　SD159　　208　SD177

第34図　第Ⅰ区第２面金属製品実測図およびX線画像（206は1/3、他は1/1）

第４表　第Ⅰ区第２面出土土器・土製品

挿図	番号	遺構・層位	種類	器種	残存	法量（cm）	胎土	焼成	色調	仮番
24	128	SR152　R1	青磁	碗	完形	口径 16.9、器高 7	径２㎜以下砂粒ごく少ない	良好	胎土：淡灰、釉：灰緑、光沢	1
24	129	SR152　R2	青磁	碗	完形	口径 16.7、器高 7.2	径１㎜以下砂粒ごく少ない	良好	胎土：不明、釉：灰緑、光沢	2
24	130	SR152　R3	青磁	皿	完形	口径 10.8、器高 3	径２㎜以下砂粒含む	良好	胎土：浅黄橙、釉：灰緑味、光沢	3
24	131	SR152　R4	白磁	皿	完形	口径 12.7、器高 2.6	径１㎜以下砂粒含む	良好	胎土：灰白、釉：灰、光沢鈍い	4
24	132	SR152　R5	青磁	皿	完形	口径 10.4、器高 2.9	径１㎜以下砂粒少ない	良好	胎土：浅黄橙、釉：灰緑味、光沢	5
24	133	SR152　R6	青磁	皿	完形	口径 10.4、器高 3	径１㎜以下砂粒少ない	良好	胎土：にぶい黄橙、釉：灰緑味、光沢	6
24	134	SR152　R10	陶器	壺	完形	口径 9、器高 23.8	径２㎜砂粒やや多い	良好	胎土：灰～褐、釉：暗オリーブ～暗褐	7
24	135	SR152　R9	陶器	大甕	底部	復元底径 18.2	径２㎜以下白色粒含む	良好	胎土：赤褐、釉：褐、灰	86
24	136	SR152 上層土	青磁	坏	底部	高台径 5.8	微細な黒色粒含む	良好	胎土：灰白、釉：緑褐、不透明	85
26	137	SX168　R1	青白磁	皿	7/10	口径 10.5、器高 2	微細な黒色粒含む	良好	胎土：白、釉：空色、透明	99
26	138	SX168　R2	青白磁	小碗	1/2	復元口径 10.5、器高 4.2	精良	良好	胎土：白、釉：空色、透明	100
28	139	SE196	青磁	碗	1/6	復元口径 16.8	微細な白色粒含む	良好	胎土：灰、釉：オリーブ、不透明	62
28	140	SE196	青磁	碗	1/8	復元口径 14.8	微細な黒色粒含む	良好	胎土：灰白、釉：灰緑、透明	63
28	141	SE196 掘方	青磁	皿	1/8	復元口径 10.8、器高 1.8	微細な砂粒含む	良好	胎土：灰、釉：緑、透明	65
28	142	SE196 掘方	土師器	坏	1/2	復元口径 15.75、器高 2.3	径 2.5㎜以下石英・長石やや多い	良好	外面：にぶい黄橙、内面：浅黄橙～灰黄褐	64
28	143	SE195	青磁	碗	1/8	復元口径 16	精良	良好	胎土：灰、釉：灰緑、光沢あり	60
28	144	SE195	白磁	皿	1/4	復元底径 6.6	精良	良好	胎土：黄白、釉：黄味、光沢強い	61
28	145	SE193	白磁	皿	底部	底径 5.3	精良	良好	胎土：灰白、釉：灰味、光沢あり	59
28	146	SE192	青磁	鉢	破片	-	精良	良好	胎土：灰白、釉：淡緑、光沢あり	58
28	147	SE191	土師器	小皿	4/5	口径 8.5、器高 1.1	径２㎜以下白・赤色粒含む	良好	にぶい黄橙	57
28	148	SE190	青磁	碗	底部	高台径 3.6	精良	良好	胎土：浅黄橙、釉：明黄褐、光沢あり	56
28	149	SE190	青磁	碗	1/6	復元口径 15.6	精良	良好	胎土：暗灰、釉：灰緑、光沢あり	55
28	150	SE158	白磁	碗	破片	-	微細な白色粒含む	良好	胎土：淡灰、釉：灰味、光沢強	52
28	151	SE158	土師器	坏	1/4	復元口径 11.8、器高 2.5	径１㎜以下黒色粒少ない。精良	良好	明褐	53
28	152	SE158	陶器	水注	破片	-	精良	良好	胎土：灰、釉：黒褐、光沢あり	54
32	153	SD162	白磁	碗	破片	-	微細な黒色粒少ない	良好	胎土：淡黄灰、釉：黄灰、不透明	66
32	154	SD162	青磁	皿	1/10	復元底径 5.6	微細な黒色粒やや多い	良好	胎土：黄灰、釉：オリーブ、透明	67
32	155	SD163	青磁	碗	1/4	復元口径 18.4	径１㎜以下白・黒色粒含む	良好	胎土：黄灰～灰白、釉：オリーブ灰、透明	95
32	156	SD163	青磁	皿	1/4	復元口径 10.4	微細な黒色粒含む	良好	胎土：淡黄～黄灰、釉：明オリーブ灰、透明	96
32	157	SD163　R1	土師器	小皿	1/2	復元口径 9.4、器高 1.1	径２㎜以下石英・長石含む	良好	外面：明赤褐～橙～灰褐、内面：浅黄橙～褐灰～橙	92
32	158	SD163　R2	土師器	小皿	完形	口径 9.85、器高 1.45	径２㎜以下石英・長石やや多い	良好	外面：にぶい橙、内面：浅黄橙～にぶい橙	93
32	159	SD163　R3	土師器	小皿	2/3	口径 9.45、器高 1.25	径２㎜以下石英・長石含む	良好	外面：浅黄橙～にぶい黄橙、内面：にぶい黄橙～橙	94
32	160	SD164	土師器	碗	底部	復元高台径 7.4	径２㎜以下赤・黒色粒、微細な雲母少なく含む	良好	灰白～淡黄	97
32	161	SD159	青磁	小皿	1/3	復元口径 11.4、器高 2.35	微細な白・赤色粒少ない	良好	胎土：灰～黄灰、釉：オリーブ、透明	91
32	162	SD159	土師器	坏	完形	口径 14.2、器高 3.1	径２㎜以下白・黒色粒少ない	良好	橙	90
32	163	SD159	土師質	鍋	破片	-	径６㎜以下石英・長石多い	良好	外面：にぶい褐～黒褐（スス付着）、内面：にぶい橙～灰褐	89
32	164	SD177　R1	青磁	皿	7/10	口径 10.1、器高 2.2	白色砂粒少なく含む	良好	胎土：灰白、釉：青緑、透明	114
32	165	SK160	青磁	碗	1/5	復元口径 16.6、器高 6.35	径１㎜以下白色粒少ない	良好	胎土：灰、釉：緑褐	33
32	166	SX156	白磁	碗	1/7	復元口径 21、器高 7.15	径１㎜以下白・黒色粒含む	良好	胎土：淡黄灰～灰黄褐、釉：黄色味、不透明	87
32	167	SX157	青磁	碗	破片	-	微細な黒色粒少ない	良好	胎土：淡灰、釉：オリーブ、透明	88
32	168	SX139	白磁	碗	2/3	復元口径 15.4、器高 6.4	微細な黒・白色粒少ない	良好	胎土：灰白、釉：灰緑、透明	84
32	169	SX188	青磁	碗	1/4	復元口径 13.1	精良	良好	胎土：灰白、釉：青緑、透明	105
32	170	SX188	青白磁	合子蓋	1/5	復元裾径 7.4、器高 1.7	微細は黒・白色粒含む	良好	胎土：白、釉：灰緑、透明	104
32	171	SX188	土師器	坏	3/5	復元口径 15.4、器高 4.2	径３㎜以下石英・長石含む	良好	外面：浅黄橙～にぶい黄橙～褐灰、内面：浅黄橙～褐灰	101
32	172	SX188	土師器	坏	3/5	復元口径 14.4、器高 2.9	径１㎜以下石英・長石含む	良好	外面:にぶい橙～灰黄褐～黒褐、内面:にぶい橙～にぶい黄橙～灰黄褐	101
32	173	SX188	土師器	小皿	9/10	口径 9.35、器高 1.5	径１㎜以下石英・長石、赤色粒少なく含む	良好	にぶい黄橙	103
33	176	SE196	土製品	土錘	1/2	径 1	微細な白色粒を含む	良好	橙	P25
33	179	SE193	土製品	土錘	完形	長さ 4.65、径 0.9、重量 3.4g	精良	良好	橙～にぶい赤褐	P26
33	180	SE192	土製品	土錘	一部欠	長さ 6.5、径 3.3、重量 67.9g	径１㎜以下石英・長石含む	良好	にぶい橙	P30
33	181	SE192	土製品	土錘	1/2	径 2	径１㎜石英・長石、径３㎜赤色粒含む	良好	赤橙	P31
33	182	SE192	土製品	土錘	完形	長さ 3.9、径 1.7、重量 10.5g	径１㎜以下白色粒含む	良好	褐灰～黒褐	P32
33	183	SE192	土製品	土錘	完形	長さ 4.05、径 1.4、重量 6.4g	微細な砂粒を含む	良好	赤橙～赤灰	P33
33	184	SE192 掘方	土製品	土錘	完形	長さ 5.4、径 1.1、重量 4.7g	微細な砂粒を含む	良好	浅黄橙～橙	P34
33	186	SE191	土製品	土錘	1/2	径 1.05	精良。褐灰色	良好	橙	P28
33	187	SE191	土製品	土錘	完形	長さ 3.9、径 0.8、重量 2.3g	精良	良好	にぶい赤橙	P29
33	190	SE158	土製品	土錘	完形	長さ8.7、径3、重量64.9g	径２㎜以下白・黒色粒含む	良好	にぶい黄橙～褐灰	P35
33	191	SE158	土製品	土錘	完形	長さ 4、径 1、重量 3.4g	微細な砂粒を含む	良好	にぶい橙～橙	P36

第５表　第Ｉ区第２面出土石器・石製品

※石材の「磁性」はネオジム磁石による。　※法量の［　］内は残存法量

番号	遺構・層位	石材	磁性	器種	残存	法量（cm、g）	備考
S1	SR152 内側	滑石	-	不明加工品	一部欠	長さ 2.34、重量 9.6	33 図 174
5111	SR152 上層土	滑石	微弱	石鍋	破片	長さ 4.84-9.46	3 点
S25	SE196	滑石	-	石錘	完形	長さ 5.74、重量 48.9	33 図 175
5112	SE196	砂岩	-	石球	完形	径 2.28-2.53	
5113	SE196 掘方	滑石	-	石鍋	破片	長さ［5.45］	
5114	SE195 掘方	滑石	-	石鍋加工品	完形	長さ 7.04	
5115	SE196 掘方	チャート	-	小礫（光沢）	完形	長さ 2.09	
S27	SE193	滑石	-	石錘	完形	長さ 5.06、重量 34.9	33 図 177
S28	SE193	滑石	-	石錘	完形	長さ 3.7、重量 21.3	33 図 178
5116	SE193 掘方	滑石	-	石鍋	破片	長さ［3.33］	
5117	SE193 掘方	滑石	-	加工品（石鍋転用）	完形	長さ 4.11	
5118	SE192	滑石	-	石錘	破片	長さ［3.48］	
5119	SE192	滑石	弱	不明加工品	破片	長さ［2.35］	
5120	SE192 掘方	滑石	-	石鍋	破片	長さ［5.44］	
5121	SE192 掘方	滑石	-	石錘	完形	長さ 2.94	
S30	SE191	滑石	-	石錘	一部欠	長さ 4.44、重量 17.3	33 図 185
S29	SE190 掘方	滑石	-	石錘	完形	長さ 3.16、重量 6.8	33 図 188
5122	SE190 掘方	滑石	弱	石鍋加工品	完形	長さ 8	
S31	SE158	滑石	-	石錘	完形	長さ 5.78、重量 94.8	33 図 189
5123	SD177	滑石	-	不明加工品	完形	長さ 3.58	
5124	SD179	滑石	-	不明加工品	破片	長さ［4.39］	
5125	SK176	黒曜石	-	剥片	完形	長さ 2.81	
5126	SX156 南半	滑石	-	石鍋	破片	長さ［5.42］	
S32	SX188	砂岩	-	砥石	完形	長さ 4.8、重量 142.2	33 図 192
5127	SX188	凝灰岩か	-	円礫（平滑）	完形	径 2.81-4.26	
5128	2 面検出清掃	砂岩	-	石球	完形	径 2.78-3	
5129	2 面検出清掃	滑石	-	石錘	完形	長さ 4.83	
5130	2 面検出清掃	滑石	-	石錘	破片	長さ［2.4］	
5131	2 面検出清掃	蛇紋岩質	弱	石錘	完形	長さ 8.93	
5132	2 面検出清掃	滑石	-	石錘（石鍋転用）	完形	長さ 2.16	
5133	2 面検出清掃	蛇紋岩質	弱	剥片	完形	長さ 3.17	
5134	2 面検出清掃	滑石	-	不明加工品	完形	長さ 2.14	
5135	2 面清掃	頁岩	-	砥石か	破片	長さ［2.57］	

第６表　第２面金属関係遺物出土遺構

遺構	取上日	金属関係遺物	備考
SR152　I1	190111	鉄釘　34 図 193	
SR152　I2	190111	鉄釘　34 図 194	
SR152　I3	190111	鉄釘　34 図 195	
SR152　I4	190111	鉄釘　34 図 196	
SR152　I5	190111	鉄釘　34 図 197	
SR152　I6	190111	鉄釘　34 図 198	
SR152　I7	190111	鉄釘　34 図 199	
SR152　I8	190115	鉄釘　34 図 200	
SR152　I10	190116	鉄釘　34 図 201	
SR152　I11	190124	鉄釘　34 図 202	
SR152　I12	190124	鉄釘　34 図 203	
SR152　I13	190124	鉄釘　34 図 204	
SR152　I14	190124	鉄釘　34 図 205	
SR152　I9	190116	鉄短刀　34 図 206	
SR152　南半	190123	鉄釘	
SR152　南端	190124	鉄釘 3	
SR152 上層土	190118	鉄釘	
SR152　外側	190108	鉄釘	
SE196	190130	鉄釘	
SE196　掘方	190130	鉄釘、鉄滓	
SE195	190129	鉄釘	
SE195 掘方（井筒混）	190129	鉄釘、鉄滓	
SE195　掘方	190130	鉄滓	
SE193	190129	鉄釘、銅銭 2	
SE193　掘方	190129	鉄釘	
SE192	190129	鉄釘	
SE192　掘方	190129	鉄釘	
SE191	190129	鉄釘	
SE190	190128	鉄釘	
SE190　掘方	190128	鉄滓	
SE158	190128	鉄釘	
SE158　掘方	190128	鉄釘	
SD159	190116	鉄滓、銅銭	天聖元寶（初鋳 1023 年）34 図 207
SD161	190121	鉄釘	
SD162	190121	鉄釘	
SD163	190123	鉄釘、鉄滓	
SD164	190123	鉄滓	
SD175	190121	鉄滓	
SD177	190123	鉄釘、鉄滓、銅銭 3	祥符元寶（初鋳 1008 年）34 図 208 熙寧元寶（初鋳 1068 年） 大観通寶（初鋳 1107 年）
SD182	190122	鉄釘	
SK176	190122	鉄釘、鉄滓	
SK160	190121	鉄片、鉄釘	
SX049	181130	鉄釘、鉄滓	
SX096	181210	鉄釘	
SX136	181217	銅銭	
SX143	181219	鉄釘	
SX143　南半	190123	鉄片、鉄釘、鉄滓	
SX146（下層含む）	181225	鉄釘、鉄滓	
SX148　T6	181225	鉄滓	
SX150	190123	鉄片、鉄釘、鉄滓	
SX150　T6	181226	鉄釘	
SX154	190108	鉄滓	
SX154　上面	190108	鉄滓	
SX156　T4	190109	鉄釘、銅銭	熙寧元寶（初鋳 1068 年）
SX156　南半	190123	鉄釘、鉄滓	
SX179	190122	鉄釘	
SX181	190123	鉄釘	
SX188	190123	鉄釘、鉄滓	
2 面検出清掃	190123	鉄釘、鉄滓	
2 面清掃	190118	鉄釘	

第４節　第Ⅱ区の調査

表土をバックホウで除去後、標高2.2～1.8ｍの面を遺構検出面とした。全体に共同溝や建物基礎（旧工学部防音講義室）による影響が大きく、遺構の残りは悪い。ピット・土坑・井戸・堆積層などを掘削・記録した。出土遺物の時期は12世紀～16世紀代を中心とする。なお、調査着手時は、南東側を調査区として設定し、グリッド１～10区を設定していたが、調査中に調査区を拡張する必要性が生じ、北西側に調査区を拡張して新たにグリッド11～19区を設定した。調査時の遺物取り上げなどはグリッド１～19区を用いたが、これらの区割は順番に並んでいないため、本報告では、南北軸にＡ～Ｆの記号を、東西軸に１～４の番号を付して、各区割を「アルファベット-数字」で呼称する。

１．土師器埋納遺構

SX044（第37図、図版14-1・2）　E-4区。掘り込みは長さ80㎝、深さ34㎝を測る。埋土が黄褐色の細・中砂で地山と区別がつかず、平面の遺構検出では認識していなかったが、攪乱で切られた断面が雨で流れて土師器が露出したので発見できた。

出土遺物（第38図、図版19-1）　209～230はヘラ切り底の土師器小皿。231は下層出土の糸切り底の土師器小皿。他の土師器に比べて細かく割れている。232～236はヘラ切り底の土師器坏。232・233は他に比べて細かく割れている。236は糸切り底の土師器坏。12世紀中頃。

２．ピット

調査区内からは柱穴が複数確認されたが、建物としての明確な並びは認識できなかった。出土遺物の時期は、概ね13世紀中頃～後半、14世紀代、16世紀前半の３時期に分かれる。

出土遺物（第39図）　237（図版19-2）はSP077（C-1区）出土の糸切り底の土師器小皿で、底内面に判読不明の墨書が残る。13世紀中頃。238はSP075（C-1区）出土の糸切り底の土師器小皿で、灯明皿として利用している。13世紀後半。239はSP078（C-1区）出土の龍泉窯系青磁皿。14世紀後半か。240・241はSP012（E-3区）出土。240は白磁碗Ⅴ-4類（D期：12世紀中頃～後半）。241は糸切り底の土師器小皿で、底部は縮小化し、板状圧痕がない。14世紀。242はSP055（D-3区）出土の龍泉窯系青磁碗高台部を瓦玉に再加工している。16世紀前半か。

３．土坑

土坑の形状については、残りも悪く、第Ⅰ区のような不定形土坑、方形土坑・礫敷土坑、円形・楕円形土坑といった区別は明確でなかった。出土遺物の時期は、16世紀代を中心とする。第Ⅰ区の土坑が、概ね12世紀後半～14世紀代、17世紀代に分かれることから、間を埋める時期に相当する。

SK034（第40図、図版14-3）　D-4区。幅81㎝、深さ22㎝を測る。埋土は暗オリーブ褐色2.5Y3/3粘質砂。SK033に切られる。　出土遺物（第44図）　249は瓦質の火鉢。

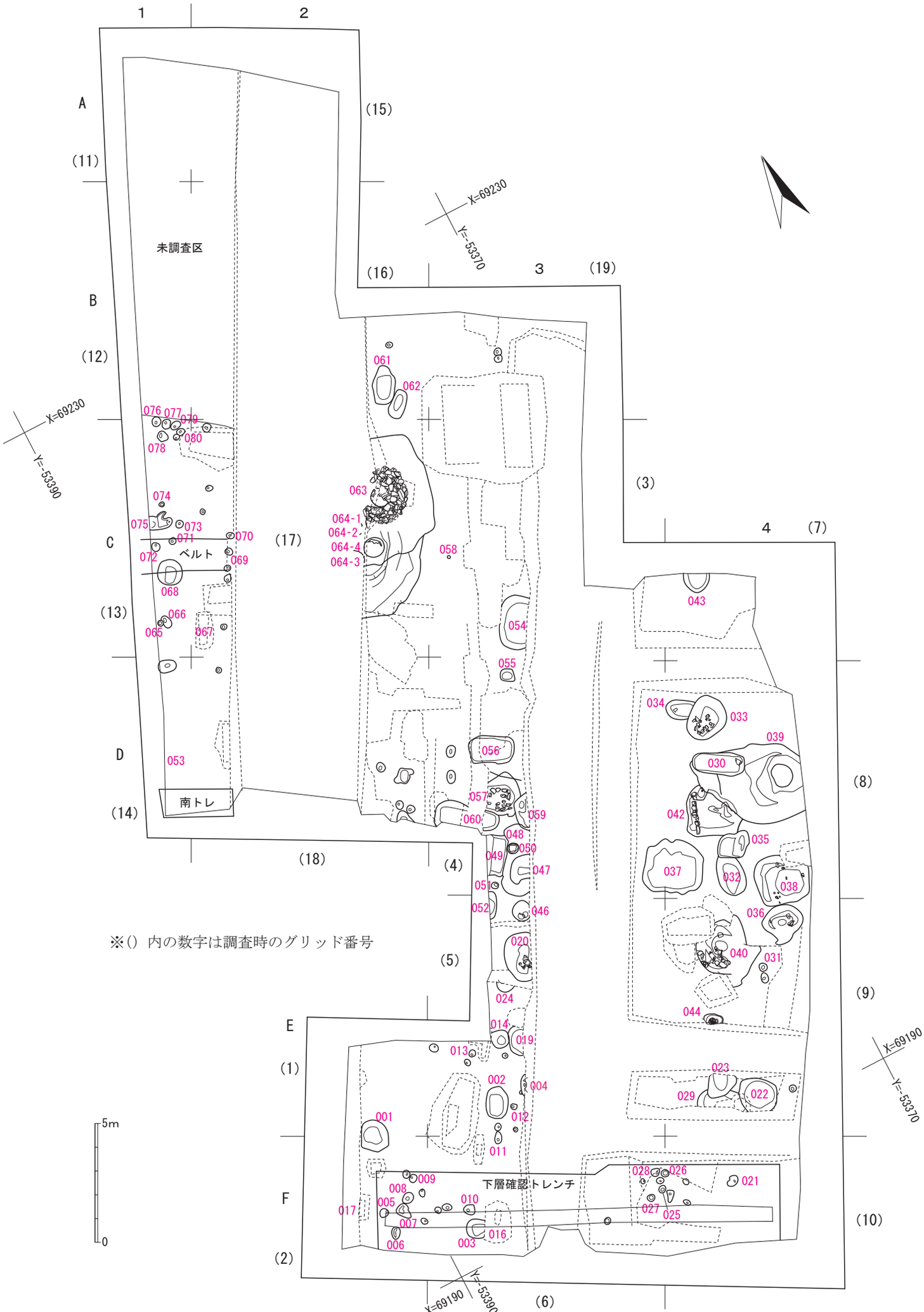
SK033（第40図、図版14-4）　D-4区。長さ189㎝、幅155㎝、深さ51㎝を測る。埋土は黄褐色砂ブロック含む暗オリーブ褐色粘質砂。礫・動物骨を含む。　出土遺物（第44図）　248は青花の鉢。

SK030（第40図、図版14-5）　D-4区。長さ220㎝、幅97㎝、深さ16㎝を測る。床にオリーブ褐色2.5Y4/4粘土を貼る。東側の扁平礫は上面のみが弱く被熱している。SE039を切る。

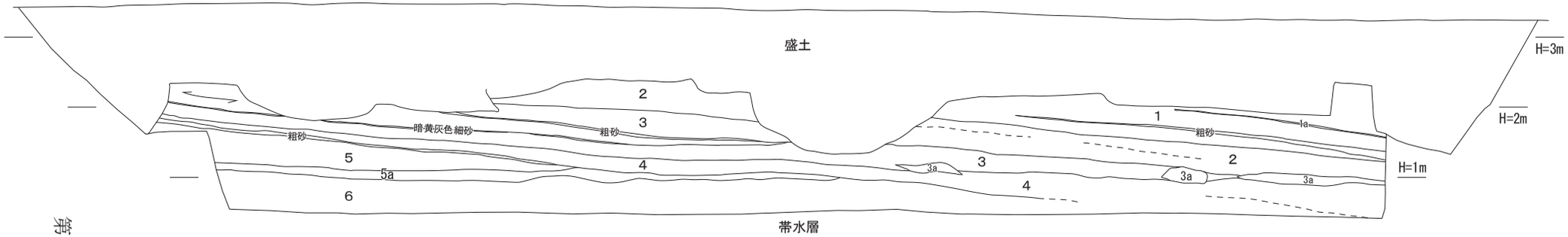
出土遺物（第44図）　247は瓦玉。出土遺物からの時期比定は困難だが、箱崎遺跡70・72次調査（1342・1344集）で確認された灰白色粘土を貼った土坑は15世紀以降の中世期と想定されている。

SK042（第40図、図版14-6～8）　D-4区。長さ213㎝、深さ35㎝を測る。西壁に角礫が並ぶ。埋土には炭層が形成される。SE039に切られるが、出土遺物はSE039よりも新しく、整合しない。

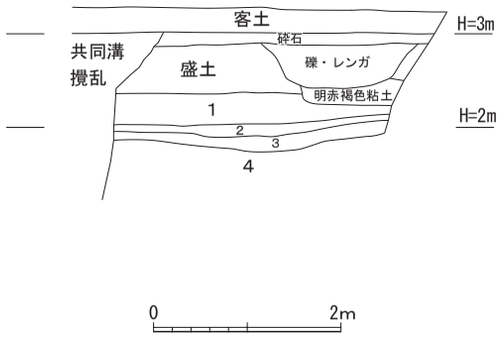
出土遺物（第44・50図）　243（図版19-3）は龍泉窯系青磁碗。15世紀中頃。246は朝鮮王朝の白



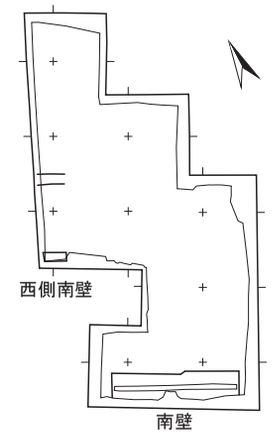
第 35 図　第Ⅱ区遺構全体図（1/200）



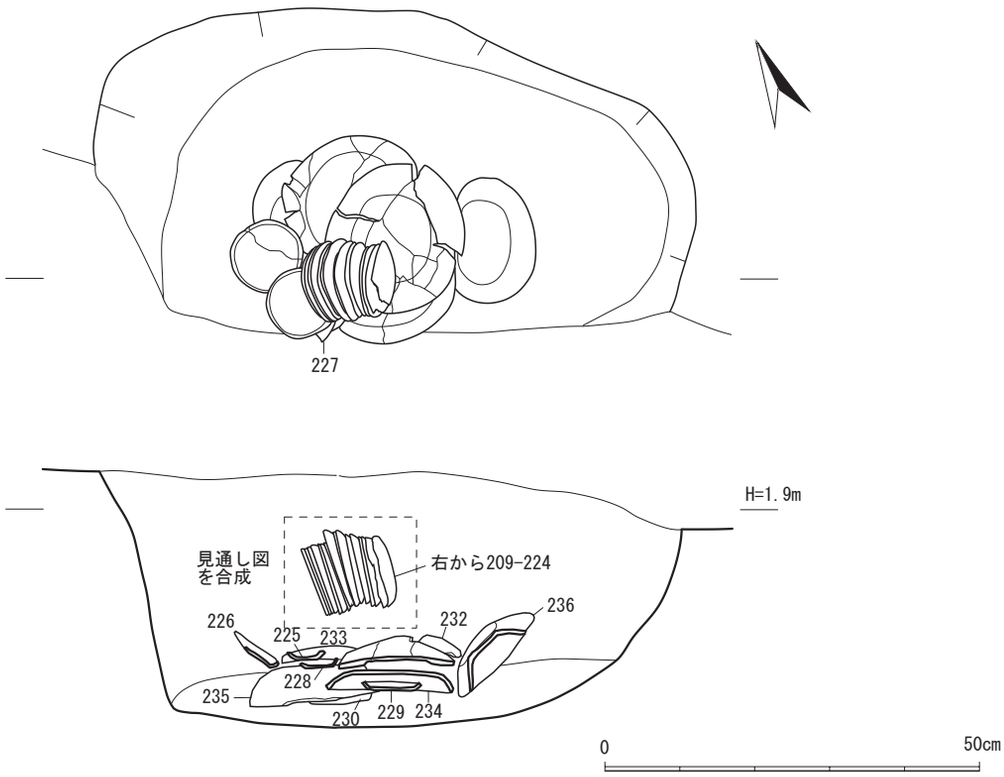
第Ⅱ区南壁土層
1．にぶい黄褐色 10YR5/4 細～中砂　　1a　暗灰黄色 2.5Y5/2 細砂
2．細砂
3．黄褐～明黄褐色、細～粗砂互層　　3a　褐色 10YR4/4 粗砂。鉄分沈着。遺物含む
4．オリーブ褐色 2.5Y4/4 ～明黄褐色 10YR6/6、細～粗砂互層。３層より中・粗砂多く、凹凸・波状を呈す
5．細～粗砂互層　　5a　鉄分沈着粗砂。遺物含む。
6．粗砂



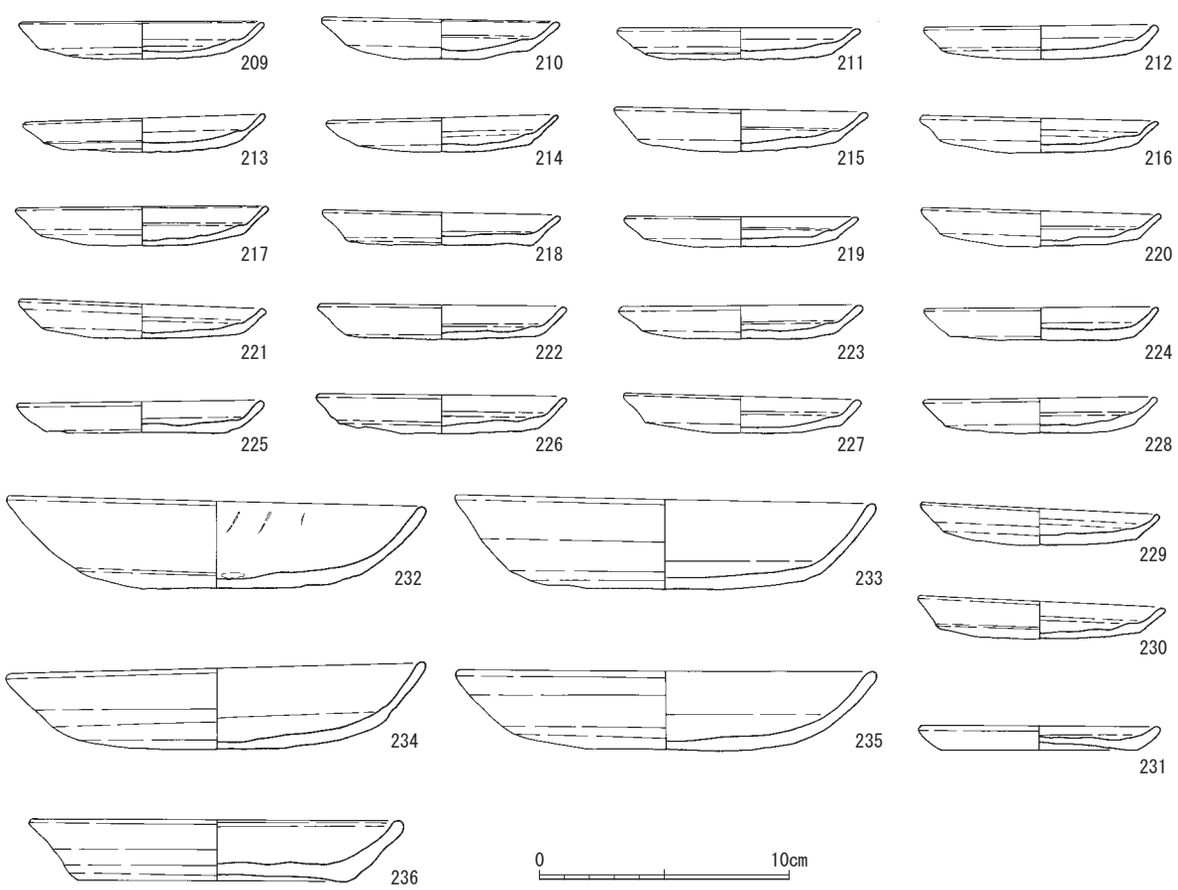
第Ⅱ区西側南壁土層
1．暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 粘質砂。径 1cm 炭少なく含む
2．褐色 10YR4/4 細・中砂。径 1cm 炭少ない。
　　暗褐色粘質砂が層状・ブロック状に混ざる
3．暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 粘質砂。径 5mm 炭少なく含む
4．粗砂



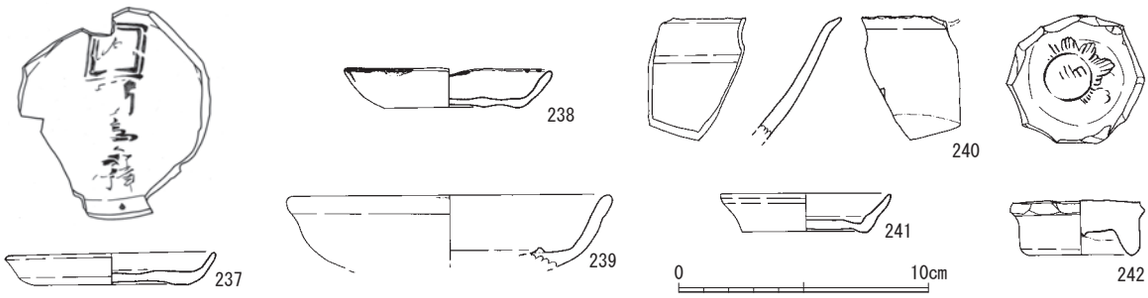
第 36 図　第Ⅱ区壁面土層実測図（1/80）



第 37 図　SX044 実測図（1/10）



第38図　SX044出土土器実測図（1/3）



237　SP077　　238　SP075　　239　SP078　　240・241　SP012　　242　SP055

第39図　SP出土土器実測図（1/3）

磁皿。見込みと畳付に目跡が付く。15世紀後半～16世紀。244・245は糸切り底の土師器小皿。15世紀後半。297・298は滑石製石錘。299は砂岩の石球。他にイネ、オオムギ、コムギの炭化果実が約200点、カレイ科椎骨、クロダイ属頭骨片、硬骨魚綱（被熱）などが出土した。

SK037（第40図、図版15-1）　D-4区。長さ250cm、幅211cm、深さ45cmを測る。埋土は径１cm炭、黄褐色砂を含む暗オリーブ褐色2.5Y3/3粘質砂。底面は凹凸をなす。埋土の炭を含む泥質層を洗浄したが何も検出できなかった。

SK035（第40図、図版15-2）　D-4区。長さ126cm、幅112cm、深さ39cmを測る。埋土は黒褐色10YR2/3粘質砂で、下層は黄褐色砂を互層状に含む。SK042・032を切る。

SK032（第40図、図版15-3）　D-4区。幅112cm、深さ28cmを測る。埋土は径１cm炭を含む黒褐色10YR2/2・2/3粘質砂。

SK038（第41図、図版15-4）　D-4区。長さ230cm、幅204cm、深さ67cmを測る。埋土は泥質砂で、被熱・破砕した小礫を含む。

出土遺物（第44・50図）　250・251は糸切り・板状圧痕底の土師器小皿。251は灯明皿利用される。252は糸切り底の土師器皿。253は土師質土器の釜。16世紀初頭。254は弥生土器の器台。後期末か。302・303は滑石製石錘。他にマダイ、ハタ科？、硬骨魚綱（被熱）、ヘビ類、カエル類、イタボガキ科？片が出土した。埋土から花粉はほとんど検出されず、イネの植物珪酸体が比較的多く検出された。

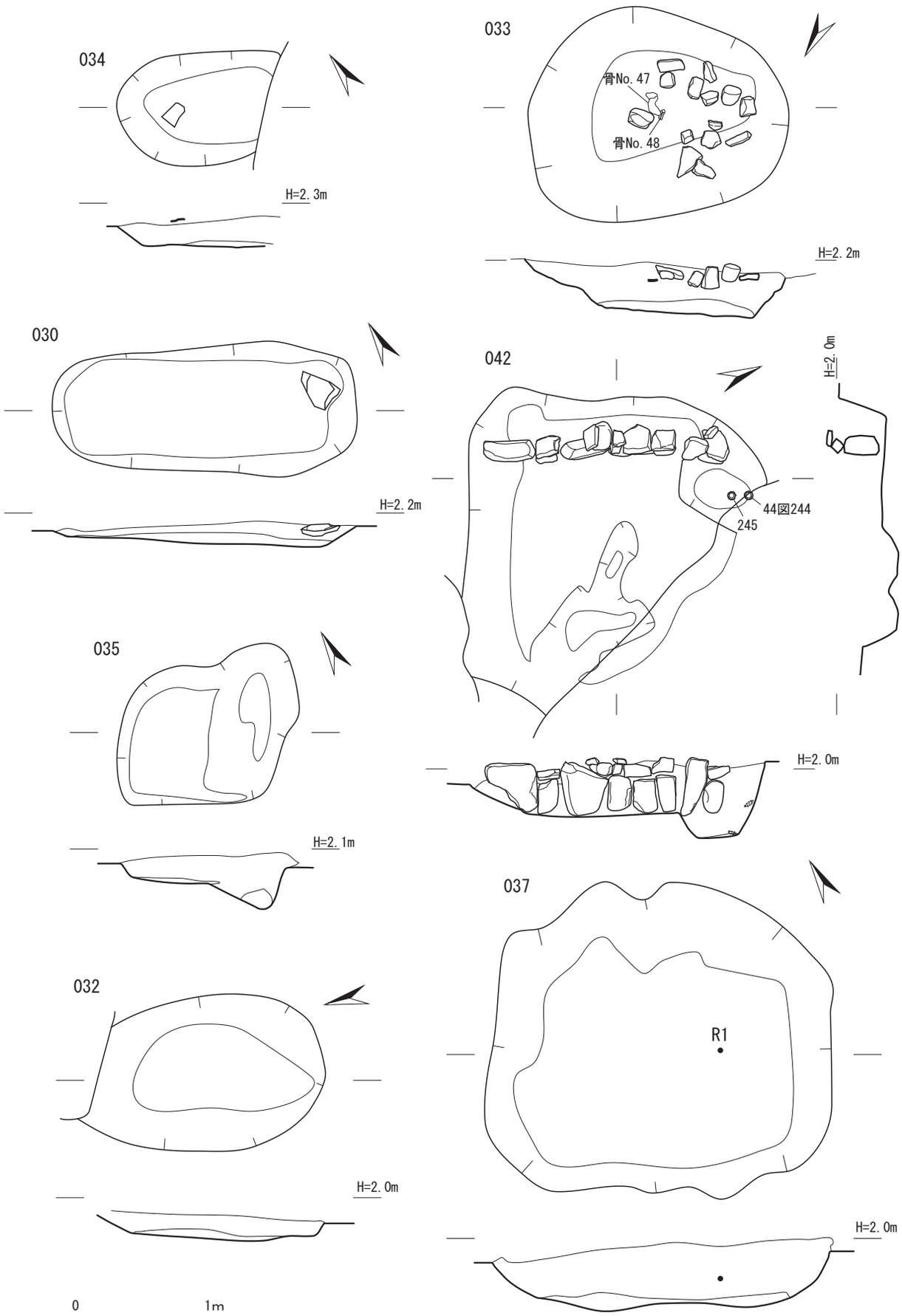
SK036（第41図、図版15-5）　E-4区。長さ174cm、幅162cm、深さ70cmを測る。埋土は径５mm炭粒を少なく含む暗オリーブ褐色2.5Y3/3粘質砂で骨や扁平礫（被熱なし）を含む。

出土遺物（第44・50図）　255は糸切り底の土師器皿。256は土師質の鍋。薄手で内面を丁寧なハケメで仕上げる。16世紀初頭。他にヒト脛骨（男性か）、鳥類骨片などが出土した。

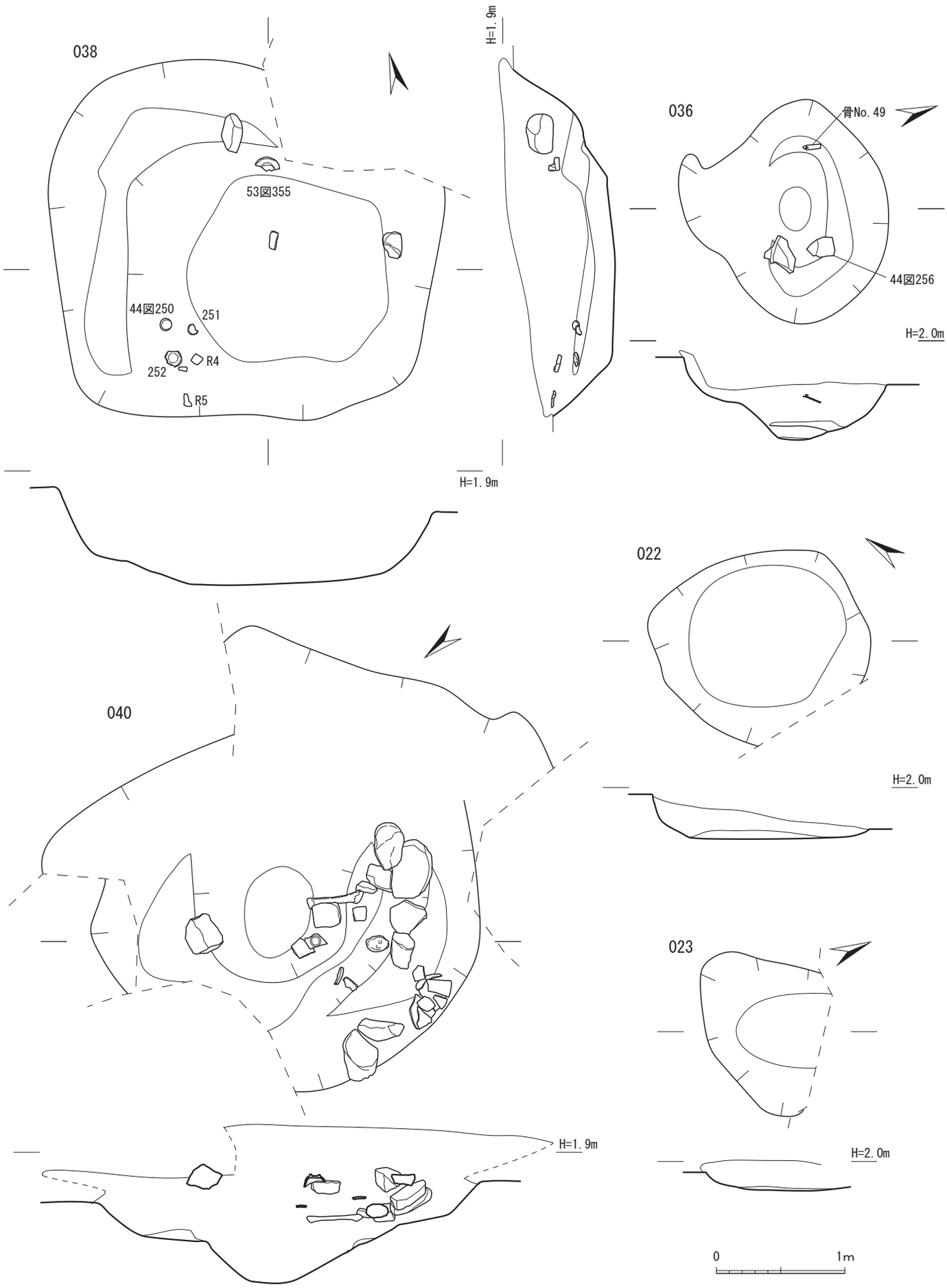
SK040（第41図、図版15-6）　E-4区。幅272cm、深さ92cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色2.5Y3/3で、上層は径１cm炭を含む砂質土、下層は粘質土。

出土遺物（第44・50図）　257は景徳鎮窯系青花皿。15世紀後半。258は高麗象嵌青磁碗。14世紀後半～15世紀。259は朝鮮王朝の雑釉陶器皿。畳付に目跡が付く。15世紀後半。261は瓦質の鍋。口縁部上端を内側に短く折り曲げており、防長型足鍋と考えられる。15世紀末～16世紀初頭。262は土師質の茶釜。15世紀代か。260は土師質の瓦玉。305・306は滑石製石錘。下層土を洗浄したが、小さい炭化材の他は何も検出できなかった。また、埋土から花粉はほとんど検出されず、イネの植物珪酸体が比較的多く検出された。

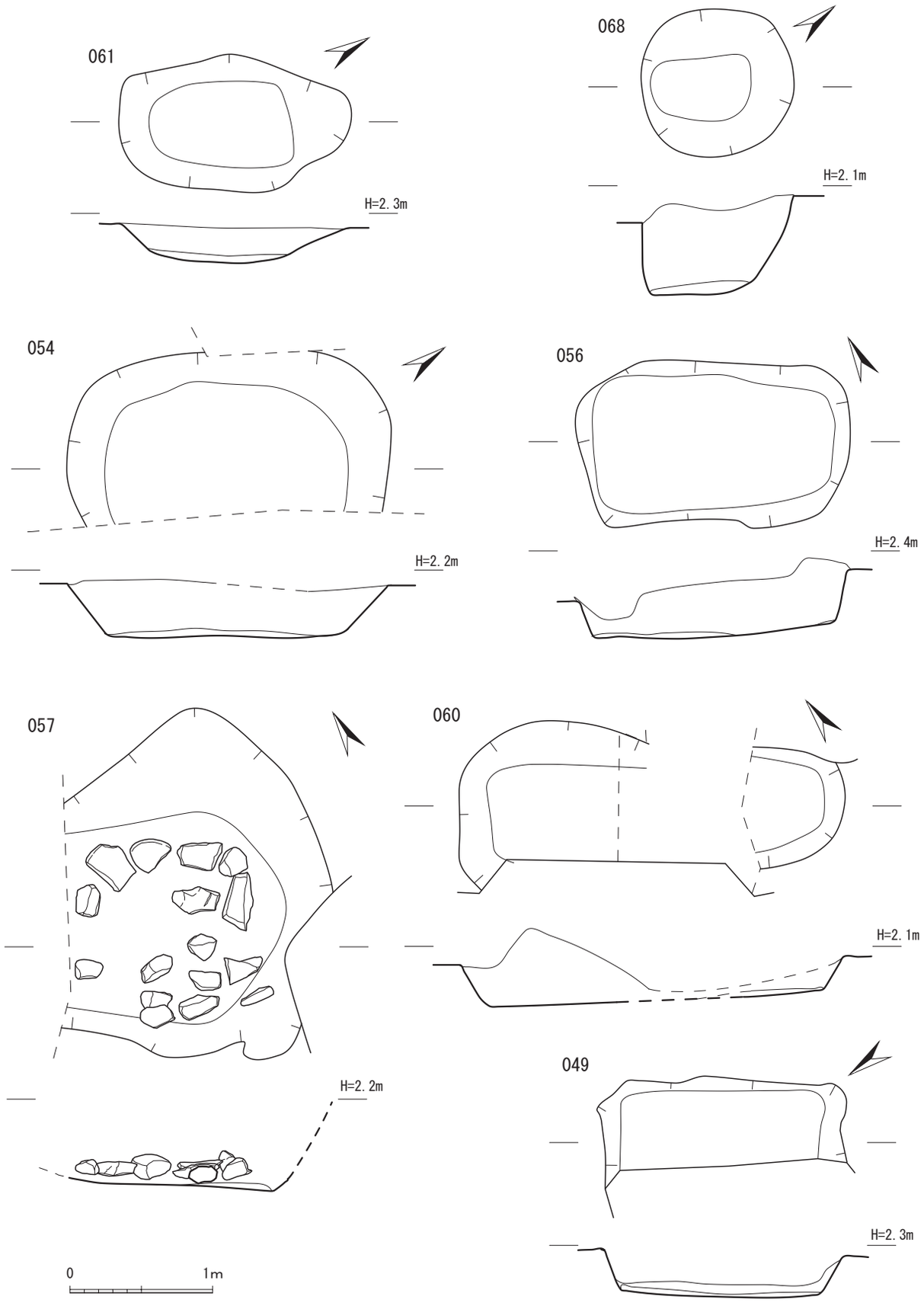
SK022（第41図、図版15-7）　E-4区。長さ174cm、深さ34cmを測る。埋土はオリーブ褐色粘質砂で、



第40図　SK034・033・030・042・035・032・037 実測図（1/40）



第 41 図　SK038・036・040・022・023 実測図（1/40）



第 42 図　SK061・068・054・056・057・060・049 実測図（1/40）

暗オリーブ褐色粘質砂と黄褐色砂を層状に含む。

SK023（第41図） E-4区。幅115cm、深さ25cmを測る。埋土はオリーブ褐色粘質砂で、暗オリーブ褐色粘質砂と黄褐色砂を層状に含む。

SK061（第42図） B-2区。長さ163cm、幅96cm、深さ23cmを測る。落ち込み状。

SK068（第42図） C-1区。長さ106cm、幅103cm、深さ69cmを測る。攪乱か。

SK054（第42図、図版15-8） C-3区。長さ226cm、深さ39cmを測る。

SK056（第42図、図版16-1） D-3区。長さ193cm、幅117cm、深さ59cmを測る。埋土はにぶい黄褐色10YR4/3～褐色4/4粘質砂。 出土遺物（第50図） 310は滑石製石錘。

SK057（第42図、図版16-2） D-3区。幅181cm、深さ63cmを測る。底に礫を敷く。

出土遺物（第45・50図） 264は青花小碗。265は丸瓦。凹面に布目痕、凸面にタタキ痕がある。313は滑石製石錘。他にサメ類椎骨（被熱）が出土した。

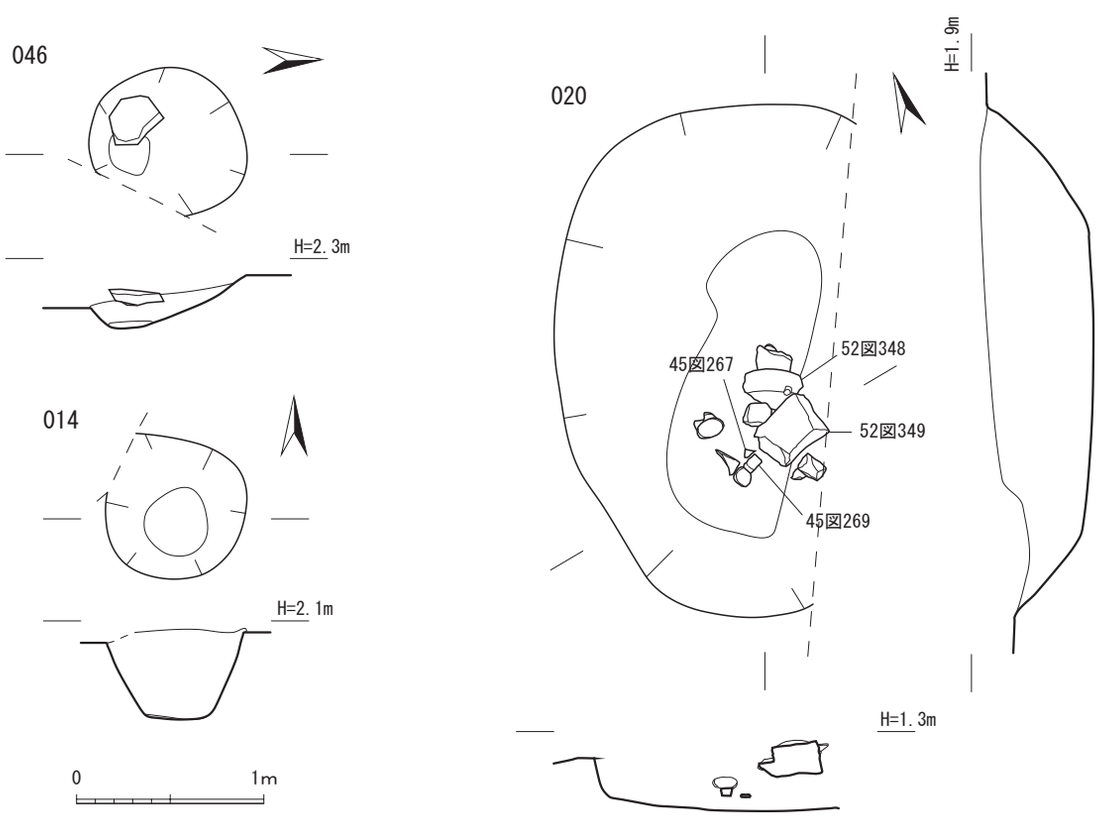
SK060（第42図） D-3区。長さ270cm、深さ60cmを測る。 出土遺物（第51図）316・317は石錘。

SK046（第43図） E-3区。長さ86cm、深さ29cmを測る。 出土遺物（第45図） 263は邵武窯系白磁皿で、内底は環状に釉を剥ぐ。15世紀代。

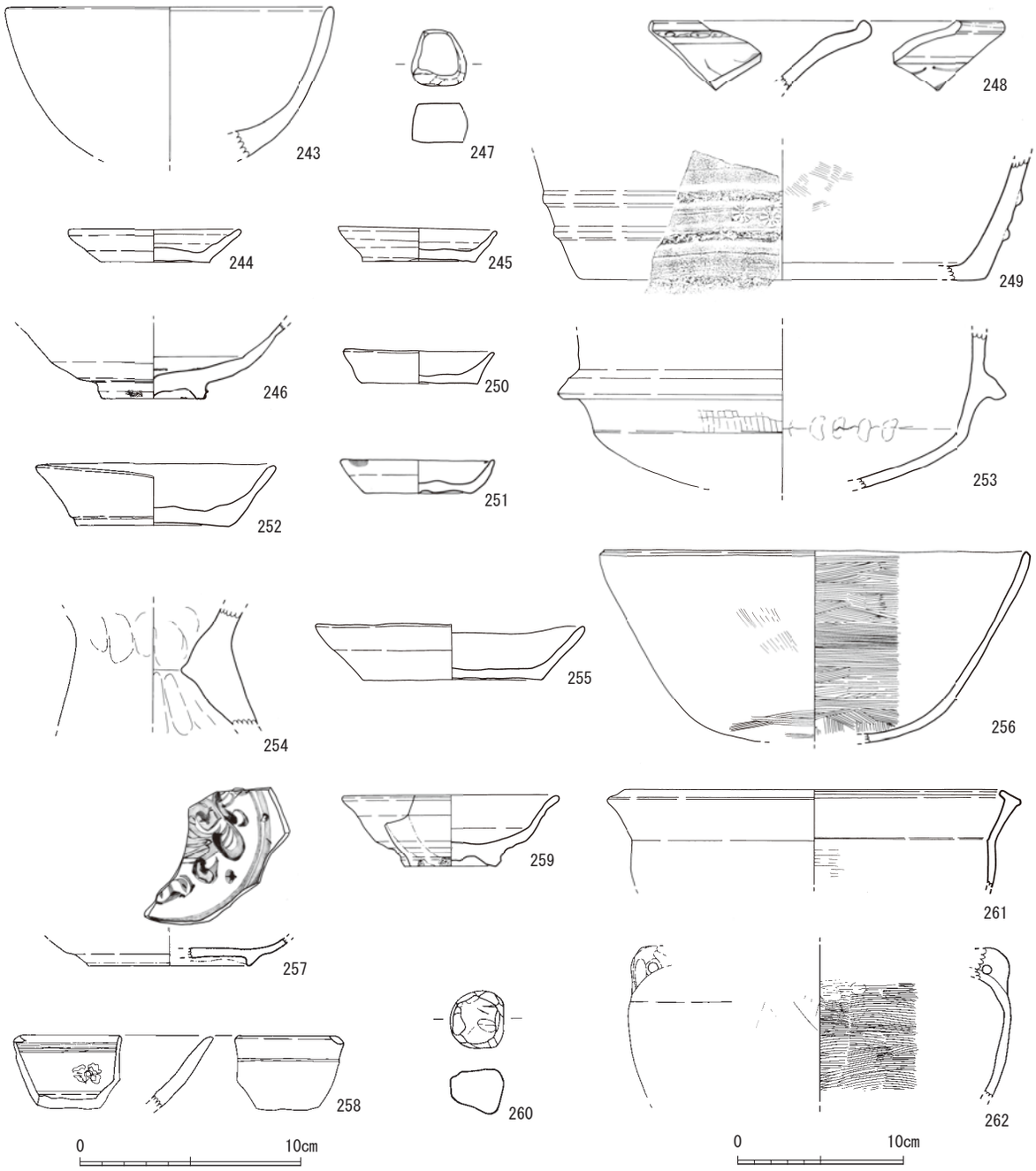
SK014（第43図） E-3区。長さ78cm、深さ48cmを測る。埋土下層に礫を含む。

SK020（第43図、図版16-3） E-3区。長さ206cm、深さ76cmを測る。

出土遺物（第45・51・52図） 267は朝鮮産灰釉陶器碗。畳付は釉剥ぎ。16世紀。268（図版19-4）は土師器の脚付坏。坏部は糸切り底。269は土師質の鍋。16世紀初頭。266は瓦質土器を再加工した円盤形土製品。320は花崗岩の磨石。321は滑石製石錘。348は石臼。臼面が挽き手の挿入孔に達するまで磨り減る。349は不明の加工石造品。全体に被熱・暗色化している。他に鹿角片が出土した。



第43図 SK046・020・014実測図（1/40）



243～246　SK042　　247　SK030　　248　SK033　　249　SK034
250～254　SK038　　255・256　SK036　　257～262　SK040

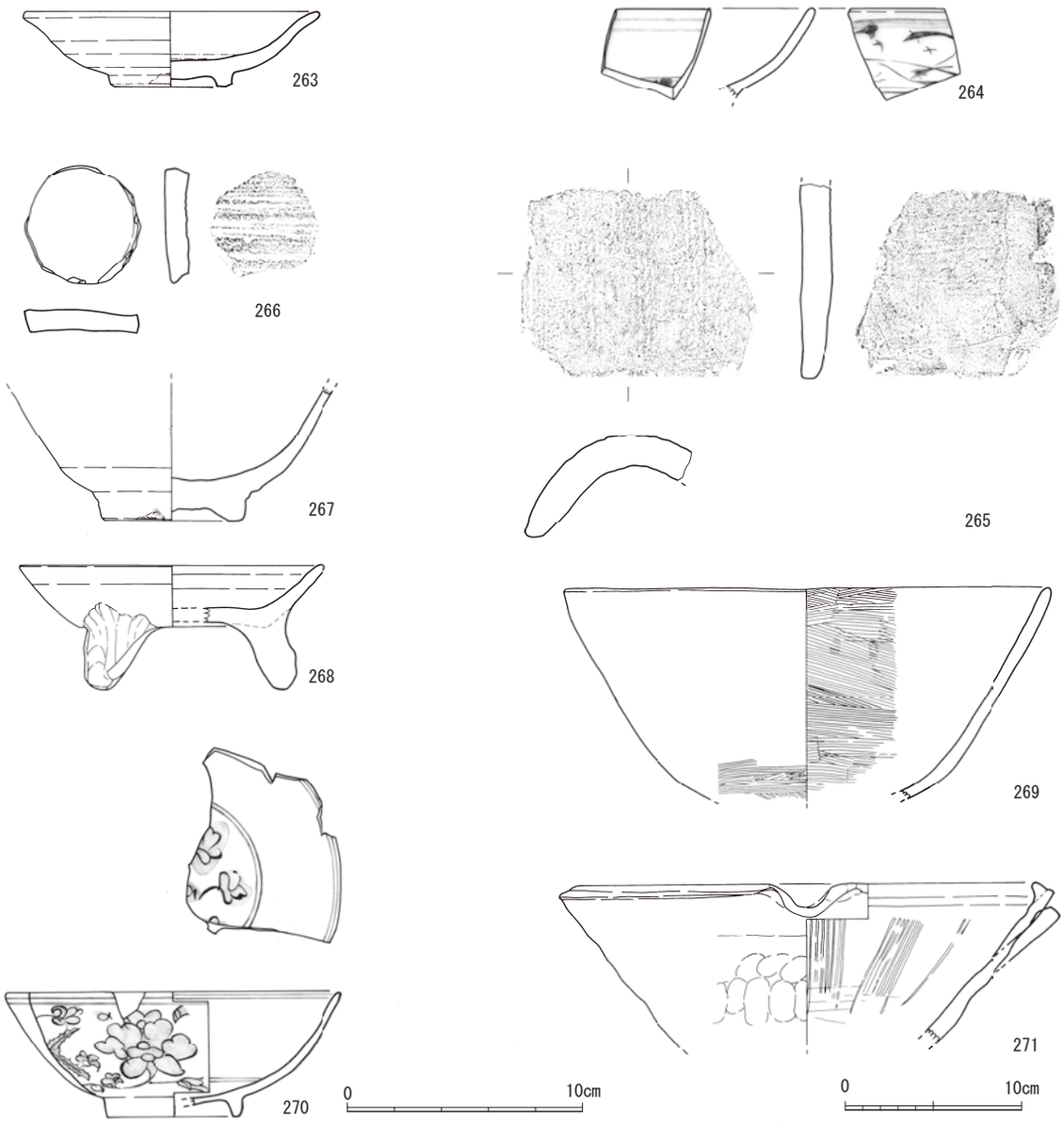
第44図　SK出土土器実測図１（249・253・256・261・262は1/4、他は1/3）

SK019（第35図、図版16-4）　E-3区。深さ28cmを測る。埋土は黄褐色砂ブロック含むオリーブ褐色2.5Y4/3粘質砂。

SK002（第35図、図版16-5）　E-3区。長さ135cm、幅93cm、深さ36cmを測る。

SK016（第35図）　F-3区。長さ178cm、幅113cm、深さ53cmを測る。攪乱。

出土遺物（第45図）　270（図版19-5）は景徳鎮窯青花碗。16世紀初頭。271は瓦質土器の擂鉢。口縁端内面に粘土帯を貼り付けて内側に屈曲させる。



263　SK046　　264・265　SK057　　266～269　SK020　　270・271　SK016

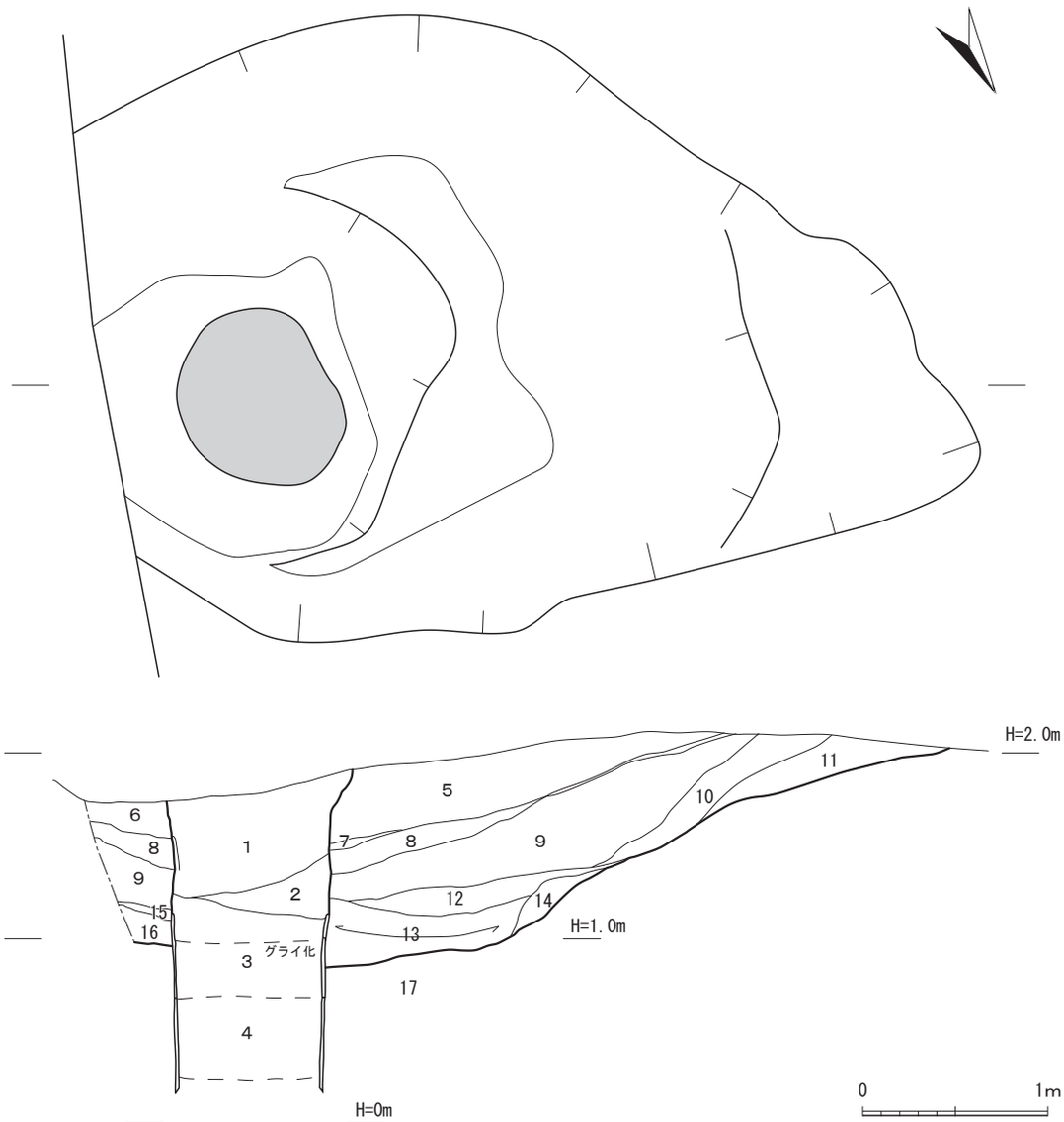
第45図　SK出土土器実測図２（265・269・271は1/4、他は1/3）

４．井戸

SE039（第46図、図版16-6、17-1）　D-4区。掘方は幅332㎝、井戸枠はスギ板目材の結桶で径80㎝を測る。標高1.15～0.15ｍに設置される。井筒内埋土は、上層がブロック土堆積、下層が互層堆積で、下層土を洗浄したところ、植物遺体は確認できなかったが、動物骨を少量採取した。

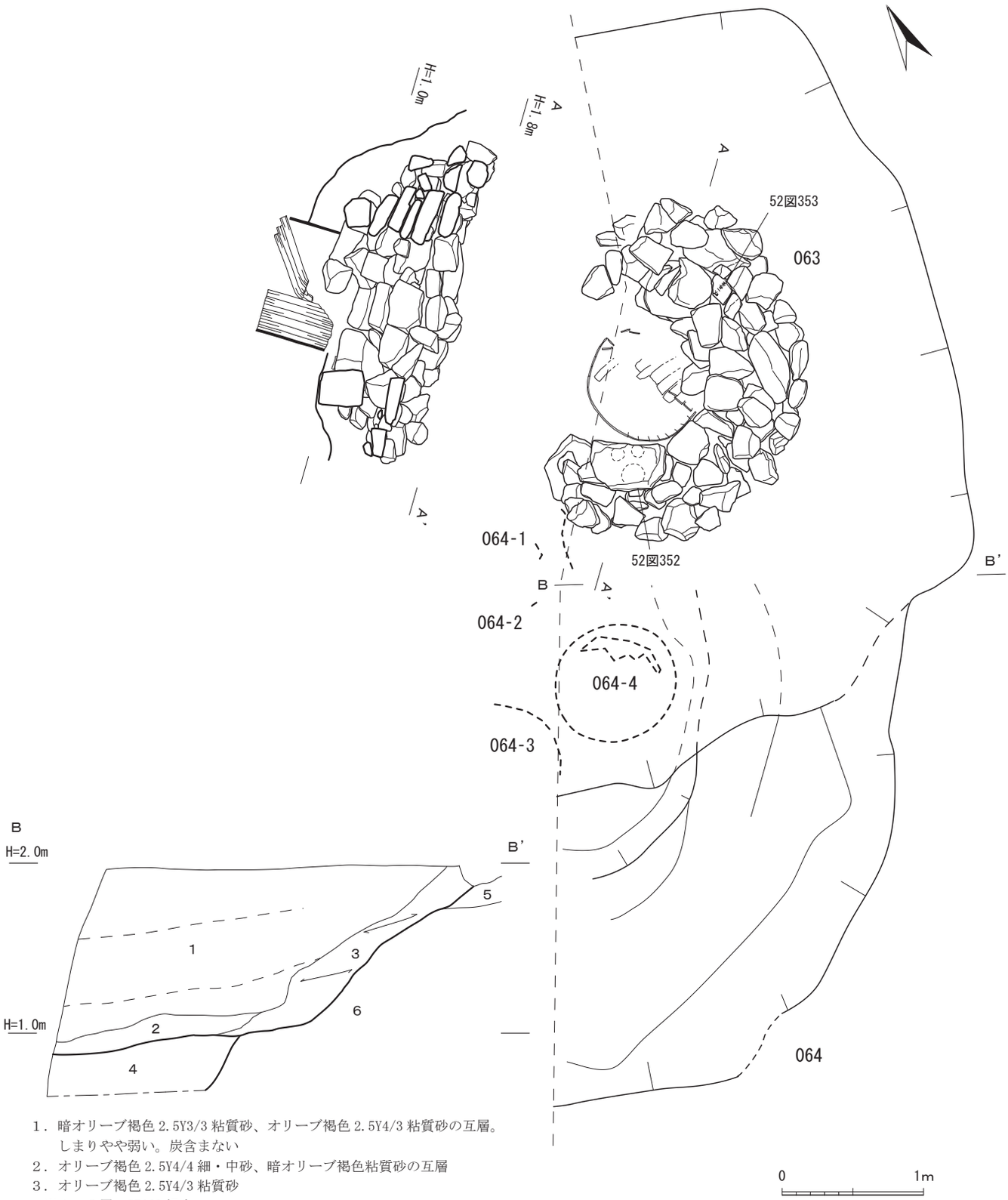
出土遺物（第48･51図）　272は井筒下層出土の龍泉窯系青磁坏Ⅲ-3類（F期：13世紀中頃～14世紀初頭）。273は掘方出土の広東産白磁碗。11世紀後半～12世紀前半。325～327は掘方出土の大小の滑石製石錘。他に井筒内からカエル類、アジ科、フグ科、貝類片が出土した。

SE063（第47図、図版16-7、17-2）　C-2区。掘方は隅丸方形をなし、幅497㎝、井戸枠はスギ板目材の結桶で径84㎝を測り、上部は石組で幅116㎝を測る。石組は形状の揃わない礫をやや粗く積んでおり、下層の４、５段、高さ80㎝ほどが残っている。



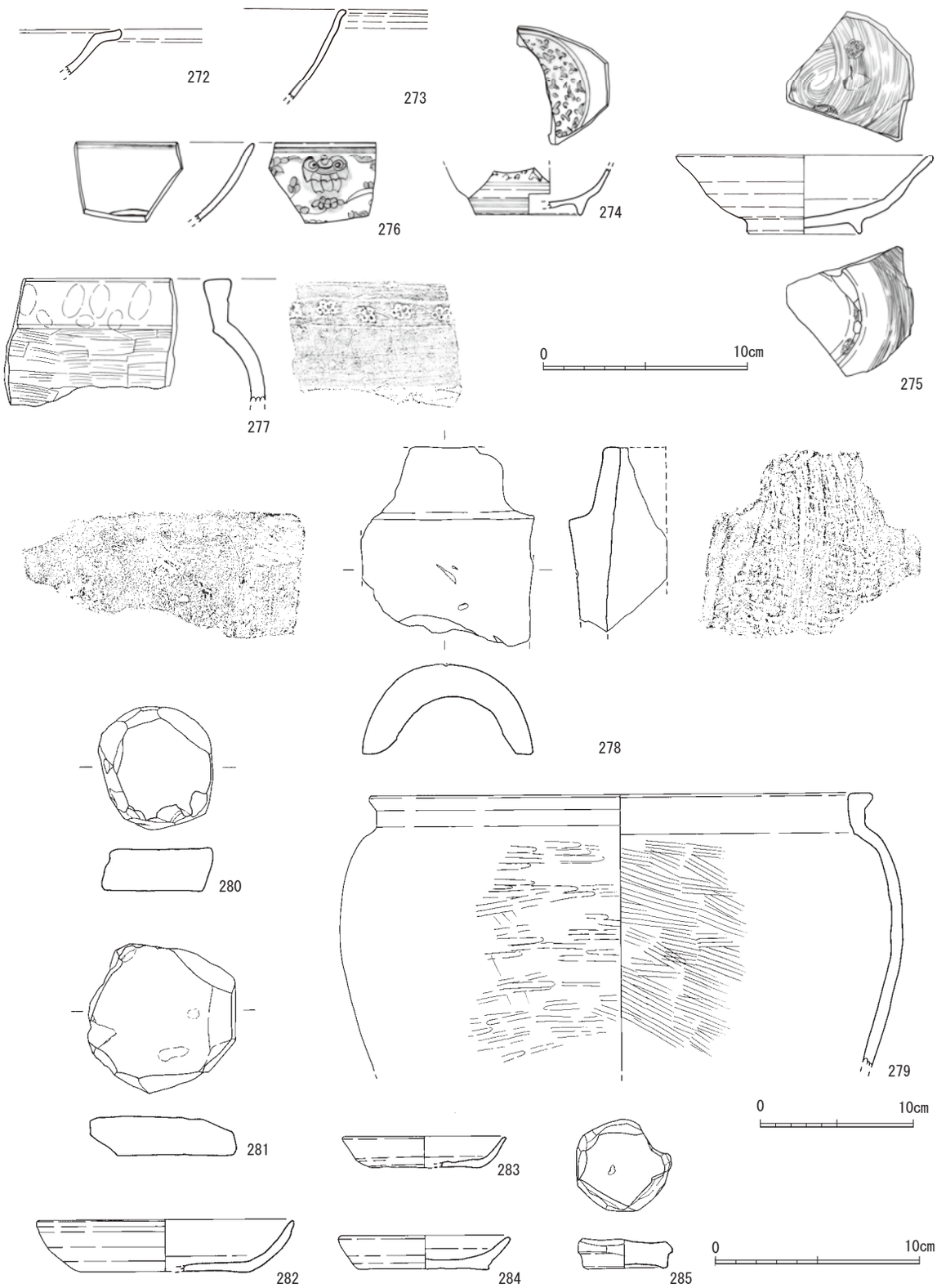
１．暗褐色 10YR3/3 粘質砂。径 1cm 炭やや多い。黄褐色、オリーブ褐色粘土ブロック含む。ブロック堆積
２．暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 粘質砂。黄褐色砂と互層状堆積（厚さ１～ 5cm）。径 1cm 炭多い。
３．黒褐色 2.5Y3/2 粘質砂。黄褐色砂と互層（厚さ１～ 5cm）。径 1cm 炭少ない。下層はグライ化する。
４．灰色粘質砂
５．暗褐色 10YR3/4 粘質砂。径２cm炭やや多い。黄褐色砂、オリーブ褐色粘土ブロック含む
６．褐色 10YR4/4 砂。径 1cm 炭少ない
７．黄褐色砂
８．オリーブ褐色粘質砂。炭・粘土含む
９．暗褐色 10YR3/4 粘質砂。径 1cm 炭含む。５層と同質でやや砂質強い
10．黄褐色細・中砂。暗褐色粘質砂ブロック含む
11．暗褐色 10YR3/4 粘質砂。砂質
12．暗褐色 10YR3/4 粘質砂。砂質。小ブロック状。
13．暗褐色 10YR3/3 粘質砂。黄褐色砂と互層（厚さ２cm）。木質含む。
14．細・中砂。暗褐色粘土含む
15．黄褐色砂
16．にぶい黄褐色 10YR4/3 粘質砂
17．褐色 10YR4/6 細～粗砂

第 46 図　SE039 実測図（1/40）



1．暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 粘質砂、オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質砂の互層。
　しまりやや弱い。炭含まない
2．オリーブ褐色 2.5Y4/4 細・中砂、暗オリーブ褐色粘質砂の互層
3．オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質砂
　※１～３層：SE063 掘方
4．オリーブ褐色 2.5Y4/4 細・中砂、暗オリーブ褐色粘質砂の混土ブロック
　※SE064 掘方
5．黄褐色 2.5Y5/4 細砂
6．細～中砂互層

第 47 図　SE063・064 実測図（1/40）



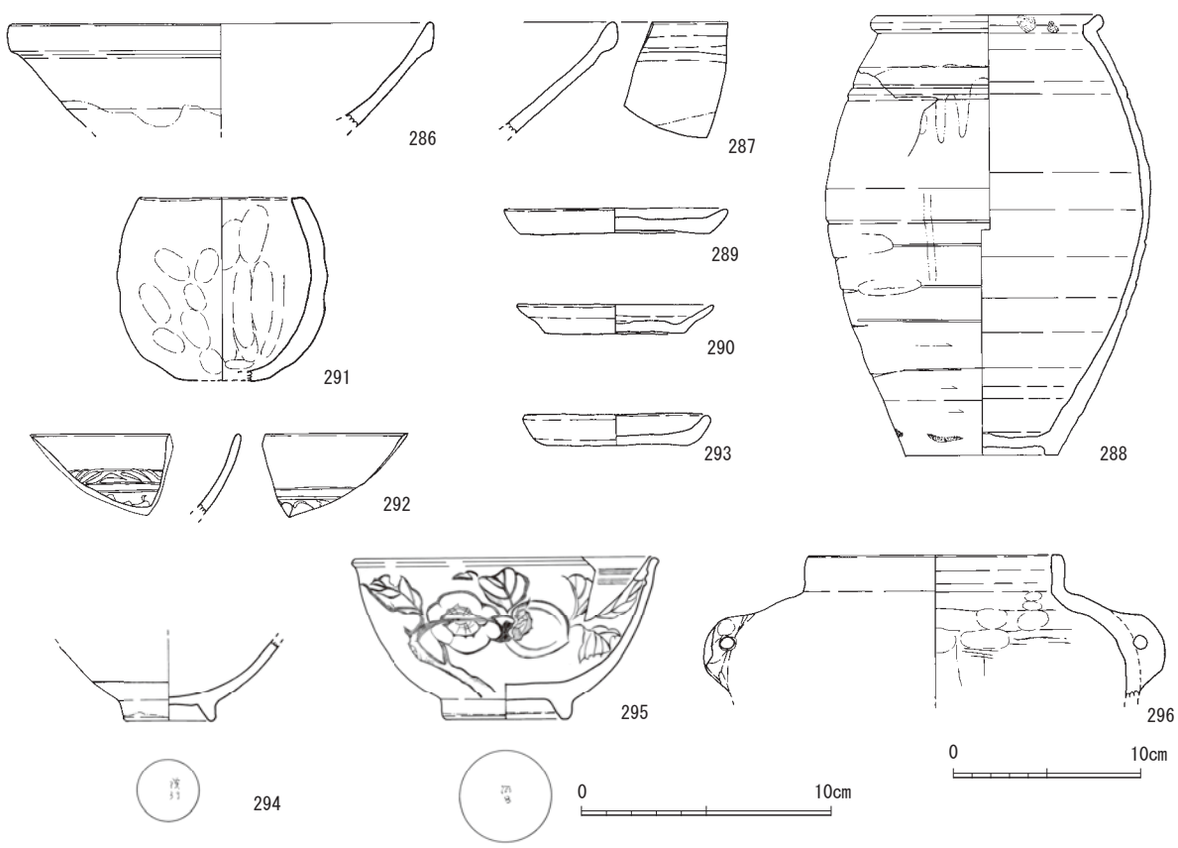
272・273　SE039　　274～281　SE063　　282　SE064-3　　283～285　SE064-4

第48図　SE出土土器実測図（277～279は1/4、他は1/3）

出土遺物（第48図）　274（図版19-6）は掘方出土の景徳鎮窯系青花連子碗。16世紀前半。275は石組出土の粉青沙器碗。高台に幅１cm程度の切り込みを入れる。16世紀。276（図版19-7）は井筒出土の景徳鎮窯系青花碗。16世紀後半。277・279は井筒出土の瓦質の風炉。278は井筒出土の丸瓦。280・281は井筒出土の平瓦片を利用した瓦玉。280は破面である側面を研磨している。336・337は石組出土の蛇紋岩質、滑石製の石錘。352・353・354は石組出土の板碑。352には阿弥陀三尊種子が彫られる。353には「白？ 一 金」の文字、354には不明漢字二字が彫られる。350・351は井筒出土の石塔片。350は五輪塔の火輪で、１辺24.5cm、高さ12.5cmを測る。全体に細かい鑿痕が残り、平坦に成形されている。肩部が被熱・暗色化する。351は宝篋印塔の笠石で、復元最大幅は22cm以上、推定高は約14cmを測る。他に掘方と石組から蛸壺破片が出土している。

SE064（第47図、図版16-8）　C-2区。SE063を掘り下げる過程で別の掘り込みとして認識され、帯水層に至る標高0.6m付近で、井戸枠を少なくとも４基確認した。064-1はスギ板目材の結桶で、SE063に切られており、詳細は不明である。064-2・3は、スギ板目材の結桶で、共同溝攪乱に切られており、詳細は不明である。064-4は、スギ板目材の結桶で、径82～88cmを測る。４基の井戸枠の中では最も残りがよい。

出土遺物（第48・51図）　343・344は064-1・2出土の土錘。282は064-3出土の糸切り底の土師器坏。13世紀後半。283～285、345～347は、064-4出土。283・284は糸切り底の土師器小皿。13世紀後半。285は天目碗高台部を使った瓦玉。345・346は土錘。347は砂岩の石球。



286・287　下層粗砂　　288・289　SX058　　290　SX062
291～294　SX053　　295・296　攪乱

第49図　SX・包含層・攪乱出土土器実測図（288・296は1/4、他は1/3）

5．包含層ほか出土遺物（第49図）

下層粗砂出土遺物　286はC-3区北攪乱下粗砂（H=0.65m）出土、287はD-1･2区南トレンチ下層出土で、いずれも白磁碗Ⅳ類（C期：11世紀後半～12世紀前半）。

SX058（C-3区。地山粗砂）出土遺物　288（図版19-8）は陶器無耳壺。口縁内面、底外面に目跡がつく。13世紀。289は糸切り底の土師器小皿。13世紀前半。

SX062（B-2区。落ち込み状の堆積層）出土遺物　290は糸切り底の土師器小皿。14世紀。

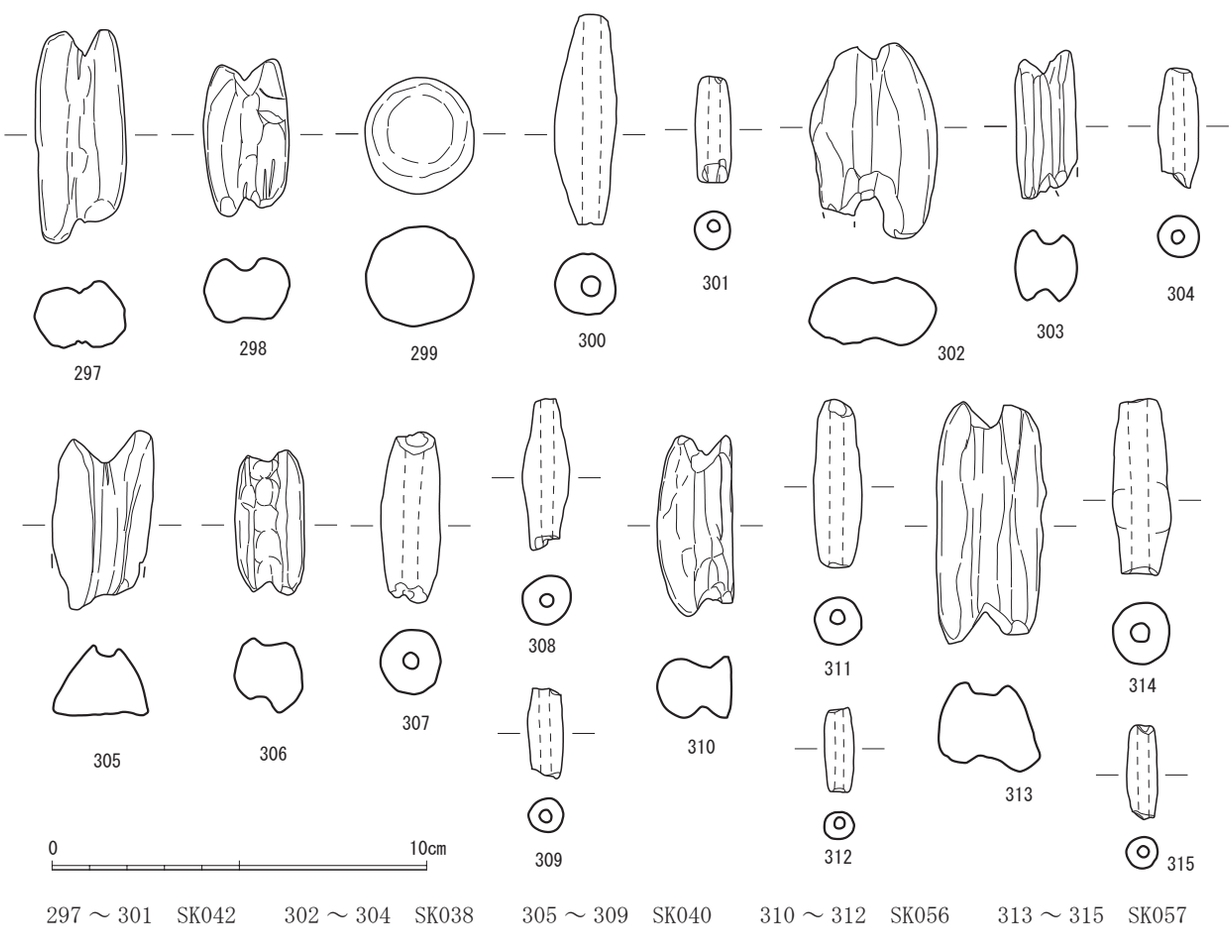
SX053（C・D-1･2区。拡張した調査区の堆積層）出土遺物　291はベルト３層出土の蛸壺。292は粉青沙器の碗。高麗象嵌青磁に似る。14世紀末～15世紀。293はベルト１・２層出土の糸切り底の土師器小皿。14世紀代。294は上面出土の肥前系染付小碗で、高台内に「波39」の銘がある。統制軍食器（昭和16～21年）。他に南トレンチから蛸壺破片が出土している。

拡張区攪乱出土遺物　295（図版19-9）は磁器碗で、高台内に「有８」の銘がある。統制軍食器（昭和16～21年）。296は土師質の茶釜で、内外面をナデで仕上げる。16～17世紀代か。

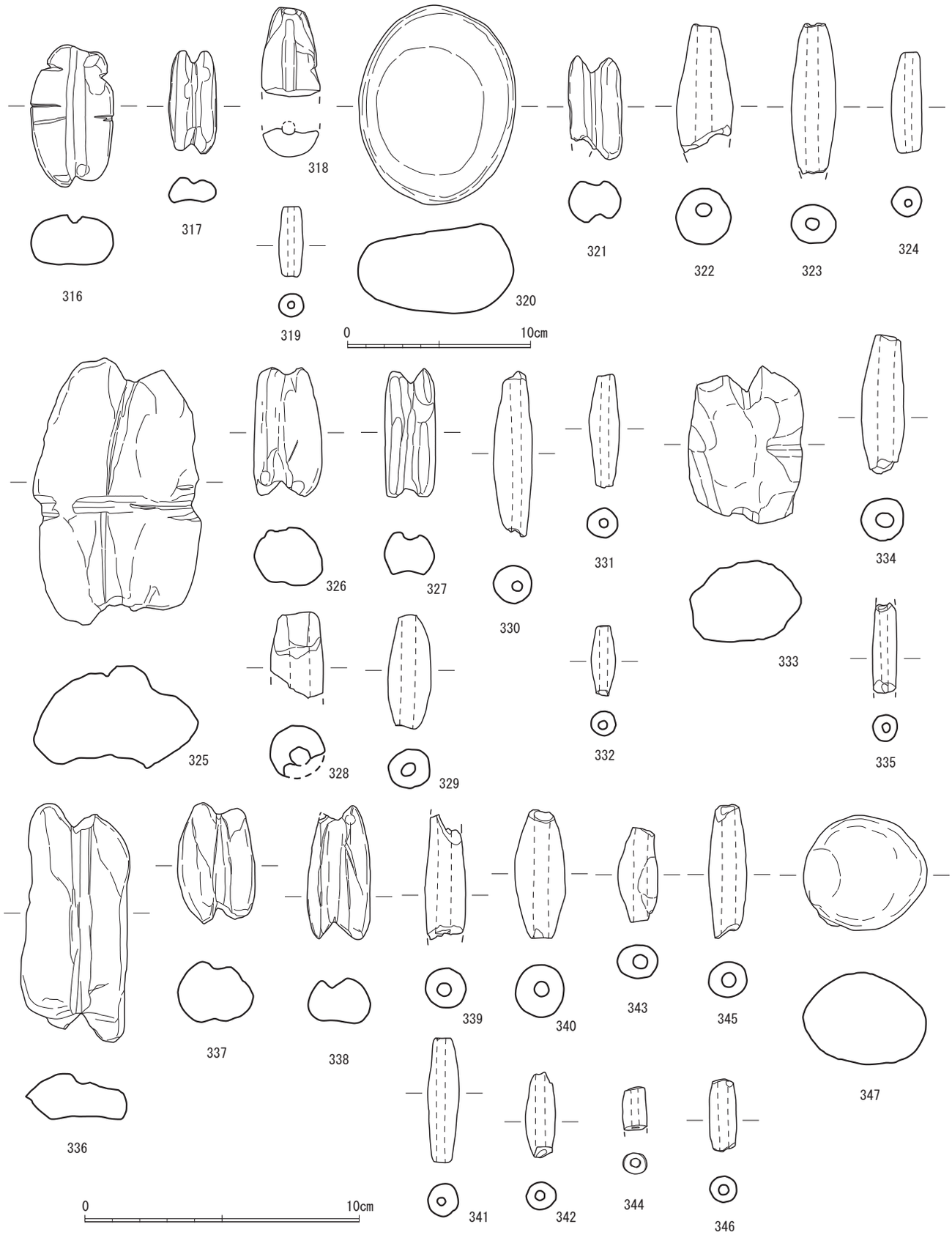
6．小結

方形土坑の軸や遺構の並びから、第Ⅱ区中世期の地割は、現況地割（調査区区割）からわずかに西に振れていたと想定され、第Ⅰ区中世期の地割とほぼ同じと考えられる。

調査区南壁土層（第36図）を見ると、地山の砂層が東から西へ傾斜しており、調査区の東側は砂丘列の高い方で、削平の影響が著しいが、西側拡張区（A～D-1･2区）は低い方で、削平の影響が比



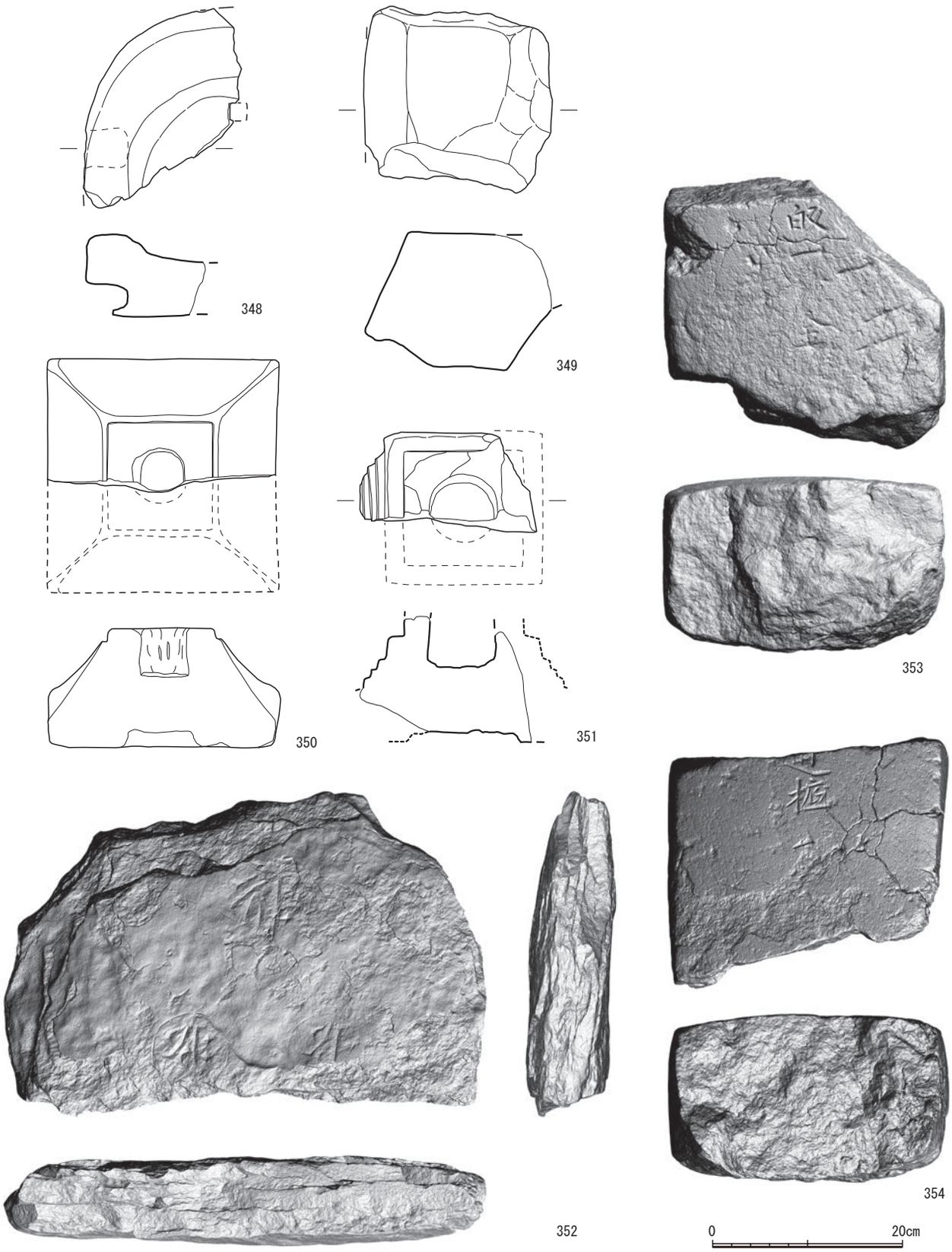
第50図　SK出土石製品・土錘実測図（1/2）



316 ～ 319　SK060　　320 ～ 324　SK020

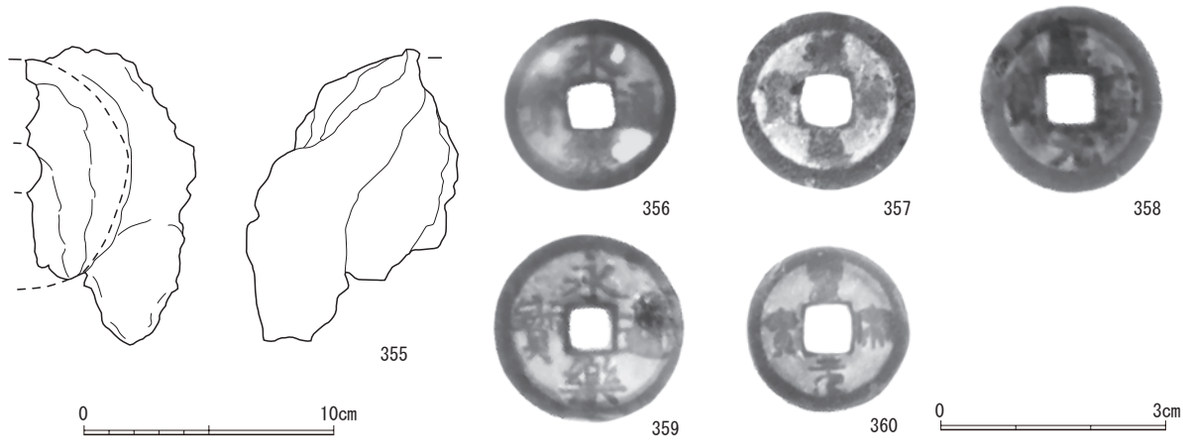
325 ～ 332　SE039 掘方　　333 ～ 335　SE039 井筒　　336 ～ 342　SE063　　343 ～ 347　SE064

第 51 図　SK・SE 出土石製品・土錘実測図（320 は 1/3、他は 1/2）



348・349　SK020　　350・351　SE063 井筒　　352 ～ 354　SE063 石組

第 52 図　SK020、SE063 出土石製品実測図および三次元モデル画像（1/6）



355　SK038　　356　SE039　　357　SE063　　358　SX053　　359　攪乱　　360　不明

第 53 図　第Ⅱ区出土金属関係遺物実測図およびＸ線画像（355 は 1/3、他は 1/1）

較的小さかったため、遺物包含層（SX053）が残っていたと考えられる。

地山の粗砂からは、11世紀後半～12世紀前半の遺物が確認され（第49図286・287）、第Ⅱ区の中で古い時期の遺構として、SX044（12世紀中頃）、SX058（13世紀前半）、SE064（13世紀後半）、SE039（13世紀中頃～14世紀初頭）などが構築される。14世紀後半から15世紀前半は空白期となり、各種土坑やSE063は15世紀後半～16世紀代に構築される。

第７表（１）　第Ⅱ区出土土器・土製品

挿図	番号	遺構・層位	種類	器種	残存	法量（cm）	胎土	焼成	色調	仮番
38	209	SX044　R1	土師器	小皿	9/10	口径 9.95、器高 1.45	微細な白色粒含む	良好	外面：にぶい黄橙、内面：橙～にぶい黄橙	2
38	210	SX044　R2	土師器	小皿	完形	口径 9.6、器高 1.7	微細な白・黒色粒含む	良好	橙	3
38	211	SX044　R3	土師器	小皿	完形	口径 9.7、器高 1.25	微細な白・黒色粒含む	良好	外面：にぶい黄橙～灰黄褐、内面：橙～にぶい黄橙	4
38	212	SX044　R4	土師器	小皿	完形	口径 9.4、器高 1.35	微細な赤・黒色粒含む	良好	橙～にぶい黄橙	5
38	213	SX044　R5	土師器	小皿	完形	口径 9.95、器高 1.55	微細な白・黒色粒、雲母含む	良好	橙～にぶい黄橙	6
38	214	SX044　R6	土師器	小皿	完形	口径 9.5、器高 1.5	微細な白色粒、雲母含む	良好	橙～にぶい黄橙	7
38	215	SX044　R7	土師器	小皿	完形	口径 10.05、器高 1.8	微細な白色粒含む	良好	橙～にぶい黄橙	8
38	216	SX044　R8	土師器	小皿	9/10	口径 9.5、器高 1.5	微細な白色粒含む	良好	橙～にぶい黄橙	9
38	217	SX044　R9	土師器	小皿	完形	口径 10.3、器高 1.6	微細な黒色粒含む	良好	外面：橙、内面：橙～にぶい黄橙	10
38	218	SX044　R10	土師器	小皿	完形	口径 9.55、器高 1.4	微細な白色粒含む	良好	橙～にぶい黄橙	11
38	219	SX044　R11	土師器	小皿	完形	口径 9.4、器高 1.2	微細な赤色粒含む	良好	橙	12
38	220	SX044　R12	土師器	小皿	完形	口径 9.6、器高 1.55	径２㎜以下赤色粒含む	良好	外面：橙、内面：橙～にぶい黄橙	13
38	221	SX044　R13	土師器	小皿	完形	口径 9.95、器高 1.55	微細な白色粒含む	良好	橙	14
38	222	SX044　R14	土師器	小皿	完形	口径 9.95、器高 1.4	微細な白色粒含む	良好	橙～にぶい黄橙	15
38	223	SX044　R15	土師器	小皿	完形	口径 9.8、器高 1.35	微細な白・赤色粒含む	良好	外面：橙～にぶい黄橙、内面：橙	16
38	224	SX044　R16	土師器	小皿	完形	口径 9.4、器高 1.3	微細な白色粒含む	良好	外面：橙～にぶい黄橙、内面：橙	17
38	225	SX044　R17	土師器	小皿	完形	口径 9.9、器高 1.3	微細な黒色粒含む	良好	外面：橙～にぶい黄橙、内面：橙	18
38	226	SX044　R18	土師器	小皿	完形	口径 10、器高 1.55	微細な白・黒色粒含む	良好	橙	19
38	227	SX044　R19	土師器	小皿	9/10	口径 9.5、器高 1.55	微細な白色粒含む	良好	橙	20
38	228	SX044　R20	土師器	小皿	9/10	口径 9.4、器高 1.45	微細な黒色粒含む	良好	橙	21
38	229	SX044　R26	土師器	小皿	9/10	口径 9.6、器高 1.7	微細な赤・黒色粒含む	良好	橙	27
38	230	SX044　R27	土師器	小皿	9/10	口径 9.9、器高 1.7	微細な白・赤色粒含む	良好	橙	28
38	231	SX044　下層	土師器	小皿	9/10	口径 9.6、器高 0.95	径３㎜以下白色粒含む	良好	外面：にぶい黄橙、内面：浅黄橙～にぶい黄橙	29
38	232	SX044　R21	土師器	坏	完形	口径 16.75、器高 3.65	微細な赤色粒含む	良好	橙	22
38	233	SX044　R22	土師器	坏	完形	口径 16.8、器高 3.75	微細な黒色粒含む	良好	外面：橙、内面：橙～浅黄橙	23
38	234	SX044　R23	土師器	坏	完形	口径 16.75、器高 3.45	微細な白・赤色粒含む	良好	外面：橙～にぶい黄橙、内面：橙	24
38	235	SX044　R24	土師器	坏	完形	口径 16.8、器高 3.2	径２㎜以下白色粒、微細な黒・赤色粒含む	良好	外面：橙～にぶい黄橙、内面：にぶい黄橙	25
38	236	SX044　R25	土師器	坏	完形	口径 15、器高 2.45	径２㎜以下白・赤色粒含む	良好	外面：にぶい黄橙、内面：橙～にぶい黄橙	26
39	237	SP077	土師器	小皿	7/10	口径 8.4、器高 1.3	径１㎜以下石英・長石含む	良好	にぶい黄橙	1
39	238	SP075	土師器	小皿	完形	口径 8.3、器高 1.6	径１㎜以下石英・長石、赤色粒やや多い	良好	外面：にぶい橙、内面：にぶい黄橙	39
39	239	SP078	青磁	皿	1/8	復元口径 13	微細な白色粒含む	良好	胎土：明灰白、釉：明オリーブ灰、光沢	40
39	240	SP012	白磁	碗	破片	－	微細な白色粒含む	良好	胎土：灰黄、釉：灰オリーブ、透明、光沢	37

第７表（２） 第Ⅱ区出土土器・土製品

挿図	番号	遺構・層位	種類	器種	残存	法量（cm）	胎土	焼成	色調	仮番
39	241	SP012	土師器	小皿	3/5	口径 6.8、器高 1.5	径１㎜以下石英・長石含む	良好	橙	36
39	242	SP055	青磁	碗(瓦玉)	底部	高台径 4.9、径 5.5	微細な白色粒含む	良好	胎土：明灰白、釉：オリーブ灰、光沢	38
44	243	SK042	青磁	碗	1/5	復元口径 14.8	微細な砂粒含む	良好	胎土：灰、釉：緑灰、不透明	62
44	244	SK042　R1	土師器	小皿	完形	口径 7.8、器高 1.5	径２㎜以下白色粒少ない。精良	良好	橙	59
44	245	SK042　R2	土師器	小皿	4/5	口径 7.2、器高 1.6	径２㎜以下白色粒少ない。精良	良好	外面：明赤褐～にぶい赤褐、内面：橙～にぶい赤褐	60
44	246	SK042	白磁	皿	1/3	高台径 4.9	径２㎜以下白色粒含む	良好	胎土：灰白、釉：灰白、透明	61
44	247	SK030	土製品	瓦玉	完形	径 2.5、厚さ 1.7	径１㎜以下白色粒含む	良好	暗灰	43
44	248	SK033	青花	鉢	破片	－	精良	良好	胎土：灰白、釉：灰白、半透明	44
44	249	SK034	瓦質	火鉢	底部	復元底径 24.6	径１㎜以下白色粒含む	良好	外面：暗灰、内面：黄灰	45
44	250	SK038　R1	土師器	小皿	9/10	口径 6.8、器高 1.5	径１㎜以下白色粒含む	良好	にぶい橙～にぶい褐	48
44	251	SK038　R2	土師器	小皿	7/10	口径 7、器高 1.5	径１㎜以下白色粒含む	良好	にぶい橙	49
44	252	SK038　R3	土師器	皿	3/5	復元口径 10.8、器高 2.8	径２㎜以下石英・長石、赤色粒含む	良好	にぶい橙	50
44	253	SK038	土師質	釜	1/5	復元鍔部径 27	径１㎜以下白色粒含む	良好	外面：暗褐～黒、内面：褐灰	52
44	254	SK038	弥生土器	器台	1/4	胴部最小径 7	径３㎜以下石英・長石多い	良好	外面：にぶい黄橙、内面：橙	51
44	255	SK036	土師器	皿	1/2	復元口径 12.1、器高 2.5	径２㎜以下石英・長石、赤色粒含む	良好	橙	47
44	256	SK036　R2	土師質	鍋	1/4	復元口径 26	径３㎜以下石英・長石含む	良好	灰黄～黒（スス）	46
44	257	SK040　攪乱混	青花	皿	1/4	復元高台径 7.3	精良	良好	胎土：純白、釉：透明	56
44	258	SK040　攪乱混	青磁	碗	破片	－	微細な砂粒含む	良好	胎土：灰、釉：オリーブ灰、透明	54
44	259	SK040　攪乱混	陶器	皿	1/2	復元口径 9.8、器高 3.25	径１㎜以下白色粒含む	良好	胎土：灰～褐、釉：灰、不透明	56
44	260	SK040	土製品	瓦玉	完形	径 2.4、厚さ 2.05	径１㎜以下白・赤色粒含む	良好	にぶい黄橙～にぶい黄褐	53
44	261	SK040　攪乱混	瓦質	鍋	1/10	復元口径 25	径１㎜以下白色粒含む	良好	灰	57
44	262	SK040　攪乱混	土師質	茶釜	1/6	胴部最大径 23.05	径３㎜以下石英・長石やや多い。角閃石含む。	良好	外面：橙、内面：にぶい赤褐～黒褐	55
45	263	SK046	白磁	皿	1/3	復元口径 12.5、器高 3.1	径１㎜以下砂粒含む	良好	胎土：淡黄灰、釉：乳白、不透明	63
45	264	SK057　下層	青花	小碗	破片	－	微細な砂粒含む	良好	胎土：純白、釉：透明	69
45	265	SK057　下層	瓦	丸	1/3	幅 9.4、厚さ 1.75	径３㎜以下石英・長石多い	良好	外面：にぶい橙～にぶい褐、内面：橙～褐灰	68
45	266	SK020	土製品	円盤形	完形	径 5.9、厚さ 1	径２㎜以下石英・長石含む	良好	外面：灰白、内面：灰	33
45	267	SK020　R3	陶器	碗	1/4	高台径 6	微細な白・黒色粒含む	良好	胎土：灰白、釉：オリーブがかった灰白、光沢あり	31
45	268	SK020	土師器	脚付坏	1/4	復元口径 8、器高 5.2	微細な白・赤色粒含む	良好	橙	32
45	269	SK020　R2	土師質	鍋	2/3	口径 21.6	径３㎜以下石英・長石含む	良好	外面：灰黄褐～黒褐（スス・コゲ）、内面：橙	30
45	270	SK016	青花	碗	1/4	復元口径 14.2、器高 5.3	微細な砂粒含む	良好	胎土：白、釉：透明、ガラス質	42
45	271	SK016 ＋ SK002	瓦質	擂鉢	1/6	復元口径 28	径３㎜以下石英・長石含む	良好	外面：灰白～褐灰、内面：灰白	41
48	272	SE039 井筒下層	青磁	坏	破片	－	微細な砂粒含む	良好	胎土：灰、釉：オリーブ、半透明	75
48	273	SE039 掘方南半	白磁	碗	破片	－	精良	良好	胎土：淡灰、釉：淡黄灰、半透明	76
48	274	SE063　掘方	青花	碗	底部	高台径 5.2	微細な黒色粒含む	良好	胎土：純白、釉：透明	82
48	275	SE063　石組	陶器	碗	1/10	復元口径 12.5、復元器高 3.9	微細な白色粒含む	良好	胎土：黒褐、釉：透明	80
48	276	SE063　井筒	青花	碗	破片	－	微細な黒色粒含む	良好	胎土：純白、釉：透明	81
48	277	SE063　井筒	瓦質	風炉	破片	－	径３㎜以下石英・長石、赤色粒含む	良好	外面：淡赤橙～浅黄橙～にぶい黄橙、内面：灰白～褐灰	84
48	278	SE063　井筒	瓦	丸	1/4	幅 11.3、高さ 6.4	径３㎜以下石英・長石、赤色粒含む	良好	灰黄～灰	79
48	279	SE063　井筒＋井戸枠下層＋石組	瓦質	風炉	1/10	復元口径 32.8	径４㎜以下石英・長石含む	良好	外面：灰～黄灰、内面：灰	83
48	280	SE063　井筒	瓦	瓦玉	完形	径 5.95、厚さ 2.1	径１㎜以下白色粒含む	良好	灰	78
48	281	SE063　井筒	瓦	瓦玉	完形	径 7.3、厚さ 1.9	径１㎜以下砂粒含む	良好	灰～褐灰	77
48	282	SE064-3	土師器	坏	1/4	復元口径 12.6、器高 2.5	径１㎜以下赤色粒、石英・長石含む	良好	橙	85
48	283	SE064-4	土師器	小皿	7/10	口径 8、器高 1.55	径１㎜以下石英・長石含む	良好	にぶい黄橙	87
48	284	SE064-4	土師器	小皿	9/10	口径 8.45、器高 1.65	径１㎜以下石英・長石、赤色粒含む	良好	にぶい橙	86
48	285	SE064-4	天目	瓦玉	完形	径 4.6、厚さ 1.5	径１㎜以下白色粒含む	良好	胎土：褐灰、釉：褐～黒褐	88
49	286	3区北攪乱下粗砂	白磁	碗	1/7	復元口径 17	径３㎜以下白色粒含む	良好	胎土：灰白、釉：灰、透明	72
49	287	南トレンチ　下層	白磁	碗	破片	－	微細な砂粒含む	良好	胎土：淡灰、釉：灰黄、不透明	74
49	288	SX058	陶器	壺	1/2	復元口径 12.5、復元器高 23.5	微細な白色粒含む	良好	胎土：橙、釉：にぶい黄橙、褐	35
49	289	SX058	土師器	小皿	4/5	口径 8.9、器高 1	径２㎜以下石英・長石含む	良好	にぶい橙	34
49	290	SX062	土師器	小皿	2/3	復元口径 7.9、器高 1.15	径１㎜以下砂粒含む	良好	外面：浅黄～にぶい黄橙、内面：にぶい黄橙～灰黄	70
49	291	SX053 ベルト３層	土師器	蛸壺	1/3	復元口径 6.6、器高 7.3	径３㎜以下石英・長石含む	良好	外面：灰黄褐～にぶい黄褐、内面：にぶい黄橙	66
49	292	SX053　南トレ	青磁	碗	破片	－	精良	良好	胎土：灰、釉：透明	67
49	293	SX053 ベルト１・２層	土師器	小皿	2/3	復元口径 7.5、器高 1.2	径２㎜以下石英・長石含む	良好	橙～にぶい黄橙	65
49	294	SX053　上面	染付	小碗	底部	高台径 3.7	精良	良好	胎土：純白、釉：透明	64
49	295	拡張区攪乱	磁器	碗	9/10	口径 12.3、器高 6.5	微細な砂粒含む	良好	胎土：純白、釉：空、透明	71
49	296	拡張西区検出攪乱	土師質	茶釜	1/5	復元口径 13.6	径２㎜以下石英・長石やや多い	良好	外面：橙～灰黄褐～黒褐、内面：にぶい褐～にぶい黄橙	73
50	300	SK042	土製品	土錘	完形	長さ 5.6、径 1.6、重量 12.7g	微細な白・赤色粒含む	良好	褐灰	P60
50	301	SK042	土製品	土錘	完形	長さ 2.8、径 1、重量 2.8g	微細な黒・赤色砂含む	良好	浅黄橙～にぶい橙	P61
50	304	SK038	土製品	土錘	完形	長さ 3.2、径 1.1、重量 2.9g	径１㎜以下白・黒色粒含む	良好	にぶい橙～灰褐	P56

第７表（３） 第Ⅱ区出土土器・土製品

挿図	番号	遺構・層位	種類	器種	残存	法量（cm）	胎土	焼成	色調	仮番
50	307	SK040	土製品	土錘	完形	長さ4.5、径1.7、重量12.3g	径３㎜以下石英、径１㎜角閃石含む	良好	にぶい黄橙～灰黄褐	P57
50	308	SK040	土製品	土錘	完形	長さ4、径1.3、重量4.5g	径１㎜白色砂含む	良好	橙	P58
50	309	SK040 攪乱混	土製品	土錘	1/2	径0.95	微細な白・赤色粒含む	良好	浅黄橙	P59
50	311	SK056	土製品	土錘	完形	長さ4.5、径1.3、重量6.9g	微細な白・黒色砂含む	良好	灰黄褐	P62
50	312	SK056	土製品	土錘	完形	長さ2.3、径0.8、重量1.2g	微細な白色粒含む	良好	にぶい赤褐	P63
50	314	SK057 下層	土製品	土錘	完形	長さ4.7、径1.6、重量10.1g	径１㎜以下石英・長石含む	良好	明赤褐	P64
50	315	SK057 下層	土製品	土錘	完形	長さ2.5、径0.8、重量1.6g	微細な白色粒含む	良好	橙～明赤褐	P65
51	318	SK060 西	土製品	土錘	1/2	径２	径１㎜以下白・赤色粒含む	良好	にぶい橙	P58
51	319	SK060 西	土製品	土錘	完形	長さ2.5、径0.9、重量1.8g	微細な白・黒色粒含む	良好	にぶい赤橙	P59
51	322	SK020	土製品	土錘	2/3	径２	径１㎜以下白・赤色粒含む	良好	浅黄	P53
51	323	SK020	土製品	土錘	完形	長さ5.5、径1.6、重量12.3g	径１㎜以下黒・白色粒含む	良好	にぶい橙～橙	P54
51	324	SK020	土製品	土錘	完形	長さ3.7、径1.1、重量4.5g	径１㎜以下白・黒色粒含む	良好	にぶい黄橙	P55
51	328	SE039 掘方北半	土製品	土錘	1/2	径２	微細な白色粒含む	良好	橙	P38
51	329	SE039 掘方	土製品	土錘	完形	長さ4.7、径1.6、重量8.2g	微細な白色粒含む	良好	にぶい褐	P37
51	330	SE039 掘方北半	土製品	土錘	完形	長さ6、径1.4、重量11.4g	径２㎜以下白色粒、微細な黒色粒含む	良好	にぶい橙	P39
51	331	SE039 掘方北半	土製品	土錘	完形	長さ4.1、径1.1、重量4.4g	微細な砂粒含む	良好	にぶい橙	P40
51	332	SE039 掘方北半	土製品	土錘	完形	長さ2.55、径0.9、重量1.7g	微細な砂粒含む	良好	にぶい黄橙	P41
51	334	SE039 井筒下層	土製品	土錘	完形	長さ5.05、径1.6、重量9.8g	径１㎜以下白色粒含む	良好	浅黄橙～黒褐	P42
51	335	SE039 井筒	土製品	土錘	一部欠	径0.95	微細な砂粒含む	良好	明赤褐	P43
51	339	SE063 井戸枠下層	土製品	土錘	一部欠	径1.5	径１㎜以下白・黒色粒含む	良好	赤橙	P50
51	340	SE063 石組	土製品	土錘	完形	長さ4.65、径1.9、重量12.9g	径１㎜以下石英・長石含む	良好	橙	P48
51	341	SE063 石組	土製品	土錘	完形	長さ4.5、径1.2、重量4.2g	微細な白・黒色粒含む	良好	にぶい橙	P49
51	342	SE063 掘方ベルト２層	土製品	土錘	完形	長さ3.1、径1.1、重量2.9g	微細な白・黒色粒含む	良好	にぶい赤褐	P51
51	343	SE064-1・2	土製品	土錘	完形	長さ3.4、径1.5、重量5.1g	径１㎜白色砂含む	良好	にぶい橙～にぶい褐	P44
51	344	SE064-1・2	土製品	土錘	1/2	径0.9	径１㎜以下白・黒色粒含む	良好	にぶい橙。風化強い	P45
51	345	SE064-4	土製品	土錘	完形	長さ4.8、径1.4、重量7.3g	径２㎜以下石英含む	良好	淡橙～橙	P46
51	346	SE064-4	土製品	土錘	完形	長さ2.6、径1、重量2.7g	微細な黒色粒含む	良好	にぶい橙～橙	P47

第８表（１） 第Ⅱ区出土石器・石製品

※石材の「磁性」はネオジム磁石による。　※法量の［］内は残存法量

番号	遺構・層位	石材	磁性	器種	残存	法量（cm、g）	備考
5136	SP073	滑石	－	石錘	破片	長さ［4.2］	
5137	SK033	滑石	－	石鍋	破片	長さ［10.14］	
S49	SK042	滑石	微弱	石錘	完形	長さ5.71、重量33.6	50図297
S50	SK042	滑石	微弱	石錘	完形	長さ4.13、重量22.8	50図298
S51	SK042	砂岩	－	石球	完形	径2.62-3.08、重量29.4	50図299
5138	SK042	滑石	－	石錘	破片	長さ［5.06］	
5139	SK042	滑石	微弱	石材	破片	長さ［4.97］	
5140	SK042	滑石	－	石材	破片	長さ［4.46］	
5141	SK042	滑石	微弱	石材	完形	長さ4.4	
5142	SK042	滑石	－	石材	完形	長さ3.3	
5143	SK042	片岩	微弱	円盤形	一部欠	長さ3.57	
S45	SK038	滑石	－	石錘	完形	長さ5.18、重量41.3	50図302
S46	SK038	蛇紋岩質	中	石錘	一部欠	長さ3.95、17.1	50図303
5144	SK038	緑色片岩	－	石材	一部欠	長さ［7.21］	
S47	SK040	蛇紋岩質	中	石錘	一部欠	長さ［4.95］、重量［25.5］	50図305
5145	SK040	滑石	微弱	石錘	完形	長さ3.9	
S48	SK040 攪乱混	滑石	弱	石錘	完形	長さ3.88、重量19	50図306
5146	SK040 攪乱混	滑石	－	石錘	一部欠	長さ5.78	
5147	SK040 攪乱混	滑石	弱	石錘	一部欠	長さ5.41	
5148	SK040 攪乱混	滑石	微弱	石錘	一部欠	長さ3.54	
5149	SK040 攪乱混	滑石	弱	石錘	完形	長さ3.84	
5150	SK040 攪乱混	滑石	微弱	石錘	完形	長さ3.77	
5151	SK022	滑石	－	石錘	完形	長さ6.61	
5152	SK022	滑石	微弱	石錘	完形	長さ5.65	
5153	SK061	滑石	弱	石錘	完形	長さ3.65	
S52	SK056	滑石	弱	石錘	完形	長さ4.78、重量26	50図310
5154	SK056	滑石	－	石錘	破片	長さ［3.3］	
S53	SK057 上層	滑石	－	石錘	完形	長さ6.5、重量60.8	50図313
5155	SK057 上層	滑石	－	石錘	一部欠	長さ4.28	
5156	SK057 上層	滑石	弱	石錘	一部欠	長さ4.3	
5157	SK057 上層	滑石	弱	石錘	一部欠	長さ6.23	
5158	SK057 上層	滑石	微弱	石錘	一部欠	長さ5.14	
5159	SK057 上層	滑石	－	石錘	一部欠	長さ4.47	
5160	SK057 上層	滑石	微弱	石材	完形	長さ8.46	
5161	SK057 上層	滑石	－	石鍋	破片	長さ［3.14］	
5162	SK057 上層	滑石	微弱	石材	破片	長さ［2.8］	
5163	SK057 上層	滑石	微弱	石材	破片	長さ［2.78］	
5164	SK057 上層	滑石	－	石材	破片	長さ2.65	
5165	SK057 上層	砂岩	－	砥石	破片	長さ［4.45］	
5166	SK057 上層	安山岩	中	砥石か	破片	長さ［3.53］	
S43	SK020R4	花崗岩		磨石	完形	長さ10.85、重量659.7	51図320
S44	SK020	滑石	微弱	石錘	一部欠	長さ3.77、重量［14.6］	51図321
S65	SK020R1	安山岩	中	石臼	破片	厚さ8.7、重量350	52図348
S66	SK020R7	安山岩	中	石塔か	破片	厚さ14.6、重量760	52図349
5167	SK020	滑石	弱	石錘	破片	長さ［2.88］	
5168	SK020	滑石	弱	石材	完形	長さ6.11	
5169	SK004	滑石	－	石錘	完形	長さ6.15	
5170	SK003	砂岩	－	砥石	完形	長さ6.3	
5171	SK018 攪乱	砂岩	微弱	砥石	破片	長さ［4.35］	
5172	SK060	滑石	－	円盤形か	完形	径4.06-4.46	
S54	SK060 西	滑石	－	石錘	完形	長さ5.24、重量40.8	51図316
S55	SK060 西	滑石	微弱	石錘	完形	長さ3.71、重量9	51図317
5173	SK060 西	滑石	－	石錘	完形	長さ5.23	
5174	SK060 西	滑石	－	石錘	完形	長さ4.38	
5175	SK060 西	滑石	－	石錘	完形	長さ4.53	
5176	SK060 西	滑石	弱	石材	完形	長さ5.42	
5177	SK060 西	滑石	微弱	石材	完形	長さ5.42	
S35	SE039 掘方・北半	滑石	－	石錘	完形	長さ9.73、重量292	51図325
S36	SE039 掘方・北半	滑石	弱	石錘	完形	長さ4.72、重量35.1	51図326

第８表（２） 第Ⅱ区出土石器・石製品

※石材の「磁性」はネオジム磁石による。 ※法量の [] 内は残存法量

番号	遺構・層位	石材	磁性	器種	残存	法量（cm、g）	備考
5178	SE039 掘方・北半	滑石	弱	石錘	一部欠	長さ 4.96	
5179	SE039 掘方・北半	滑石	-	石錘	一部欠	長さ [5.11]	
S38	SE039 掘方・南半	滑石	弱	石錘	完形	長さ4.76、重量19.4	51 図 327
5180	SE039 掘方・南半	滑石	弱	石錘	一部欠	長さ 4.85	
5181	SE039 掘方・南半	滑石	弱	石錘	完形	長さ 4.78	
5182	SE039 掘方・南半	滑石	弱	石材	完形	長さ 4.93	
S37	SE039 井筒下層	滑石	-	石錘	完形	長さ5.69、重量105.2	51 図 333
S40	SE063 石組	蛇紋岩質	中	石錘	完形	長さ8.62、重量80.8	51 図 336
S41	SE063 石組	滑石	微弱	石錘	完形	長さ4.46、重量41.1	51 図 337
5183	SE063 石組	滑石	微弱	石錘	一部欠	長さ 5.54	
5184	SE063　石組	滑石	微弱	石錘（石鍋転用）	完形	長さ 4.74	
S62	SE063 石組 R1	砂岩		板碑	一部	長さ [35.5]、重量 [19600]	52 図 352
S63	SE063 石組 R2	砂岩		板碑	一部	長さ [17.4]、重量 [4750]	52 図 353
S64	SE063 石組裏込	砂岩		板碑	一部	長さ [15.8]、重量 [4700]	52 図 354
5185	SE063 井戸枠下層	滑石	微弱	石錘	完形	長さ 4.73	
S61	SE063 井筒	砂岩		火輪	破片	1 辺 24.5、重量 [535]	52 図 350
S60	SE063 井筒	砂岩		宝篋印塔	破片	長さ [18.6]、重量 [1850]	52 図 351
S42	SE063 ベルト 1 層	蛇紋岩質	中	石錘	完形	長さ 4.86、重量 25.1	51 図 338
5186	SE063 掘方	滑石	弱	石錘	一部欠	長さ 4.73	
5187	SE063 掘方	滑石	-	石材	完形	長さ 6.48	
5188	SE063 掘方	蛇紋岩質	中	小円盤状	完形	径 1.91-1.94	
5189	SE063 掘方	滑石	-	小円盤状	完形	径 1.78-2.06	
5190	SE063 掘方	滑石	-	小円盤状	完形	径 1.86-2.04	
S39	SE064-4	砂岩	-	石球	完形	径 3.31-4.53、重量 82.8	51 図 347
5191	SX053 ベルト 1・2 層	滑石	弱	石錘	完形	長さ 4.85	
5192	SX053 ベルト 1・2 層	滑石	弱	石錘	一部欠	長さ [5.73]	
5193	SX053 ベルト 3 層	滑石	弱	石鍋	破片	長さ [5.25]	
5194	SX053 下面	滑石	-	不明加工品	破片	長さ [3.13]	
5195	SX053 ベルト上攪乱	滑石	-	石錘	完形	長さ 4.03	
5196	検出・攪乱 4 区	粘板岩	弱	石材	破片		2 点
5197	樹痕 4 区	砂岩	-	石球	完形	径 3.04-3.46	
5198	検出・攪乱 1・2・5・6 区	滑石	弱	石錘	完形	長さ 5.58	
5199	検出・攪乱 1・2・5・6 区	滑石	弱	石錘	完形	長さ 4.91	
5200	検出・攪乱 1・2・5・6 区	滑石	微弱	石錘	完形	長さ 4.44	
5201	検出・攪乱 8・9 区	粘板岩	弱	石材	破片		2 点
5202	検出・攪乱 8・9 区	滑石	-	石錘	完形	長さ 7.94	
5203	攪乱拡張区	滑石	-	石錘	完形	長さ 6.98	
5204	攪乱拡張区	滑石	微弱	石錘	完形	長さ 5.57	
5205	攪乱拡張区	滑石	微弱	石錘	一部欠	長さ 5.81	
5206	攪乱拡張区	滑石	-	石錘	完形	長さ 4.22	
5207	検出・攪乱拡張西区	滑石	-	石錘	一部欠	長さ [2.9]	

第９表　第Ⅱ区金属関係遺物出土遺構

遺構	取上日	金属関係遺物	備考
SP011	190204	鉄釘	
SP073	190312	鉄塊	
SP079	190312	鉄釘	
SK002	190201	鉄釘	
SK004	190204	鉄釘	
SK030	190212	鉄釘	
SK032	190205	鉄釘	
SK034	190206	鉄釘	
SK036	190212	鉄釘	
SK037	190212	鉄釘	
SK038　R4	190214	鉄釘、木片（鉄釘貫入）	
SK038　R5	190214	鉄製品 2	
SK038　R6	190214	羽口 53 図 355	
SK038	190214	鉄釘、鉄製品 1	
SK040	190215	鉄釘	
SK040 攪乱混	190213	鉄釘	
SK042	190215	鉄釘、鉄滓、銅銭 2	
SK046	190218	鉄釘	
SK049	190221	鉄釘	
SK052	190221	鉄釘	
SK054	190307	鉄釘	
SK056	190308	鉄釘、鉄滓	
SK057 上層	190308	鉄釘、鉄滓	
SK057 下層	190308	鉄釘	
SK059	190308	鉄釘	
SK060　西	190308	鉄釘、鉄滓、鉄片、銅銭	
SK068	190312	鉄釘	
SE039 掘方	190218	鉄釘	
SE039 掘方・北半	190215	鉄釘、鉄滓	
SE039 掘方・南半	190215	鉄釘、鉄滓	
SE039 井筒下層		鉄釘、銅銭	永楽通寶（初鋳 1408 年）53 図 356
SE063	190315	鉄釘、銅銭 2	
SE063 ベルト 1 層	190312	鉄釘	
SE063 掘方	190315	鉄釘	
SE063 石組	190318	鉄釘、鉄製品 2	
SE063 井戸枠下層	190318	銅銭	祥符通寶（初鋳 1008 年）53 図 357
SK064・SE063 混土	190312	鉄釘、鉄製品	
SE064-4	190313	鉄釘	
SX048	190218	鉄釘	
SX053 上面	190301	鉄片	
SX053 ベルト 1・2 層	190311	鉄釘、鉄片、銅銭	熙寧元寶（初鋳 1068 年）53 図 358
SX053 ベルト 3 層	190312	鉄釘、鉄片	
SX058	190308	鉄片	
SK018 攪乱	190204	鉄釘、鉄片	
SX053　ベルト上攪乱	190311	鉄釘	
拡張西区検出・攪乱	190312	鉄釘、銅銭	永楽通寶（初鋳 1408 年）53 図 359
4 区　樹痕	190308	鉄釘	
不明		銅銭	聖宋元寶（初鋳 1101 年）53 図 360

第５節　自然科学分析

第１項　動物骨・貝類、木製品樹種、種実、土壌（花粉・植物珪酸体・珪藻）の自然科学分析

株式会社古環境研究所

１．動物骨・貝類

（１）方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。

（２）結果

試料の詳細と、同定された分類群および部位を第10表に示す。主要な分類群の写真を図版20・21に示す。以下に、遺構別に同定結果を述べる。なお、哺乳類に関しては細片で観察部位を欠くものが多い。

①第Ⅰ区

・SD162　哺乳類６点。

・SE035（下層を含む）　硬骨魚綱７点、ネズミ科３点、哺乳類１点。

・SE047（堀方）　ニホンジカ１点。

・SE158　硬骨魚綱１点、哺乳類１点。

・SE190　イヌ４点、イルカ類１点。イヌの骨は小さく全て未融合であり、子犬のものである。

・SE193（堀方を含む）　カレイ科１点、ヒト７点、ウマ１点、クジラ目１点、哺乳類１点。ヒトの下顎骨は永久歯が生え替わる時期のもので６才程度であり、遊離歯は下顎骨と同一である。

・SE195（堀方）　ハタ科５点、タイ科？６点、マダイ３点、ヒラメ３点、硬骨魚綱２点他10.59g、ニホンジカ１点。

・SE196（堀方を含む）　ヒト２点、哺乳類１点。

・SK008　硬骨魚綱１点。

・SK023　腹足綱。

・SK160　スッポン３点、哺乳類９点。

・SX188　マダイ？１点、硬骨魚綱３点。

・SP059周辺１面下堆積土　ヒト１点。ヒト頭蓋骨は被熱により白色を呈する。

・SP074　イヌ１点。

・SX036　イルカ類１点。

・SX048　ウマ１点。

・SX143 T4　イヌ１点。

・SX148 T6　ウマ１点。

・SR152（外側を含む）　硬骨魚綱１点、ヒト88点、哺乳類75点。№20のヒトの第一大臼歯は成人しているヒトの歯であり、また、№21のヒトの頭蓋骨は骨表面の筋付着面の凹凸がほとんど見られないことから女性の骨である。なお、ヒトの頭蓋骨片は細片であり計数が高くなっているが、最低個体数が複数体とは限らない。

・SX163　イヌが１点。

・SX178　腹足綱１点。

・SX180　ニホンジカ１点。

・SX188（３区西ベルトを含む）　斧足綱８体、マダイ２点、哺乳類破片。マダイはカブトワリによって切断された解体痕が観察された。

・１面下４区　ウマ１点。

・２面検出清掃　斧足綱１点、ウマ／ウシ１点。

・Ⅱ下層（４区、T6南）　フネガイ科？１点、マダイ１点、ウマ１点、哺乳類１点。

②第Ⅱ区

・SE039（井筒下層、井筒内下層土、堀方北半を含む）　腹足綱１点、斧足綱細片、アジ科１点、フグ科１点、硬骨魚綱23点、カエル類２点、哺乳類１点。

・SE064（1･2、3）　タコノマクラ目２点。

・SK002　ヒト１点。

・SK020　ニホンジカ？１点、哺乳類１点。

・SK033　齧歯目１点、哺乳類 28 点が同定。
・SK036　鳥類 11 点、ヒト１点、哺乳類 58 点。ヒトの脛骨は、骨質の厚さや筋付着面の荒さから男性のものである。
・SK038（下層を含む）　イボタガキ科？１点、ハタ科？１点、マダイ２点、硬骨魚綱 29 点、カエル類１点、ヘビ類１点。硬骨魚綱には被熱によって白色を呈するものがある。
・SK042　クロダイ属２点、カレイ科２点、硬骨魚綱 37 点、哺乳類 25 点。カレイ科、硬骨魚綱は被熱によって白色を呈する。
・SK057（上層、下層）　サメ類７点。いずれも被熱による白色を呈する。

（３）考察

箱崎遺跡92次発掘調査で出土した動物遺存体は、巻貝および二枚貝の貝類、タコノマクラ目、魚類、鳥類、ヒトやクジラ目およびイルカ類を含む哺乳類であった。タコノマクラ目とヒトを除いた貝類および動物は、いずれも食用となるものであり、解体痕が観察されるものや、被熱変化のあるものが見られた。

巻貝は破片が多く、同定に至らないものばかりであった。二枚貝はイボタガキ科？、フネガイ科？の２種類で、内湾から河口の岩礁や、潮間帯下の泥底に生息する海生の貝類である。タコノマクラ目は貝類ではなく、また食用でもないが、底曳網漁などで混獲されたものが消費地まで持ち込まれたと考えられる。

サメ類、マダイ、ハタ科などの海水魚、クジラ目、イルカ類などの海生哺乳類は11種類同定された。ハタ科、マダイが比較的多く、カブトワリなどの解体痕や被熱による色調の変化などが見られる。アジ科は沿岸表層を群れで回遊する魚で、ハタ科、マダイ、クロダイ属、フグ科は沿岸性の岩礁域や砂泥底に生息する。カレイ科、ヒラメは沿岸の浅い水域から深海までの海底に生息する。磯釣りなどで漁獲できるが、底曳網、刺し網などで漁獲される。サメ類は外洋に生息しており、食用の他に皮がヤスリの素材として利用される。クジラ目、イルカ類は外洋から沿岸などに生息し、時代によっては、食用だけでなく肋骨などが骨角器に利用される。刺網漁、追い込み漁などで漁獲される。なお、現在ではマダイなどを漁獲する磯建網漁にサメ類やイルカ類が混獲されることがある。

陸生動物は、鳥類、カエル類、スッポン、ヘビ類、ヒト、ネズミ科、イヌ、ウマ、ニホンジカなど10種類が同定された。役畜のイヌやウマは飼育されていた可能性がある。野生動物としてはスッポン、カエル類、ヘビ類、ネズミ科、ニホンジカがいる。ウマは、乗馬や荷物の牽引などに使役され、最終的には解体され、皮や肉を資源として利用したと考えられる。イヌは飼育されるが、中近世では食用にされた例もある。イヌには幼い子犬も含まれ、子犬から成犬まで本遺跡には存在した。スッポンは淡水生で河川の中・下流域や池、湖沼などに生息する。江戸時代などでは主に西日本で食されてきた。カエル類、ヘビ類は湿潤な環境を好み、スッポンの生息する湖沼などに共に生息する。ネズミ科は河川、湖畔や人里に近い田畑や土手に生息し、人里近くで見られる。ニホンジカは自然豊かな山野に生息する動物であり、食用となる。また、ニホンジカは古くから角や骨が骨角器に利用される。

当時の人々は、近隣に位置する博多湾沿岸の岩礁域や砂礫、干潟より貝類やハタ科、マダイ、クロダイ属、フグ科などの魚類を獲得し、それに加え網漁でサメ類、クジラ目、イルカ類なども漁獲していたと考えられる。陸生動物にはウマ、イヌなどの役畜も含まれるが、カエル類、スッポン、ニホンジカ、ネズミ科などの野生動物も消費されていた。いずれの動物遺存体も食用や骨角器に利用されたのち廃棄されたものと考えられる。なお、SE193堀方、SE196、SP059、SR152よりヒトの骨が同定

第 10 表（1） 動物遺存体同定結果

No.	調査区	遺構・層位	位置	結果（学名／和名）		部位	部分	左右	個数	備考
2	Ⅰ	SP074		*Canis familiaris*	イヌ	大腿骨			1	
3	Ⅰ	SK008		Osteichthyes	硬骨魚綱	鱗			1	
				Plants	不明植物	不明			28	突起・孔あり
4	Ⅰ	SK023		Gastropoda	腹足綱	破片			1	
7	Ⅰ	SE035	土サンプル	Osteichthyes	硬骨魚綱	椎骨	ほぼ完形		1	
				Osteichthyes	硬骨魚綱	不明	破片		3	
				Osteichthyes	硬骨魚綱	鱗			3	
				Muridae	ネズミ科	下顎骨		左 右	2	
				Muridae	ネズミ科	上腕骨		左	1	
8	Ⅰ	SE035 下層		*Mammalia*	哺乳類	頭蓋骨	破片		1	
18	Ⅰ	SX036		Odontoceti fam. indet.	イルカ類	椎骨	椎体		1	
1	Ⅰ	SE047 堀方		*Cervus nippon*	ニホンジカ	鹿角			1	
19	Ⅰ	SX048		*Equus cabalus*	ウマ	歯	遊離歯		1	
24	Ⅰ	１面下４区	R1	*Equus cabalus*	ウマ	上腕骨	ほぼ完形	右	1	
25	Ⅰ	SP059 周辺１面下堆積土		*Homo sapiens*	ヒト	頭蓋骨	頭頂骨片		1	被熱白色変化
33	Ⅰ	２面検出清掃		Bivalvia	斧足綱	破片			1	
34	Ⅰ	２面検出清掃		*Equus cabalus / Bos taurus*	ウマ / ウシ	歯	遊離歯（C）		1	
35	Ⅰ	Ⅱ下層４区		Arcidae ?	フネガイ科?	破片			1	
				Pagrus major	マダイ	上擬鎖骨	破片	左	1	
				Mammalia	哺乳類	肋骨			1	
36	Ⅰ	黒褐層（Ⅱ下層）T6 南		*Equus cabalus*	ウマ	基節骨（後肢）	近位	右	1	
20	Ⅰ	SR152	頭骨付近	*Homo sapiens*	ヒト	頭蓋骨	破片		60	
				Homo sapiens	ヒト	歯	第一大臼歯		1	成人
				Homo sapiens	ヒト	歯	第二大臼歯		1	
				Homo sapiens	ヒト	歯			25	
				Mammalia	哺乳類	不明	破片		30	ヒトと同一か？
				Osteichthyes	硬骨魚綱	歯	遊離歯		1	
21	Ⅰ	SR152	頭骨	*Homo sapiens*	ヒト	頭蓋骨	破片		1	女性か
22	Ⅰ	SR152	骨①	Mammalia	哺乳類	不明	破片		45	土壌
23	Ⅰ	SR152 外側		Unknown	不明	不明			1	不明
15	Ⅰ	SE196		*Homo sapiens*	ヒト	頭頂骨	破片		2	
16	Ⅰ	SE196 堀方		Mammalia	哺乳類	肋骨？			1	
14	Ⅰ	SE195 堀方		*Pagrus major*	マダイ	前頭骨	破片		1	
				Pagrus major	マダイ	前上顎骨	ほぼ完形	左	1	
				Pagrus major	マダイ	主鰓蓋骨	破片	左	1	
				Sparidae ?	タイ科？	椎骨	完形		6	
				Serranidae	ハタ科	主鰓蓋骨	ほぼ完形	左	1	
				Serranidae	ハタ科	方骨	完形	左	1	
				Serranidae	ハタ科	前鰓蓋骨	破片	左	1	切断
				Serranidae	ハタ科	歯骨	破片	左	1	
				Serranidae	ハタ科	歯骨	破片	右	1	解体痕
				Paralichthys olivaceus	ヒラメ	椎骨	完形		3	
				Osteichthyes	硬骨魚綱	椎骨	椎体		1	
				Osteichthyes	硬骨魚綱	鱗			1	
				Osteichthyes	硬骨魚綱	不明	破片		10.59g	
				Cervus nippon	ニホンジカ	下顎骨	下顎体	左	1	
11	Ⅰ	SE193		Mammalia	哺乳類	肋骨	破片		1	木
12	Ⅰ	SE193		Cetacea	クジラ目	椎骨	椎体		1	
13	Ⅰ	SE193 堀方		Pleuronectidae	カレイ科	第１血管間棘			1	
				Homo sapiens	ヒト	下顎骨			1	６才程度
				Homo sapiens	ヒト	歯	遊離歯（破片）		6	下顎と同一
				Equus cabalus	ウマ	歯	遊離歯（下顎 M3）	右	1	
10	Ⅰ	SE190		Canis familiaris	イヌ	肩甲骨		左	1	子犬。肩甲骨、橈骨、尺骨、脛骨は同一個体
				Canis familiaris	イヌ	橈骨		左	1	
				Canis familiaris	イヌ	尺骨		左	1	
				Canis familiaris	イヌ	脛骨		左	1	
				Odontoceti fam. indet.	イルカ類	歯	遊離歯		1	
9	Ⅰ	SE158		Osteichthyes	硬骨魚綱	不明	破片		1	
				Mammalia	哺乳類	肋骨			1	
5	Ⅰ	SK160		*Pelodiscus sinensis*	スッポン	肋骨板	破片		1	
				Pelodiscus sinensis	スッポン	中腹骨板	ほぼ完形		1	
				Pelodiscus sinensis	スッポン	下腹骨板	破片		1	
				Mammalia	哺乳類	四肢骨	骨幹		1	小型
				Mammalia	哺乳類	肋骨	破片		1	大型
				Mammalia	哺乳類	破片			7	
17	Ⅰ	SD162		Mammalia	哺乳類	不明	破片		6	
28	Ⅰ	SD163		*Canis familiaris*	イヌ	下顎骨	下顎体	左	1	

第 10 表（2） 動物遺存体同定結果

No.	調査区	遺構・層位	位置	結果（学名／和名）		部位	部分	左 右	個数	備考
26	Ⅰ	SX143 T4		*Canis familiaris*	イヌ	椎骨	頸椎		1	
27	Ⅰ	SX148 T6		*Equus cabalus*	ウマ	歯	遊離歯		1	
29	Ⅰ	SX178		Gastropoda	腹足綱	殻軸			1	
30	Ⅰ	SX180		Cervus nippon	ニホンジカ	肩甲骨		左	1	
6	Ⅰ	SX188		*Pagrus major ?*	マダイ？	舌顎骨	破片	右	1	
				Osteichthyes	硬骨魚綱	鰭棘	担鰭骨		1	
				Osteichthyes	硬骨魚綱	不明破片			2	
31	Ⅰ	SX188		Bivalvia	斧足綱	不明	破片		8	
				Pagrus major	マダイ	前頭骨＋上後頭骨	破片		2	切断（カブトワリ）
32	Ⅰ	SX188、３区西ベルト		Mammalia	哺乳類	不明	破片		-	大型哺乳類か？
47	Ⅱ	SK033	骨 -1	Rodentia	齧歯目	歯	遊離歯		1	
				Mammalia	哺乳類	不明	破片		27	
48	Ⅱ	SK033	骨 -2	Mammalia	哺乳類	不明	破片		1	
53	Ⅱ	SK042		Pleuronectidae	カレイ科	椎骨	完形		2	被熱黒色変化
				Osteichthyes	硬骨魚綱	椎骨	ほぼ完形		8	被熱白色変化
				Osteichthyes	硬骨魚綱	不明	破片		29	被熱白色変化、炭
54	Ⅱ	SK042		*Acanthopagrus*	クロダイ属	前上顎骨	破片	左	1	土器
				Acanthopagrus	クロダイ属	歯骨	破片	左	1	
				Mammalia	哺乳類	不明	破片		25	
51	Ⅱ	SK038		Ostreidae ？	イボタガキ科?	破片			3	
52	Ⅱ	SK038 下層		*Pagrus major*	マダイ	前上顎骨	ほぼ完形	右	1	鱗
				Pagrus major	マダイ	副蝶形骨	破片		1	
				Serranidae ？	ハタ科？	椎骨	完形		1	
				Osteichthyes	硬骨魚綱	副蝶形骨	ほぼ完形		1	
				Osteichthyes	硬骨魚綱	尾部棒状骨	破片		1	
				Osteichthyes	硬骨魚綱	椎骨	ほぼ完形		4	内２点被熱白色変化
				Osteichthyes	硬骨魚綱	不明	破片		12	
				Osteichthyes	硬骨魚綱	鱗			11	
				Colubridae gen.et sp.indet.	ヘビ類	椎骨	完形		1	
				Salientia fam. indet.	カエル類	寛骨	ほぼ完形	右	1	
49	Ⅱ	SK036	R1	*Homo sapiens*	ヒト	脛骨		右	1	男性か
50	Ⅱ	SK036		Mammalia	哺乳類	不明	破片		58	
				Aves	鳥類	不明	破片		11	
55	Ⅱ	SK057 上層		Selachii	サメ類	椎骨	ほぼ完形		6	被熱白色変化
56	Ⅱ	SK057 下層		Selachii	サメ類	椎骨	完形		1	被熱白色変化
45	Ⅱ	SK020	R1	Mammalia	哺乳類	角？			1	
46	Ⅱ	SK020	R6	*Cervus nippon ?*	ニホンジカ？	鹿角			1	
44	Ⅱ	SK002		*Homo sapiens*	ヒト	脛骨	骨体	右	1	
37	Ⅱ	SE039		Salientia fam. indet.	カエル類	橈尺骨	ほぼ完形	左	1	
				Salientia fam. indet.	カエル類	大腿骨	ほぼ完形	左？	1	
38	Ⅱ	SE039 井筒内下層土		Carangidae	アジ科	鱗	稜鱗		1	
				Osteichthyes	硬骨魚綱	不明	破片		11	
				Osteichthyes	硬骨魚綱	鱗			12	
39	Ⅱ	SE039 井筒下層		Gastropoda	腹足綱	殻軸			1	
				Bivalvia	斧足綱	細片			-	
40	Ⅱ	SE039 井筒下層		Tetraodontidae	フグ科	歯骨	ほぼ完形	左	1	
41	Ⅱ	SE039 堀方北半		Mammalia	哺乳類	四肢骨			1	
42	Ⅱ	SE064-1･2		Clypeasteroida	タコノマクラ目	破片			1	
43	Ⅱ	SE064-3		Clypeasteroida	タコノマクラ目	破片			1	

された。SE193堀方では６才程度の子供の下顎骨であり、SR152では検出された骨を１個体と考えるならば成人した女性の頭蓋骨である。SP059のヒト頭蓋骨は被熱による白色変化が見られ、火葬された人骨の可能性があり、SR152より出土した人骨は埋葬された人骨の可能性がある。しかし、井戸跡では動物骨が投棄されることが大半であり、またSE193堀方では他の動物骨と共に出土しているため、SE163堀方およびSE196より出土した人骨は、井戸や井戸堀方を埋めるときに共に投棄された可能性がある。

【参考文献】

安部永（1994）日本の哺乳類 , 東海大学出版会 ,195p.

松井章（1988）中世のマダイ漁 草戸千軒．第 182 号草戸千軒町遺跡調査研究所，p.6-7.

2．木製品樹種

（1）方法

試料の木取りを観察した上で、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入してプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。

（2）結果

樹種同定結果を第11表に示す。井戸の部材と木製品は、針葉樹のスギと広葉樹のイスノキに同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

第 11 表　樹種同定結果

No.	調査区	遺構	位置	器種	木取り	樹種
1	Ⅰ	SE035	W4	井戸枠板	板目	スギ
2	Ⅰ	SE035	東半最下層	櫛	削出	イスノキ
3	Ⅰ	SE047		木枠	柾目状	スギ
4	Ⅰ	SE155	W1	井戸枠板	板目	スギ
5	Ⅰ	SE158	W1	井戸枠板	板目	スギ
6	Ⅰ	SE190	W1	井戸枠板	板目	スギ
7	Ⅰ	SE191	W1	井戸枠板	板目	スギ
8	Ⅰ	SE191		加工木片	分割角材状	スギ
9	Ⅰ	SE192	W1	井戸枠板	板目	スギ
10	Ⅰ	SE193	W1	井戸枠板	板目	スギ
11	Ⅰ	SE195	W1	井戸枠板	板目	スギ
12	Ⅱ	SE039		井戸枠板	板目	スギ
13	Ⅱ	SE063	W1	井戸枠板	板目	スギ
14	Ⅱ	SE064-1		井戸枠板	板目	スギ
15	Ⅱ	SE064-2		井戸枠板	板目	スギ
16	Ⅱ	SE064-3		井戸枠板	板目	スギ
17	Ⅱ	SE064-4		井戸枠板	板目	スギ

・スギ *Cryptomeria japonica*（L. f.）D. Don　ヒノキ科スギ属

軸方向組織は仮道管を主要素とし、他に樹脂細胞が認められる。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・イスノキ　*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.　マンサク科イスノキ属

小径の道管が年輪界一様にほぼ単独で散在する散孔材。道管の分布密度は比較的高い。道管の穿孔板は階段穿孔板となる。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～20細胞高。柔組織は、独立帯状または短接線状で、放射方向にほぼ等間隔に配列する。

（3）考察

樹種同定を実施した木製品等は、伊東・山田（2012）の木器分類を参考にすると、服飾具（櫛）、施設材・器具材（井戸枠板・木枠）、その他（加工木片）に分けられる。これらの木製品等は、櫛がイスノキで、他は全てスギに同定された。各樹種の材質等についてみると、針葉樹のスギは、木理が通直で割裂性と耐水性が比較的高い。イスノキは、重硬・緻密で強度が高い。

器種別にみると、試料の大半を占める井戸枠板は、12基の井戸から出土している。井戸の時期は、SE063が16世紀代、その他の11基は13･14世紀とされる。板材は、その全てが板目板であり、樹種も全てスギとなる。この結果から、時期に関わらずスギが多用されたことが推定される。また、板目板は、年輪が板の広い面に対して平行に層状に入る。細胞壁が厚く、細胞密度が高い晩材部が層状に入るために、柾目板に比べて耐水性が高いという特徴がある。井戸枠に使うことから、より耐水性の高い木取りで製作された可能性がある。

木枠は、近世の井戸SE047から出土した。樹種は同じくスギが利用されるが、木取りは柾目状を呈しており、それ以前の井戸枠板とは木取りが異なる。木取りの違いは、部位の違いなどが影響している可能性がある。

福岡市内では、下月隈C遺跡の中世とされる井戸を構成する井戸側板にスギ、井戸枠・板にアカガ

シ亜属、アワブキ属、スギ、モミ属、井戸枠・杭にキブシ、シキミ、スダジイ、ツブラジイ、井戸枠・曲物にヒノキ、井筒（曲物）にモミ属が確認されている（三村・高橋,2005）。スギの利用は、既存の調査例とも整合的といえる。

櫛は、いわゆる横櫛である。背がやや山なりに丸みを帯びる形状であり、背が木口、胸が板目となる木取りで削出されている。イスノキは重硬・緻密で加工が困難であるが、緻密であるために細かな加工には適しており、利用の背景に考えられる。

伊東・山田（2012）のデータベースによれば、福岡県内では御笠川南条坊遺跡の鎌倉時代とされる横串がイスノキに同定されている。また、同時期の資料では、全国的にイスノキの利用が多くを占めており、中世の横櫛ではイスノキが主体であったことが推定される。

加工木片は、分割角材状を呈する部材である。スギが利用されることから、加工性の高い木材の選択・利用が推定される。

【参考文献】

林　昭三,1991,日本産木材　顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所.66-176.

伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.

伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.

伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.

伊東隆夫・山田昌久（編）,2012,木の考古学　出土木製品用材データベース.海青社,444p.

三村昌史・高橋　敦,2005,第6次調査出土材の樹種からみた木材利用.「下月隈Ｃ遺跡Ⅴ　－福岡空港周辺整備工事に伴う下月隈Ｃ遺跡第6次発掘調査報告－　本文編」,福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第839集,福岡市教育委員会,221-230.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006,針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修）,海青社,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（2004）*IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*］.

島地　謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998,広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）,海青社,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.

3．種実

（1）方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

（2）結果

○分類群

草本４分類群が同定された。結果を第12表に示し、同定された分類群の写真を図版22に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

第 12 表　炭化種実同定結果

No.	調査区	遺構	分類群		部位	個数
			学名	和名		
1	Ⅱ	SK042	*Oryza sativa L.*	イネ	果実	3
			Hordeum vulgare L.	オオムギ	果実	65
			Triticum aestivum L.	コムギ	果実	17
			Hordeum-Triticum	ムギ類	果実（破片）	151
			備考	炭化材	細片	(+)
				石		(+)
				虫瘤		1

〔草本〕

イネ　*Oryza sativa* L.　炭化果実　イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

オオムギ *Hordeum vulgare* L.　炭化果実　イネ科

炭化しているため黒色で、楕円形を呈す。腹部の端には胚がある。背面には縦に一本の溝がある。側面の形は曲率が大きく、胚と胚乳との接する輪郭線は山形である。

コムギ　*Triticum aestivum*. L　炭化果実　イネ科

炭化しているため黒色で、楕円形を呈する。腹部の端には胚がある。背面には縦に一本の溝がある。比較的四角い形を呈し、短い。

ムギ類（オオムギ-コムギ）*Hordeum-Triticum*　炭化果実　イネ科

オオムギもしくはコムギと思われるが、発泡しており胚が確認できないためムギ類とした。

○種実群集の特徴

草本種実のイネ果実３点、オオムギ果実65点、コムギ果実17点、ムギ類果実151点が同定され、その他に炭化材細片（+)、石（+)、虫瘤１点が確認された。

（3）考察

草本種実のイネ、オオムギ、コムギ、ムギ類は食用になる栽培植物で、すべて炭化している。いずれも主要となる農作物の穀類であり、周囲または時期的に水田や畑が盛行していたと推定される。種実の組成から、オオムギやコムギなどの穀類を作物とする畑作が主要に行われていたと考えられる。

【参考文献】

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.

笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第２巻生業，雄山閣出版，p.131–139.

南木睦彦（1991）栽培植物．古墳時代の研究第４巻生産と流通Ⅰ，雄山閣出版，p.165–174.

南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276–283.

４．土壌（花粉分析・植物珪酸体分析・珪藻分析）

○花粉分析

（１）方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

１）試料から１cm^3を採量

２）0.5％リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎

３）水洗処理の後、0.25mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去

４）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置

５）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）

６）再び氷酢酸を加えて水洗処理

７）沈渣にチール石炭酸フクシン染色液を加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の分類は、同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉（1973）、中村（1980）を参照して行った。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。なお、花粉分類では樹木花粉（AP）および非樹木花粉（NAP）となるが非樹木花粉（NAP）は草本花粉として示した。

（２）結果

産出した分類群は、樹木花粉２、草本花粉４、シダ植物胞子１形態の計７分類群である。花粉分析の結果を第13表に示し、主な分類群の顕微鏡写真を図版22に示した。同時に、寄生虫卵についても観察した結果、１分類群が確認された。以下に産出した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕　スギ、コナラ属コナラ亜属

〔草本花粉〕　イネ科、アブラナ科、タンポポ亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕　単条溝胞子

〔寄生虫卵〕　回虫卵

次に、各調査区における花粉化石群集の特徴を述べる。

１）第Ⅰ区：SE190最下層、西壁土層サンプル１、サンプル２

いずれの試料も密度が極めて低く、SE190最下層でスギがわずかに検出されたのみであった。

２）第Ⅱ区：SK038下層、SK040下層

いずれの試料も密度が極めて低い。SK038下層でイネ科、タンポポ亜科、アブラナ科、ヨモギ属がわずかに検出され、SK040下層でコナラ属コナラ亜属、イネ科がわずかに検出された。また、SK038下層から回虫卵がわずかに検出された。

（３）考察

１）第Ⅰ区

SE190最下層は、花粉密度が極めて低いことから、堆積速度が速く花粉が集積できなかったか淘汰されたと考えられる。分解質の遺体片が多く、周囲からの落ち込みが著しかったとみられる。

西壁土層では、いずれの試料とも花粉が検出されないことから、堆積速度が速かったか淘汰された

第13表　花粉分析結果

分類群		Ⅰ区 SE190	Ⅰ区西壁		Ⅱ区 SK038	Ⅱ区 SK040
学名	和名	最下層	サンプル1	サンプル2	下層	下層
Arboreal pollen	樹木花粉					
Cryptomeria japonica	スギ	1				
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属					1
Nonarboreal pollen	草本花粉					
Gramineae	イネ科				3	1
Cruciferae	アブラナ科				1	
Lactucoideae	タンポポ亜科				3	
Artemisia	ヨモギ属				1	
Fern spore	シダ植物胞子					
Monolate type spore	単条溝胞子				3	
Arboreal pollen	樹木花粉	1	0	0	0	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	0	0	8	1
Total pollen	花粉総数	1	0	0	8	2
Pollen frequencies of 1 cm^3	試料1 cm^3 中の花粉密度	0.6 $\times 10^2$			0.6 $\times 10^2$	0.1 $\times 10^2$
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	0	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	0	0	0	3	0
Parasite eggs	寄生虫卵					
Ascaris (lumbricoides)	回虫卵				5	
Total	計	0	0	0	5	0
Parasite eggs frequencies of 1 cm^3	試料1 cm^3 中の寄生虫卵密度				3.5 $\times 10$	
Stone cell	石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal・woods fragments	微細炭化物・微細木片	(++)	(+)	(+)	(+)	(+)
微細植物遺体（Charcoal・woods fragments）						
未分解遺体片					0.4	
分解質遺体片		384.0	16.3	8.1	37.6	20.5
炭化遺体片（微粒炭）		13.4		0.3	2.3	

と考えられる。

２）第Ⅱ区

SK038下層は、花粉密度が極めて低いことから、堆積速度が速く花粉が集積できなかったか淘汰されたと考えられる。なお、イネ科、タンポポ亜科などの草本がわずかに産出しており、周辺に比較的乾燥した陽当たりの良い開けた環境が分布していたと推定される。寄生虫の回虫卵が少量認められた。産状から生活汚染の影響が想定され、周囲に由来源となる居住域ないし生活域があったとみなされる。

SK040下層は、花粉密度が極めて低く、堆積速度が速く花粉が集積できなかったか淘汰されたと考えられる。コナラ属コナラ亜属、イネ科がわずかに検出されている。これらは風媒花植物であることから、周辺の植生を反映したものと思われる。

○植物珪酸体分析

（１）方法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

２）試料約１ｇに対し直径約40μｍのガラスビーズを約0.02ｇ添加（0.1mgの精度で秤量）

３）電気炉灰化法（550℃・6時間）により脱有機物処理

４）超音波水中照射（300Ｗ・42KHz・10分間）により土壌を分散

５）沈底法により20μｍ以下の微粒子を除去

６）乾燥後、封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

検鏡は、400倍の偏光顕微鏡下で行う。同定は、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象とする。計数は、ガラスビーズ個数が500以上になるまで行う。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料1ｇ中の植物珪酸体個数は、試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率を乗じて算出する。また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重）を乗じて、単位面積で層厚１㎝あたりの植物体生産量を算出する。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山，2000）。

（２）結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第14表および第52図に示した。主要な分類群の顕微鏡写真を図版23に示す。

〔イネ科〕　イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族型（チガヤ属など）、シバ属型

〔イネ科－タケ亜科〕　ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、メダケ節型（メダケ属メダケ節・ヤダケ属など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、その他未分類等

〔イネ科－その他〕　未分類等

〔木本起源〕　クスノキ科、イスノキ属

〔その他〕　海綿骨針

次に、各調査区における植物珪酸体の産出状況を述べる。

１）第Ⅰ区 SE190最下層、西壁土層サンプル１、サンプル２

SE190最下層は、植物珪酸体の産出量が少ない。イネ、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族型の草本と、クスノキ科、イスノキ属の木本が少量検出されたが、優占種は認められない。植物珪酸体以外に海綿骨針が少量検出された。

西壁土層サンプル１とサンプル２は、いずれもイネが高密度で検出され優占する。次いでススキ属型が多く、キビ族型、タケ亜科のネザサ節型とメダケ節型、木本のイスノキ属がそれぞれ少量検出された。他には、サンプル１ではシバ属型と木本のクスノキ科が、サンプル２ではウシクサ族型とタケ亜科のミヤコザサ節型が少量認められた。両試料からは植物珪酸体の他に海綿骨針が少量検出された。

２）第Ⅱ区 SK038下層、SK040下層

それぞれイネが高密度で検出され優占する。次いでススキ属型が多く、キビ族型、ヨシ属、ウシクサ族型、タケ亜科のネザサ節型とメダケ節型、木本のクスノキ科とイスノキ属が低密度で検出された。他にSK038下層ではシバ属型、SK040下層ではタケ亜科のミヤコザサが少量認められた。植物珪酸体の他に海綿骨針が少量検出された。

（３）考察

１）第Ⅰ区

SE190最下層では、植物珪酸体の産出量が少なく、優占種も認められない。陽当たりが悪くイネ科草本植物の生育できない環境であったか、堆積速度が速かったことが考えられる。ここで検出された植物珪酸体は、周辺から混入したものと判断される。

西壁土層では、サンプル１、サンプル２ともにイネの植物珪酸体が高い密度で検出されている。サンプル１では7,600個/g、サンプル２では9,900個/gであり、いずれも稲作跡の判断基準値である5,000個/gを超過している。このことから、調査地もしくは近傍に水田が分布していた可能性が高い

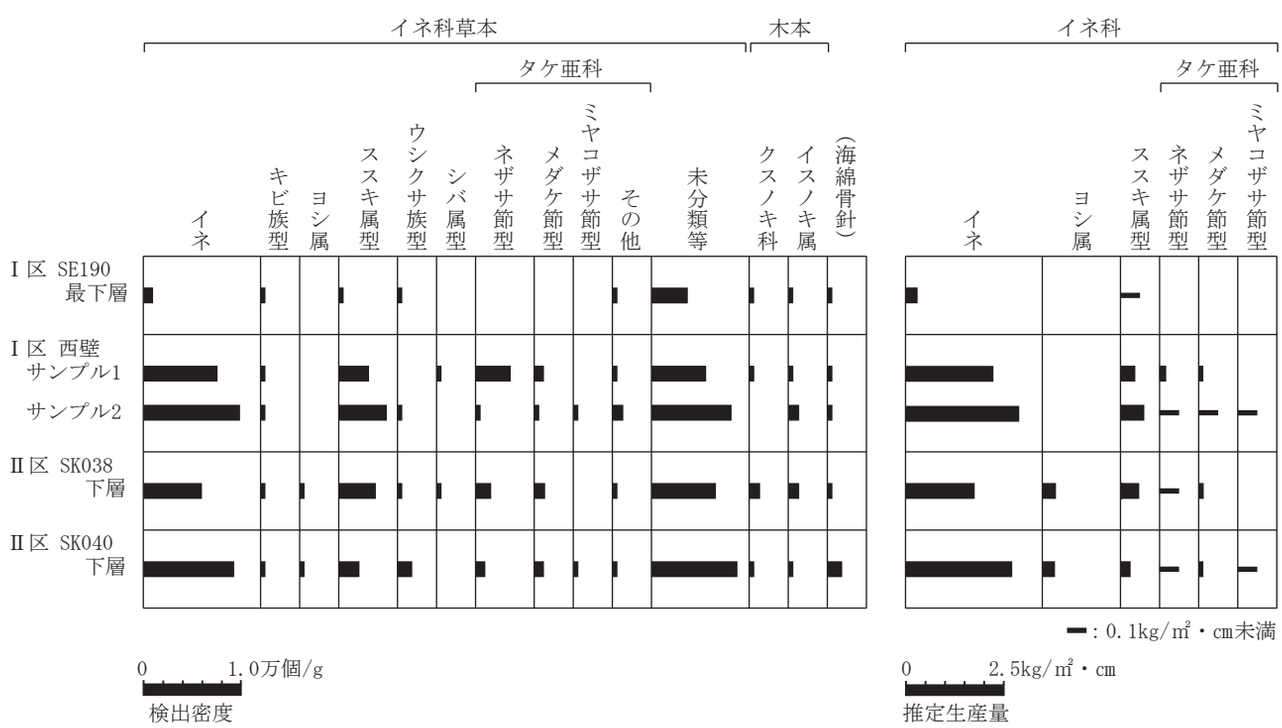
第 14 表　植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：× 100 個 /g）

分類群	学名	Ⅰ区 SE190	Ⅰ区西壁		Ⅱ区 SK038	Ⅱ区 SK040
		最下層	サンプル 1	サンプル 2	下層	下層
イネ科	Gramineae					
イネ	*Oryza sativa*	10	76	99	60	93
キビ族型	*Paniceae type*	5	5	5	5	5
ヨシ属	*Phragmites*				5	5
ススキ属型	*Miscanthus type*	5	31	49	38	21
ウシクサ族型	*Andropogoneae type*	5		5	5	15
シバ属型	*Zoysia type*		5		5	
タケ亜科	Bambusoideae					
ネザサ節型	*Pleioblastus sect. Nezasa*		36	5	16	10
メダケ節型	*Pleioblastus sect. Nipponoca lamus*		10	5	11	10
ミヤコザサ節型	*Sasa sect. Crassinodi*			5		5
その他	Others	5	5	11	5	5
その他のイネ科	Others					
未分類等	Unknown	37	56	82	66	88
木本	Arboreal					
クスノキ科	Lauraceae	5	5		11	5
イスノキ属	*Distylium*	5	5	11	11	5
(海綿骨針)	Sponge	5	5	5	5	15
植物珪酸体総数	Total	77	234	277	238	267

おもな分類群の推定生産量（単位：kg / ㎡・cm）：試料の仮比重を 1.0 と仮定して算出

イネ	*Oryza sativa*	0.31	2.25	2.91	1.77	2.73
ヨシ属	*Phragmites*				0.35	0.32
ススキ属型	*Miscanthus type*	0.06	0.38	0.61	0.48	0.26
ネザサ節型	*Pleioblastus sect. Nezasa*		0.17	0.03	0.08	0.05
メダケ節型	*Pleioblastus sect. Nipponoca lamus*		0.12	0.06	0.13	0.12
ミヤコザサ節型	*Sasa sect. Crassinodi*			0.02		0.02



第54図　植物珪酸体分析結果

と考えられる。なお、ススキ属型も多く検出されていることから、畦畔や水田近辺の乾いたところにはススキ属が生育していたと推定される。

２）第Ⅱ区

SK038下層とSK040下層では、それぞれイネの植物珪酸体が6,000個/g、9,300個/gと高い密度であり、いずれも稲作跡の判断基準値の5,000個/gを超過している。なお、調査対象が土坑であることから、水田だったところに土坑が造られたか、何らかの要因で水田土壌が混入したか投棄されたことが想定される。ここでもススキ属型が多く検出されていることから、調査地周辺の乾いたところにススキ属が生育していたと推定される。なお、水田土壌が混入あるいは投棄されたのならば、その水田の畦畔や周辺の乾いたところにススキ属が生育していたと考えられる。

○珪藻分析

（１）方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

１）試料から１cm^3を採量

２）10％過酸化水素水を加え、加温反応させながら１晩放置

３）上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗（５～６回）

４）残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下して乾燥

５）マウントメディアによって封入し、プレパラート作製

６）検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

（２）結果

産出した珪藻は、真塩性種（海水生種）８分類群、真－中塩性種（海－汽水生種）12分類群、中塩性種（汽水生種）５分類群、中－貧塩性種（汽－淡水生種）３分類群、貧塩性種（淡水生種）63分類群である。破片の計数は基本的に中心域を有するものと、中心域がない種については両端２個につき１個と数えた。分析結果を第15表に示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを第53図に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性はLowe（1974）の記載により、陸生珪藻は小杉（1986）により、環境指標種群は海水生種から汽水生種は小杉（1988）により、淡水生種は安藤（1990）による。また、主要な分類群は顕微鏡写真を図版24に示した。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記載する。

〔真－中塩性種〕*Achnanthes delicatula*、*Cocconeis scutellum*、*Navicula duerrenbergiana*、*Nitzschia granulate*

〔中塩性種〕*Navicula perminuta*

〔中－貧塩性種〕*Rhopalodia gibberula*

〔貧塩性種〕*Achnanthes lanceolata*、*Achnanthes minutissima*、*Amphora fontinalis*、*Amphora montana*、*Amphora veneta*、*Cocconeis disculus*、*Cocconeis placentula*、*Fragilaria exigua*、*Fragilaria pinnata*、*Fragilaria* spl.、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula cryptotenella*、*Navicula kotschyi*、*Navicula mutica*、*Navicula pseudoacceptata*、*Navicula* spp.、*Navicula veneta*、*Nitzschia frustulum-liebetruthii*、*Nitzschia palea*

次に、各調査区における珪藻化石群集の特徴を述べる。

１）第Ⅰ区：SE190最下層、西壁土層サンプル１、サンプル２

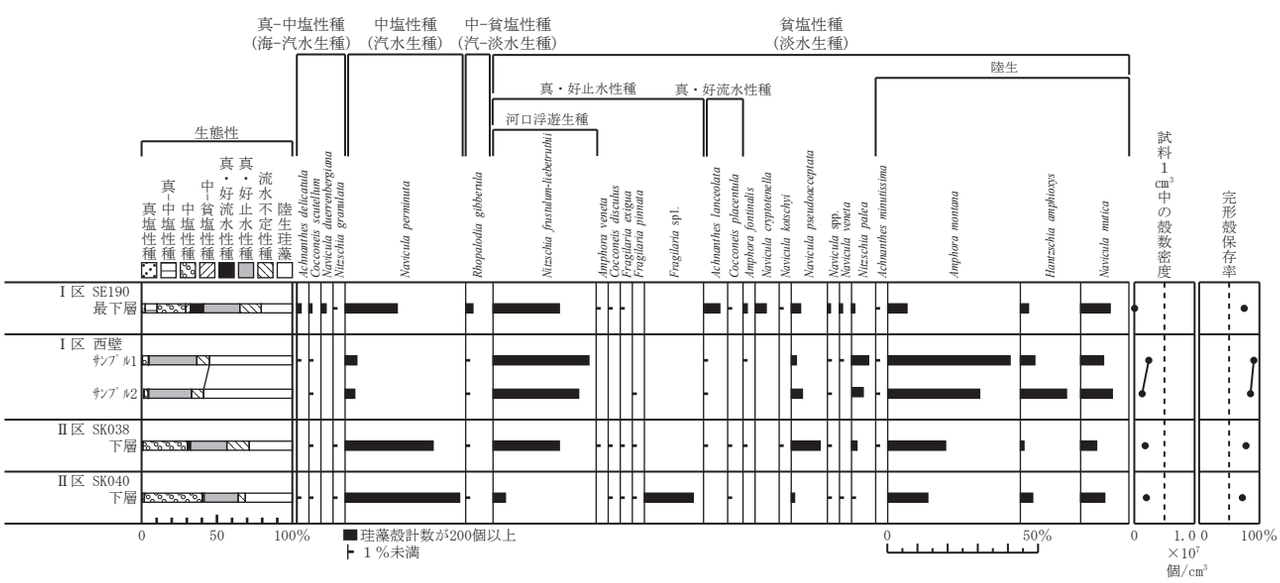
SE190最下層では、真塩性種（海水生種）から貧塩性種（淡水生種）まで多様な分類群が産出する。貧塩性種（淡水生種）で真・好止水性種が24％、陸生珪藻が21％と多く、次いで中塩性種（汽水生種）が19％を占める。比較的優占するのは、好止水性種で河口浮遊性種の*Nitzschia frustulum-liebetruthii*である。次に中塩性種（汽水生種）の*Navicula perminuta*の産出率が高い。他に貧塩性種（淡水生種）では、陸生珪藻の*Amphora montana*、*Hantzschia amphioxys*、真・好流水性種で中～下流性河川指標種の*Achnanthes lanceolata*、流水不定性種の*Navicula cryptotenella*、*Navicula pseudoacceptata*などが比較的多く、中－貧塩性種（汽－淡水生種）の*Rhopalodia gibberula*もやや多い。

西壁土層サンプル１、サンプル２では、珪藻の組成、構成ともに類似する傾向を示す。すなわち、陸生珪藻が59％から55％、真・好止水性種が29％から32％を占める。陸生珪藻では、*Amphora montana*を主に*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*の産出率が高い。真・好止水性種では、河口浮遊性種の*Nitzschia frustulum-liebetruthii*が優占する。他に流水不定性種の*Nitzschia palea*、*Navicula pseudoacceptata*、中塩性種（汽水生種）の*Navicula perminuta*が低率に産出する。

２）第Ⅱ区：SK038下層、SK040下層

SK038下層では、中塩性種（汽水生種）が29％、陸生珪藻が29％、真・好止水性種が24％、流水不定性種が15％を占める。中塩性種（汽水生種）の*Navicula perminuta*、真・好止水性種で河口浮遊生種の*Nitzschia frustulum-liebetruthii*、陸生珪藻の*Amphora montana*の産出率が高く、流水不定性種の*Navicula pseudoacceptata*、陸生珪藻の*Navicula mutica*などが産出する。

SK040下層では、中塩性種（汽水生種）が38％、陸生珪藻が31％、真・好止水性種が22％を占める。中塩性種（汽水生種）の*Navicula perminuta*が高率に産出し、真・好止水性種では、小型の*Fragilaria* sp1.と河口浮遊性種の*Nitzschia frustulum-liebetruthii*、陸生珪藻では、*Amphora montana*、*Navicula mutica*、*Hantzschia amphioxys*の産出率が高い。



第55図　主要珪藻ダイアグラム

第 15 表（1） 珪藻分析結果

分類群	Ⅰ区 SE190	Ⅰ区西壁		Ⅱ区 SK038	Ⅱ区 SK040
	最下層	サンプル 1	サンプル 2	下層	下層
貧塩性種（淡水生種）					
Achnanthes hungarica		1	1		
Achnanthes lanceolata	16	1	1	2	
Achnanthes minutissima	2	3	2	2	
Achnanthes saccula	1				
Amphora aequalis	1				
Amphora fontinalis	4	1		2	
Amphora montana	19	218	142	94	58
Amphora veneta	2			2	
Amphora spp.				1	
Caloneis bacillum				1	
Caloneis silicula				1	
Cocconeis disculus	1			2	1
Cocconeis placentula	2			3	2
Cymbella minuta	1				
Cymbella silesiaca	1			1	1
Cymbella sinuata	1			1	
Cymbella turgidula	1			1	1
Cymbella spp.	1				
Diploneis boldtiana					1
Diploneis elliptica	1				
Diploneis pseudovalis					1
Diploneis spp.	1				
Epithemia adnata				1	
Eunotia minor					1
Eunotia paludosa-rhomboidea				2	
Fragilaria construens	1			2	
Fragilaria construens v. venter				1	1
Fragilaria exigua	1			2	4
Fragilaria pinnata			2	1	1
Fragilaria spl.					71
Gomphonema clevei				1	
Gomphonema parvulum	2				
Gomphonema spp.	1				
Hantzschia amphioxys	8	26	71	6	18
Navicula confervacea					1
Navicula contenta			1	8	4
Navicula cohnii					1
Navicula cryptocephala	1				1
Navicula cryptotenella	11				
Navicula elginensis	1			1	
Navicula gallica				2	
Navicula kotschyi	1			3	
Navicula laevissima	1				
Navicula mutica	29	41	49	26	35
Navicula mutica v. ventricosa	1	6	8	1	3
Navicula pseudoacceptata	9	9	17	47	5
Navicula pusio	1				
Navicula veneta	3	1			1
Navicula spp.	3	3	3	1	4
Nitzschia debilis	1	1			
Nitzschia frustulum-liebetruthii	65	171	132	108	18
Nitzschia palea	3	30	17	9	3
Nitzschia umbonata					1

第15表（2） 珪藻分析結果

分類群	Ⅰ区 SE190	Ⅰ区西壁		Ⅱ区 SK038	Ⅱ区 SK040
	最下層	サンプル1	サンプル2	下層	下層
貧塩性種（淡水生種）					
Pinnularia borealis	1		1	1	1
Pinnularia microstauron					1
Pinnularia obscura				1	6
Pinnularia schoenfelderi				1	7
Pinnularia subcapitata					2
Pinnularia viridis				1	
Pinnularia spp.					3
Stauroneis lauenburgiana				1	
Surirella angusta	1			1	
Surirella ovata				1	1
中-貧塩性種（汽-淡水生種）					
Diploneis interrupta	1				
Navicula pygmaea	1				1
Rhopalodia gibberula	7	1	1	1	1
中塩性種（汽水生種）					
Achnanthes brevipes	1				
Amphora holsatica	2				
Melosira sp. n.					1
Navicula perminuta	51	21	15	143	166
Nitzschia compressa	1			1	
Rhopalodia musculus	1				1
真-中塩性種（海-汽水生種）					
Achnanthes delicatula	4	1			1
Amphora coffeaeformis	1				
Amphora ostrearia v. belgica	1				
Cocconeis scutellum	3	1	1	1	4
Cyclotella striata-stylorum	2				
Hemidiscus sp.	1				
Mastogloia sp.	1				
Navicula duerrenbergiana	5				
Navicula marina	1				
Nitzschia cocconeiformis	2		1		
Nitzschia granulata	1			2	1
Nitzschia punctata	1				
真塩性種（海水生種）					
Amphora marina	1				
Cocconeis pseudomarginata	1				
Grammatophora oceanica	2				1
Grammatophora sp.				1	
Nitzschia lanceola	1				
Odontella sp.					1
Thalassionema nitzschioides	2				
Triceratium scitulum		1			
合 計	97	25	19	156	199
未同定	13	4	4	8	7
破片	104	55	81	140	108
試料1㎤中の殻数密度	6.2×10^4	2.4×10^6	1.3×10^6	1.8×10^6	2.0×10^6
完形殻保存率（%）	51.4	34.5	22.1	53.9	65.6

（3）考察

1）第Ⅰ区　SE190最下層

好止水性種で河口浮遊生種の*Nitzschia　frustulum-liebetruthii*や中塩性種（汽水生種）の*Navicula perminuta*の産出率が高く、陸生珪藻も認められる。これらの特徴から、河口の汽水から淡水の浅くやや広い安定した水域が想定される。分析対象となった井戸内に、河口の水域から地下水が浸透してきたと推定される。陸生珪藻は湿った壁面に生育していたと推定される。

2）第Ⅰ区　西壁土層

サンプル1、サンプル2ともに*Amphora　montana*を主とする陸生珪藻と好止水性種で河口浮遊生種の*Nitzschia　frustulum-liebetruthii*の産出率が高い。こうした特徴から、いずれも調査地は河口の淡水域と湿った陸域が接する沿岸に立地していたと推定される。安定した水域で、停滞ないし緩やかに流れる環境が示唆される。

3）第Ⅱ区　SK038下層

中塩性種（汽水生種）の*Navicula　perminuta*の産出率が高く、好止水性種で河口浮遊生種の*Nitzschia　frustulum-liebetruthii*、*Amphora　montana*などの陸生珪藻も多い。こうした特徴から、河口の汽水から淡水の浅く広い安定した水域の環境が示唆され、周囲には湿った陸域が分布していたと推定される。

4）第Ⅱ区　SK040下層

中塩性種（汽水生種）の*Navicula　perminuta*の産出率が高く、好止水性種で小型の*Fragilaria* sp1.と*Amphora　montana*などの陸生珪藻が伴われる。これらの特徴から、汽水域でやや不安定な水域が示唆される。周囲には湿った陸域が分布していたと推定される。

○土壌分析のまとめ

箱崎遺跡92次発掘調査で花粉分析、植物珪酸体、珪藻分析を行った。各遺構および堆積層とも花粉化石が極めて少なく、堆積速度が速いか、淘汰を受け堆積したと推定された。各遺構および層準も周辺に河口の汽水から淡水の水域が分布しており、周囲には沿岸の湿った陸域の環境が分布していた。なお、時代によって水環境は変化しており、12世紀？のⅠ調査区西壁土層の時期は淡水域であり、調査地あるいは近傍に水田が分布していたと判断された。13･14世紀のⅠ調査区SE190最下層とⅡ調査区SK038下層の時期は、汽水も混在する環境へと移り変わり、同じく13･14世紀のⅡ調査区SK040下層では、ほぼ汽水の環境であったと推定された。Ⅱ調査区SK038下層とSK040下層は水田土壌の混入もしくは投棄が想定された。SK038の周辺には陽当たりの良い開けた比較的乾燥した環境が分布しており、回虫卵の少量の産出から、周辺に居住域ないし生活域があったとみなされた。

【参考文献】

（花粉分析）

土質工学会編（1979）土質試験法，p.2-5-1～2-5-23，4-2-1～4-3-11.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．木下正史編「新版古代の日本　第10巻　古代資料研究の方法」，角川書店，p.248-262.

金原正明（1999）寄生虫．西田豊弘・松井　章編「考古学と動物学」，同成社，p.151-158.

金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物．医動物学「医動物学　付　実験用動物学　新版

臨床検査講座，8」，医歯薬出版，p.9-134.
中村　純（1967）「花粉分析」．古今書院，232p.
中村　純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，p.187-193.
中村　純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，no.10，p.21-30.
中村　純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録，5，60p.
Warnock, P. J. and Reinhard, K. J.（1992）Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Jounal of Archaeological Science, 19, p.231-245.
（植物珪酸体分析）
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.
杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－．考古学と自然科学，19，p.69-84.
杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追及のための基礎資料として－．考古学と自然科学，20，p.81-92.
（珪藻分析）
安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用．東北地理，42，p.73-88.
Asai,K.&,Watanabe,T.（1995）Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relaiting to Organic Water Pollution（２）Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom,10,p.35-47.
Hustedt,F.（1937－1938）Systematische und ologishe Untersuchungen uber die DiatomeenFlora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch.Hydrobiol,Suppl.15，p.131－506.
伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，６,p.23-45.
K. Krammer・H.Lange-Bertalot（1986-1991）Bacillariophyceae,vol.2,no.1-no.4
小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－．植生史研究，第１号，植生史研究会，p.29-44.
小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p. 1 -20.
Lowe,R.L.（1974）Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh－water diatoms. 333p., National Environmental Reserch.Center.
渡辺仁治（2005）淡水珪藻生態図鑑　群集解析に基づく汚濁指数DAIpo, pH耐性能．内田老鶴圃，666p.

第２項　SR152出土鉄釘の観察と木棺構造の推定

小林　啓（九州歴史資料館）

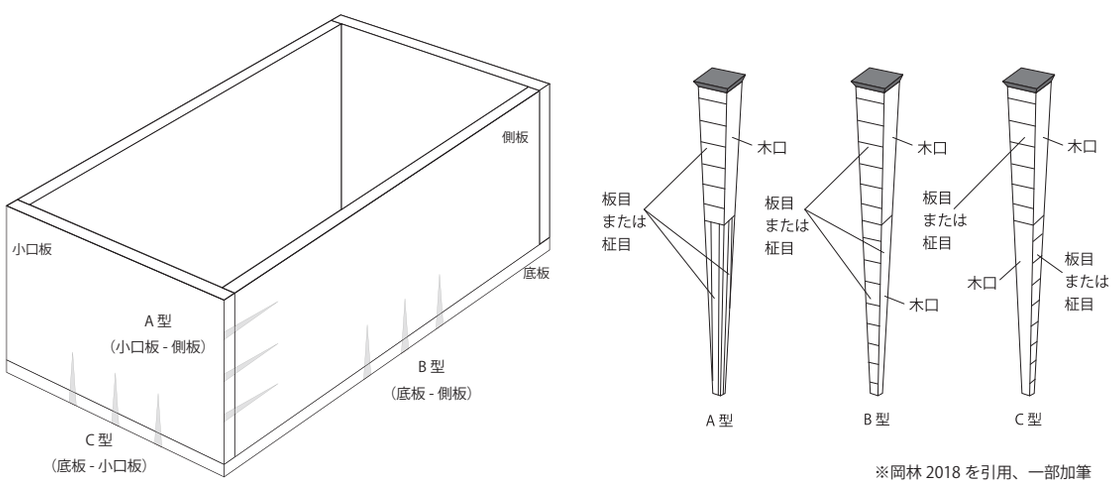
１．はじめに

箱崎遺跡第92次調査のSR152からは木棺に使用した鉄釘が10数点出土している。木棺自体は木材のため埋蔵中に腐朽して既に失われているが、鉄釘には木棺の存在を示す木材の痕跡が錆化した状態で残存している。鉄釘にわずかに残る木材の痕跡を各種顕微鏡で観察し、木材の組織・構造など解剖学的形質を根拠に分類することで木棺構造の推定が可能である。本稿では鉄釘に残存する木材を観察・分類し、木棺構造について推定した結果について報告する。

２．器物の基礎構造

木棺をはじめとする箱型の器物の基本的な構造と使用する釘の部位については概ね以下の様に定義されている。

・器物の身は底板１枚・側板２枚・小口板２枚の５枚で構成する
・底板・側板の木取りは材の繊維方向が板の長軸報告に一致する
・小口板の木取りは材の繊維方向が水平になる
・側板と小口板は底板の上に乗る
・釘付される板材の組合せは、小口板と側板、底板と側板、底板と小口板の３通り



第 56 図　器物の基礎構造（左）と釘の木質パターン（右）

上記定義により釘に反映される木材断面のパターン（以下、木材パターン）は第56図の様になる。SR152から出土した13点の鉄釘に対し、鉄釘の頭部側と先端部側の木材パターンを顕微鏡観察により特定し、出土状況等と比較・検討することで木棺構造を推定する。

３．鉄釘の観察結果

鉄釘13点の顕微鏡観察の結果を第16表に示す。内訳はＡ型７点、Ｂ型２点、Ｃ型２点、不明１点である。Ａ型の198・201・202・203・204は頭部側の木材パターンを確認することができなかったが、先端部側の木材の繊維方向が釘の長軸と平行となるためＡ型と判断できる。各釘の出土状況は、Ａ型は木棺推定範囲の四隅、Ｂ型・Ｃ型は北側の木棺推定線の北側短軸にそれぞれ集中している。

第 16 表　鉄釘の観察結果

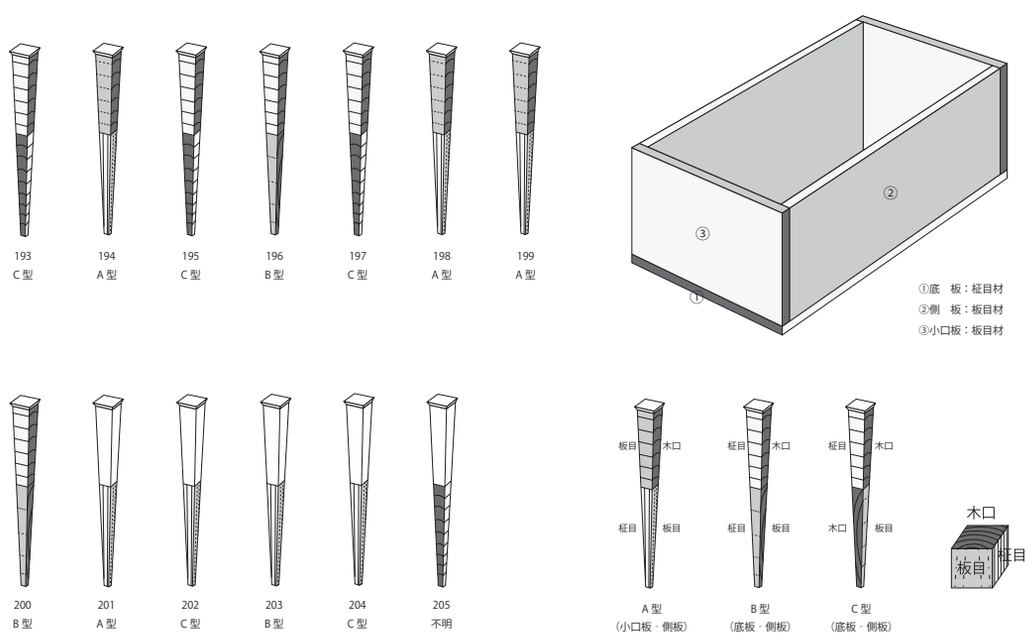
図番号	観察結果		
	木材パターン	頭部	先端部
第 34 図 193	C 型	柾目 - 木口	木口 - 柾目
第 34 図 194	A 型	板目 - 木口	柾目 - 板目
第 34 図 195	C 型	柾目 - 木口	木口 - 柾目
第 34 図 196	B 型	柾目 - 木口	板目 - 木口
第 34 図 197	C 型	柾目 - 木口	木口 - 柾目
第 34 図 198	A 型	板目 - 木口	柾目 - 板目
第 34 図 199	A 型	板目 - 木口	柾目 - 板目

図番号	観察結果		
	木材パターン	頭部	先端部
第 34 図 200	B 型	柾目 - 木口	板目 - 木口
第 34 図 201	A 型	-	柾目 - 板目
第 34 図 202	A 型	-	柾目 - 板目
第 34 図 203	A 型	-	柾目 - 板目
第 34 図 204	A 型	-	柾目 - 板目
第 34 図 205	不明	-	木口 - 柾目

4．若干の考察 - 木棺の構造の推定 -

鉄釘の木材パターンからSR152に納められた木棺の構造について推定する。木棺を構成する小口板・側板・底板が第56図の定義により全て板目材と仮定した場合、鉄釘の木材パターンは、A型は頭部が柾目 - 木口・先端部が柾目 - 板目、B型は頭部が柾目 - 木口・先端部が柾目 - 板目、C型は頭部が柾目 - 木口・先端部が木口 - 板目となる。観察結果と比較すると、B型は一致するが、A型の頭部とC型の先端部がこれと一致せず、仮定した木棺の構造に矛盾が生じることになる。

A型は小口板と側板、C型は底板と小口板の連結に用いるものであり、矛盾の生じたA型の頭部とC型の先端部はいずれも小口板の木取りを示すものである。そこで小口板を板目材ではなく柾目材とすると、A・B・C型全ての木材パターンが矛盾なく一致する。鉄釘の木材パターンにより、SR152の木棺は小口板が柾目材、側板と底板が板目材で構成されていた可能性が推定できる。



第 57 図　鉄釘の木材パターン（左）と木棺の想定図（右）

【参考文献】

岡林孝作2018『古墳出土の釘に付着した材組織の観察からみた木棺の用材利用法と棺構造の復元的研究』平成27年度～平成29年度科学研究費助成事業（基盤研究（C））研究成果報告書　奈良県立橿原考古学研究所

第６節　総括

箱崎遺跡第92次調査では、鎌倉、室町、戦国、江戸時代、近代にかけての遺構・遺物を確認した。以下では、調査成果を箱崎遺跡の他地点の調査成果と比較しつつ報告の補足を行い、総括に代えたい。文中の「○次」は箱崎遺跡内の調査次数を指し、「○集」は福岡市埋蔵文化財調査報告書の集数を指す。

第Ⅰ区で弥生時代中期土器片（第15図47）と黒曜石片（第２表5098、第５表5125）が、第Ⅱ区で弥生時代後期末土器片（第44図254）が確認され、この時期の活動痕跡がわずかながらうかがわれる。箱崎遺跡では、20次Ⅰ区（767集）で夜臼式甕片が、６次（459集）・26次（853集）で磨製石斧が出土している。

第Ⅰ区では、下層の第２面で、本格的な居住域（第１面）形成前の地割りや整地・埋め立てに関係しそうな溝を数条確認した。第２面上・第１面下の堆積層は、遺物や炭を含む汚れた暗色粘質砂やブロック土堆積である。明確な整地層や埋め立ての単位が把握できたわけではないが、客土的な様相も示している。

第Ⅰ区第２面の木棺墓SR152は、鉄釘の位置から木棺サイズを幅58×長さ168㎝と推定した。箱崎遺跡の他の木棺墓の推定サイズを見ると、21次（705集）・SX153（65×170㎝。12世紀中頃）、SX456（50×180㎝。12世紀中頃）、22次（811集）・SX0023（60×135㎝。12世紀前半～中頃）、SX0024（50×160㎝。12世紀後半）、SX0033（60×180㎝。12世紀後半）、SX0040（55×170㎝。12世紀後半）、SX050（70×200㎝。12世紀後半）、27次Ｃ区（812集）・SK2028（55×180㎝。13世紀前後）、37次（951集）・SK290（50×150㎝。12世紀中頃～後半）、41次（854集）・SK63（50×150㎝。12世紀中頃～後半）、46次20-c区（948集）・SX25（40×180㎝。13世紀後半～14世紀）などを確認できる。副葬品の量や質には違いがあるが、12～13世紀という時期や、木棺の大きさ（50～70×160～180㎝）は概ね同じである。墓壙上に礫を配置する事例は、24次（768集）・SX07（12世紀中頃）がある。24次SX07の上部石組は2.5×1.5ｍの範囲で、墓壙内に木棺や鉄釘は確認されていないが、墓壙底面に礫を配置する点が、本調査SR152と共通する。

第Ⅱ区の土師器埋納土坑SX044については、１．小皿は上向きに正置する、２．坏は伏せる、３．大半がヘラ切り底の坏・小皿の中に、糸切り底の小皿（231）と坏（236）が１点ずつ含まれる、４．他よりも細かく割られる小皿・坏があり（231・232・236）、うち231・236は糸切り底である、５．下層の土師器と上層の土師器の埋没に時間差がある、などの特徴を指摘できる。土師器の埋納行為における何らかの所作を反映している可能性がある。

第Ⅱ区では、石組・結桶を井筒とする井戸SE063（16世紀後半埋没）を確認した。石組・結桶井戸は、３次（262集）・SE09（15～16世紀）、23次（551集）・SE01（17世紀後半）、27次Ａ区（812集）・SE049（14世紀代か）、40次（948集）・SE01（15世紀後半代か）、41次（854集）・SE33（時期不明）、46次20-b区（948集）・SE220（時期不明）、64次（1128集）・SE1147（14世紀頃）、67次（1165集）・SE307（最下部の井筒は曲物と推定。14世紀以降）、73次（1316集）・SE044（17世紀頃）などを確認できる。23次・SE01は石組に６点の板碑を転用しており、本調査のSE063と共通点がある。SE063出土の石造品については、井戸石組には板碑（352・353・354）が転用され、井筒内には石塔（350・351）が投棄される、という区別がある。いずれの石造品も長さ20～30㎝程度に割られている。

以上、発掘作業・整理報告作業ともに十分なものではなかったが、箱崎遺跡第92次調査によって、箱崎遺跡北東端の資料が新たに取得された。今後の箱崎遺跡研究への寄与が期待される。

１．第Ⅰ区第１面全景（北から）

２．第Ⅰ区作業風景（南から）

図版２

１．第Ⅰ区第１面全景（南東から）

２．第Ⅰ区 SE096 ほか（南西から）

１．第Ⅰ区第２面南側（南東から）

２．第Ⅰ区第２面北側（南東から）

１．調査区南壁土層（東側）

２．調査区南壁土層（西側）

３．調査区西壁土層（南側）

４．調査区西壁土層（中央）

５．調査区西壁土層（北側）

６．中央ベルト土層（西側）

７．中央ベルト土層（東側）

１．SL051（西から）

２．SL147（南から）

３．SK008（北東から）

４．SK023（南東から）

５．SK025（北西から）

６．SK063（東から）

７．SK014（南東から）

８．SK153（北東から）

図版６

１．SK027（南東から）

２．SK006（東から）

３．SK131（北から）

４．SK005（東から）

５．SK073（北から）

６．SK019（東から）

７．SK026（南西から）

８．SK018（南から）

１．SK138（南東から）

２．SK022（東から）

３．SK022（北東から）

４．SE035（東から）

５．SE155（東から）

６．SE056（南東から）

７．SE047（北西から）

８．SR152（北東から）

図版８

１．SR152（北東から）

２．SR152（北から）

３．SR152（東から）

４．SR152（南から）

５．SR152（北から）

６．SX168（南西から）

７．SE196（南西から）

８．SE195（南西から）

１．SE193（南西から）

２．SE193（南西から）

３．SE192（南西から）

４．SE191（南西から）

５．SE190（北から）

６．SE190（南西から）

７．SE158（南東から）

８．SE158（南西から）

図版 10

１．SK160（南から）

２．SD164・165（南東から）

３．SD161・162（南東から）

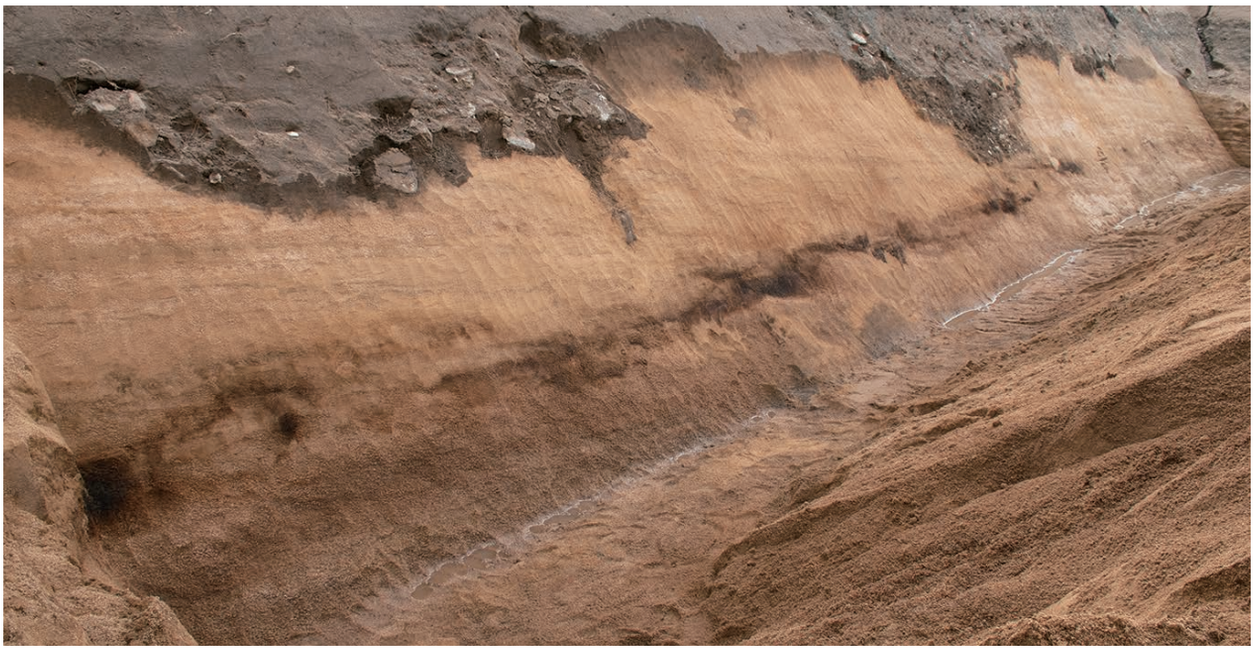
４．SD163（南西から）

1．第Ⅱ区全景（西から）

図版 12

1．第Ⅱ区全景（北西から）

2．第Ⅱ区全景（南東から）



１．調査区南壁土層東側（東から）

２．調査区南壁土層西側（北から）

３．調査区西壁土層南側（東から）

1．SX044 上部（南西から）

2．SX044 下部（南西から）

3．SK034（北西から）

4．SK033（南西から）

5．SK030（南西から）

6．SK042（西から）

7．SK042（南から）

8．SK042（東から）

1．SK037（南西から）

2．SK035（南西から）

3．SK032（西から）

4．SK038（東から）

5．SK036（南から）

6．SK040（南東から）

7．SK022（東から）

8．SK054（南から）

図版 16

1．SK056（北東から）

2．SK057（北西から）

3．SK020（北西から）

4．SK019（南西から）

5．SK002（北西から）

6．SE039 井筒（南西から）

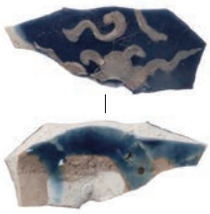
7．SE063 井筒（北西から）

8．SE064 井筒（北西から）

1．SE039（北東から）

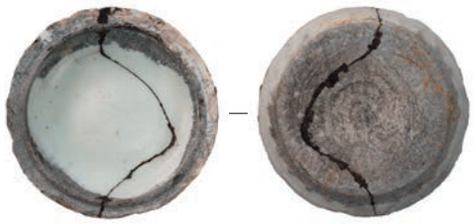
2．SE063（北西から）

1．6図3



2．12図17

3．13図25



4．15図35

5．13図32

6．15図42

7．15図48

8．16図59

9．16図60

10．16図61

11．26図137

12．32図166

13．24図128～134

1．第Ⅰ区出土遺物（縮尺不同）

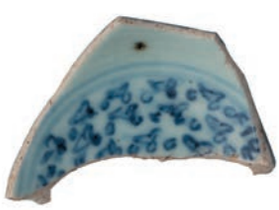
1．38 図 209 ～ 236

2．39 図 237

3．44 図 243

4．45 図 268

5．45 図 270



6．48 図 274

7．48 図 276

8．49 図 288

9．49 図 295

2．第Ⅱ区出土遺物（縮尺不同）

図版 20

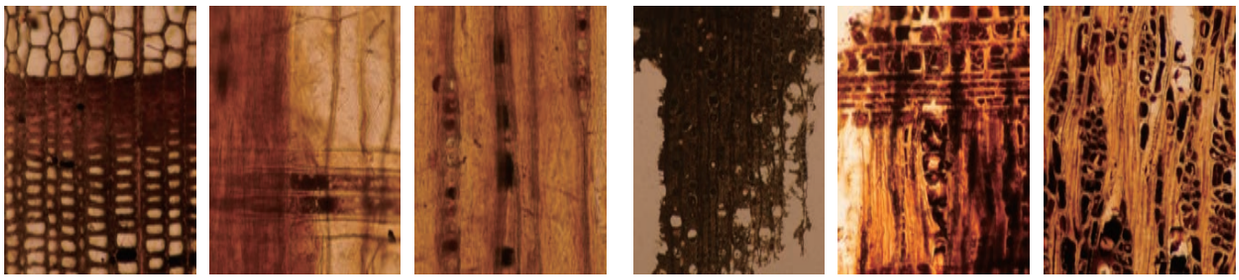
1 フネガイ科？	(No.35 Ⅰ区 Ⅱ下層４区)	
2 イボタガキ科？	(No.51 Ⅱ区 SK038)	
3 サメ類椎骨	(No.56 Ⅱ区 SK057下層)	
4 ハタ科歯骨 左	(No.14 Ⅰ区 SE195堀方)	
5 ハタ科前鰓蓋骨 左	(No.14 Ⅰ区 SE195堀方)	
6 アジ科稜鱗	(No.38 Ⅱ区 SE039井筒内下層土)	
7 クロダイ属歯骨 左	(No.54 Ⅱ区 SK042)	
8 マダイ前頭骨	(No.31 Ⅰ区 SX188)	
9 マダイ上後頭骨	(No.31 Ⅰ区 SX188)	
10 フグ科歯骨 左	(No.40 Ⅱ区 SE039井筒下層)	
11 ヒラメ椎骨	(No.14 Ⅰ区 SE195堀方)	
12 カレイ科椎骨	(No.53 Ⅱ区 SK042)	
13 カエル類橈尺骨 左	(No.37 Ⅱ区 SE039)	
14 スッポン中腹骨板	(No.5 Ⅰ区 SK160)	
15 ヘビ類椎骨	(No.52 Ⅱ区 SK038下層)	
16 ヒト頭頂骨	(No.15 Ⅰ区 SE196)	
17 ヒト下顎骨	(No.13 Ⅰ区 SE193堀方)	
18 ヒト歯(第一大臼歯)	(No.20 Ⅰ区 SR152頭骨付近)	
19 ヒト脛骨 右	(No.49 Ⅱ区 SK036 R1)	
20 ネズミ科下顎骨 左	(No.7 Ⅰ区 SE035土サンプル)	
21 ネズミ科上腕骨 左	(No.7 Ⅰ区 SE035土サンプル)	

1-5, 7-11, 13, 14, 16-19 ━ 5.0mm
6, 12, 15, 20, 21 ━ 1.0mm
※()内は、検出箇所

１．動物骨類１

22 イヌ下顎骨 左　(No.28 Ⅰ区 SD163)
23 イヌ大腿骨　(No.2 Ⅰ区 SP074)
24 ウマ歯 右　(No.13 Ⅰ区 SE193堀方)
25 ウマ上腕骨 右　(No.24 Ⅰ区 １面下４区 R1)
26 ウマ基節骨(後肢)　(No.36 Ⅰ区 黒褐層(Ⅱ下層)T6南)
27 クジラ目椎骨　(No.12 Ⅰ区 SE193)
28 イルカ類歯　(No.10 Ⅰ区 SE190)
29 イルカ類椎骨　(No.18 Ⅰ区 SX036)
30 ニホンジカ？鹿角　(No.46 Ⅱ区 SK020)
31 ニホンジカ肩甲骨 左　(No.30 Ⅰ区 SX180)
32 ニホンジカ下顎骨 左　(No.14 Ⅰ区 SE195堀方)

22-24, 26, 28 ━ 5.0mm
25, 27, 29-32 ━ 5.0mm
※()内は、検出箇所



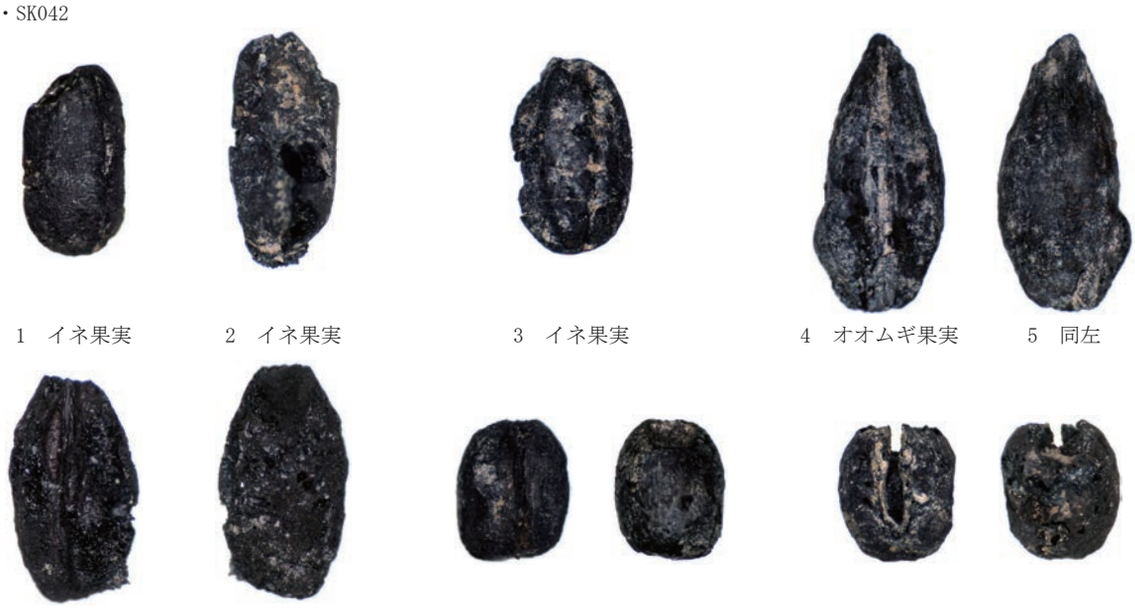
0.1 mm　0.1 mm　0.1 mm　0.1 mm　0.1 mm　0.1 mm

横断面　放射断面　接線断面　横断面　放射断面　接線断面

スギ　No.11　イスノキ　No.2

1．木材

・SK042



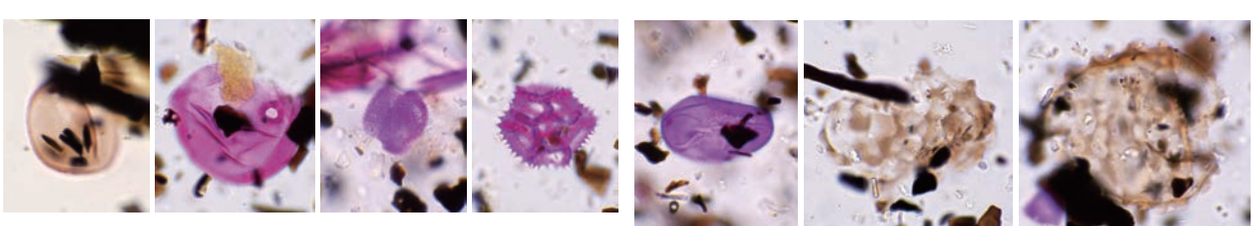
1　イネ果実　2　イネ果実　3　イネ果実　4　オオムギ果実　5　同左

6　オオムギ果実　7　同左　8　オオムギ果実　9　同左　10　オオムギ果実　11　同左

1～3：1.0mm　4～11：1.0mm

2．炭化種実

※()内は、検出箇所



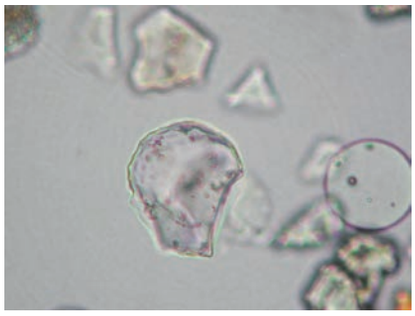
1　2　3　4　5　6　7

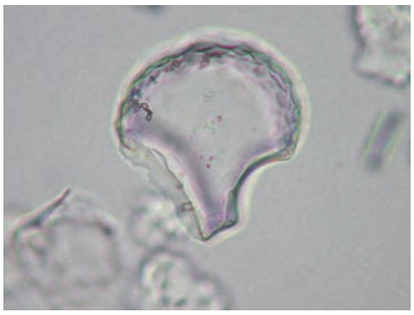
1　スギ（Ⅰ区SE190最下層）　2　イネ科（Ⅱ区SK038下層）　3　アブラナ科（Ⅱ区SK038下層）　4　タンポポ亜科（Ⅱ区SK038下層）

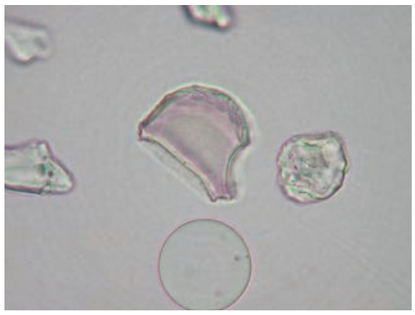
5　シダ植物単条溝胞子（Ⅰ区SE190最下層）　6　回虫卵（Ⅱ区SK038下層）　7　回虫卵（Ⅱ区SK038下層）

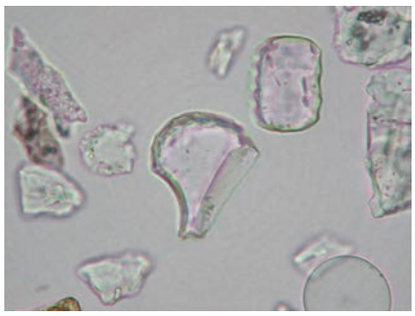
10μm

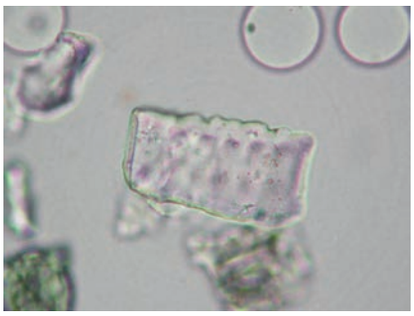
3．花粉

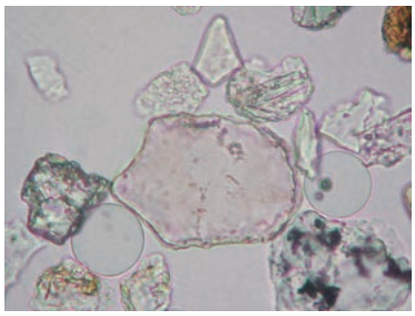

イネ（Ⅰ区西壁サンプル1）

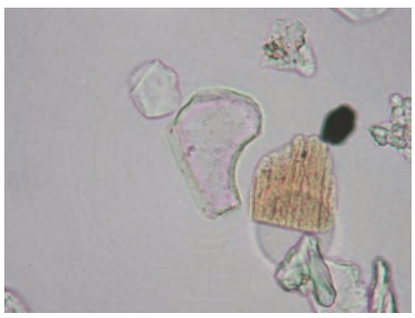

イネ（Ⅰ区西壁サンプル2）


イネ（Ⅱ区SK038下層）

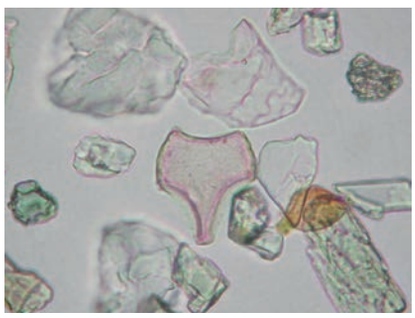

イネ（Ⅱ区SK040下層）

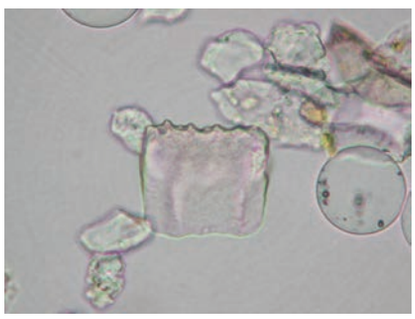

キビ族型（Ⅱ区SK040下層）

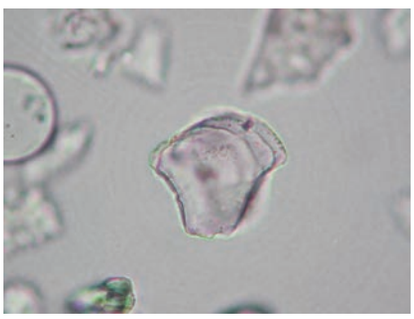

ヨシ属（Ⅱ区SK038下層）

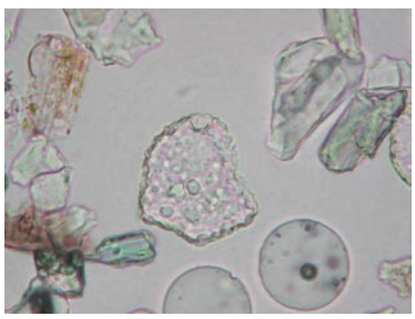

ススキ属型（Ⅱ区SK038下層）

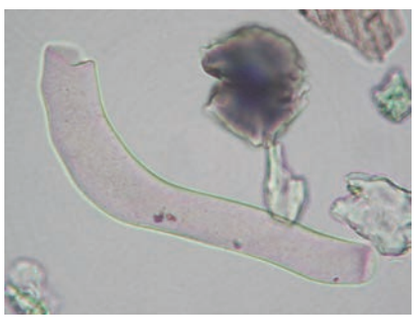
ウシクサ族型（Ⅱ区SK038下層）

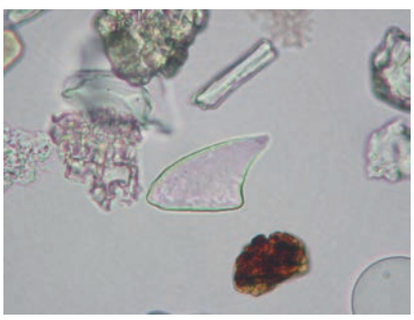

シバ属型（Ⅰ区西壁サンプル1）

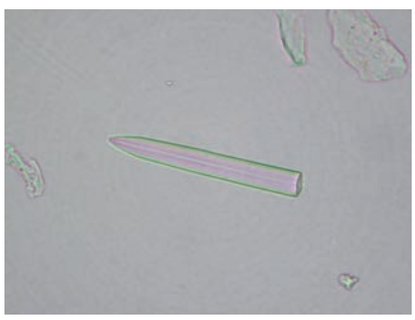

ネザサ節型（Ⅰ区西壁サンプル1）


メダケ節型（Ⅰ区西壁サンプル1）


ミヤコザサ節型（Ⅱ区SK040下層）


イスノキ属（Ⅱ区SK038下層）


表皮毛起源（Ⅱ区SK040下層）


海綿骨針（Ⅰ区SE190最下層）

50μm

1．植物珪酸体

※()内は、検出箇所

1 *Cocconeis scutellum*
（Ⅱ区SK040 下層）

2 *Navicula perminuta*
（Ⅱ区SK040 下層）

3 *Rhopalodia gibberula*
（Ⅰ区西壁ｻﾝﾌﾟﾙ2）

4 *Achnanthes minutissima*
（Ⅰ区SE190最下層）

5 *Amphora fontinalis*
（Ⅰ区SE190最下層）

6 *Amphora montana*
（Ⅰ区西壁ｻﾝﾌﾟﾙ2）

7 *Cocconeis placentula*
（Ⅰ区SE190最下層）

8 *Fragilaria* sp1.
（Ⅱ区SK040 下層）

9 *Hantzschia amphioxys*
（Ⅰ区西壁ｻﾝﾌﾟﾙ2）

10 *Navicula kotschyi*
（Ⅰ区SE190最下層）

11 *Navicula mutica*
（Ⅱ区SK038下層）

12 *Navicula pseudoacceptata*
（Ⅰ区西壁ｻﾝﾌﾟﾙ2）

13 *Navicula veneta*
（Ⅰ区SE190最下層）

14 *Nitzschia frustulum -liebetruthii*
（Ⅰ区西壁ｻﾝﾌﾟﾙ2）

15 *Nitzschia palea*
（Ⅱ区SK040 下層）

10μm

1．珪藻

第３章　第102次調査の記録（１）

第１節　調査の概要

第102次調査地点は、旧九州大学箱崎キャンパス内の工学部本館及び心理学教室の西側に位置し、九州大学埋蔵文化財調査室が設定する箱崎キャンパス発掘調査グリッドでは、M・N–34～39内に該当する。総調査面積は3,411.3㎡、調査期間は令和元年９月３日～令和２年２月28日である。

道路建設に伴う発掘調査であるため、調査区は狭長なものとなっており、また排土処理の都合もあって、調査は対象地を１～６の複数区に分けて実施した。そして調査着手ごとに番号を付したため、区番の配置は不規則となっている。また、遺構番号の割り振りは調査区ごとで行なっており、それぞれ４桁の番号を付し、４桁目を調査区番号としている。今回は、第102次調査５区の内、南西側に位置する２・４・６の各区（第58図）について報告を行ない、残りの北東側１・３・５区、及び調査成果の総括は令和４年度に行なう予定である。

第２節　２区の調査

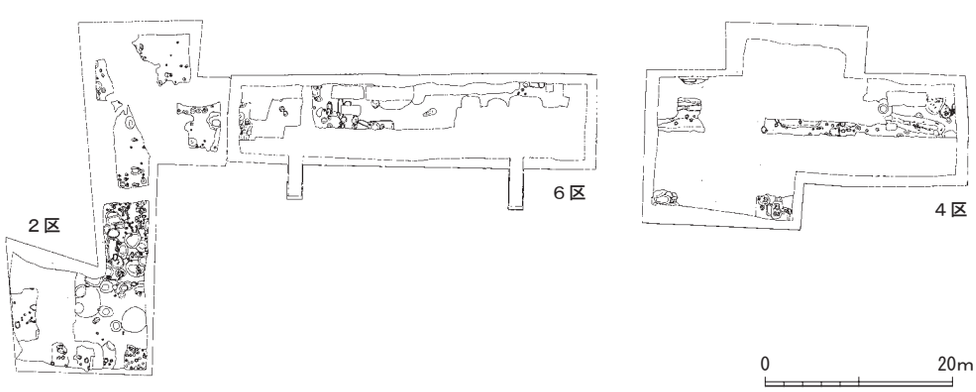
１．調査の概要

２区は第102次調査区南西端に位置する調査区であり、その西側は第92次調査第Ⅱ地点となる。調査面積は457.3㎡。調査はまず重機による表土の剥ぎ取りを行ない、表土下0.7～1.2m、標高2.3～2.6mの明黄褐色（2.5Y6/6）～黄褐色（2.5Y5/4）砂層（砂丘面）上に調査面を設定し、発掘を開始した（第59図）。大半の調査面は１面のみの調査であるが、調査区東端の一部では、表土下0.9m、標高2.8mの黄褐色（2.5Y5/4）砂層上で遺構を検出し、その下のオリーブ褐色（2.5Y4/3）砂質土を挟んだ黄褐色（2.5Y5/3）砂層上においても、遺構の存在を確認したため（第59図土層４）、このごく狭い部分のみ２面の調査を実施している。

２．遺構と遺物

（１）土坑（SK）

多数の柱穴と共に、２区中央付近で多数確認できた（第60図）。様々な形態のものが存在するが、平面形から軸線を窺うことのできるものは、九州大学構内建物も含む地域の地割りに沿う場合が多い。また、内部に多量の礫を充填するものが存在するが、これらは別項にて触れる。



第58図　第102次調査２・４・６区（1/80）

SK2001（第61図）

SK2020の南東側、SK2002の北西側に位置し、SK2013の一部を切り込んでいる。平面は北側の２辺がやや直線的な不整形を呈しており、長さ1.3m、幅1.0m、深さ0.5mを測る。壁面の立ち上がりは急で垂直に近く、底面は平坦である。

出土遺物（第63図１・２）

１・２は竜泉窯系青磁で、１は椀、２は盤の口縁部片。２は口縁部に輪花を有する。

SK2002（第61図）

SK2001の南東側に位置し、南東側をSK2005に切り込まれ、SK2003の南西側の一部を切り込んでいる。平面は整った長方形を呈し、長さ2.3m、幅1.0m、深さ0.3mを測る。壁面の立ち上がりは急で、垂直に近く、底面は平坦に仕上げられている。埋土は暗褐色砂質土（7.5YR3/3）を主とし、また出土遺物は土器のみで、釘等の鉄製品は出土していない。主軸はN-65°－Wである。

出土遺物（第63図３～６）

３は竜泉窯系青磁椀で、外面に蓮弁文を施す。４はC群の青花皿口縁部片。５はC群の青花椀。６は土師質の鍋で、外面に煤が付着している。

SK2003（第61図）

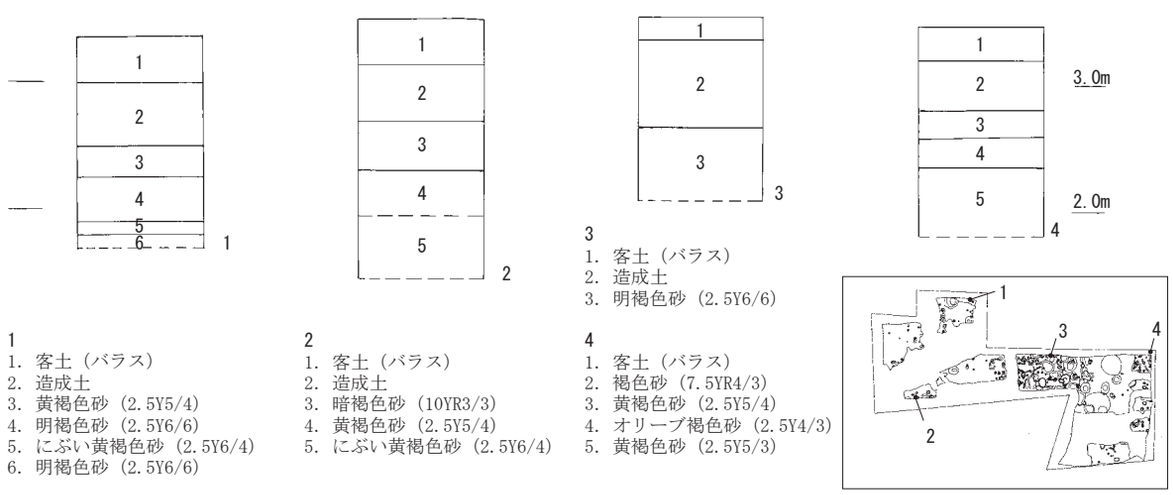
SK2002の北東隣に位置し、南側をSK2003・2005に切り込まれ、北側はSK2017に切り込まれる。平面は長さ1.8m、幅1.0mの楕円形を呈するが、南北の各辺はやや直線的である。壁面の立ち上がりは急で、底面は南東端において深くなり、穴状を呈する。深さは最深部（穴底部）で0.7m、その他は深さ0.5～0.6mで、比較的平坦である。埋土は褐色砂質土（7.5YR3/4）を主とする。

出土遺物（第63図34・35）

34は土師質の釜で、口径（復元）16.8cm。35は土師質の茶釜で、外器面に煤が付着している。

SK2005（第61図）

SK2002・2003の南東側に位置し、SK2002・2003の一部を切り込んでいる。平面は径1.3～1.4mの円形を呈し、深さは0.3mを測る。立ち上がりは急で、平面は平坦である。内部にいくつか礫が散乱していたが、上層部からの出土であり、記録は残していない。SK2008等の東側に位置する礫を内包する土坑からの混入も想定可能である。



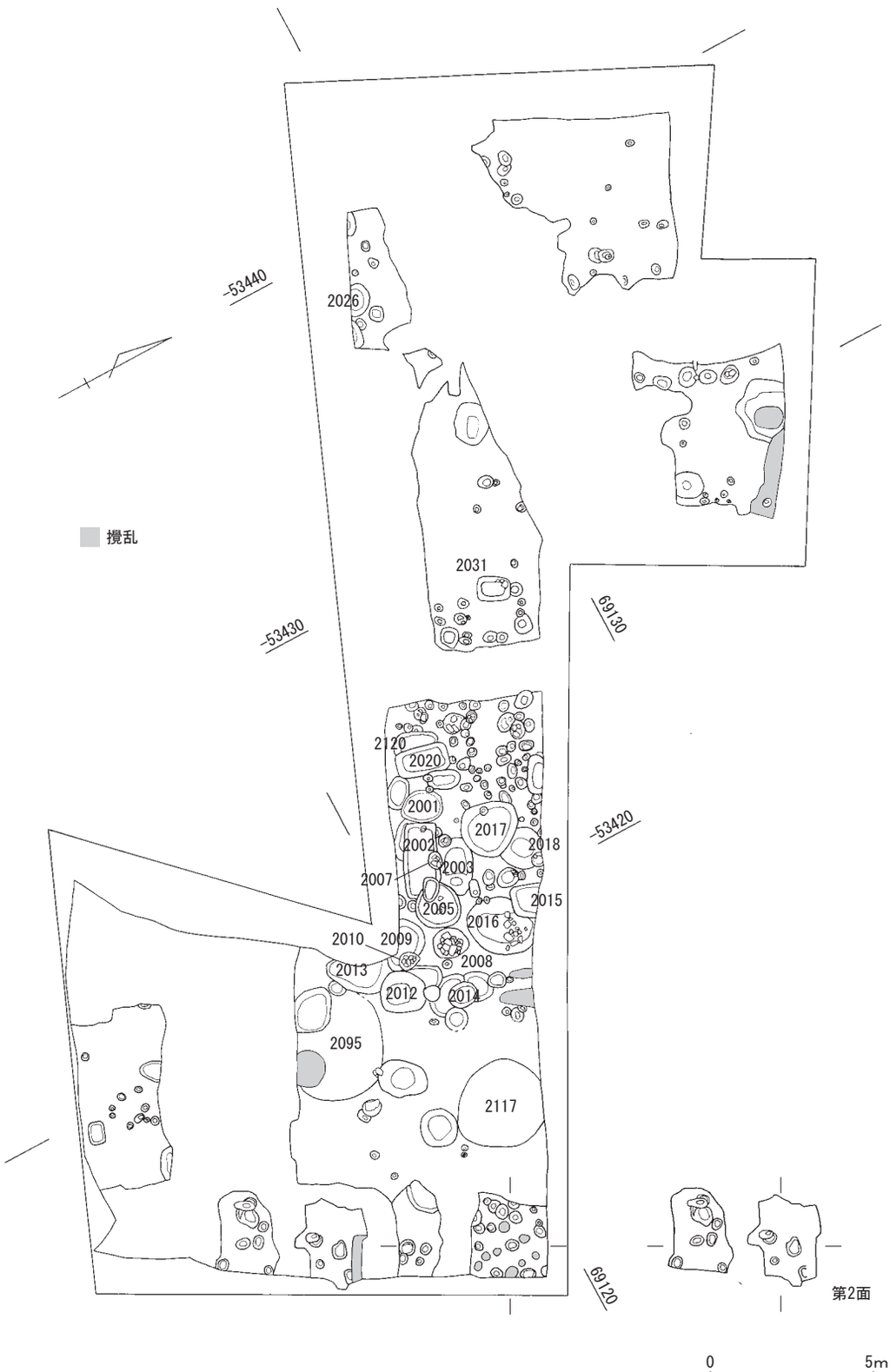
1
1. 客土（バラス）
2. 造成土
3. 黄褐色砂（2.5Y5/4）
4. 明褐色砂（2.5Y6/6）
5. にぶい黄褐色砂（2.5Y6/4）
6. 明褐色砂（2.5Y6/6）

2
1. 客土（バラス）
2. 造成土
3. 暗褐色砂（10YR3/3）
4. 黄褐色砂（2.5Y5/4）
5. にぶい黄褐色砂（2.5Y6/4）

3
1. 客土（バラス）
2. 造成土
3. 明褐色砂（2.5Y6/6）

4
1. 客土（バラス）
2. 褐色砂（7.5YR4/3）
3. 黄褐色砂（2.5Y5/4）
4. オリーブ褐色砂（2.5Y4/3）
5. 黄褐色砂（2.5Y5/3）

第59図　２区土層（1/1,000、1/60）



第60図　２区遺構配置（1/200）

出土遺物（第63図７～10）

７は土師皿、８・９は土師坏である。いずれも底部は糸切りで、７は口径（復元）7.2cm、８は口径（復元）10.0cm、９は口径（復元）12.4cmをそれぞれ測る。10は陶器の鉢で、口縁部内面に２条の突起を有する。

SK2009（第61図）

SK2005の南側に位置し、SK2010に切り込まれている。一部は調査範囲内にあり、全形を窺うことはできないが、長さ1.5m、幅0.8～1.0mの楕円～不整円形を呈するものといえようか。壁面の立ち上がりは急で、底面は平坦である。深さは0.3mを測る。

出土遺物（第63図－15・16）

15は口禿の白磁椀の口縁部片。16は白磁の小椀であり、内面見込みに目跡が残る。

SK2012（第61図）

SK2009の南東側に位置し、SK2013の一部を切り込んでいる。平面は径1.3～1.4mの円形を呈しているが、南側の２辺がやや直線的であること、底面の底面形が隅丸方形を呈していることを考えれば、この土坑は本来方形を呈していた可能性を考えることができる。壁面の立ち上がりは緩やかで、底面も傾きを有しており、その中心も土坑の南西側へと偏している。埋土はにぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）で、底面近くはやや黒みを帯び（10YR3/2）、粒子も細かい。

出土遺物（第63図17）

17は陶器で、瀬戸焼のおろし皿である。

SK2013（第61図）

SK2009・2012の南西側に位置し、これらに北東側の一部を切り込まれている。平面は長さ2.0m、最大幅1.1m程の不整形を呈し、南西側の壁面は明確な立ち上がりをみせるが、北東側へ向かうにつれて緩やかとなる。底面は凹面をなしており、深さは最大で0.5m程。

出土遺物

図示に耐えない小片が出土している。

SK2014（第62図）

SK2012の北東側に存在する。３基の土坑が切り合ったものであるが、遺構のあらかたを掘り上げるまでその判断ができず、３基を一括して番号を付しており、したがってここでは切り合い順に、2014－１（中央）、2014－２（南側）、2014－３（北側）とし、以下に所見を述べる。

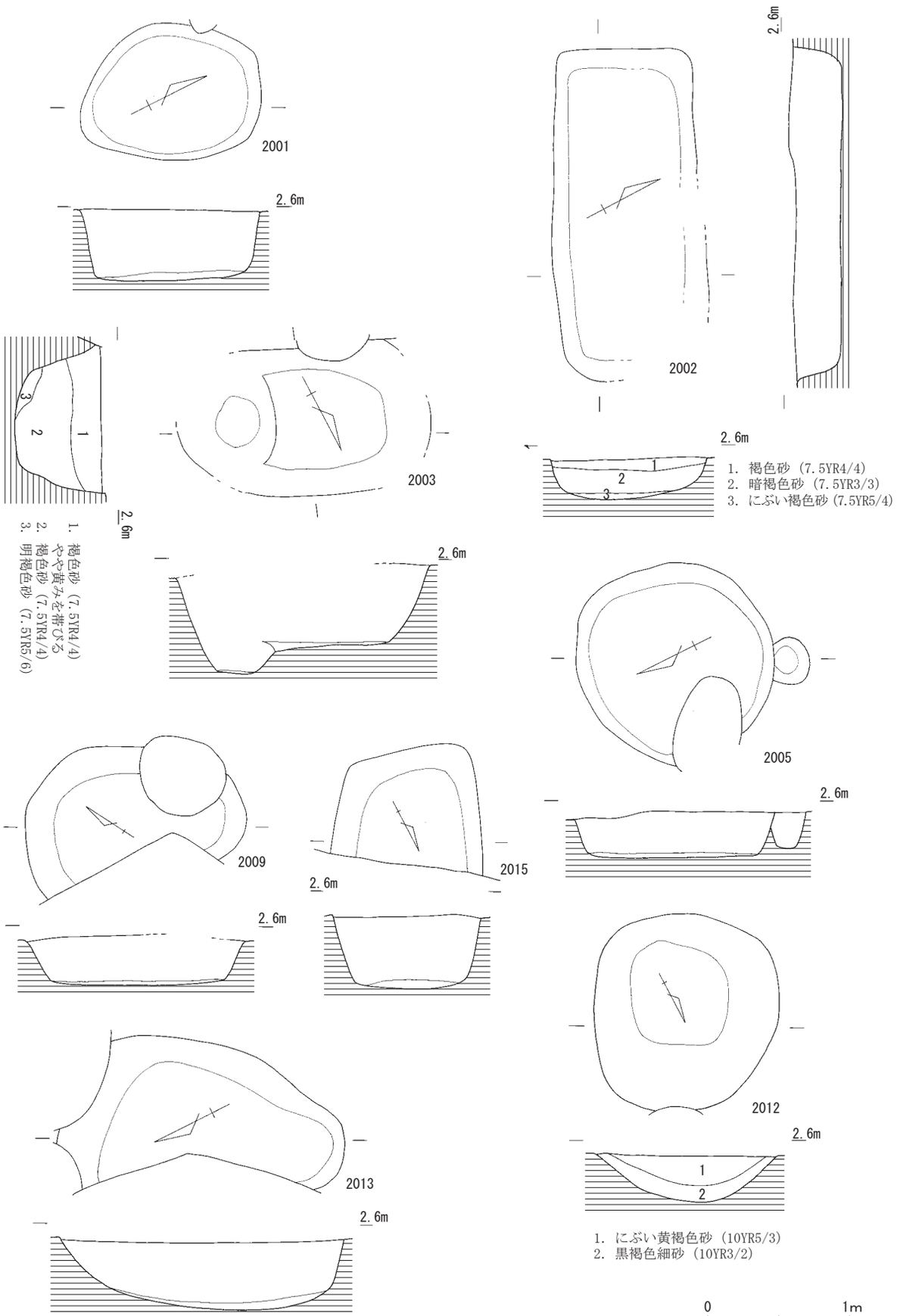
１は平面1.9×1.7m程の円形を呈し、深さは0.3m程である。壁面の立ち上がりは緩やかで、底面もやや凹面をなしている。２は平面が長さ1.4m、幅1.4m程の楕円形を呈し、深さは0.2mを測る。立ち上がりは緩やかで、底面もやや凹面をなしている。３は平面が径0.9m程不整円形を呈し、深さは0.1mである。立ち上がりはなだらかで、そのまま底面へとつながっている。

出土遺物（第63図23・24）

23は竜泉窯系青磁椀で、外面に蓮弁文を施す。24は朝鮮陶器であり、内面見込み及び高台畳付に目跡が残る。

SK2015（第61図）

SK2005の北東側に位置し、SK2016の一部を切り込んでいる。調査区内には一部のみが存在し、平面全形を窺うことはできないが、３辺が直線的な「コ」字を描く状況をみても、平面長方形に類する形態を想像することもできようか。壁面の立ち上がりは急で、底面も平坦である。長さ0.9m以上、幅1.0m、深さは0.5mを測る。



第61図　２区SK(1)（1/40）

出土遺物

図示に耐えない小片が出土している。

SK2016（第62図）

SK2015の南側に位置し、その一部を切り込まれている。平面は長さ2.2m、幅1.8m程の楕円形を呈し、深さは0.4～0.5mを測る。立ち上がりは緩やかで、底面は凹面をなしている。図では、土坑の北半のみに礫が散布する状況を示しているが、これは半裁して南半の調査を先に行なった際、出土したいくつかを図化せず取り上げてしまったためで、本来の礫散布範囲はもう少し広いものとなる。礫はまとまらず、個々が分散し南西側へ傾斜して出土しており、土坑廃棄の際、出土した土器と共に北東側の他所、おそらく調査区外から流入したものであることが分かる。

出土遺物（第63図18～22・37～42）

18は白磁皿の口縁部片。19は朝鮮陶器の椀底部片で、高台畳付の４カ所を掻き取っている。内面見込みには目跡が残る。20～22は土師皿。いずれも底部は糸切り。37～39は土師質の捏鉢。40は土師質の釜で、外面に煤が付着する。41・42はすり鉢で、共に土師質である。

SK2017（第62図）

SK2003の北側に位置し、その一部を切り込んでいる。平面は1.8×1.6mの不整円形を呈し、深さは0.8mを測る。壁面の立ち上がりは急で、底面もほぼ平坦である。

出土遺物（第63図11～14・35・36）

11・12は土師皿、13は土師坏である。いずれも底面は糸切りによる。14は台付の土師皿で、台部には煤が付着している。35・36はいずれも須恵質で、35は鉢の口縁部片、36は底部片である。

SK2018（第62図）

SK2017の東側に位置し、西側の一部を切り込まれている。平面は径1.3m程の円形を呈し、深さは0.4m程である。底面も0.7×0.5m程の円形をなしている。壁面の立ち上がりは緩やかで、底面は狭い。

出土遺物

図示に耐えない小片が出土している。

SK2020（第62図）

SK2001の北西側に位置し、ＳＫ2120東側を切り込んでいる。平面は長さ1.6m、幅0.8m程の長方形を呈し、深さは0.2m程である。壁面の立ち上がりは明確で、底面も平坦である。出土遺物は土器等のみで、釘等の鉄製品は出土していない。土坑の主軸はＮ－10°－Ｅである。

出土遺物（第63図25～29）

25はＣ群の青花椀。26・27は土師皿で、底面はいずれも糸切り。28・29は土錘。

SK2026（第62図）

調査区北西側に位置するもので、北西側の一部は調査区外にあり、全形を知ることはできないが、平面は長さ1.0m、幅0.8m程の楕円形を想定することができようか。深さは0.2～0.3mである。壁面の立ち上がりはなだらかで、そのまま底面へと続いている。

出土遺物（第63図30～32）

30は青磁椀の口縁部片。31は土錘、32は石錘である。

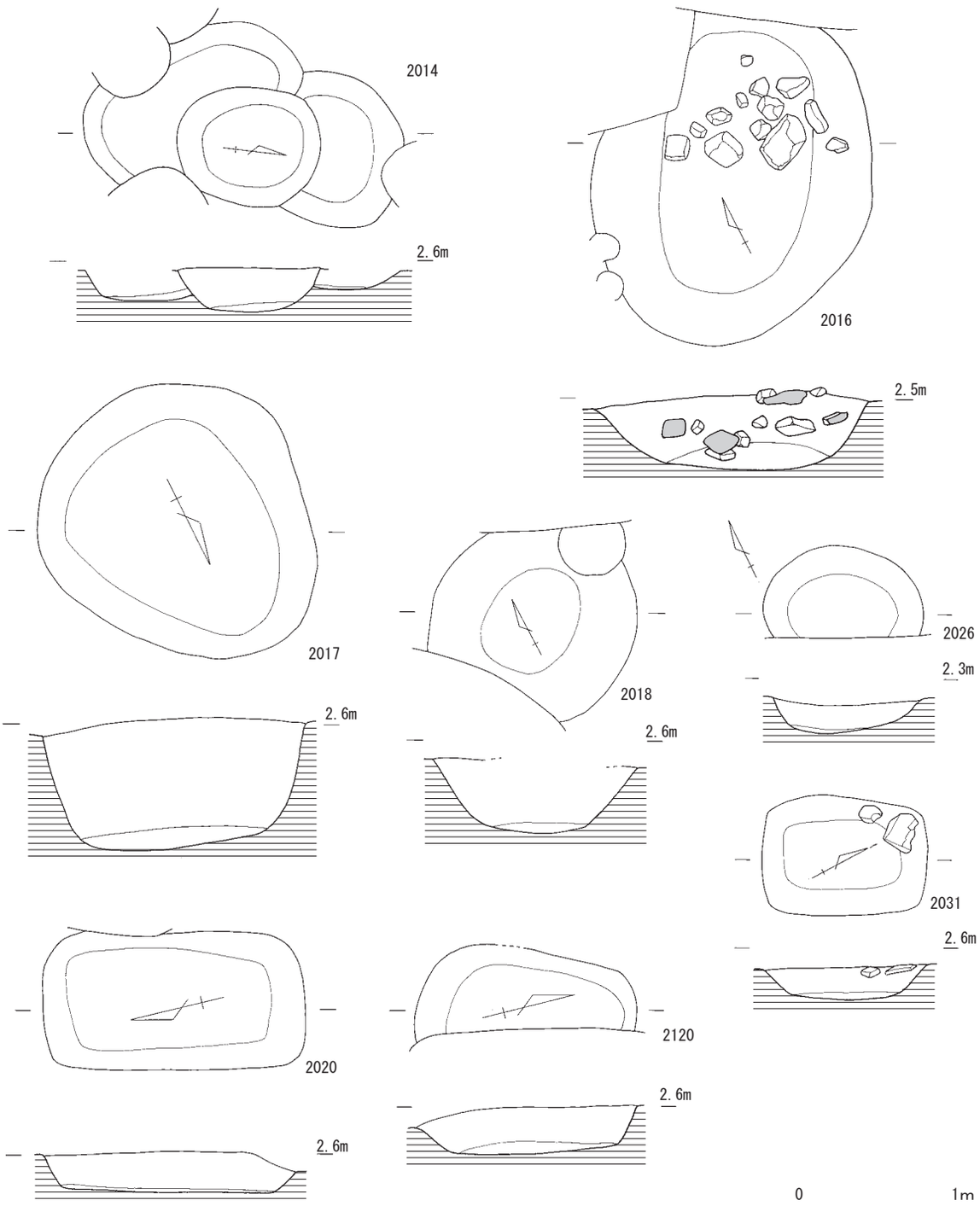
SK2031（第62図）

調査区中央北西寄りに位置する。平面は長方形を呈し、長さ1.0m、幅0.6～0.7mを測る。壁面の

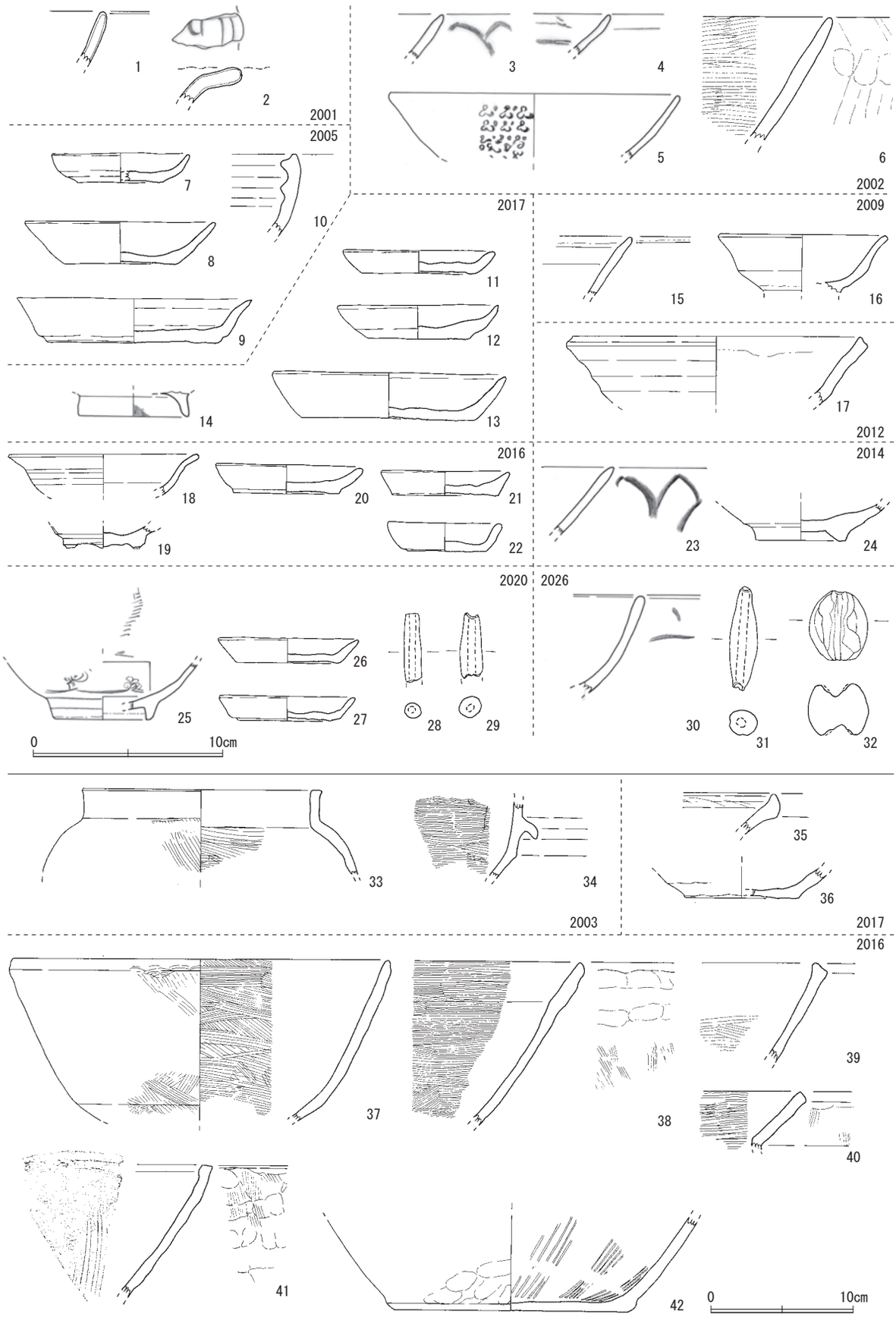
立ち上がりは緩やかだが、底面は平坦である。深さは0.2m程。土坑内北側隅に礫が検出されているが、埋土上部のものであり、この土坑に本来伴うものであるかは不明。

出土遺物

図示に耐えない小片が出土している。



第62図　２区SK(2)（1/40）



第63図　２区SK出土遺物（1/4、1/3）

SK2120（第62図）

SK2020の西側に位置し、東側の半ば近くを切り込まれている。全形を正確に窺うことはできないが、長さ1.3m、幅0.8m程の隅丸長方形、もしくは楕円形を呈するものといえようか。深さは0.3m。壁面の立ち上がりは、北側が急で、南側は緩やかである。SK2020との関連は不明。出土遺物は無い。

（２）井戸（SE）

２区の調査では、２基の井戸（SE2095・2117）を確認した。SE2117は井筒が瓦組の近世段階の井戸であり、ここでは調査対象としていない。以下ではSE2095についてのみ所見を述べる。

SE2095（第60・64図）

調査区中央南寄りに位置し、北西側の一部をSK2013に切り込まれている。また、井戸の南西側も撹乱で失われている。井戸掘方は、北西側が判然としないが、検出部分をみると、3.5×3.0m程の楕円形に復元できるだろうか。土層をみれば、南東側の掘方は垂直に近く、北西側はなだらかとなっていることが分かる。井戸側は残っていなかったが、１～５層がかつて井戸側の存在した部分の埋土であり、それをみれば径0.5m程の、おそらく桶組の井筒が存在した可能性が高い。

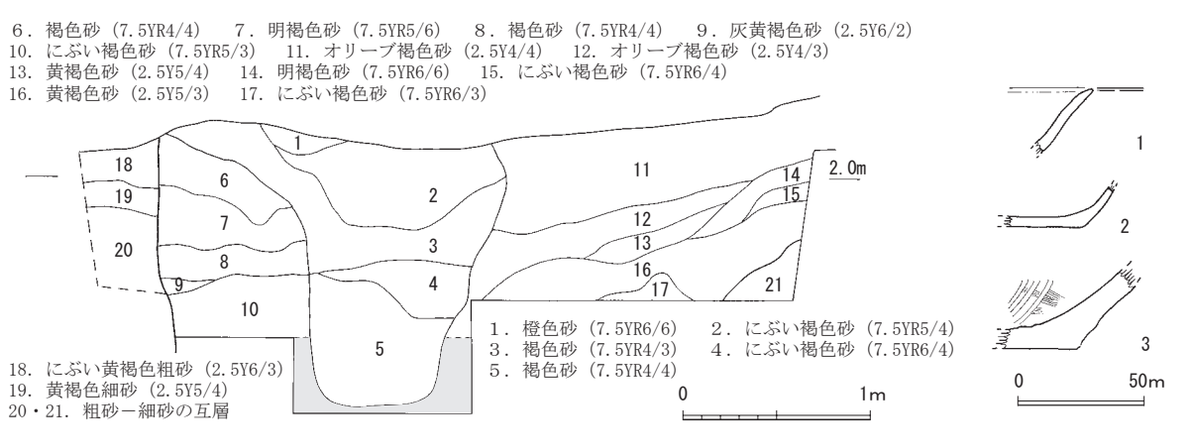
調査時は標高1.2m前後で湧水したため、部分的に深掘りし井戸底の確認を試みた。標高0.8m前後で砂丘粗砂の存在を確認した。おそらくこの前後で、井戸底が存在するのだろう。

出土遺物（第64図）

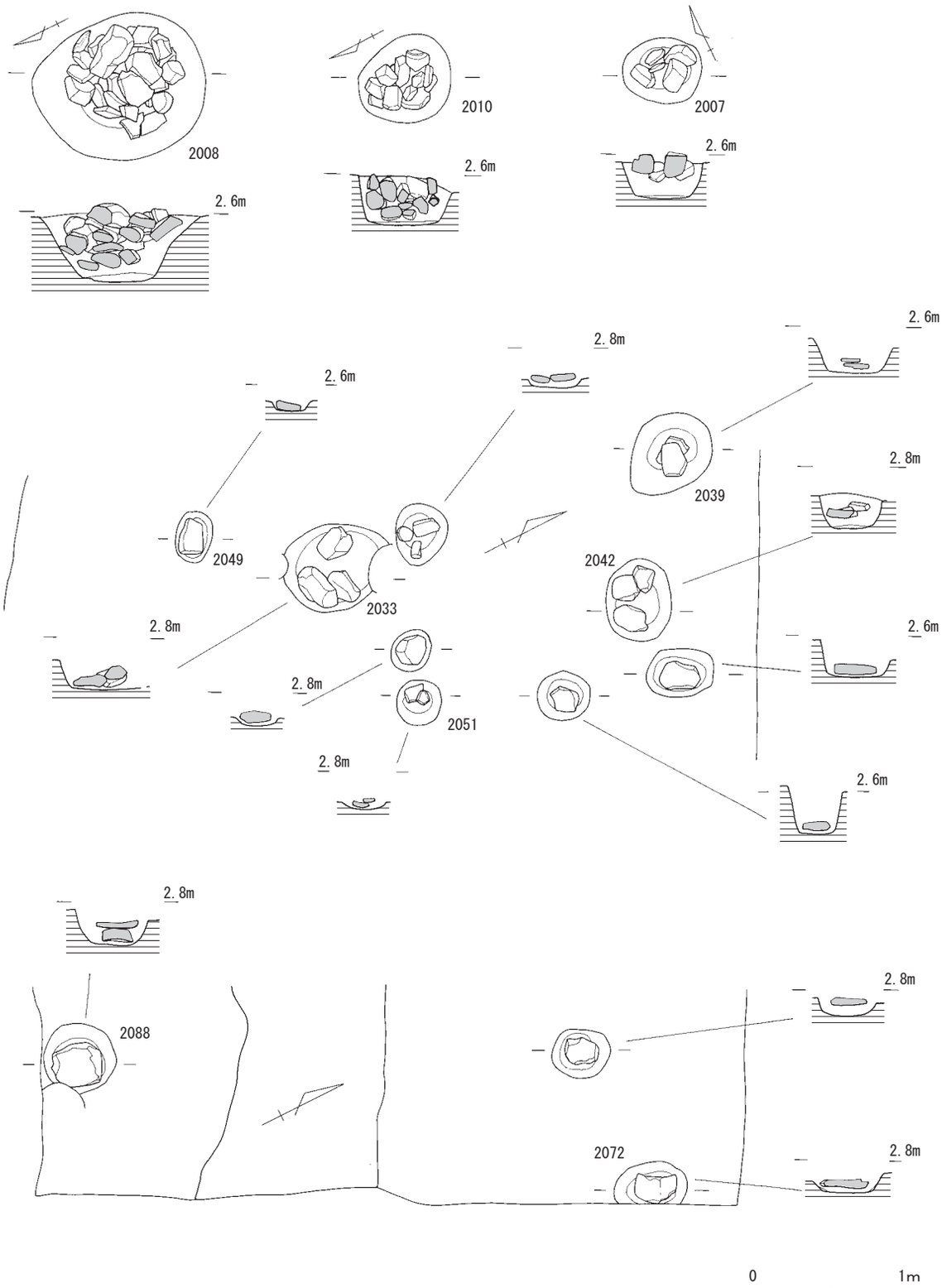
遺物出土量は少ない。１は口禿の白磁皿。２は底面糸切りの土師皿、３はすり鉢である。

（３）礫等を有する土坑（SK）・柱穴（SP）

この調査区では、土坑や柱穴に、廃棄後の流れ込み等ではなく、遺構内に礫等の石材を意図的に配置した例を多数確認できた。それには、①：角礫等を充填したもの（第65図上）と、②：扁平石材を遺構底や下面に敷いたもの（第65図中・下；以下では柱穴群とする）の２者がある。まず②については、その形態より柱穴内における柱の沈下を防ぐ礎石としての機能を想定することができるだろう。①にはSP2007やSK2008・2010があり、2007は埋土上面に礫を敷き詰めたもの、2008・2010は、内部に重層的に配置したもの、という違いがある。後者は後に述べるように、土坑の形状に合わせ意図的に礫を配置していることから、ここでは地上構造物の基礎としての機能を想定しておくことにしたい。以下では、それぞれについて、所見を述べる。



第64図　２区SE2095（1/40、1/3）



第65図　２区礫・根石を有するSK・SP（1/40）

SP2007（第65図上右）

調査区中央に位置し、SK2002・2003を切り込んでいる。平面は径0.4～0.5mの円形を呈し、しっかりとした掘方を有している。深さは0.2m。埋土の上面に角礫４を環状に配置しており、柱穴中央部には凹みを持つ。先にも触れたように、SP2007の礫は厚みをもって充填されておらず、これが削平によるものではなく本来の姿であったならば、これら礫は①の他と異なり、②と同様の柱の沈下を防ぐ根石である可能性もある。

出土遺物（第66図７）

７はC群の青花皿である。口径11.0cmを測る。

SK2008（第65図上左）

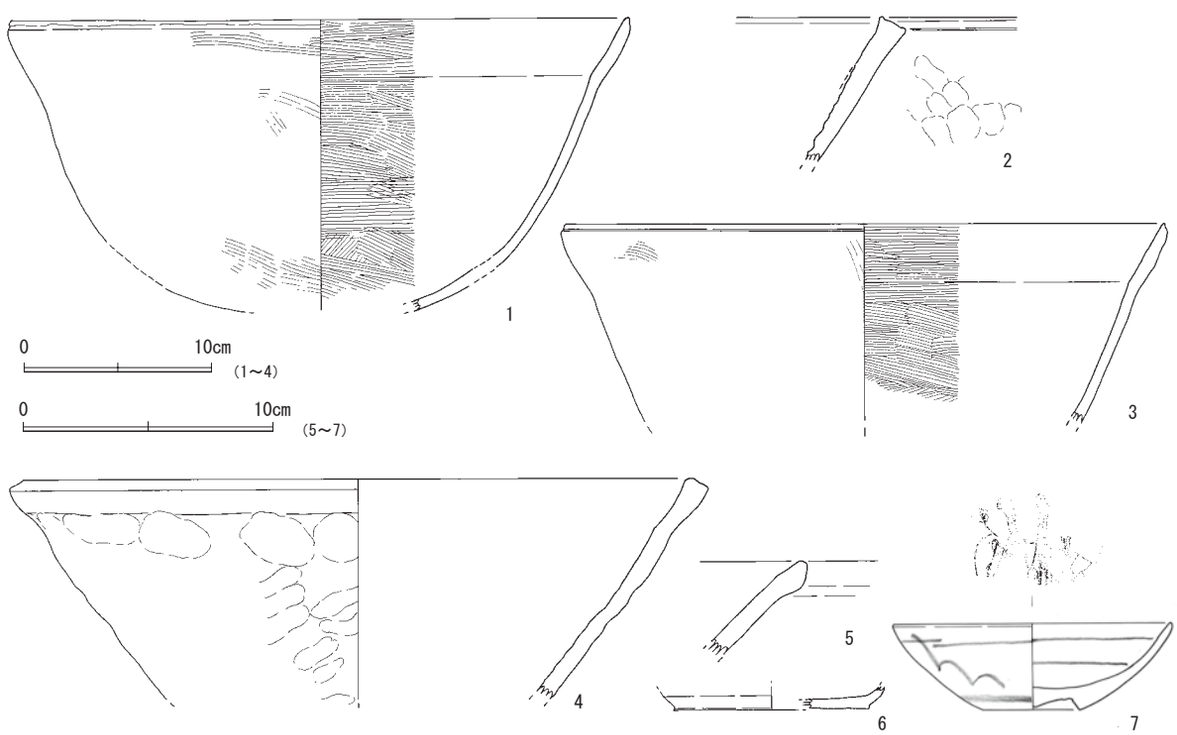
調査区中央に位置し、SK2005の東側、SK2016の南側に位置する。平面は径0.9～1.1mの不整円形を呈し、深さは0.5m程である。壁面の立ち上がりは比較的なだらかである。角礫は遺構の中央にまとまり厚さ0.4mに渡って敷き詰められている。このような礫の配置はこれが意図的に行なわれたことを良く示しているといえる。

出土遺物（第66図１～４）

１・３は鍋である。いずれも土師質で、頸部はわずかな屈曲をみせる。外面には煤が付着している。２・４は捏鉢である。共に土師質で、胴部は直線的に立ち上がり、口縁端部がわずかに肥厚する。

SK2010（第65図上中）

SK2008の南側に位置し、SK2009を切り込んでいる。平面は径0.6m程の不整円形を呈し、壁面の立ち上がりは急で、深さは0.3mを測る。礫は土坑の中心に厚さ0.3mに渡って充填されており、SK2008の場合と同じく、これが意図的に行なわれたことが分かる。



第66図　礫・根石を有するSK・SP出土遺物（1/4、1/3）

出土遺物

図示に耐えない、陶器や土師器等の小片が少量出土している。

柱穴群（第65図中・下）

これら柱穴は調査区中央部（第65図中）及び南東部（第65図下）にまとまって存在している。

礎石の配置には大きく、ⅰ：１石を配するもの、ⅱ：複数石を敷き詰めるもの、ⅲ：複数石を重ねるもの、の３種を見出すことができる。礎石上面の標高は、中央部で2.4～2.7m、南東部ではやや高く2.7m前後を測る。これら配置や標高の違いをみても、当調査区内における柱穴の配置に、建築物の構造や配置を示すような有意性を見出すことはできなかった。しかし、何らかの建築物がこの場所に存在したことは確実だろう。

出土遺物（第66図５・６）

５・６はいずれもSP2033出土である。５は玉縁の白磁口縁部片。５は土師坏の底部片である。底面は糸切り。

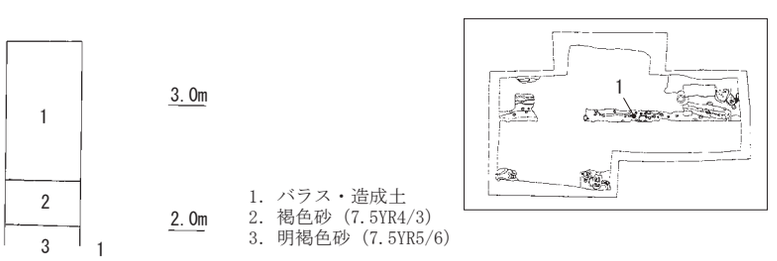
第３節　４区の調査

１．調査の概要

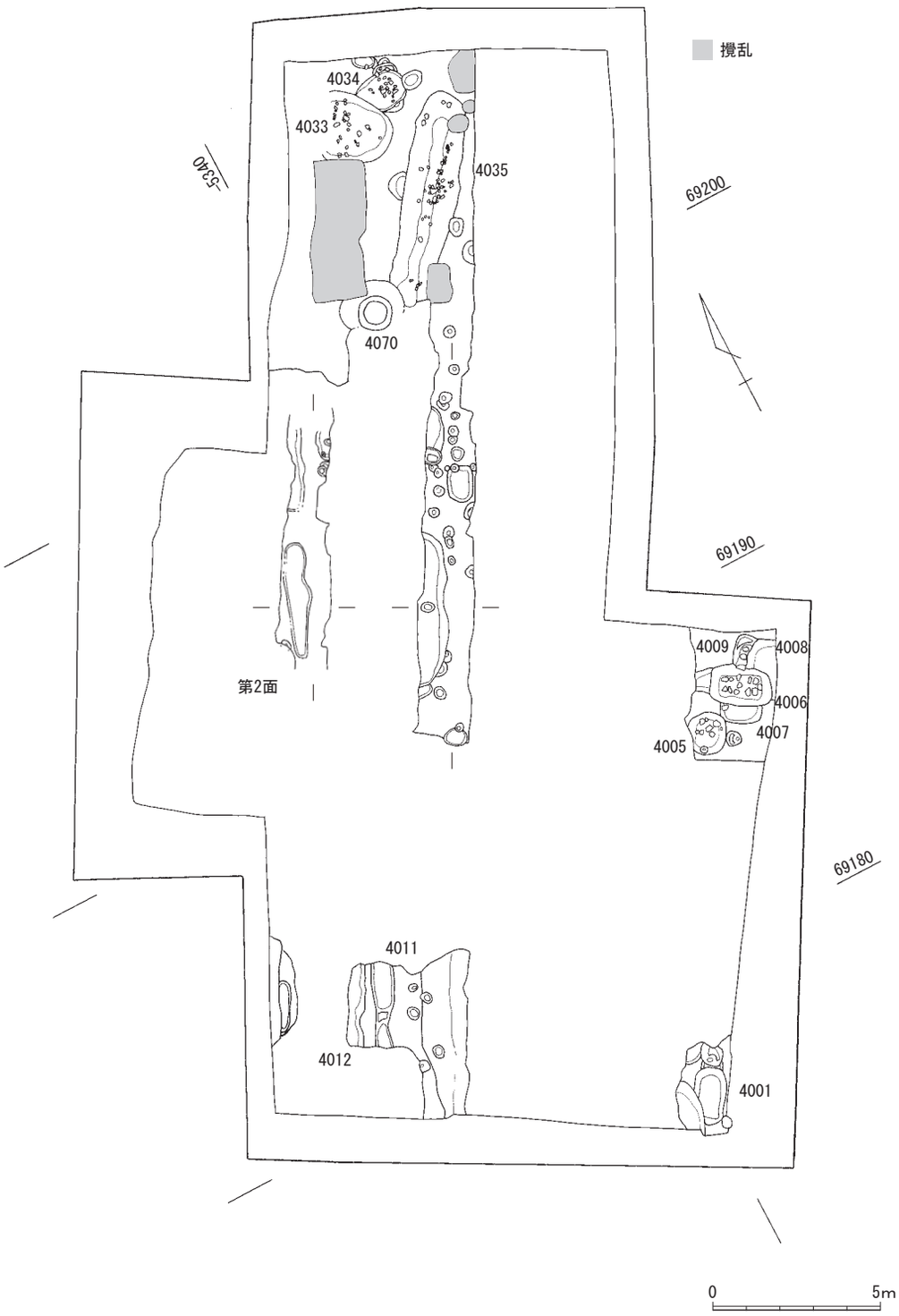
４区は後述する６区の北東側に位置する調査区であり、旧工学部本館西側に位置する。調査面積は591.1㎡。４区と６区の間には間隔があるが、これはこの部分に構内の解体工事に伴う既設の場内排水用パイプが存在しており、４区と６区における遺構の分布状況からみて、この部分は撹乱が激しく遺構の分布密度も薄いことが想定できたことから、調査不要との判断を行なったためである。

調査は排土処理の都合から、調査区を二分して行なった。まず南側から調査に着手し、重機により現地表下1.1～1.2mまでの表土剥ぎを行なって、撹乱土を除去し、標高２m前後の砂丘上面（7.5YR5/6）より調査を開始した。そして終了後に土砂を反転し、残り北側の調査を行なっている。なお、反転後調査区中央の一部分には、その上層の褐色砂層（7.5YR4/3）が残存しており、その部分では２面の調査を行なっている。

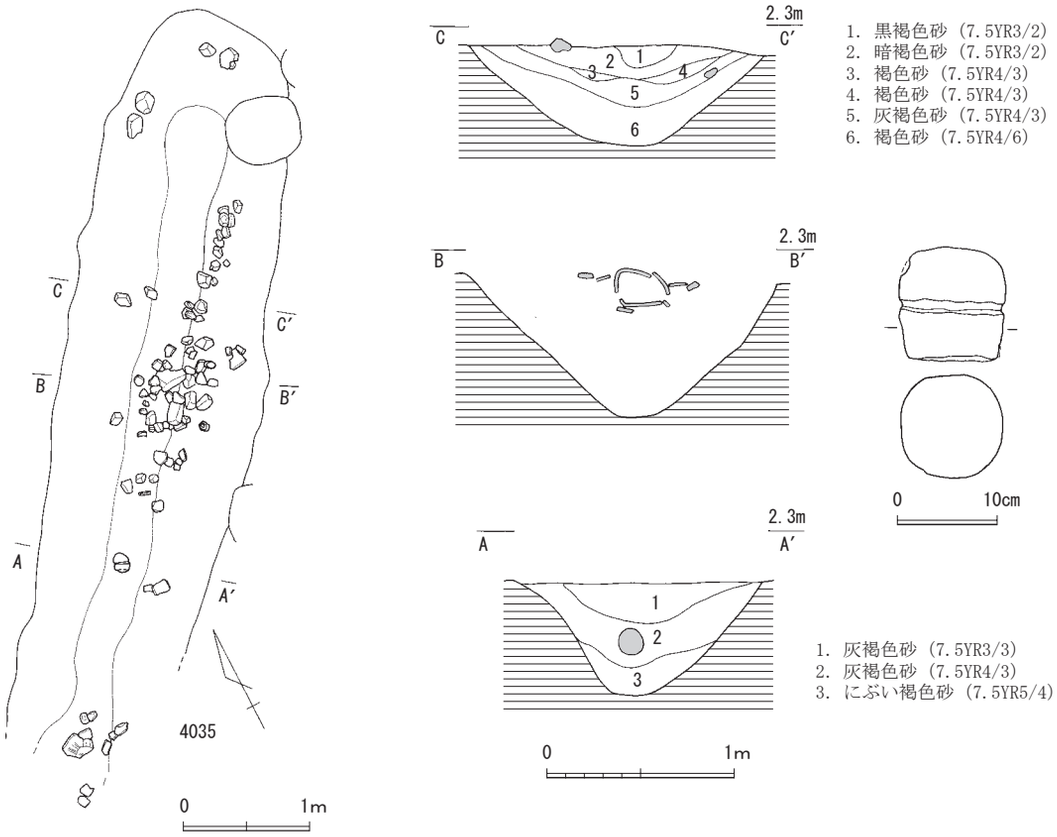
４区は激しく撹乱を受けており、一部にしか遺構は残存していない。その中で、溝（SD）、土坑（SK）、井戸（SE）、墓（ST）といった遺構を確認することができた。以下にその所見を述べる。



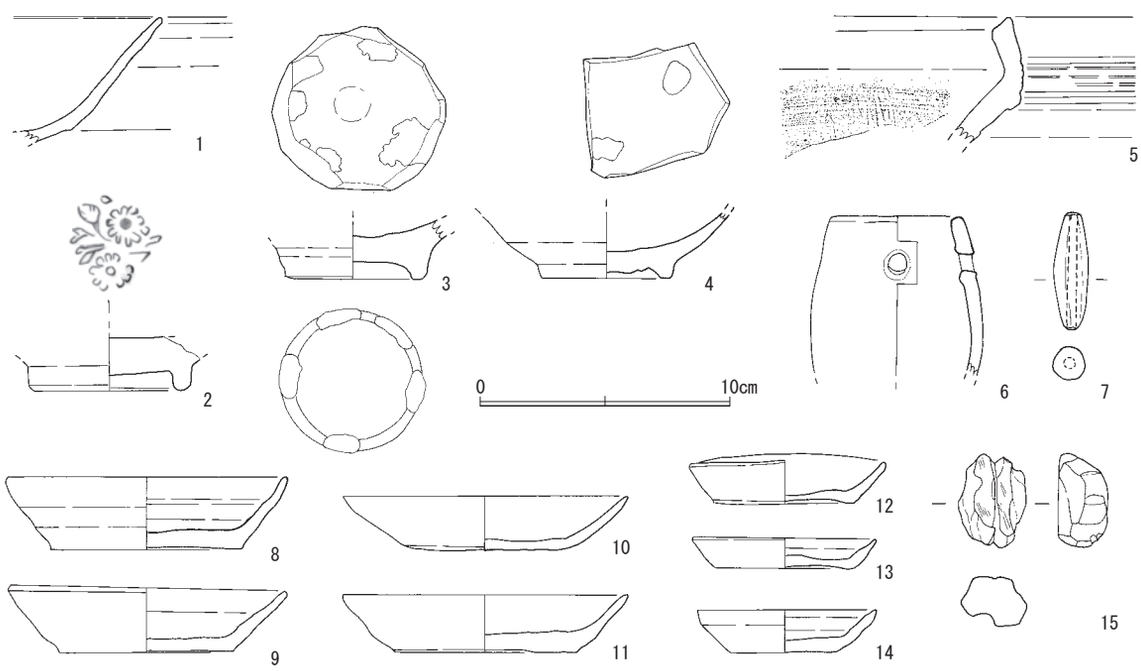
第67図　４区土層（1/1,000、1/60）



第68図　４区遺構配置（1/100）



第69図　４区SD4035（1/60、1/40、1/8）



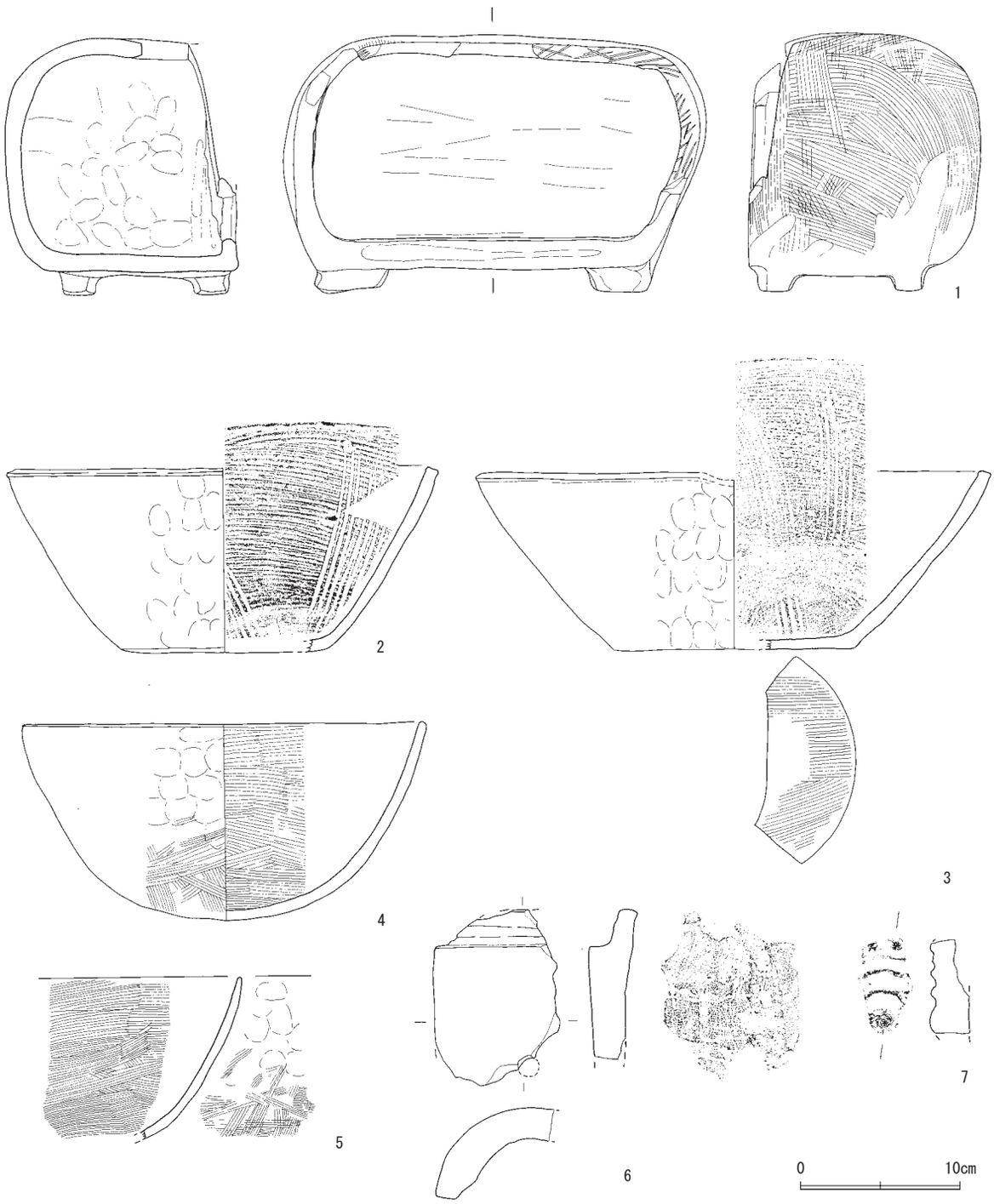
第70図　４区SD4035出土遺物(1)（1/3）

2．遺構と遺物

（1）溝（SD）

SD4011（第72図）

調査区南西側に位置し、北東－南西方向（N-25°－E）へ直線的に延びている。両端を撹乱に切られており、長さ2.5m分のみが残存する。幅0.5～0.6m、深さ0.3m程で、中央部において浅くなり幅を減じている。埋土は褐色砂質土（7.7YR4/4）。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、幅に比して掘り込みも深く壁面の立ち上がりも急角度であることから、時期的に新しい可能性もある。



第71図　４区SD4035出土遺物(2)（1/4）

SD4012（第72図）

調査区の南西側に位置する。SD4011の西側に平行する溝である。溝の西側を撹乱によって切られており、幅や深さ等、詳細は不明である。埋土や形態等、SD4011と類似しており、こちらもSD4011と同じく時期的に新しいものである可能性がある。

SD4035（第69図）

調査区の北側に位置し、北東－南西方向（N-38°－E）へ直線的に延びている。南東側を撹乱によって切られており、区内では長さ６ｍ分のみが確認できる。幅1.3～1.5m、深さ0.6～0.7mを計り、溝の先端、つまり北東側では次第に浅くなる。溝の断面はやや傾斜の緩やかな「V」字形を呈する。壁面は直線的に延びており、底面は狭い。

埋土の上半部分には、溝中央部を中心に多くの遺物や礫が含まれている。土師質・瓦質土器も大片であり、あまり摩滅をしておらず、第71図１に示す、土師質の行火は、つぶれた状態で出土していた。

出土遺物（第70・71図）

〔第70図〕１は陶器椀の口縁部片。２はⅠ類の竜泉窯系青磁椀の底部片。３・４は朝鮮陶器の底部片。見込と畳付に目跡が残る。５は備前焼のすり鉢。６は蛸壺、７は管状土錘。８～11は土師椀、12～14は土師皿で、いずれも底面は糸切りによる。15は滑石製の石錘。

〔第71図〕１は土師質の行火。底面の四隅に足部を有する。２・３は土師質のすり鉢。４・５は土師質の鍋。いずれも底面に煤が付着している。６は丸瓦。目穴を有し、凹面には布目痕が残る。７は軒丸瓦の瓦当片である。

その他、溝の中位（２層）から、五輪塔の一部が出土している（第69図下）。

（２）井戸（SE）

SE4070（第72図）

４区で確認できた井戸は１基のみである。調査区北側に位置し、SD4035を切り込んでおり、南側の掘方の一部を撹乱により失っている。残存部分から類推すれば、井戸の掘方は平面径２ｍ程の円形を呈し、標高1.7m以下では瓦組による井側も残存している。井側は４段分があり、底面には４段目と重なって木桶を設置している。標高0.6m付近で湧水が激しくなり、掘削を断念した。

出土遺物（第73図６～８）

１は土師坏、２は土師皿で、共に底面は糸切りによる。８はⅧ類の白磁椀で、見込みの釉を輪状に掻き取っている。いずれも掘方の出土。

（３）土坑（SK）

SK4001（第72図）

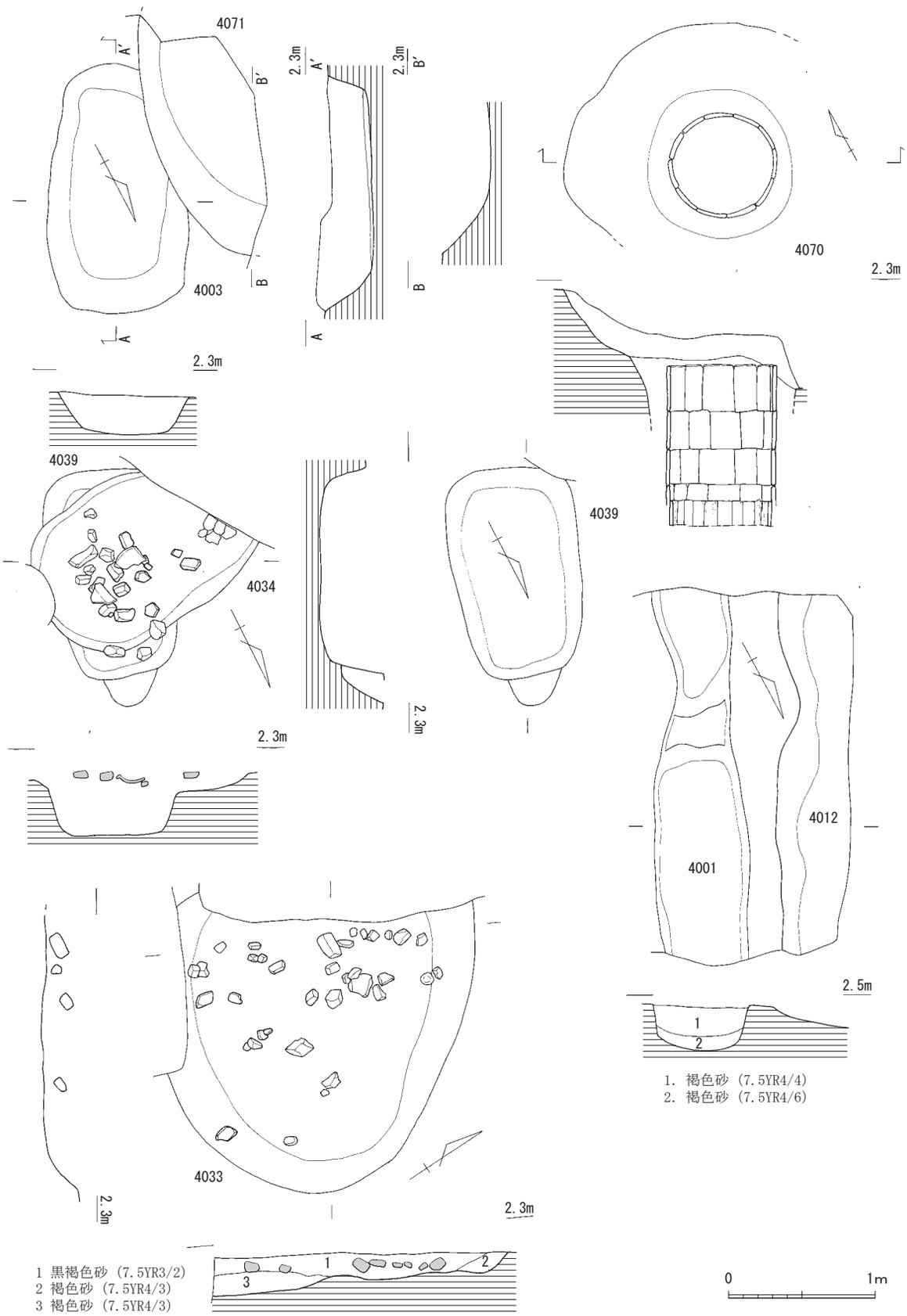
調査区の南端に位置し、その一部をSK4071に切り込まれている。平面は長さ2.2m、幅1.8m程の隅丸長方形を呈し、深さは0.4～0.5mを測る。立ち上がりは緩やかで、底面は平坦である。

出土遺物

図示に耐えない小片が出土している。

SK4033（第72図）

調査区の北側に位置し、SK4034を切り込んでおり、北西側の一部は撹乱により失われている。だが、平面形は2.3×2.1mの不整円形を呈するといえようか。深さは0.1～0.2mを測る。壁面の立ち上がりはゆるやかで、底面も凹凸が激しい。埋土は黒褐色（7.5YR3/2）を主とし、遺構内部には大小の礫が散乱している。大半が底面から遊離しており、流れ込みによる混入である。



第72図　４区SD(2)・SK・SE (1/40)

出土遺物

図示に耐えない小片が出土している。

SK4034（第72図）

SK4033の東側に位置し、西側の一部を切り込まれている。そして、後述するSK4039のほとんどを真上から切り込んでいる。平面は1.6×1.1m程の楕円形を呈するものといえようか。深さは0.1m程と浅い。壁面の立ち上がりはなだらかで、そのまま底面へと続く。SK4034・4039には礫等が散乱していたが、出土位置はいずれも浅く、SK4034に伴うものであることが分かる。礫に混じり、鍋、甕といった大型品の破片が出土している。

出土遺物（第73図１～３）

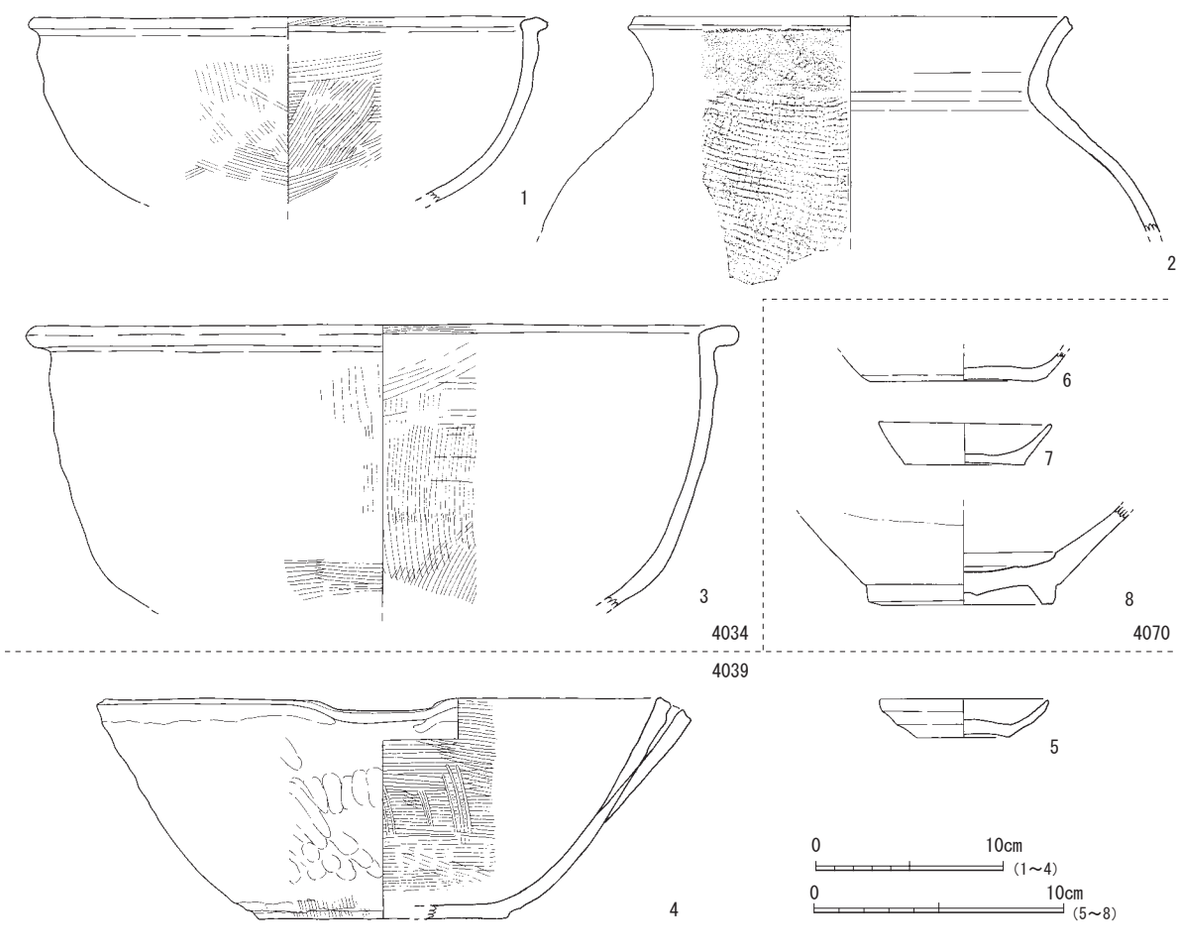
１・３は土師質の鍋で、共に口縁端部を水平方向へ折り曲げている。外面には煤が付着する。２は須恵質の甕で、胴部外器に格子目タタキを施す。

SK4039（第72図）

SK4034の直下に位置し、遺構の大半が切り込まれているが、SK4034は浅い土坑であり、その調査終了後に全形を窺うことができた。平面は長さ1.4m、幅0.7～0.9m程の隅丸長方形を呈し、北側の幅が若干狭い。深さは0.3～0.4mである。壁面の立ち上がりは明確で、底面も平坦である。

出土遺物（第73図４・５）

４は土師質のすり鉢。５は土師皿で、底面は糸切り。



第73図　４区SK・SE出土遺物（1/4、1/3）

SK4071（第72図）

SK4001の西側に位置し、その一部を切り込む。深さは0.3m程で、壁面の立ち上がりはなだらかである。遺物は出土していない。

（４）木棺墓（ST）

調査区の東側で、特徴的な土坑の一群、５基（4005～4009）を検出した。１カ所に集中して存在しており、その内の４基（4006～4009）は重層的な切り合い関係にある。加えて、それぞれの軸線が平行もしくは直交しており、互いに密接な関連がある土坑であると考えて良いだろう。平面形は円形（4005）、長方形（4006）、隅丸略方形（4007・4008）と多様であり、土坑の深さも、浅いものから（4004）から、約１ｍの深いもの（4006）まで存在する。５基の内４基（4005～4007・4009）土坑底面に平石が並べられており、後述するように4005・4006の底面から釘が出土したことから、底面の平石を棺台と判断し、これら５基の土坑を内部に木棺等を収める木棺墓（ST）と考え、以下に記述する。

ST4005（第74図）

木棺墓群の北西側に位置し、ST4004の一部をわずかに切り込んでいる。東側の一部を撹乱により失っているが、平面は径1.2m程の円形を呈するものと考えて良いだろう。深さは0.3～0.4mを測る。壁面の立ち上がりは緩やかであるが、底面は平坦である。墓坑底面では礫８を検出した。内、大きめの礫５は四隅とその中心、つまり賽の目「五」と同様の配置を取っている。南西半部分に敷き並べており、北東半部分には存在しない。礫は平石を主とし、表面は平坦になるよう設置されている。遺物は、図示した土器片等の他、底面から釘の破片が１点出土している。

出土遺物（第75図22～24）

22は須恵質の鉢、口縁部片。23・24は土師皿である。

ST4006（第74図）

木棺墓群の中央に位置する。遺構掘削時、ST4008との切り合いは判然としなかったが、断面図（第74図上）をみれば、ST4008に先行することが分かる。平面は長さ1.8m、幅0.7～1.1mの長方形を呈し、深さは1.0～1.1mである。墓坑の底面は長さ1.3m、幅1.2～1.1mの長方形を呈し、北東側がやや幅広となる。底面からは、底面長辺側にそれぞれ５、北東端と中央に１ずつの礫計12の礫が確認できた。墓坑の軸線から左右対称となる礫の配置からは、設置者の明確な意図を看て取ることができる。礫は平坦面を上にし、高さをそろえている。墓坑の軸線はN-120°－Wである。なお、ST4006南東側短辺からは、南東方向へ延びる溝が付設している。これはST4006に関連する遺構と考えているが、後述するSX4071に伴う可能性も否定できない。

墓坑の底面近くからは、釘２が出土した。原位置を記録することはできなかったが、この遺構に伴うことは確実である。遺構の形状や底面の礫の有り様をみれば、釘は木棺の存在を示し、底面の礫は棺台として機能していたと考えることができるだろう。したがってこの遺構は墓（木棺墓）であると判断した。

ところで、遺構検出中、ST4006の東隅部から完形の丸瓦（第75図16）が凹面を上向きに出土し、その下から石錘11（第75図１～11）が出土した。不注意により、記録を取らず取り上げてしまったが、これらはST4006に対する供献等の目的により置かれたと判断している。その内の３点は墓坑内に流れ込む形で検出された。その他、埋土内からも４点の石・土器片錘（第75図12～15）が出土している。

また、ST4006の南東下半部は上面から他遺構（SX4071）によって切り込まれている（第74図破線部分）。それは径1.2m程の平面円形を想定でき、ST4006の掘り込み部分の直上に存在する。深さは0.5m程。土層図では、１～10層までがこの埋土に相当し、11層はSX4071掘削時のST4006壁面の崩落土である。埋土には、炭・焼土・粘土塊・被熱痕跡のある石材が混じり、土層図からは小さな埋没単位を指摘することができる。担当者は、この近隣に何かの焼成遺構があり、SX4071はその残滓の廃棄土坑である可能性を考えている。

出土遺物（第75図１～21）

16は土師質の丸瓦、１～11は16の下から出土した滑石製の石錘である。１・11のみ縦横十字方向に切目を施す。12～15は墓坑内出土の錘で、13は土師質、他は滑石製。14は未成品か。17・20は染付で、17はC群の皿、20はC群の椀である。19はⅠ類の竜泉窯系青磁椀。18は土師皿、21は備前焼のすり鉢。

ST4007（第74図）

ST4006の北東側に並列して存在し、南西側をST4006、東隅の一部をST4005に切り込まれている。平面は長さ1.25m程の幅広な隅丸長方形を呈するといえようか。深さは0.2～0.3mである。壁面は垂直近くに立ち上っており、底面は平坦。底面の平面形も墓坑平面と同じく幅広な隅丸長方形である。墓坑内の南東側隅部に礫１を検出した。この礫は扁平で、墓坑底面では無くわずかに浮いた位置に存在している。SX4071掘削時の影響を受けたのだろうか。なお、遺物は確認できなかった。

ST4008（第74図）

ST4006の西側に位置し、ST4006・4009を切り込んでいる。木棺墓群中、最も新しい遺構である。北西側は調査区外にあり、その全形を窺うことはできないが、残存部で長さ1.8m、幅0.9＋αmを計り、平面は隅丸の略方形、もしくは幅広の隅丸長方形を呈するものだろう。壁面は垂直近くに立ち上がり、底面は平坦である。深さは0.7m程。今報告では木棺墓としているが、これのみ底面に礫（棺台）を確認しておらず、その認定には問題を残している。

出土遺物（第75図25～28）

25は白磁皿口縁部片。26は瓦質の捏鉢。27は石鍋。28は土師坏である。

ST4009（第74図）

ST4006の南東側、北西側にST4008に存在する。遺構の多くをこの両者に切り込まれており、長さ0.9m、幅0.5m分のみが残存する。遺構の軸線はST4008に平行し、ST4006に直交するものだろう。壁面の立ち上がりは急角度であるが、墓坑南側隅部は２段の掘り込みとなっており、立ち上がり途中に平坦面がある。深さは0.3～0.4mを測る。底面には１列３石の礫が検出された。いずれも平坦面を上にし、直線的に配列されていることから、ST4006例と同じく木棺等の棺台として機能したものだろう。SX4071の影響により、北側の礫は原位置を保っていない。なお、遺物は確認できなかった。

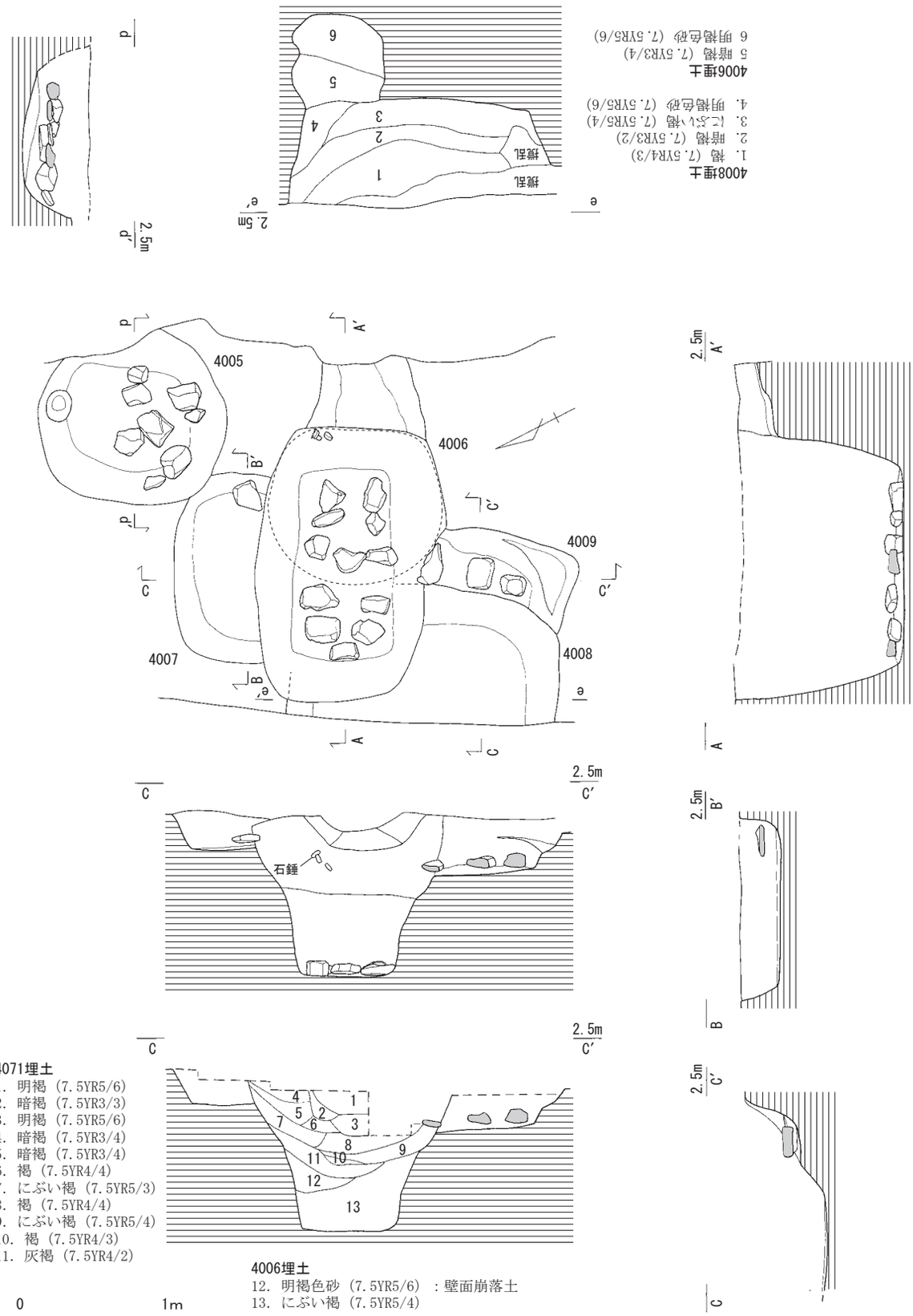
（５）その他の遺物

撹乱出土の遺物（第76図１・４・５）

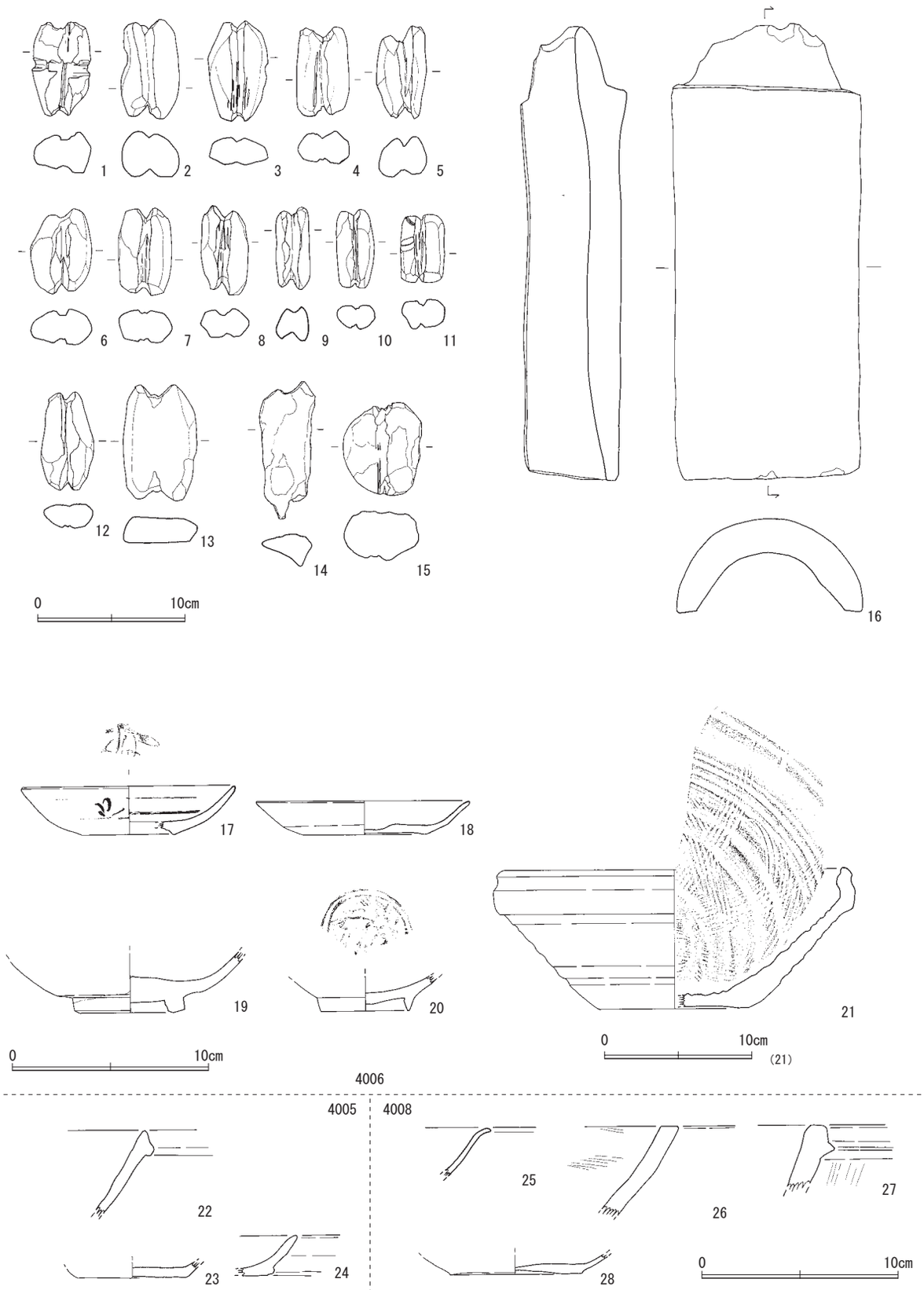
１・４は朝鮮陶器の椀。５は土師皿で、底面は糸切りによる。

遺構面掘下中出土の遺物（第76図２・３）

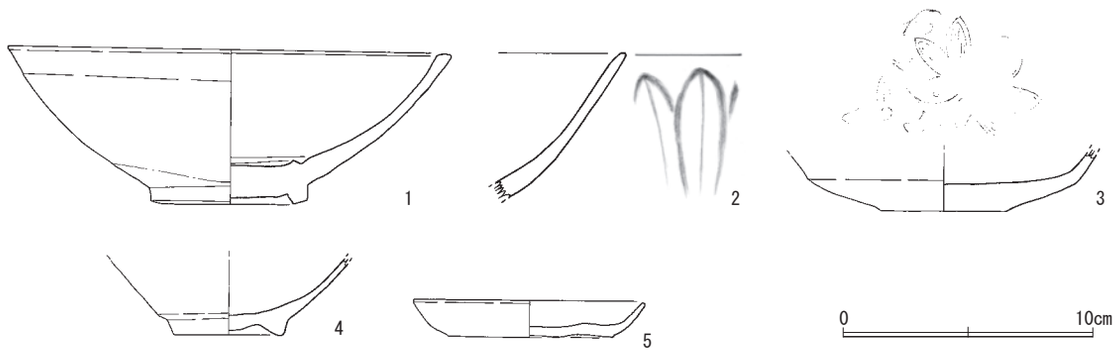
２・３は竜泉窯系青磁。２は椀で、外面に鎬蓮弁文を施す。３は皿で、内面見込に花文を施す。



第74図　４区ST4005～4009（1/40）



第75図　４区ST4005・4006・4008出土遺物（1/4、1/3）



第76図　４区その他の遺物（1/3）

第４節　６区の調査

１．調査の概要

６区は２区の北東側へ続く調査区であり、かつての保存図書館前（北西側）に位置する。調査面積は400.9㎡である。調査は排土処理の都合から、調査区を二分して行なった。まず北東側から調査に着手し、重機により標高3.2m程の現地表から0.6～0.7mまでの表土剥ぎを行なって、大学造成時の客土（厚さ0.2～0.3m）や撹乱土（厚さ0.4m程；褐色砂質土：7.5YR4/3）を除去し、標高2.6m前後の砂丘面である橙色砂層（7.5YR6/6）上面より調査を開始した（１区）。そして終了後に土砂を反転し、残り南西側の調査を行なっている（２区）。

砂丘面である橙色砂層は厚さ0.1～0.2m程で、その下には厚さ0.1m前後の明褐色細砂層（7.5YR5/6）、そして以下が橙色粗砂層（7.5YR6/6）となる。

６区もまた激しく撹乱を受けており、２区を中心に所属時期の不明な柱穴や土坑、溝といった遺構が存在するのみである。その中で、調査区中央において確認した井戸（SE6010）について、以下にその所見を述べる。

２．遺構と遺物

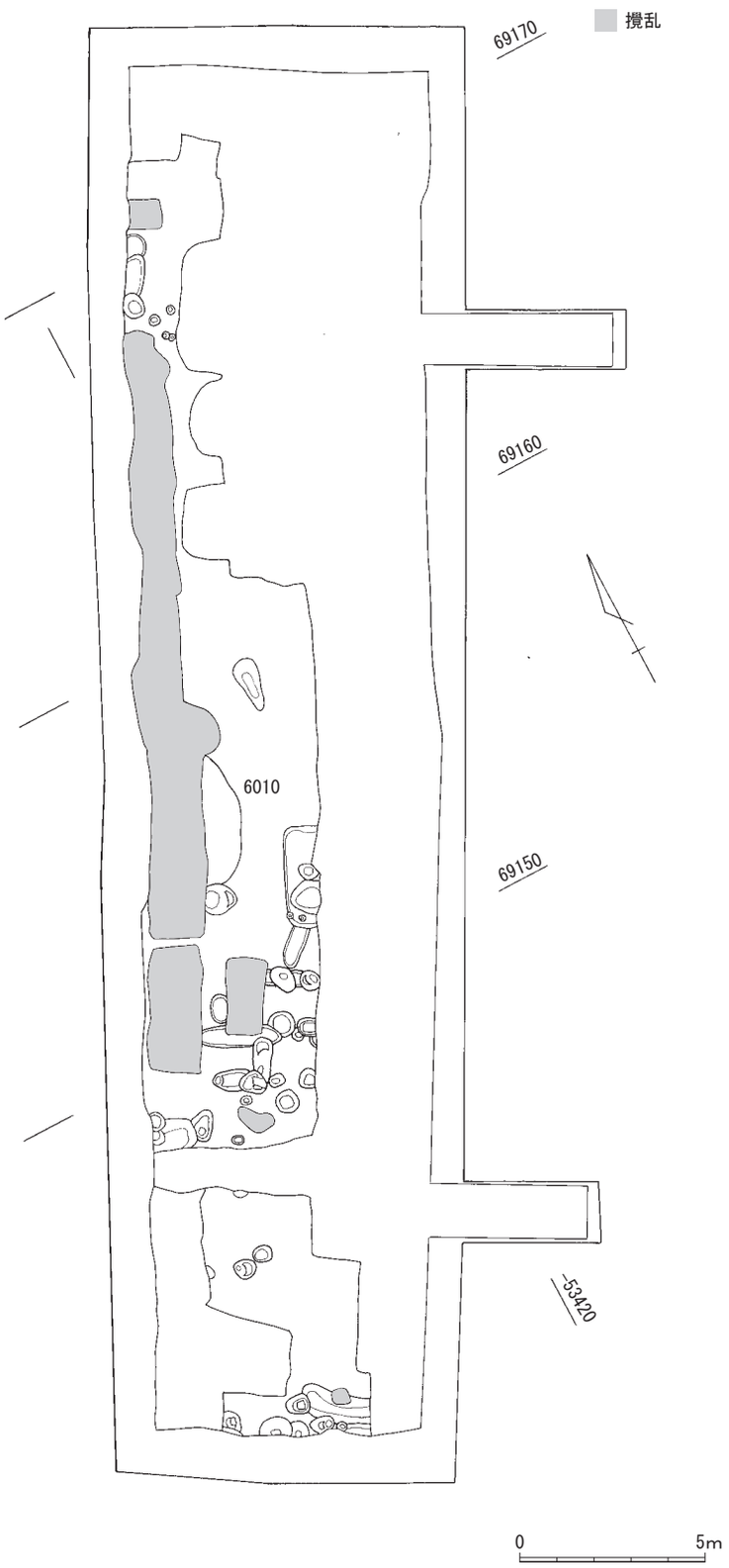
（１）井戸（SE）

SE4010（第78図）

調査区の中央に位置し、遺構の北西側は調査区外に存在するが、平面は4.3×3.5m程の楕円形を呈するものだろう。ただ、井戸の北側は２段の掘方となっており、断面をみれば、ごく浅い１段目の後、広い平坦面が存在していることが分かる。したがって、今回検出した石組みを内部に収める掘方は井戸を中心とした2.8mの円形を呈している。井戸側は石組みによるもので、内径は0.8～0.9mを測る。主に石材を横位に据えて、４～６段積み重ねており、内面は平滑に整えている。石組みは深さ１m程が残存しており、石組底面に当たる標高1.0m以下からは径0.6m程の木桶が据えられている。湧水のため、木桶内の掘削は行なっていない。調査時、井戸石組みの中には多量の礫が投棄されており、底面中央には宝篋印塔の基礎が投棄されていた。また、この調査では石組みの検出までに止め、石組みを除去した掘方全体の完掘は行なっていない。

出土遺物（第79図）

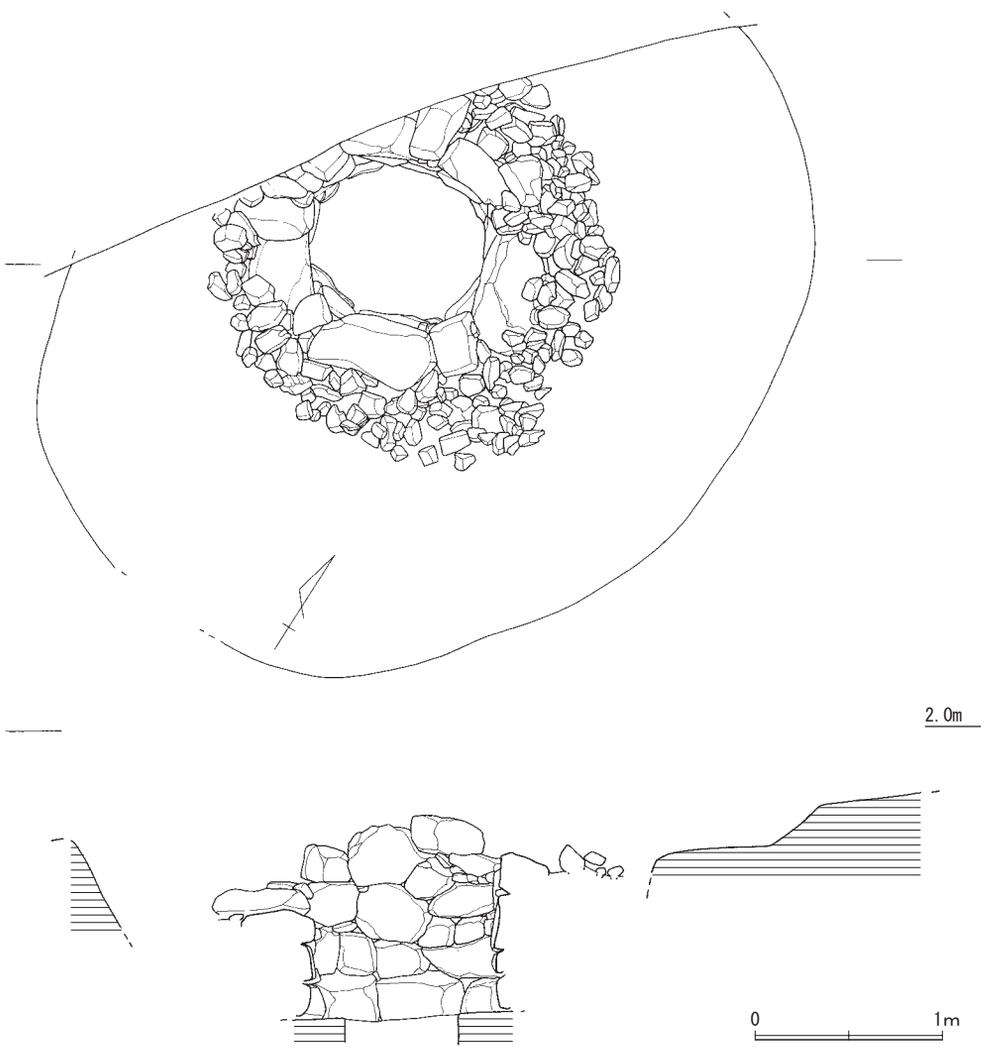
２・３・５～８・11が井戸検出中の出土遺物、１・４・９・10は掘方内出土の遺物である。１は陶器の瓶、２は瓦質の釜である。３は瓦質の火鉢。６～11は土錘である。



第77図　６区遺構配置（1/100）

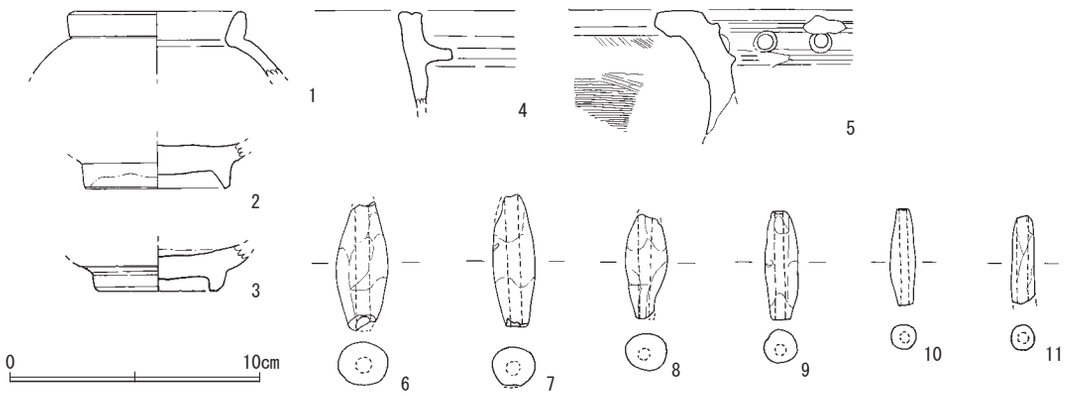
（２）その他の遺物

２・４・５・９・12・14は撹乱中の出土、その他は遺構検出中の出土である。１は口禿の白磁椀。２～４・９・10はⅠ類の竜泉窯系青磁椀で、２・３・９は外面に蓮弁文、４は片彫りによる花文を施す。５はⅧ類の白磁椀。見込み部分の釉を輪状に掻き取っている。６はⅣ類の白磁椀底部片。７は朝鮮陶器の椀底部片で、内面見込と畳付に目跡を残す。８は瓦器椀の底部片。11・12は同安窯系青磁。11は椀で、外面に櫛目文を施す。12・15は皿で、内面見込に櫛状施文具による文様を施す。13・14は青磁皿の底部片。16は青磁の合子蓋。17は陶器の鉢で、釉はにぶい赤褐色を呈する。胴部は上半部で内湾し、口縁端部は肥厚させ、外側へ丸め込んでいる。

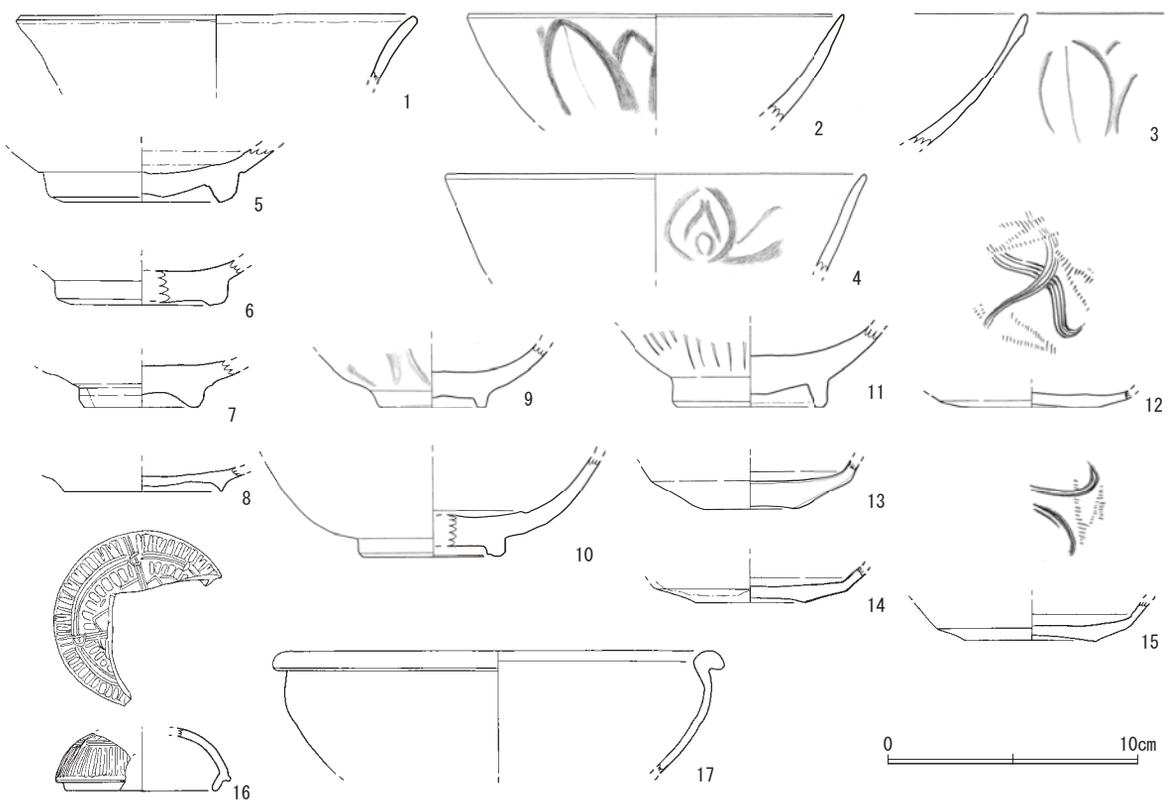


第78図　６区SE6010（1/40）

【参考文献】
小野正敏1982「15、16世紀の染付椀、皿の分類とその時代」『貿易陶磁研究 N0.2』日本貿易陶磁研究会
宮崎亮一編2000『大宰府条坊跡ＸＶ—陶磁器分類編—』太宰府の文化財第49集　太宰府市教育委員会



第79図　６区SE6010出土遺物（1/3）



第80図　６区その他の遺物（1/3）

①２区全景（南東から）

②２区南東側（東から）

③２区北西側（南東から）

図版２

①２区調査区中央部（東から）

②２区調査区中央部南東側
（北東から）

③２区調査区中央部北西側
（南東から）

①４区南西側全景（北東から）

②４区北東側全景（南西から）

③４区北東側完掘状況
（北東から）

図版４

① 4 区 SD4035、SK4034・4039
（北東から）

② 4 区 SD4045・SE4070
（南西から）

③ ST4005 ～ 4009（南東から）

第４章　第108次調査の記録

第１節　調査の概要

第108次調査地は九州大学旧箱崎キャンパス内、心理学教室と工学部本館の西側に位置する。

遺構面は現地表面下-1.6～1.3m、標高1.4～2.0mの明褐～灰白色砂上である。遺構面は極細砂～粗砂の互層でラミナ状を呈し、大学校舎等の建設・解体による削平・攪乱が顕著である。よって大半の部分で遺構面の直上まで現代の盛り土が堆積していた。

本調査は使用中の排水管や電路、立木・車両用通路・工作物等により多くの部分で調査を断念せざるを得なかった。今回は2か所に分けて調査を実施し、それぞれ第108次調査1区・2区と呼称する。

今回の調査で検出した遺構は、井戸6基・土壙2基・柱穴・ピットである。井戸はすべて1区で検出され、1基が近世以降、それ以外は13～15世紀代と考えられる。土壙のうち1基は完形の龍泉窯系青磁碗や鉄釘が出土していることから木棺墓と考えられる。ピットには根石を有するものがあり柱穴と考えられる。

第２節　遺構と遺物

1．井戸（SE）

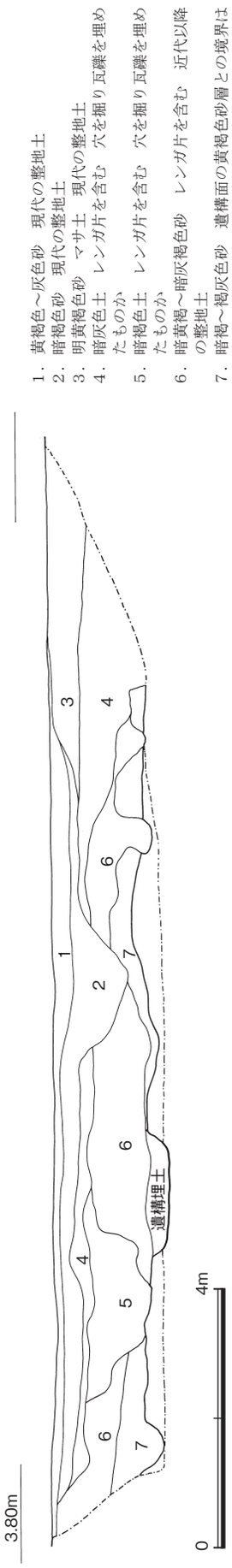
①SE01（第84図）

1区南東縁辺部で検出した。SE02を切り、SE05･06と切り合う。平面形は不整円形と推測され、最大径2.7mを測る。断面は井側残存部上端から20cmまで緩やかに下るが、それ以下は急に深くなる。標高2.45mで澄んだ地下水が湧水し、壁面の崩壊が止まらず標高2.0m以下の掘削は断念せざるを得なかったが、井側の残存状況から検出面上端から1.2～1.4mで底部に達すると推測される。埋土は褐灰色砂で鉄分が沈着する。井側の内外で土質に顕著な差はない。井側は掘方の中央部、標高2.05m付近で上端を検出した。内径80cmを測る木桶を利用している。側板は幅10cm前後を測り、残存長45cm前後である。側板の多くは腐朽が進み、取り上げることはできなかった。なお、側板を緊結する箍は検出できなかった。

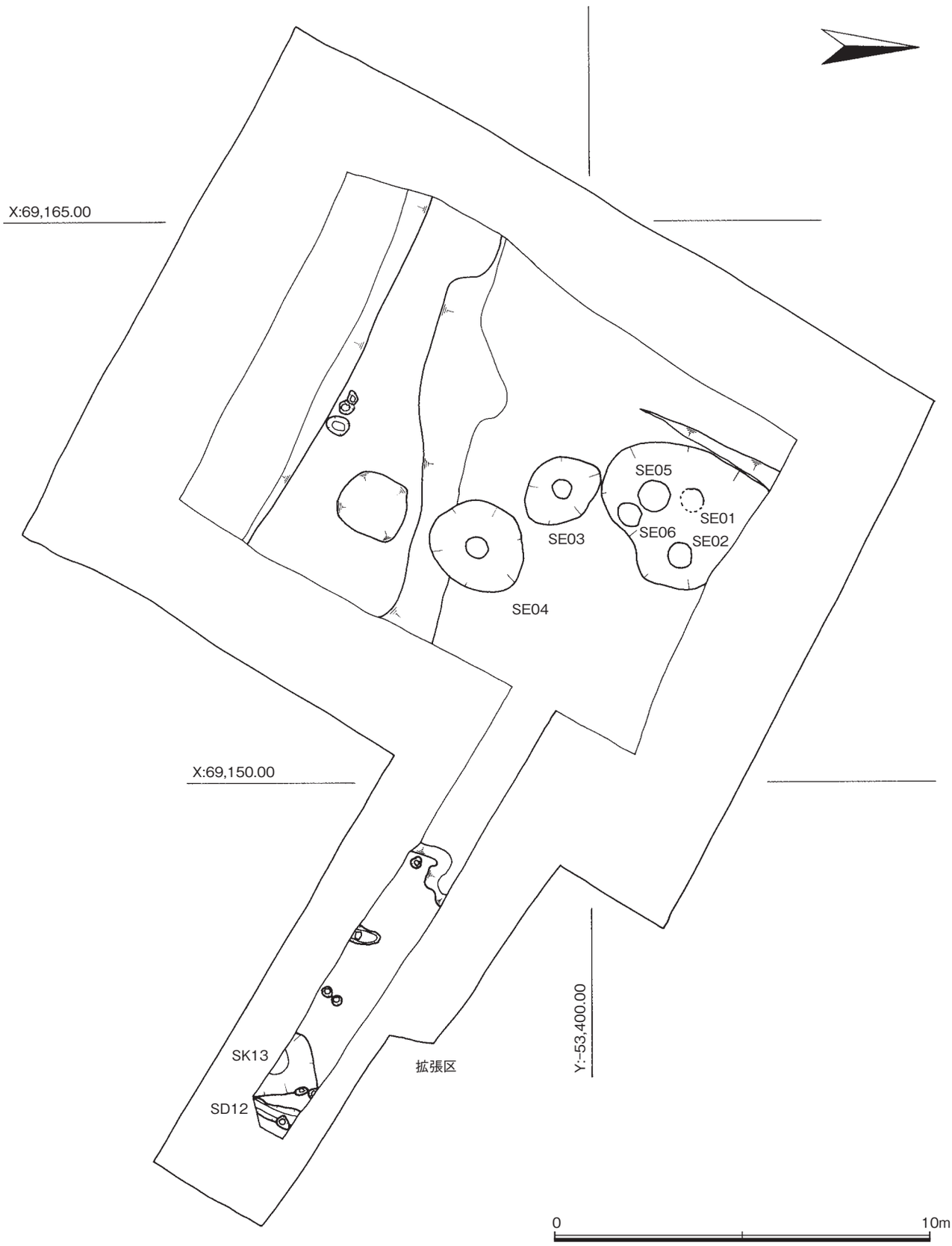
出土遺物（第85図）

遺物は主に井筒の外から出土した。6の龍泉窯系青磁碗からSE01は15世紀前半頃に構築されたものと推測される。

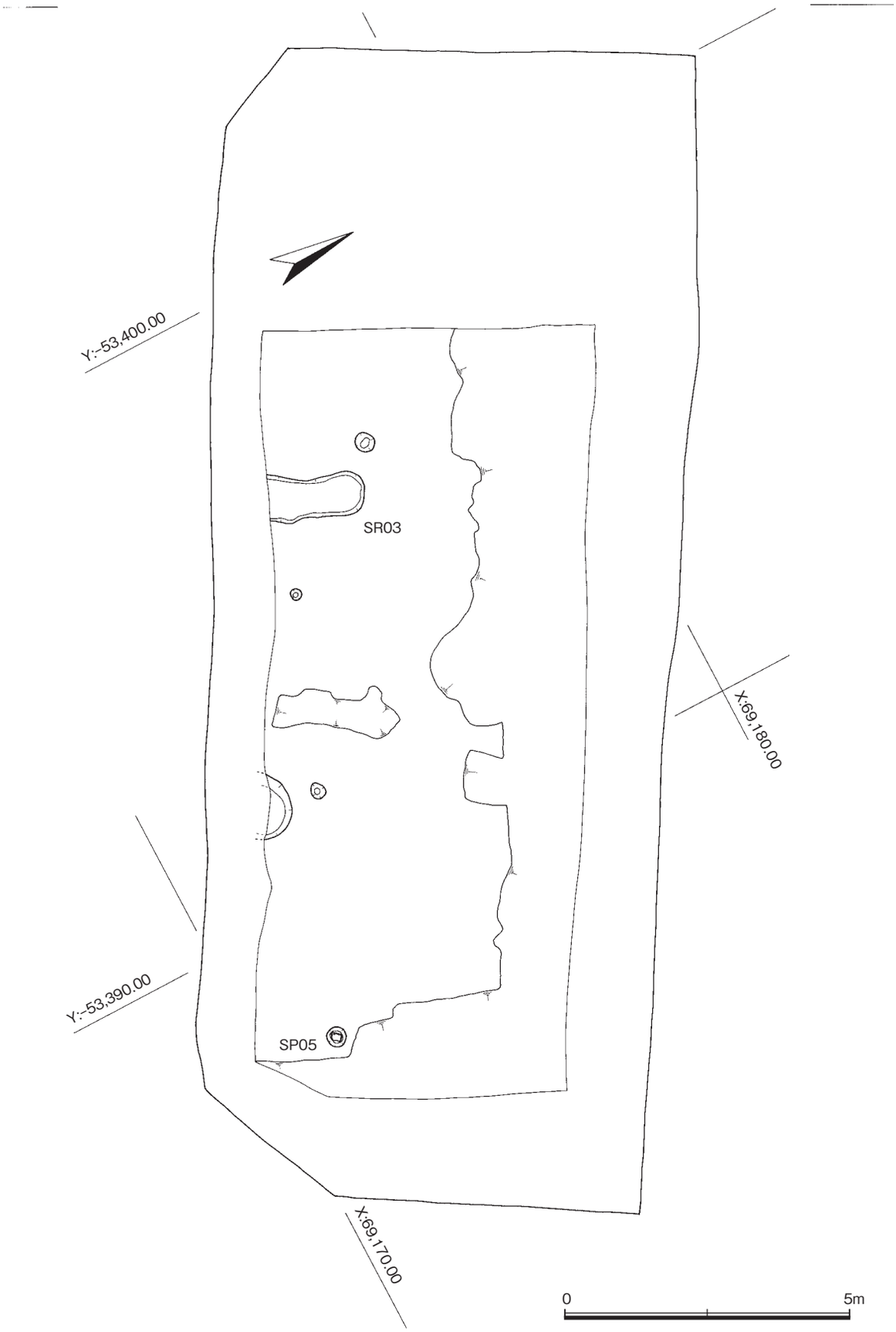
1～4は土師器坏である。1のみ完形で出土。いずれも底面糸切りで1は板状圧痕を有し、底面が厚い。2は内底面から打撃によって径4mm前後の穿孔がなされる。5は白磁碗の小片である。内面には、褐色の釉で文様が描かれる。6は龍泉窯系青磁小碗である。底部の破片



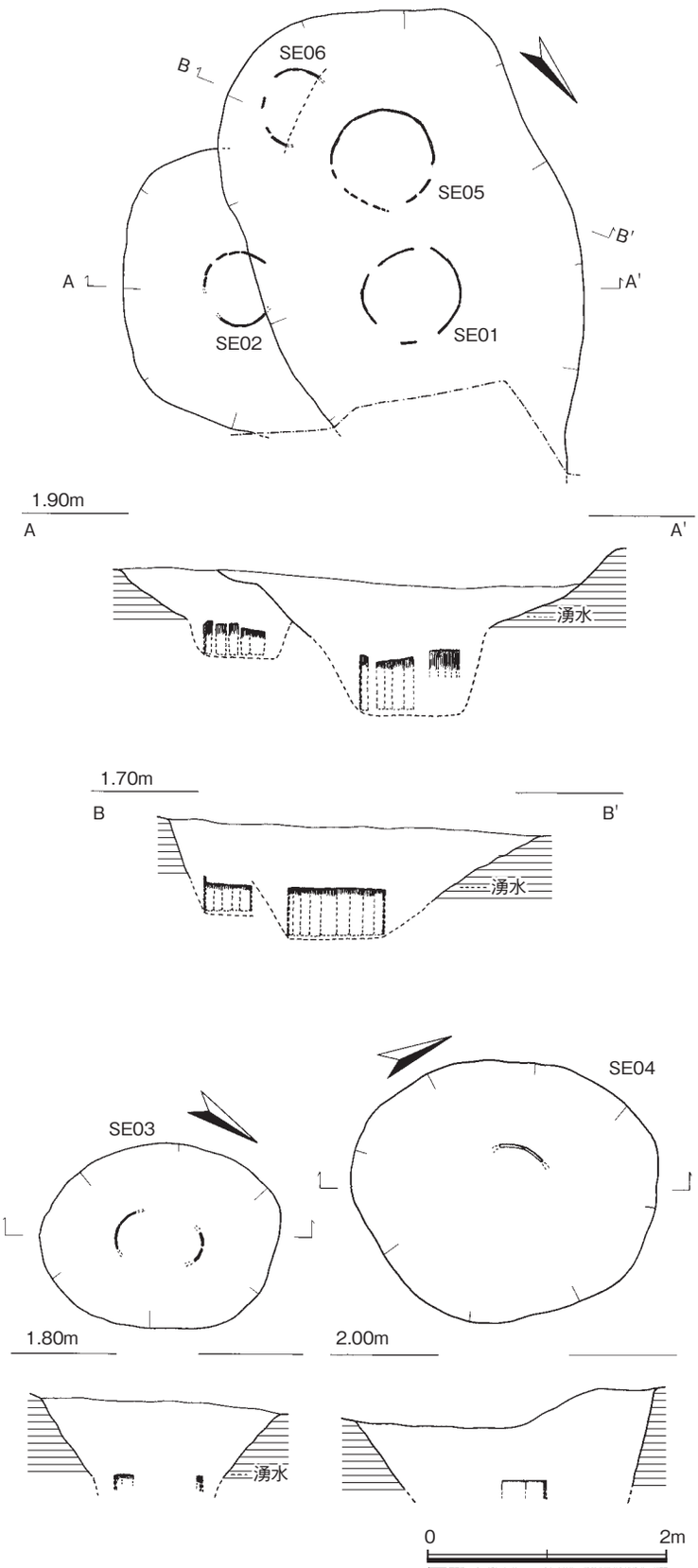
第81図　第108次調査2区南壁土層断面実測図（1/100）



第82図　第108次調査1区全体図（1/150）



第83図　第108次調査2区全体図（1/100）

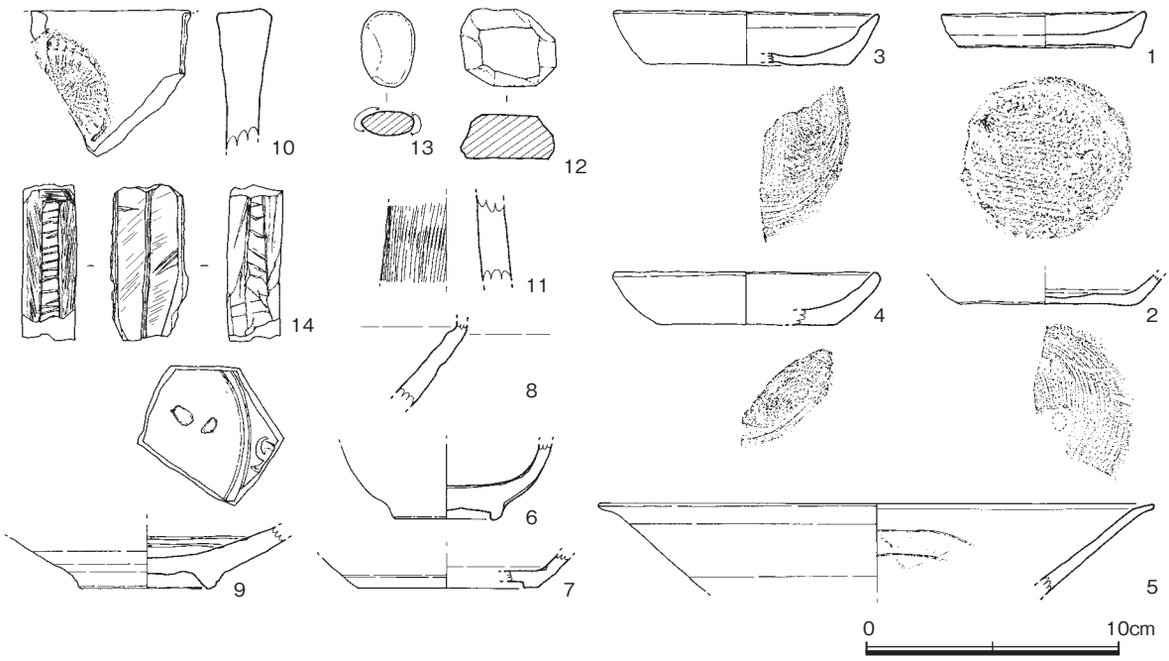


第84図　第108次調査検出井戸実測図（1/60）

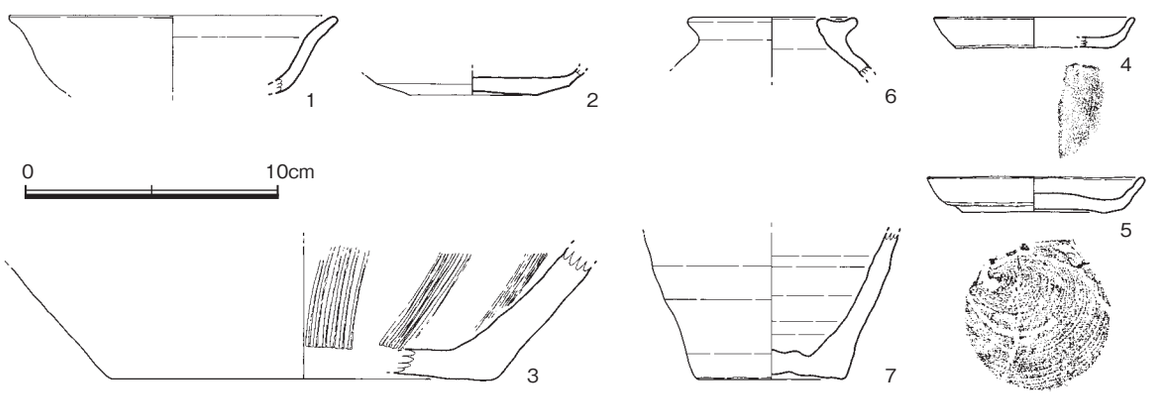
で器壁は厚い。灰緑色の釉が厚く掛かり全体に氷裂がある。7は越州窯系青磁皿である。底部の小片で淡緑色の釉がうすく掛かる。焼成は良好で胎土は乳白色を呈する。8は天目碗である。体部の小片で内面と外面の上部は黒褐色の釉がうすく掛かる。内面には砂目痕が、外面にはヘラ削りの痕が残る。9は高麗青磁碗の小片である。全体に灰緑色の釉がうすく掛かり畳付と見込みに砂目痕が残る。内面には白土による象嵌が施される。10は瓦質土器である。所謂奈良火鉢で口縁部の小片、外面に花文のスタンプと輪花の境界が残る。11は土師器高坏である。脚部の小片で外面はヘラミガキで仕上げられる。12は瓦玉で磨滅が顕著である。重量20.1gを測る。13は扁平な楕円形の円礫で擦過による磨滅が観察できる。重量9.9gを測る。14は滑石製石鍋の加工品である。外周に鋭利な工具による溝が施され、直方体状の素材を複数折り取るためのもの。重量76.4gを測る。

②SE02（第84図）

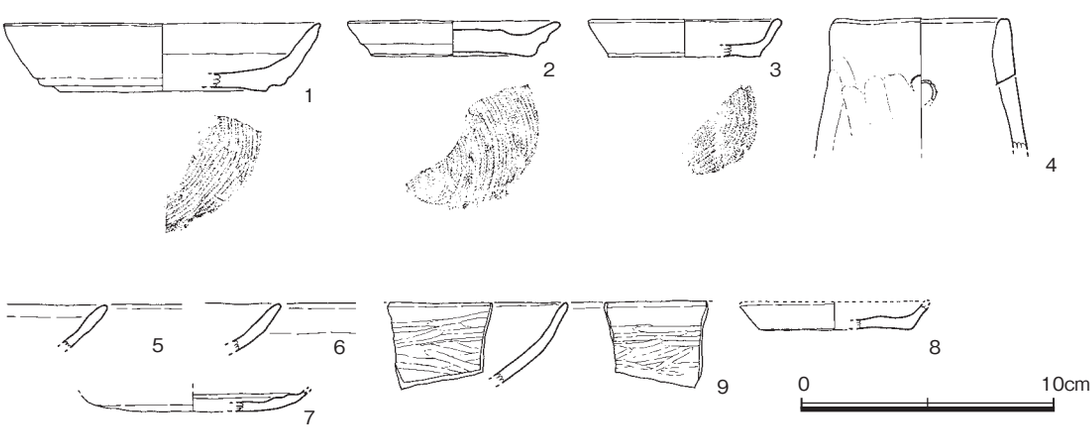
1区南東縁辺部で検出した。SE01･05･06に切られる。平面形は不整円形と推測され、最大径2.35mを測る。断面は井側残存部上端まで緩やかに下るが、それ以下は急に深くなる。標高2.45mで澄んだ地下水が湧水し、壁面の崩壊が止まらず標高2.25m以下の掘削は断念せざるを得なかったが、井側の残存状況から検出面上端から0.7mで底部に達すると推測される。埋土は暗黄褐色砂で井側の内



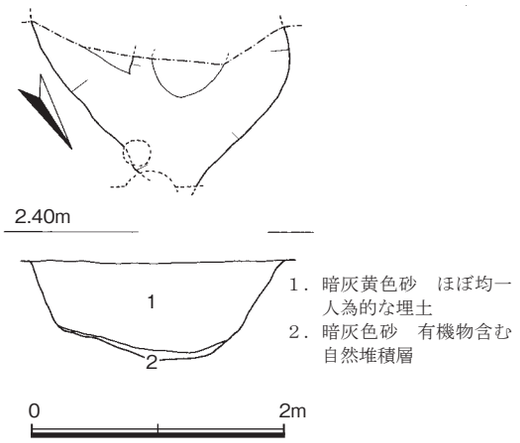
第85図　第108次調査SE01出土遺物実測図（1/3）



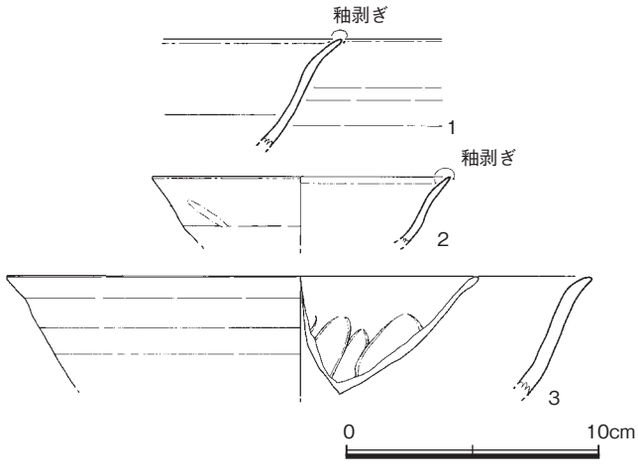
第86図　第108次調査SE02・03出土遺物実測図（1/3）



第87図　第108次調査SE01・02、05・06出土遺物実測図（1/3）



第88図　第108次調査
SK13実測図（1/60）



第89図　第108次調査SK13出土遺物実測図（1/3）

外で土質に顕著な差はない。井側は掘方の中央部、標高2.4m付近で上端を検出した。内径60cmを測る木桶を利用している。側板は幅8cm前後を測り、残存長20～35cm前後である。側板を緊結する箍は検出できなかった。

出土遺物（第86図・第87図）

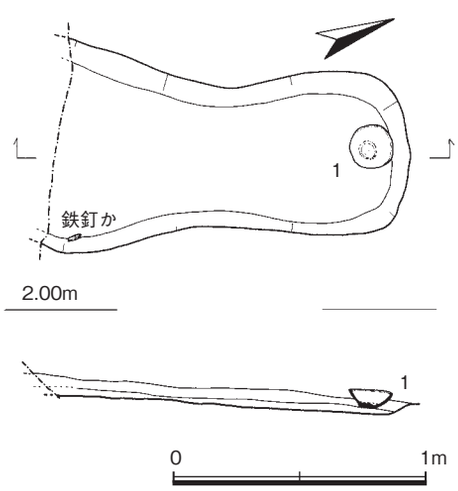
遺物は少なく時期を決め難いが、SE01に切られることから14世紀末～15世紀初頭頃の構築になろうか。

1は碗の小片である。口縁部は外反し内外面無文で福建産白磁か。2は白磁皿の底部である。体部はすべて失われ人為的に割り取られた可能性がある。3は擂鉢である。焼成が不良で胎土は土師質だが、外面に灰色を呈する層があり暫定的に瓦質土器とする。底部の小片で5条1単位の擂り目が残る。

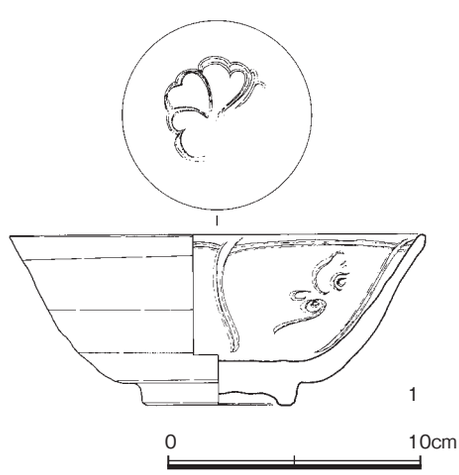
その他、SE01に帰属する可能性がある遺物を第87図に示す。1～4は土師器で、1は坏、2･3は小皿である。いずれも糸切り底で板状圧痕はない。4は蛸壺の小片である。

③SE03（第84図）

1区中央部で検出した。平面形は楕円形を呈し、長径1.9m、短径1.5mを測る。断面は逆台形を呈するが、標高0.8mで澄んだ地下水が湧水し、壁面の崩壊が止まらずそれ以下の掘削は断念せざるを得なかった。埋土は掘方が黄褐色砂、井側の内側は灰色砂で人為的に埋められている。井側は掘方の



第90図　第108次調査SR03実測図（1/60）



第91図　第108次調査SR03実測図（1/60）

中央部、標高0.8m付近で上端を検出した。内径70cmを測る木桶を利用している。側板は幅12cm前後を測る。側板を緊結する箍は検出できなかった。

出土遺物（第86図）

遺物は少なく時期を決め難いが、6の褐釉陶器から13世紀後半～14世紀前半頃の構築になろうか。4･5は土師器皿である。いずれも底部は糸切りで板状圧痕はない。6･7は褐釉陶器壺である。6は口縁部の小片で口縁の断面は三角形状を呈する。7は底部の小片で上げ底状となる。

④SE04（第84図）

1区中央部で検出した。平面形は不整円形を呈し、長径2.4m、短径2.2mを測る。埋土は掘方が黄白色砂、井側の内側は暗灰色～黒褐色砂で小円礫を含む。井側は掘方の中央部、標高0.95m付近で上端を検出した。瓦組みの井戸で近世以降の構築と考えられる。

⑤SE05（第84図）

1区南東縁辺部で検出した。SE01に切られ、SE06を切る。平面形は不整円形と推測され、断面は井側残存部上端から緩やかに下る。標高0.9mで澄んだ地下水が湧水し、壁面の崩壊が止まらずそれ以下の掘削は断念せざるを得なかったが、井側の残存状況から検出面上端から0.9mで底部に達すると推測される。埋土は褐灰色砂で鉄分が沈着する。井側の内外で土質に顕著な差はない。井側は掘方の中央部、標高0.8m付近で上端を検出した。内径80cmを測る木桶を利用している。側板は幅10～12cm前後を測り、残存長40cm前後である。側板を緊結する箍は検出できなかった。

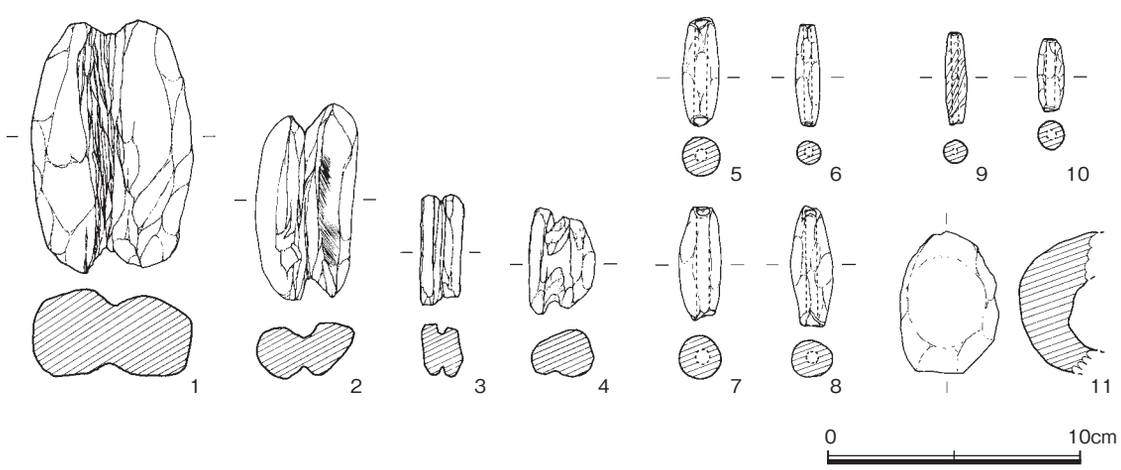
出土遺物（第87図）

遺物が少なく時期を決め難いが、SE01に切られることから室町期の構築となろうか。

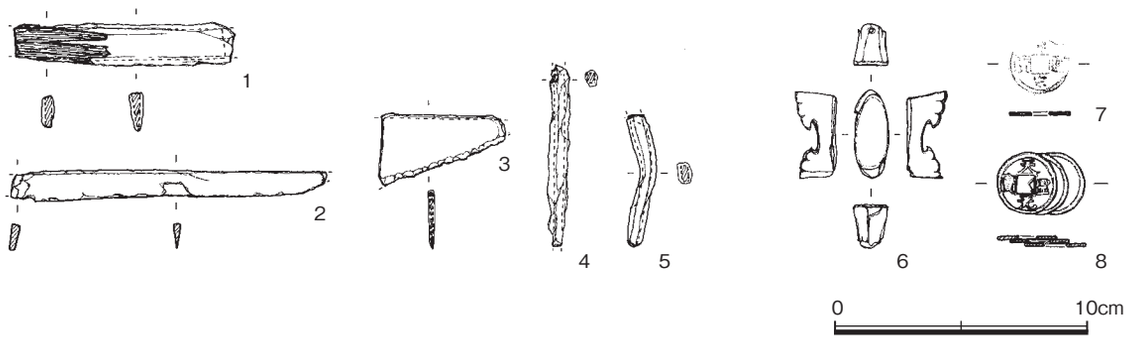
5～7は土師器坏の小片である。いずれも磨滅が顕著である。

⑥SE06（第84図）

1区南東縁辺部で検出した。SE05に切られる。平面形は不整円形と推測され、断面は他の井戸に比し急角度に下る。標高1.0mで澄んだ地下水が湧水し、壁面の崩壊が止まらずそれ以下の掘削は断念せざるを得なかったが、井側の残存状況から検出面上端から0.75mで底部に達すると推測される。埋土は褐灰色砂で鉄分が沈着する。井側の内外で土質に顕著な差はない。井側は標高1.0m付近で上端を検出した。内径70cmを測る木桶を利用している。側板は幅10cm前後を測り、残存長20～30cm前後である。側板を緊結する箍は検出できなかった。



第92図　第108次調査出土石錘・土錘・土製品実測図（1/3）



第93図　第108次調査出土金属器実測図（1/3）

出土遺物（第87図）

遺物が少なく時期を決め難いが、SE05に切られることから室町期の構築となろうか。

6は黒色土器Ａ類椀の小片で九州系Ⅳ類にあたるか。7は土師器小皿である。板状圧痕はない。

2. 土壙（SK）

①SK13（第88図）

1区南部、トレンチ状に拡張した範囲で検出した。東半が調査区外となるが不整円形の土壙と推測される。埋土は大半が暗灰黄色砂で人為的に埋められるが、底部に有機物を含む暗灰色の自然堆積層が観察でき、埋められるまで一定期間放置されていた様子が窺える。

出土遺物（第89図）

1･2は口禿げの白磁碗。3は龍泉窯系青磁碗である。13世紀後半～14世紀前半頃の土壙と考えられる。

3. 木棺墓（SR）

①SR03（第90図）

2区西部で検出した。東壁南端部で鉄釘が1本出土しており、木棺墓と考えられる。平面形は隅丸長方形と推測され、深さ8～10cmと大きく削られる。底面は凹凸がなく平坦である。埋土は炭化物を含む黄白色砂である。木棺の痕跡は検出できなかった。

出土遺物（第91図）

1は龍泉窯系青磁碗である。ほぼ完形で内面は磨滅が進む。底面近くに正置した状態で出土しており棺外に置かれていたものか。釉は淡い青緑色で12世紀後半頃の木棺墓と考えられる。

4. その他の遺物

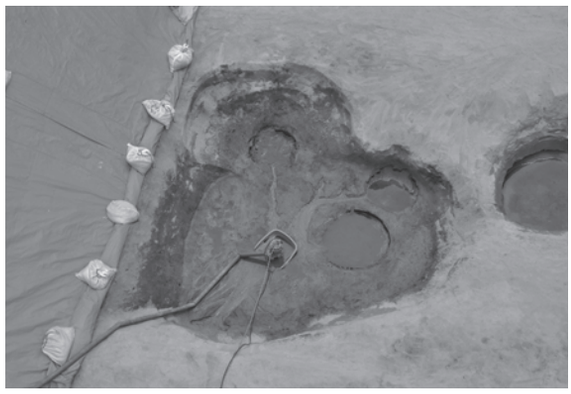
①石錘・土錘・土製品（第92図）

1～4は滑石製石錘である。長辺方向に溝をつくり1は大型で重量360gを測る。1は1区壁面、その他は1区SE01出土。5～10は土錘である。いずれも1区SE01･02出土。径2～5mmの丸棒に粘土を巻き付けてつくる。9は器壁をヘラミガキで仕上げる。孔の両端は使用によって欠損し網状の漁具の縁辺に通して使用したものと考えられる。11は球形の土製品と推測され、内部を中空につくる。

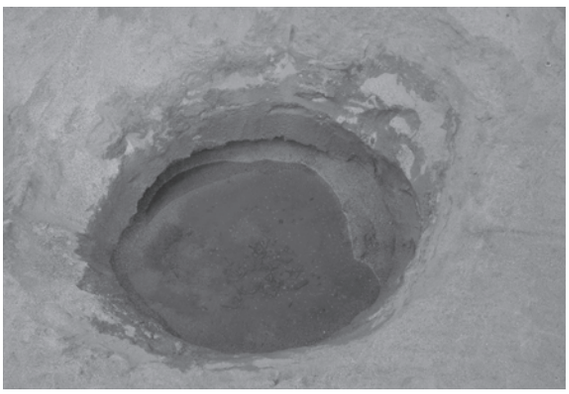
②金属器・銭貨（第93図）

1～5は鉄製品。いずれも1区SE01出土。1･2は刀子で1は柄の木質が残る。２は研ぎ減りが顕著である。3は鋸の先端部で刃部にアサリは確認できない。4･5は鏃か。6は銅製刀装具で暫定的に鞘尻金具とする。1枚の銅板を曲げてつくり上部に釘孔を1カ所有する。鍍金の痕跡は観察できない。7･8は銅銭である。7は皇宋通宝。銭文は明瞭である。8は3枚重なった状態で出土し、上から天聖元宝、淳熙元宝、元祐通宝または元符通宝である。銭面の磨滅が顕著で緡銭の一部か。

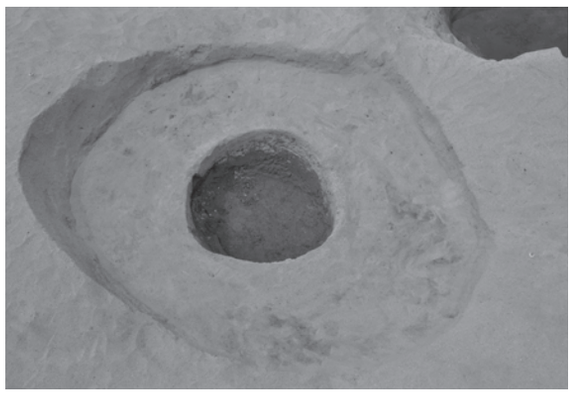
第108次1区　全景（北より）



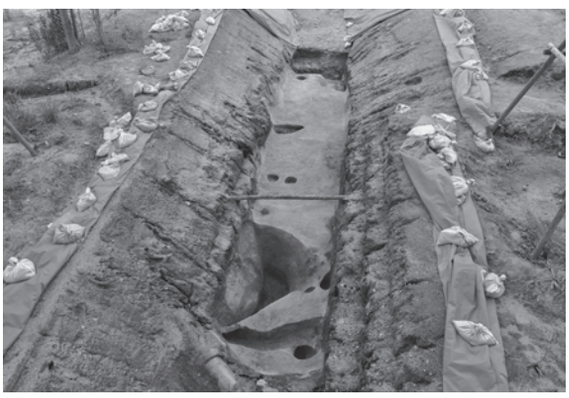
第108次1区
SE01・02・05・06（北より）



第108次1区　SE03（北より）

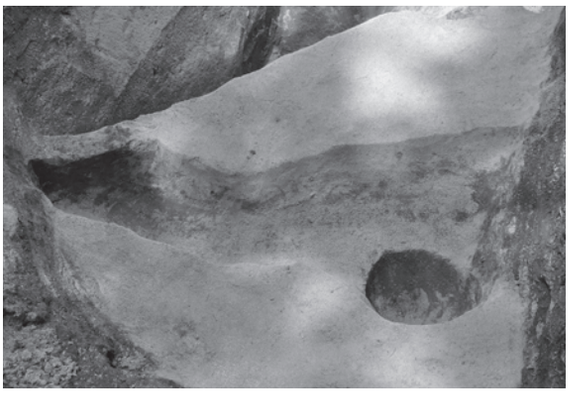


第108次1区　SE03（南より）



第108次1区拡張区　全景（南より）

第108次1区拡張区　SK13（東より）

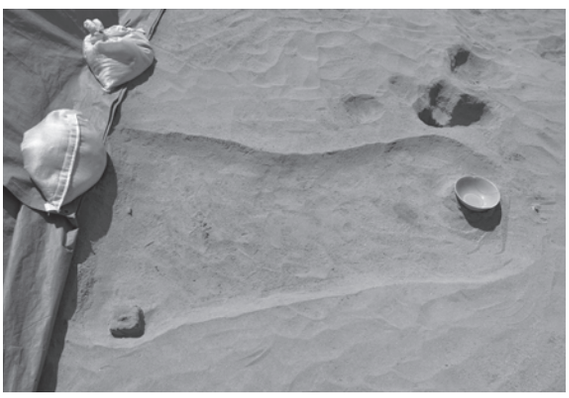


第108次1区拡張区　SD12（南より）

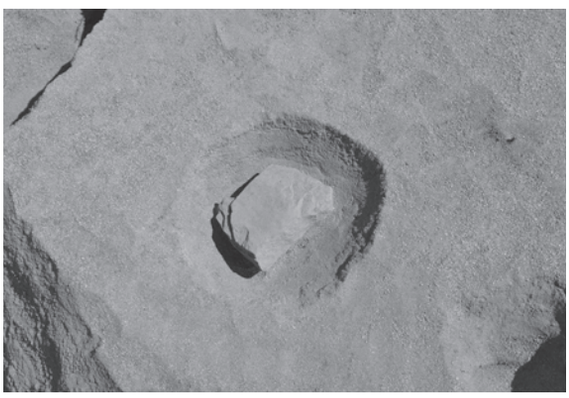
第108次1区拡張区　SD12土層（西より）

第108次2区　全景（西より）

第108次2区　調査区南壁土層（北より）



第108次2区　SR03（東より）



第108次2区　SP05（西より）

報　告　書　抄　録

ふりがな	はこざき
書名	箱崎　64
副書名	第 92 次・第 102 次・第 108 次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 1457 集
編著者名	藏冨士 寛・板倉 有大・阿部 泰之（編）
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒 810-8621　福岡市中央区天神一丁目 8 番 1 号　TEL (092)711-4667
発行年月日	令和 4 年 3 月 24 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
箱崎遺跡（はこざき） 第 92 次	福岡市（ふくおかし）東区（ひがしく）箱崎（はこざき） 6 丁目 10 番 1 号	40131	2639	33° 37′ 20″	130° 25′ 27″	2018.11.1 ～ 2019.3.31	1,514.1㎡	都市計画道路 建設
箱崎遺跡（はこざき） 第 102 次	福岡市（ふくおかし）東区（ひがしく）箱崎（はこざき） 6 丁目 10 番 1 号	40131	2639	33° 37′ 20″	130° 25′ 27″	2019.8.19 ～ 2020.2.28	2,712.76㎡	都市計画道路 建設
箱崎遺跡（はこざき） 第 108 次	福岡市（ふくおかし）東区（ひがしく）箱崎（はこざき） 6 丁目 10 番 1 号	40131	2639	33° 37′ 20″	130° 25′ 27″	2020.5.1 ～ 2020.7.7	541.63㎡	都市計画道路 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
箱崎遺跡	集落	中世	溝・土壙・井戸・墓・鍛冶炉	土師器・須恵器・陶磁器・瓦・土製品・石製品・金属器	
	集落	近世	土壙・井戸	土師器・陶磁器・土製品・瓦・金属器	

要　　約	本書に所収された発掘調査はすべて九大箱崎キャンパス跡地内で実施されたものである。これらの調査によって従来不明であった箱崎遺跡北端部の様相が一部ながら明らかになった。 いずれの調査においても既存建物の基礎によって遺構は大きく破壊されていたものの、鎌倉時代から室町時代までの遺構・遺物が検出された。遺構は土壙・井戸・木棺墓・溝・鍛冶炉・柱穴等で、第 92 次調査では、地割りや整地に関わる溝や、土師器埋納遺構が確認されている。第 102 次調査では土壙墓から全身を判別できる人骨が出土したほか、井戸は井戸側の違いから時期の変遷をたどることができる。遺物は中国製陶磁器のほか、土師器・蛸壺・鉄滓・石錘等が出土した。第 108 次調査では井戸から高麗象嵌青磁片が出土している。

箱崎 64

—第 92 次・第 102 次・第 108 次発掘調査報告—

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告　第 1457 集

令和 4 年 3 月 24 日

発　行　　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目 1 番 8 号

印　刷　　協文社印刷株式会社

福岡市西区小戸 4 丁目 24 番 5 号